

仙台市文化財調査報告書第18集

杵江遺跡発掘調査報告書

—造瓦所の調査—

1980. 3

仙台市教育委員会
仙台市土地開発公社
古窯跡研究会

杵江遺跡発掘調査報告書

—造瓦所の調査—

第一号窯跡出土「ヘラ書文字瓦」
「比」?



1980. 3

仙台市教育委員会
仙台市土地開発公社
古窯跡研究会

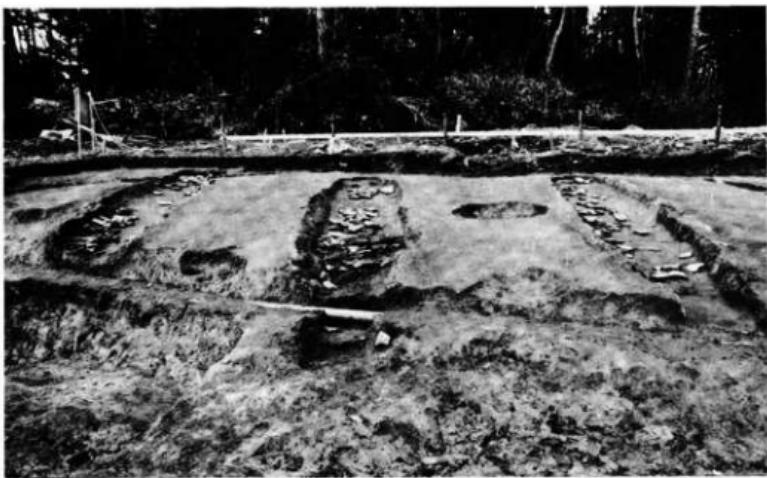


写真1 B地区窯跡検出状況



写真2 C地区遺構検出状況



この地図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図(仙台)を使用したものである。

図1 位置図

序 文

昭和52年から2次・3回にわたり調査を実施してまいりました折江遺跡の発掘調査報告書をこのたび刊行することになりました。この遺跡は台原・小田原丘陵のほぼ中央に位置しており、古代窯業遺跡の集中しているところに当たり、鶴谷小学校分校（仮称）建設予定地になってことから、事前調査を行ない記録保存の処置をとったものであります。

調査に当っては、当教育委員会が主体となったのはもちろんのことですが、第1次調査から報告書作成にいたるまで実質的に担当していただいた古窯跡研究会、またこれまで多大なご指導を賜わりました東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所をはじめとする諸研究機関及び文化財保護委員の先生方に、心から御礼申し上げます。

報告書作成にあたりましては十分検討したつもりではありますが、不備な点もあるかと思います。本書へのご批評をお聞かせ願うとともに、今後とも仙台市の文化財保護行政へのご理解とご協力をお願い申し上げます。

昭和55年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

教 育 長 藤 井 黎

例　　言

1. 本報告書は、昭和52年7月から昭和54年4月までの間、二次にわたり、断続的に発掘調査を実施した宮城県仙台市橋江に所在する橋江遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、仙台市土地開発公社の依頼により、古窯跡研究会が、仙台市教育委員会と共同で担当した。
3. 本調査、ならびに報告書作成は、渡辺泰伸と結城慎一が主として当った。また本報告書作成編集のための遺物、図面の整理は、約1年間を要した。
4. 本文の執筆は主として渡辺泰伸が行ない、結城慎一、滝口卓も一部分担した。
5. 報告書作成にいたる作業分担は、整理参加者全員が行なった。

造構写真 渡辺泰伸、毫岐善文

遺物写真 渡辺泰伸、中沢裕一

造構実測製図 斎藤秀寿、山内耕、石本弘

遺物実測製図 滝口卓、石黒伸一朗、佐々木祐一、白井一夫、渡辺秀樹

最終的な製図・トレースは、渡辺泰伸、渡部弘美、滝口卓、石黒伸一朗が行なった。

6. 編集は、結城慎一、渡辺泰伸が行なった。

7. 本書図版観察表は次の要項に従って作成した。

(1) 造構、遺物の色調観察は、小山、竹原編、著(1973)：『新版標準上色帖』日本色研事業株式会社を使用した。

(2) 造構図では、オーバーハングの場合に一点鎖線を使用し、十色による変化の区分は、二点鎖線を使用した。

(3) 遺物では、凸部には、破線を使用し、凹部には、一点鎖線を使用することを原則としたが、その判断は観察者の主觀によった。

8. 遺物は、その大部分について観察カードを作成し、できうる限り、図、拓本、写真による資料化を行なった。本報告に掲載した以外にも多量の資料を保管している。

9. 本報告においてふれることの出来なかったものについては、後日個別の問題点として解決して行きたい。

本文目次

I.はじめに	1
II.調査要項	3
III.遺跡の位置と環境	4
1.地理的環境	4
2.歴史的環境	5
IV.調査の方法と経過	6
1.調査地区の設定	6
2.調査経過	6
V.調査概要	23
1.A地区の概要	23
2.B地区の概要	26
3.C地区の概要	46
VI.出土遺物について	97
1.瓦類	97
2.土器類	101
3.鉄製品	105
4.木製品	105
5.石製品	106
6.その他	106
VII.総括と考察	107
1.遺構について	107
2.出土遺物について	108
3.まとめと問題点	109
4.おわりに	110

参考文献

遺物図版、写真図版、観察表

写真・図表目次

写真1. B地区窯跡検出状況	
2. C地区遺構検出状況	
3. A地区発掘前の状況	7
4. C地区発掘前の状況	7
5. B、C地区グリット設定状況	12
6. C地区表土排除作業	13
7. C地区グリット掘上げ状況	13
8. C地区表土排除終了状況	14
9. 現地説明会	16
10. B地区の表土排除状況	17
11. B地区窯跡の掘り上げ状況	17
12. B地区窯跡の実測風景	17
13. A地区全景	23
14. 第1号窯跡瓦堆積状況	25
15. 第1号窯跡施設瓦状況	25
16. A地区出土の重弁蓮華文軒丸瓦片	26
17. B地区全体の状況	31
18. 第2号窯跡(1)	31
19. 第2号窯跡(2)	32
20. 第3号窯跡(1)	34
21. 第3号窯跡(2)	34
22. 第4号窯跡(1)	36
23. 第4号窯跡(2)	37
24. 焼土遺構遺物出土状況	40
25. 灰原の状況	42
26. 灰原から出土した 重弁蓮華文軒丸瓦	42
27. 灰原での平瓦と 須恵器壺の出土状況	42
写真28. 灰原出土の刻印文字瓦	43
29. 灰原での漆器出土状況	43
30. 灰原での木製品出土状況	43
31. C地区全体の状況	49
32. 第1号住居跡(1)	53
33. 第1号住居跡(2)	53
34. 第1号住居跡(3)	53
35. 第1号住居跡カマドの状況	54
36. 第1号住居跡改築の状況	54
37. 第1号住居跡周溝上の施設瓦	54
38. 第2号住居跡(1)	61
39. 第2号住居跡(2)	61
40. 第2号住居跡のカマド状況	61
41. 掘立柱建物跡群	65
42. 第8号掘立柱建物跡	71
43. 第3号土壤	75
44. 第7号土壤	75
45. 第14号土壤	77
写真団版 1～2、A地区出土遺物	160～161
3～5、B地区出土遺物	162～164
6～14、C地区出土遺物	165～178

図1. 位置図 (1 : 5万)		図32. 第1、2号溝断面図	83
2. 位置図 (1 : 2.5万)	2	33. 第4号溝断面図	84
3. 遺跡全体図	21・22	34. 第6号溝断面図	86
4. 第1号窯跡実測図	24	35. 第7号溝断面図(1)	86
5. B地区全体図	27・28	36. 第7号溝断面図(2)	87
6. 第2号窯跡瓦出土状況	32	37. 第9号溝断面図	88
7. 第2号窯跡	33	38. 第10号溝断面図	88
8. 第3号窯跡瓦出土状況	34	39. 第17号溝断面図	91
9. 第3号窯跡	35	40. 第18、19号溝断面図(1)	91
10. 第4号窯跡瓦出土状況	36	41. 第18、19号溝断面図(2)	92
11. 第4号窯跡	38	42. 第20号溝断面図	93
12. 第5号窯跡	39	43. 第21号溝断面図	93
13. 烧土遺構	41	44. 第21、22号溝断面図	94
14. C地区全体図	47・48	45. 第24号溝断面図(1)	95
15. 第1号住居跡(1)と 第8号掘立柱建物跡	51	46. 第24号溝断面図(2)	96
16. 第1号住居跡(2)	52	図版1~5、A地区出土遺物	113~117
17. 第1号住居跡(3)	52	6~26、B地区出土遺物	118~138
18. 第2号住居跡(1)	57	27~47、C地区出土遺物	139~159
19. 第2号住居跡(2)	58		
20. 第2号住居跡(3)	60		
21. 第2号住居跡(4)	60		
22. 第2号住居跡部分図(1)	63		
23. 第2号住居跡部分図(2)	63		
24. 第1号掘立柱建物跡	64		
25. 第2号掘立柱建物跡	66		
26. 第3号掘立柱建物跡	67		
27. 第6、7号掘立柱建物跡	70		
28. 第3、4号土壤	74		
29. 第7号土壤	76		
30. 第12号土壤	76		
31. 第13、14号土壤	78		

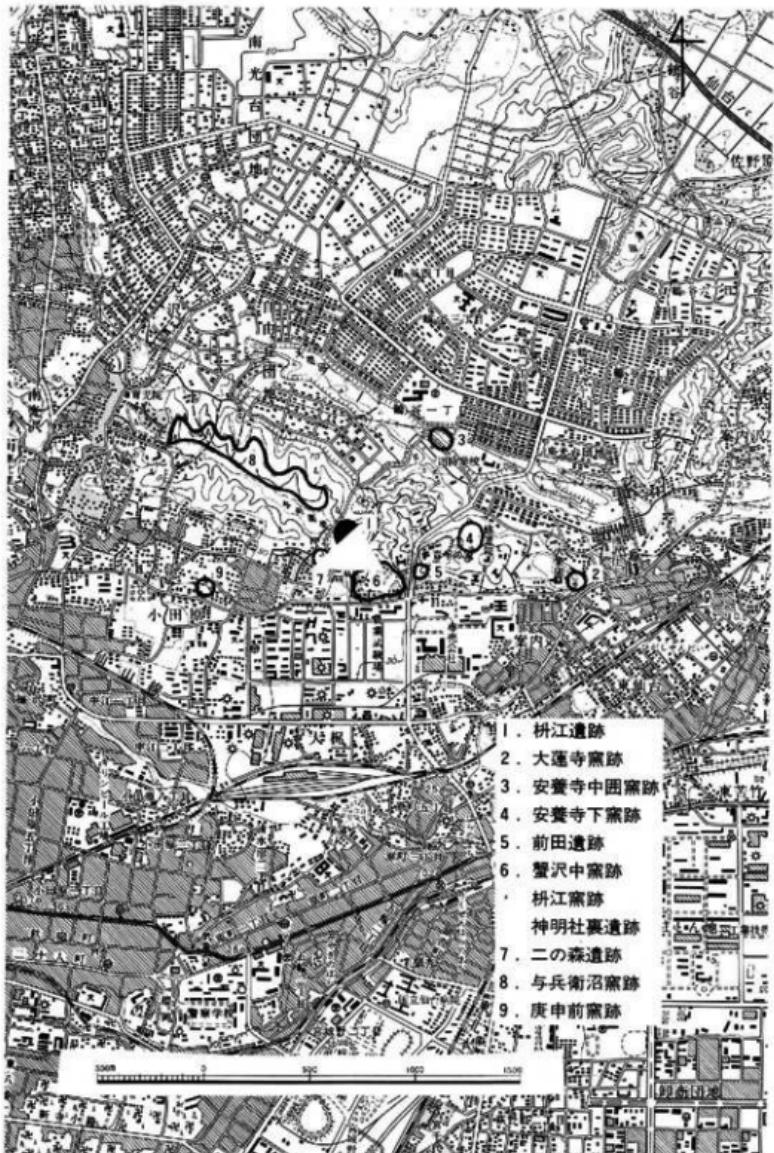
表1. 窯床面の傾斜角度	40	表33. 第7号溝出土土器集成	87
2. 焼土遺構出土土器集成	40	34. 第8号溝出土土器集成	88
3. A地区第1号土壤出土土器集成	45	35. 第9号溝出土土器集成	88
4. B地区第10号土壤出土土器集成	46	36. 第12号溝出土土器集成	89
5. 第1号住居跡ピット註記表	55	37. 第16号溝出土土器集成	90
6. 第1号住居跡開溝観察表	56	38. 第17号溝出土土器集成	91
7. 第2号住居跡ピット註記表	62	39. 第18号溝出土土器集成	92
8. 第1号獨立柱建物跡ピット註記表	65	40. 第19号溝出土土器集成	93
9. 第2号獨立柱建物跡ピット註記表	65	41. 第20号溝出土土器集成	93
10. 第3号獨立柱建物跡ピット註記表	68	42. 第21号溝出土土器集成	94
11. 第6号獨立柱建物跡ピット註記表	69	43. 第22号溝出土土器集成	95
12. 第7号獨立柱建物跡ピット註記表	71	44. 第23号溝出土土器集成	95
13. 第8号獨立柱建物跡ピット註記表	72	45. 第24号溝出土土器集成	95
14. 第3号土壤出土土器集成	73	46. 文様瓦、文字瓦等出土表	98
15. 第4号土壤出土土器集成	73	遺物観察表	179
16. 第7号土壤出土土器集成	73		
17. 第8号土壤出土土器集成	75		
18. 第12号土壤出土土器集成	77		
19. 第13号土壤出土土器集成	77		
20. 第14号土壤出土土器集成	79		
21. 第15号土壤出土土器集成	79		
22. 第16号土壤出土土器集成	79		
23. 第17号土壤出土土器集成	80		
24. 第19号土壤出土土器集成	80		
25. 第20号土壤出土土器集成	81		
26. 第21号土壤出土土器集成	81		
27. 第1号溝出土土器集成	82		
28. 第2号溝出土土器集成	82		
29. 第3号溝出土土器集成	84		
30. 第4号溝出土土器集成	84		
31. 第5号溝出土土器集成	85		
32. 第6号溝出土土器集成	85		

I. はじめに

橋江遺跡は昭和48年段階の分布調査では、仙台市橋江地区の南東斜面、東照宮より燕沢に至る県道に面した仙台市原町小田原字橋江12番地を指すものとして登録されていたものである。今回調査を行なった地点は、橋江12番地より北西に250m程のところである。この地点は旧仙台市原町小田原字蟹沢地内であったが、町名整理により橋江地区となったものであり、重複をさけるため、今回調査した地点を橋江窯跡遺跡、先に知られていた橋江12番地所在遺跡を橋江12番地遺跡としたい。また橋江12番地遺跡は分布調査によって遺物の分布が確認されただけで遺構は発見されておらず、今後橋江遺跡の名称を使用する場合は、橋江窯跡遺跡を指すものであることをおことわりしておく。

今回の調査の契機となったのは、昭和52年に橋江地区内の与兵衛沼東側地区に鶴谷小学校分校（仮称）建設計画がもちあがり、仙台市教育委員会社会教育課文化財係職員が事前の踏査を行なった。その結果、同地は地形的に与兵衛沼より流れだした旧河道に面した南向緩斜面であり、さらには同一の旧河道に沿って存在する与兵衛沼窯跡群（仙台市文化財登録番号C-407）と蟹沢中窯跡群（仙台市文化財登録番号C-408）の中間にあたり、内藤政恒氏の報告に言う与兵衛沼窯跡群にあたる可能性もある。地主の吉川敬氏によれば、自宅を建築するために整地した際に焼土や布目瓦片が出土したことがあるということで、今までの分布調査で見落していった窯跡の存在が考えられるにいたった。このことは早々古窯跡研究会に連絡され、同研究会員が分布調査を行なったところ、与兵衛沼より橋江地区に流れる用水路に、多量の須恵器片、布目瓦片が散布していることが確認された。その後仙台育英学園高等学校郷土史研究部員によって分布調査が行なわれ、平瓦の完形品をはじめ、多量の瓦、須恵器片を出土するところであることが再確認された。このことより、地形、出土遺物から見て窯跡群の存在が確実となった。また用水路の東側平場においても、土地の買上げに伴ない杉林が伐採されるなど平場の整理が進められたところ、この平場においても多數の須恵器、土師器片が出土することがわかり、平場にも遺構の存在が考えられるようになった。

以上のように建設予定地内に窯跡群とその関連遺跡の存在が明らかになつたので、仙台市教育委員会及び仙台市土地開発公社は事前調査を行なうこととし、長年同地区一帯の調査研究を行なってきた古窯跡研究会に発掘調査を依頼した。これにより古窯跡研究会は各機関の協力を受け、橋江遺跡調査団を編成して、昭和52年7月20日より着手したのである。



この地図は、国土地理院発行の2万5千分の1の地形図(仙台東北部)を使用したものである。図2 位置図

II. 調査要項

1. 遺跡の名称

折江窯跡群（仙台市文化財登録番号C-433）

2. 遺跡の所在地

宮城県仙台市折江105-1外

3. 調査期間

第1次 昭和52年7月20日～8月25日、昭和53年2月14日～4月20日

第2次 昭和54年4月16日～4月27日

4. 調査主体

仙台市教育委員会

仙台市土地開発公社

5. 調査担当者

渡辺泰伸（日本考古学協会会員、仙台育英学園高等学校教諭、古窯跡研究会代表）

結城慎一、柳沢みどり、高橋彦之（仙台市教育委員会社会教育課文化財係）

6. 協力機関

東北学院大学考古学研究部

仙台育英学園高等学校郷土史研究部

みやぎの考古研究会

藤間建設株式会社

7. 調査補助員

〈第1次〉 森剛男、山内耕、滝口卓、石本弘、渡部弘美、主浜光朗、木島勝也、小山薰、浜田秀一、中嶋康博、斎藤好輝、宇部則保、小野きよ子、金光正裕、安田稔、石本敬、白石直子、高橋学、廣岡敏、庄司博雄、工藤まり子、高橋美左子、小野いすみ、佐藤雅子、脇野順子、佐藤史仁、安倍正則、山田恵子、高橋みづほ、藤田俊雄、遠藤弘美、久富正章、古川哲弘、宍戸雅弘、福地真由美、千葉多智恵、高沢薰、那須祐二、井上敦子、沢畠俊明、壱岐善文、渡辺裕美、熊谷恵子、鈴木淑子、梅原秀子、猪股一夫、白井一夫、小島修、小澤賢一、菅原純孝、加藤豊明、若生俊広、渡辺秀樹、永沢一義、井口裕二、岩渕直之、藤島健司、藤原洋、内田悌之、海上晃、村岡信一、吉田豊、大茄子川泰司、松原清道、荒井裕己、小林慎吾、佐伯啓一、鈴木信人、鈴木僚一、鈴木清啓、高橋克彦、芳賀英実、三浦光一

郎、武山正孝、田村豊、辰口典男、水城昭子、岩崎美登利、伊達順、鈴木忠、佐藤功、佐藤式、馬場学、高橋秀至、酒井芳夫、熊谷信一、小沢健一、鎌田浩、高橋加代子、高橋和江、杉山真美、高橋勝子、佐々木啓一、藤本修、奥村義昭、佐々木政宏、佐藤正弘、斎藤秀寿、中沢裕一、佐々木祐一、川村正之、石黒伸一朗、横山慶一、高橋建一、桜井雄二、川村正彦、三塚健生、赤川祥子、上野英子、武藤亮子、目黒美智子、樋渡利美、

〈第2次〉 森剛男、滝口卓、熊谷信一、秋保博志、羽曾部豪美、富田茂夫、中沢裕一、村上昭弘、佐々木裕一、白井一夫、巻野俊夫、鈴木ひろみ

〈遺物整理〉 石本弘、滝口卓、山内耕、斎藤秀寿、藤田俊雄、高橋学、白井一夫、小沢健一、川村正之、熊谷信一、渡辺秀樹、佐々木祐一、中沢裕一、須田律子、佐藤正弘、酒井芳夫、石黒伸一朗、福地寿子、辰口典男、津田広穂、佐々木啓一、斎藤タ子、高野晃、小野寺清治

III. 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

折江遺跡は仙台市折江105-1外に所在する遺跡で、仙台市の中心から3.5 km程北にあり、東西に長く伸び、仙台市の北辺を画する丘陵南側斜面に位置する。

この丘陵は東北地方の背梁をなす奥羽山地より太平洋側に伸びた七北田丘陵が、北側を七北田川、南側を広瀬川によって浸蝕された丘陵の東端部で、通常台の原・小田原丘陵と呼称されている。丘陵地帯を構成する地層は仙台市を取巻く典型的な第三紀鮮新世仙台層群の一つであり、特に南側は河岸段丘の発達が著しい。遺跡の立地する台の原・小田原丘陵は、広瀬川によって形成された四つの段丘（台の原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘）の中で最も高位にある段丘である（海拔50~100 m）。この段丘の一部は基岩が露出している岩石段丘であるが、大部分は5から6 mの厚さの砂礫層で被われている。この砂礫層は上部より1 m内外の粘土層、次いで2から3 mの偽層疊層よりなっており、台の原・小田原地区の浅井戸の良好な漏水層となっている。

つぎに折江遺跡を中心とする微地形を検討したい。

橋江遺跡の立地する小田原地区は、仙台市の中心部に近接することより、近年宅地化が急速に進み、その本來の地形の様相が大きく変化している。現在わずかに溜池となって残っている沼と水路によって、かつての水系を推定することができる。一つは鶴ヶ谷団地と自由ヶ丘団地にはさまれた大堤沼から、鶴ヶ谷団地の南側斜面沿いに西流し、燕沢住宅、小鶴通り梅田川に合流する。一つは与兵衛沼より南流し、藤川に合流し、さらに梅田川に合流する。この二つの水系は現在では沼は団地の排水池化され、水路の一部は暗渠化されてしまった。

橋江遺跡は後者の水系に属するものであり、最初に遺物を発見したのも与兵衛沼より橋江地区に至る用水路に大量の遺物を発見したことによってもうなずける。

遺跡は与兵衛沼より流れる用水路と、北側の丘陵より流れる小沢によって大きく三つに別れる。すなわち小沢によって南側を画される南側緩斜面、西側を用水路によって画され、北側を小沢によって切られ、中央部が若干高く東西に緩く傾斜するほぼ平坦な平場である。一つは、西側が現在道路となっている堤に接し、東は用水路によって切られ、南側は急斜面となっているところである。

2. 歴史的環境

この遺跡がある台の原・小田原丘陵は、端的に言えば古代の生産遺跡が集中しているところである。丘陵東端から順次それらの窯跡をあげてみると、次のようになる。

大蓮寺窯跡は5世紀の須恵器を出土した遺跡として有名である。周囲から布目瓦が出土していることより瓦窯跡の存在も考えられるところである。これに続いて安養寺下窯跡、安養寺中窯跡、蟹沢中窯跡、与兵衛沼窯跡、庚申前窯跡、五本松窯跡等が点在している。これらの窯跡は瓦窯跡であり、庚申前だけが須恵窯跡である。また丘陵上には土師器、輪火口の散布もみられることより、瓦、須恵器だけでなく他の生産も行なわれたことが考えられる。現在、丘陵の西端、国道4号線西側の堤町に焼焼という窯があるが、窯業に適した地であったことが知られる。

この丘陵は窯跡だけでなく、他の遺跡にも恵まれた地区であり、丘陵の各先端には縄文時代の遺物も散見せられる。橋江遺跡の北東には、現在調査されただけでも約20基の善応寺横穴古墳群がある。この横穴は7世紀前半より造営されたと考えられ、現存するだけでも50基を下らない大群集墳と推定される。ここから出土する遺物等により、窯跡群との関連も十分考えうることができる。また大蓮寺窯跡の範囲内には円筒埴輪をもつ小さな前方後円墳・案内古墳が存在する。さらには古代東北開拓の要となった陸奥国第1級官衙である多賀城、その附属寺院、また寺院としては出羽、陸奥国最大の陸奥国分寺、同尼寺が、この丘陵から7km以内の距離に

位置している。遺跡の性格はかならずしも明らかでないが、多量に瓦、須恵器、土師器を出土する燕沢遺跡などがあり、各時代とも、比較的遺跡の立地環境にめぐまれ、特に奈良～平安期には、生産地帯として発展している。

IV. 調査の方法と経過

1. 調査地区の設定

分布調査を行なった当時、学校予定地内には杉林、竹林、民家等が有り、全体の地形を十分に掌握できる様な状態ではなかったが、その後予定地内の伐採整理が進むにしたがって、地形からみて分布調査で採集した遺物に関する遺構の存在が考えられるようになったため、学校予定地を地形にあわせてA、B、C、Dの4ブロックに区分し、そのうちA、B、Cの3地区、約4,000 m²を第1次調査の対象とした。

A区は最初に遺物を発見した与兵衛沼より流れ込む小沢の東西斜面に、地形に応じてトレントを設定した。B、C区は東側平場の南端に基準点を作り、この点を(0, 0)として、3×3 mを基準としたグリッドを設定し、方位のアルファベットと3 m単位のアラビア数字との組合せで呼称することにした(例: N 3 E 21, S 6 E 30)。D区は遺跡内西側の平場で面積は約1,500 m²である。ここに3 mのメッシュを組み、北側から1、2、3とトレント名を、西側からa、b、cと地区名を付し調査地点を表わすことにした。

2. 調査経過

〈第1次調査〉

昭和52年7月20日 晴れ

A地区の下刈りを行なう。表土は意外に浅いようである。与兵衛沼よりの排水路によって周辺が侵食されたものと思われる。意外に涼しく、作業は予定より進んだ。本日は遺構確認は出来なかった。

7月21日 晴れ

A地区は昨日に引き続き下刈り及び草木の排除を行なう。耕土は砂混りであるが、一部に赤

土が見られる。C地区は下刈りをほぼ終了した。

7月22日 晴れ

A地区、C地区のグリット設定を終了し、A地区の表土剥ぎ作業に入った。A-I 6とA-II 4、5の表土剥ぎは終了した。

またA-II 3、6は一部掘り下げた。本日も遺構の検出は出来なかつたが、遺物の出土量が増えた。中には溶着したもののが混っている。

7月23日 晴れ

A-II 3、6を完了し、A-II 1、2の一部を掘り下げた。またA-I

5は完了し、A-I 3、4を一部掘り下げた。A-Iでは遺構はなさうである。また遺物も少ない。A-I、A-IIともに竹根、木根のため作業が困難である。

7月24日 晴れ

本日はA-IIに作業を集中し、またA-II 6より北に8、9、10とグリットを拡張した。A-II 1、2は前日に引き続き掘り下げ、特にA-II 2が廃棄物のため難行した。A-II 7、8はほぼ掘り下げを終了した。遺物の出土量は特に7、8で多く、須恵器、土師器、瓦が一括で出土しあじめた。

7月25日 晴れ



写真3 A地区発掘前の状況



写真4 C地区発掘前の状況

A-II 1、2は地山面まで掘り下げて終了した。A-II 2より重弁蓮華文軒丸瓦の破片が出土した。A-II 8は第5層上面での遺物を取り上げたが、遺物は少ない。C-II 1は表土が以外に薄く耕作の影響が見られる。

7月26日 晴れ

本日はA-IIの表土剥ぎ及び遺構検出を行なった。A-II 8は前日の作業の整理を行なったのち写真撮影を行なった。9a、10aは遺物が少なく地山まで掘り下げ、8b、9b、10bは下刈り及び表土剥ぎを行なった。8b、9bの境のベルトの西端において窯跡が検出された。副は140cm位で窯壁が見られ、中には瓦がつまっており、水田の開墾の際に一部削平されたものらしい。

7月27日 晴れ

本日は昨日検出された窯跡の確認を行なった。窯跡の残存部は焼成部の一部と思われ、トレチに対し若干斜めに残っている。おそらく沢に水田を作った際に破壊されたと推定される。

7月28日 晴れ

A-I 1、2、3、4を掘り下げ終了した。A-II 8bは遺物包含層上面まで掘り下げ、またA-II 9bは地山面まで掘り下げ、土壤を検出した。C地区のO(N3W3)とII 1(N12E3)、II 2(N12E6)は6層上面より多量の土器が、またII 10は地山まで浅かったが、遺構は検出されなかった。

7月29日 晴れ

A-II 8b、9bは黒色土の堆積状況を確認するため掘り下げる。また前日検出された土壤は8bまで伸びた。C-II O(N12W3)は黄色土の確認をするため6層上面まで掘り下げた。その上面で遺物が多量に出土した。黄色土の広がりを確認するためC-II 1(N12E3)とのベルトを排除した。

7月30日 晴れ

A-IIで窯跡を検出したため、同じ斜面の北側にII 11b、12b、13bとグリットを拡張し掘り下げたが、3グリットとも地山まで達しなかった。C-II O(N12W3)、1(N12E3)はセクションの確認とセクション図作成を行なった。その結果6層上面が地山ではなく、また5層と6層の間に粘土が張り付いた状態であった。

7月31 晴れ

A-II 11b、12bの特に下方部に作業を集中し、風化した凝灰層まで掘り下げた。上層の黒色土層下の砂質層、灰色層より多量の木質削板や瓦が出土した。C区は前日の遺物を取り上げ、層を確認した。またトランシットを使用しトレチを設定した。

8月1日 晴れ

A-II 9 b、10 b、11 b、12 b の各トレンチを最下層まで掘り下げ完了した。A-II b群は粘土で盛土をしテラスにしたと推定される。C地区は I 10 (N 3 E 30)、8 (N 3 E 24)、6 (N 3 E 18)、II 9 (N 12 E 27)、7 (N 12 E 21)、III 10 (N 24 E 30)、8 (N 24 E 24) の各トレンチを地山面まで掘り下げた。地山面までは浅く20~50cmである。今日は遺構の検出はなかった。

8月2日 晴れ

A地区は第1土壤をベルトを残し掘り下げ、また沢の落ち込みを確認した。C地区は昨日に引き続き、掘り下げたグリットの精査並びに遺構検出を行なう。

8月3日 晴れ

A-II区は8 bで土壤を検出(第2土壤)した。また第1土壤の遺物をそのまま残し掘り下げた。また8 b、9 b、10 bのセクション図作成の作業に入いる。C地区は焼土の範囲確認を行なうとともに、I 7 (N 3, E 21)、6 (N 3 E 18)、4 (N 3 E 12)、3 (N 3 E 9)、3 aの表土排除を終了し精査を行なった。その結果、幅60cmで深20cmの小溝を検出、また、住居跡らしき遺構が発見されたが、プランが明確になっていないため確認はない。

8月4日 晴れ

A-IIは9 bのセクション図は終了したが、10 bのセクションは3層目までである。13 bは4層まで掘り下げた。C-Iは遺構を検出し確認するため昨日掘り下げたグリットを精査し、また住居跡のプランを確認するため精査を行なった。その結果、住居跡内と住居跡の北東に土壤を検出、また東側には2本の溝を確認した。C-IIは昨日検出した溝のプラン確認、C-IIIは溝らしきものが見られる。

8月5日 晴れ~時雨

A-II 10のセクション図終了し、9のベルトを排除した。第2土壤は掘り上げた。また第1窓は写真撮影を行なったのち平面図作成を実施した。C-Iは南北、東西ベルトを残した。第1住居跡の確認を行なったが、西側と南側は不明、東側の壁の内側に瓦列がみられる。C-IとC-IIの各ベルトを排除し、C-IIより3本の溝のプランを確認した。

8月6日 晴れ

第1窓跡は平面図終了、左側の瓦を取り除く。また床面には瓦が敷かれているようである。第1住居は全体の写真撮影を行なったのち、十字にベルトを残し、2層まで掘り下げ焼土の面で止める。平面で五つのピットを検出した。

8月7日 晴れ

午前中に2号溝、午後に3号溝を掘り上げたが、焼土の部分は残した。第3土壤の周辺は土色の変化が見られ、第4土壤は楕円形で第3土壤を切っている。第1住居は約5m四方で、東と北側の内壁下に瓦が敷かれており、北側にカマドがある。床面と思われる面でピット6個発

見され、東側壁下より縄火口が出土した。

8月8日 雨

プレハブ内にて水洗い及びネーミングを行なった。窓跡内出土瓦に「鳴」とヘラ書きされたものがあった。

8月9日 晴れ

窓跡は敷瓦を剥ぎ、縦断と横断の実測を行なった。住居跡においては床面プランの平面図を作成した。第4土壤の掘り上げ、その周辺の再確認を行なう。

8月10日 雨

プレハブにおいて、出土遺物の水洗いとネーミングを行なう。

8月11日 雨

今日も雨のため、遺物の整理と水洗いとネーミングを行なう。

8月12日 晴れ

窓跡及びA-II地区を終了した。住居跡はピットを半分掘り下げた。焼土の中に鉄滓の混っているものもあり、小鍛冶の可能性がある。住居跡も何回か拡張されたらしい。第3土壤は写真撮影後にセクション図作成を行ない終了した。

8月13日 雨

今日は現地説明会のため、その準備を行なった。

8月14日 雨

A地区の約3割の測量を終了した。第3土壤は実測のためのセクションポイントを残し、残りの埋土を掘り下げた。住居跡は平面プランを確認し、柱穴、ピット、溝を新しいものから掘り上げる。住居跡内に炉と考えられるものを確認した。溝周辺の平面図作成を行なう。

8月15日 曇り時々雨

A地区は第1、2土壤の平面図を終え、A-I、A-IIの平面図取りに入いる。第1住居跡はカマド前の土師器を取り上げ、その下を精査した。また前日まで行なっていたピットの大部分の掘りかたを終えた。第3土壤は平面図取りを終え、未掘の溝は番号を付け、その位置を図化した。

8月16日 曇り時々雨

A地区的平面図を終了した。住居跡は第2平面図取りに入いる。

8月17日 雨

雨のため午前中に遺物を育英高校に搬入し、午後は水洗いとネーミング作業を行なった。

8月18日 雨

午前中、プレハブにて器材整理を行ない、午後、育英高校において水洗いとネーミングを行

なった。

8月19日 曇り

第1住居跡の平面図取り及び床面の精査を行なった。また第3土壤と第1住居跡を結ぶトンネル状の溝を検出し掘削する。

8月20日 曇り

第1住居跡の平面図取りを終了し、レベル記入を行なった。また周溝の掘り下げも同時に実施した。C地区では東西セクション図取りの準備を行なう。

8月21日 曇り

第1住居跡の第1、第2周溝を掘り上げ、平面図を取り、レベルを記入した。また北西隅にもトンネル式の溝を確認した。

8月22日 晴れ

C地区的東西セクション実測を終え、註記も終了した。第1住居跡は周溝に敷かれている瓦を清掃し、その平面図を作成した。

8月23日 曇り一時小雨

第1住居跡の第3平面図を終了し、周溝に敷かれていた瓦を取り上げた。

8月24日 晴れ

第1住居跡の周溝に敷かれた瓦を取り上げた状態で平面図を取り、註記を行なう。またC地区の一部は埋め戻し作業に入いる。

8月25日 曇り

埋め戻し作業を終了した。

昭和53年2月15日 晴れ時々雪

事務所の整備をおおむね終了し、C区の清掃、グリット設定を終了した。

2月16日 晴れのち曇り

午前中B地区のグリットを終了し、午後より表土排除の作業に入った。

2月17日 晴れ

B地区的表土排除と遺構検出作業を行なった。その結果、N9、12、15ラインに沿って窓跡が3基検出され、西側から第2、第3、第4号窓とした。

2月18日 晴れ

前日に引き続き、B地区的表土排除と遺構検出を行なった。第2号窓の焚口部付近は破壊されている様である。

2月19日 晴れ

B地区的表土排除し、遺構確認面まで掘り下げた。第3、第4号窓跡の焚口部をわずかなが

ら確認した。水道管がB地区を東西に横断して窓を切斷している。

2月21日 晴れ

B地区はN48~N42、E9、12、15ラインのベルトのセクション図の検討及びN48~42、E9ラインの東側断面図取りを行な



写真5 B、C地区グリッド設定状況

った。C地区は表土排除及び遺構検出を行なった。

2月22日 曇り

B地区はN48~42、E9、12、15とN45~42、E21ラインの南北ベルトとN42 E21~24ラインの東西ベルトのセクション図取りと註記をした後、ベルトを排除した。C地区は中央部より南側の表土排除及び遺構検出を行なった。

2月23日 雪

雪のためC地区の清掃をしただけで屋外作業は中止し、遺物の水洗い及びネーミングを行なう。

2月24日 曇り

C地区的南側の表土排除及び遺構検出を行なった。

2月25日 晴れ

昨日に引き続きC地区南側の表土排除及び遺構検出を行なった。S6 E6から内側が焼けている土壤を見た。

2月26日 晴れ時々曇り

B地区に造り方を設定し、C地区は南西部の表土排除及び遺構検出をした。

2月28日 曇り

B地区は第2、3、4号窓跡の精査を行なった後、写真撮影を実施した。C地区は東側の表土排除及び遺構検出。これでC地区の表土排除は全て終了した。

3月1日 曇りのち雪

B地区では精査を行なう。造り方設定は終了。C地区はベルトの排除を行なう。

3月2日 曇り

B地区は第2、第3、第4号窯跡の確認面での平面実測を行ない、C地区では昨日に引き続きベルトを排除した。

3月3日 曇り

C地区は中央部の遺構確認作業を行なった。その結果、住居跡らしきものが4棟確認され、また溝が4本と土壙9基検出した。

3月4日 晴れ

B地区は窯跡に南北1本、東西3本のベルトを設け、窯跡全体を若干掘り下げ、その段階での平面図を作成した。C地区は東側の精査と遺構確認を行ない、第5住居跡の範囲を確認した。また東西と南北ベルトのセクション検討を行なった。

3月5日 晴れ

B地区は窯跡西側を昨日よりも若干掘り下げたところ瓦が出土したため写真撮影をした。東側も同様であり、その後出土遺物の実測を行なった。

C地区は西側と東側の精査を行ない、



写真6 C地区表土排除作業



写真7 C地区グリッド掘り上げ状況

同時に東西、南北ベルトのセクション図作成に入いる。

3月7日 晴れ

B地区は昨日と同様の作業を実施した。また窯跡の下方部に3m×6mのトレーナーを4箇所設定し掘り下げた。C地区は東西、南北ベルトのセクション図取り、註記を行ない、その後、南北ベルトの一部を撤去した。その他、遺構確認はほぼ終了し、造り方設定も行なった。

3月8日 晴れ

B地区は窯跡内部を若干掘り下げ、遺物を出した。また灰原の検出も行なった。C地区は東西、南北ベルトの排除と、去年埋め戻した第1住居跡、第2、3溝の埋土を排除した。

3月9日 晴れ

窯内出土瓦の平面図取り、遺物の取り上げ、灰原の確認を行なった。C地区では写真撮影のための整備及び不確定遺構の確認を行なった。

3月10日 雪

今日は雪のため、プレハブ内で遺物の水洗い及びネーミングを行なう。

3月13日 曇り

B地区は灰原の検出作業とE9、E15ラインのセクション図取りを行なった。C地区では現代の排水溝より掘り下げ開始。

3月14日 晴れ

B地区は窯跡の壁面、床面を検出した。灰原は第3、4号窯跡にかかるベルトのセクション実測を行なった。C地区は1、2、3号溝を掘り上げた。

3月15日 晴れ



写真8 C地区表土排除終了状況

B地区は前日に引き続き窯の床面と壁面出しを行ない、その後、遺物の出土状況を実測した。また第5号土壌を掘り下げた。C地区では第1、2、4号溝と南側のピット及び東側のピットを掘り上げた。

3月16日 晴れ

B地区第2、4号窯跡のセクション図及び遺物出土状況図、第3号窯跡は精査を行なう。第4号窯跡東側を精査した結果、長さ約6m、幅約1mの溝状遺構を検出した。C地区では第1号溝を掘り上げ完了し、1号住居跡南側で住居跡1棟（第8号住居跡）検出した。また北東端で2間×3間の掘立建物跡、その南側でピット群を確認した。

3月17日 晴れ

B地区は昨日に引き続き第2、3号窯の東西ベルトのセクション図を取り、その後ベルト撤去。第3号窯跡は出土遺物の実測をした。また溝状遺構と灰原は精査した。C地区は東側の掘立建物跡の柱穴並びに南側のピットを掘り出す。8号住居跡を掘り上げ、第6号土壙は十字ベルトを設定して掘り下げ開始。

3月18日 晴れ

第2、4号窯跡はベルトを撤去した段階での遺物出土状況を実測し、第3号窯跡は東西、南北ベルトのセクション図作成を行なった。また溝状遺構は午前中に写真撮影、午後に確認面の平面図を取る。灰原は前日に引き続き掘り下げる。C地区は東側のピット掘りを続けた。また第8住居跡、第7、8号土壙は完了した。

3月19日 雨

今日は雨のためプレハブ内にて出土した遺物の水洗いとネーミングなどの室内作業を実施した。

3月21日 晴れ

B地区は第2号窯跡のベルトを排除し精査を行なった。溝状遺構はプランの再確認、実測をした後、掘り下げる開始した。また第9、11土壙をも掘りはじめた。C地区は第6住居跡のプランを確認し、十字にベルトを設定、第7号溝と並行して掘りはじめた。東側のピット群と第12土壙は掘り上がった。

3月22日 雪

雨のためプレハブにて出土遺物の水洗いとネーミングを行なった。

3月23日 晴れ

B地区は第2号窯跡内出土遺物の実測、取り上げを実施。溝状遺構は検討しながら掘り下げを進める。C地区は第7号溝の掘り下げを行なった。

3月24日 晴れ

B地区は明日の記者発表のため午前中に全面整備をし、午後に第2号窯跡の奥壁を確認した。また溝状遺構は下方部を掘り下げプランを再確認した結果、壁面が火を受けているようである。C地区は第6号住居跡のC区を床面まで掘り下げ、精査し、壁を検出した。7号溝は昨日に引

き続き掘り下げを行なった。

3月25日 晴れ

本日は記者発表。作業内容は次のとおり。B地区は溝状遺跡の下方部の掘り下げを行なった。その結果、昨日検出した焼壁面は溝状遺構の壁ではなく、溝状遺構



写真9 現地説明会

を切って作られた遺構であることを確認した。また灰原の精査を行なった。C地区は第6号住居跡のB区を掘り下げ、床面、壁を検出した。またD区の周溝を掘り上げた。第7号溝はA区の精査、壁の検出を行なう。5号住居跡の精査と、第2、4、5、7号住居跡の周溝掘り下げも実施する。

3月26日 晴れ

今日、午後に現地説明会を行なった。約300人が見学に来た。作業は、B地区では溝状遺構のセクション図取り、溝状遺構に継ぐ灰原を掘り下げた。C地区は第6号住居跡のA区を床面まで掘り下げ、カマドも精査した。第7号溝はA区の精査を行なった。第2、3、7住居跡を精査したところ、掘立の柱穴を確認した。

3月28日 晩りのち雨

10時までC地区の精査をし、その後雨のため出土遺物の水洗いとネーミングを行なう。第1号掘立遺構の柱穴の註記と、B地区的溝状遺構のセクション図取りは雨の中実施した。

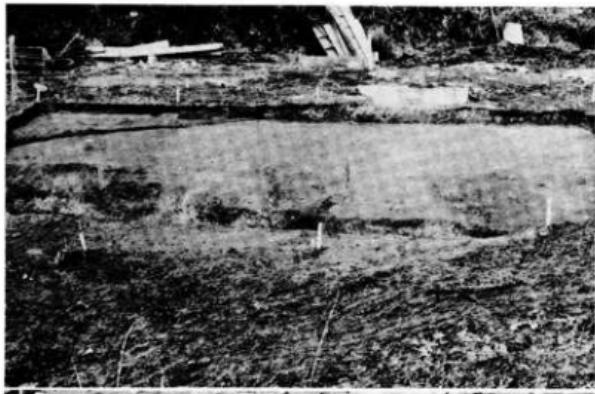
3月29日 晴れ

B地区は溝状遺構のベルト排除と焼土遺構のプラン確認をした。C地区では第6号住居跡の床面を精査し、また周溝を掘り下げた。第18、19号溝は精査し、新旧関係を調べた。本日より第2号住居跡を第2A、2B号掘立遺構、第3号住居跡を第4号掘立遺構、第4号住居跡を第5号掘立遺構、第7号住居跡を第3号掘立遺構とした。第2A、2B、3号掘立遺構の柱穴を掘り下げ、埋土の註記を並行して行なった。

3月30日 晴れ

B地区は焼土遺構を遺物を出しながら掘り下げて行なった。C地区は第6号住居跡の床面と

►写真10
B地区の表土
排除状況



►写真11
B地区窯跡の
掘り上げ状況



►写真12
B地区窯跡
の実測風景



壁を精査した後、略図を作成した。第2、2B号掘立遺構は前日に引き続き埋土の註記を行なった。第5号住居跡は精査したところ二つの土壤を確認し、第13、14号土壤とした。

3月31日 晴れ

B地区は焼土遺構を遺物を出しながら掘り下げて行った。これに並行して灰原の掘り下げも実施した。C地区では、前日第5号住居跡を第13、14号土壤としたため、第6号住居跡を第2号住居跡とする。第2号住居跡はピットに番号を付け、P1~5まで掘り下げた。第18、21、22号溝は切り合いを確かめつつ掘り下げ、第13、14号土壤は十字にベルトを設定し、第23号溝との関連を確かめながら掘り下げ実施。

4月1日 晴れ

B地区は焼土遺構のセクション図作成と註記をしたのちベルトを撤去し、また灰原は白色粘土層上面まで掘り下げた。C地区は第2号住居跡のピットと周溝を、第13、14号土壤を底面まで掘り下げ、第8、20号土壤はセクションの実測を行なった。

4月2日 晴れ

B地区は焼土遺構出土遺物の実測準備をし、灰原は最下層まで掘り下げた。C地区第2号住居跡はピットと周溝の埋土の掘り上げ、各溝並びに土壤のセクション図取りを開始した。

4月4日 晴れ

焼土遺構より出土した遺物の平面図取りと灰原の東西、南北ベルトのセクション実測を行なう。C地区では第6号住居跡のセクション実測、溝、土壤のセクション図取りを行なった。また北側を精査した結果、2間×3間の掘立遺構を検出した。

4月5日 晴れ

焼土遺構の遺物取り上げ、精査を実施。灰原は実測を続行。第2号住居跡と第7号溝の南北セクション図取り後、ベルトを撤去し精査する。

4月6日 曇りのち雨

焼土遺構は遺物を画面にチェックしながら掘り下げていく。C地区は昨日に引き続き平面実測を行なったが、雨のため中断し、出土遺物の水洗いとネーミングを行なった。

4月7日 曇り時々晴れ

焼土遺構は前日の作業を続行し、灰原では東西、南北セクションの実測を終了した。C地区は第2号住居跡の2、3号カマドのセクション図取りと註記を行なう。

4月8日 晴れ

B地区は焼土遺構を昨日に引き続き掘り下げて行った。また灰原は南北、東西ベルトの耕除を行なった。C地区は平面実測を続行する。

4月9日 晴れ時々雨

B地区は焼土遺構の断面、平面実測、精査並びに灰原の平面図取りを行なった。C地区は第2住居跡の北側の精査と、西南隅を掘り下げた。また平面図取りも同時に行なっている。

4月11日 晴れ

B地区は第22土壤を掘り下げ、B地区全体の平面取りを行なった。C地区は第2号住居跡のベルトを除去し、精査し、同時に第1、2カマドの平面図取りを行なった。また平面図取りはほぼ終了した。

4月12日 雨

雨のため午前中、出土遺物の水洗いとネーミングを行なった。

4月13日 曇り

B地区全体の平面図作成を行なう。灰原の平面図は終了した。C地区は第2号住居跡のピット、周溝並びに掘立遺構の掘り下げを実施する。

4月14日 晴れ

B地区の平面図取りは第2、3号窯跡まで終了した。C地区では第2号住居跡の平面図取りを行なった。また南側よりレベル記入をはじめる。

4月15日 晴れ

B地区は第4号窯跡と溝状遺構の平面図取りを終えた。C地区は第2号住居跡の平面図取りを行ない、平面図へのレベル記入は西側が終了した。

4月16日 曇り

B地区は平面図取りを終了し、第2、3号窯跡付近までレベル記入を行なった。C地区は第6号住居跡の平面図取りを終え、レベル記入をも終了した。

4月17日 晴れ

B地区全体のレベル記入終了。C地区第2号住居跡は全体を整備し、写真撮影を行なった。

4月18日 晴れ

第2号住居跡は溝の埋土を掘り上げ、同時に平面実測、レベル記入を行なう。

4月19日 曇り

第2号住居跡はレベル記入を終了した後、第1床面を剥がし、第2床面を検出した。

4月20日 晴れ

第2号住居跡は第2床面の焼土、炭化物の範囲を平面図にチェック、レベルを記入し、またピット及び溝を掘り下げた。

4月21日 晴れ

第2号住居跡は第2床面の平面図及びレベル記入と第1カマド焚口部の実測を行なった。第1号住居跡は東西、南北に切断してみた。

4月22日 晴れ

第2号住居跡は前日に引き続き第2床面の平面図及びレベル記入、第1カマドの瓦組の実測及びその切断を行なった。第1号住居跡は切断面の実測を行なった。

4月23日 曇り

6号住居跡の断ち割り、その図面作成及び北側の施設瓦の精査、実測、遺物取り上げを行なう。また3号掘立造構の掘り方を半裁し、セクション図をとった。

〈第2次調査〉

昭和54年4月16日 雨

今回調査地区はD地区である。区域内に3×3mのグリッド設定及び現場整備を実施する。

4月17日 晴れ

第1トレンチは約30cmで地山に達する。耕作が地山まで達しており、地山面には天地がえしの痕跡がある。第3トレンチも30~50cmで地山にたつしたが、本日は半分表土剥ぎが残った。

4月18日 曇り時々晴れ

第3、第5トレンチ完掘。第7トレンチは掘り残す。全体的に耕作による擾乱がはげしい。

4月19日 晴れ

第7トレンチを完掘する一方、第1トレンチ北側に第8トレンチを設定し掘り上げる。また第1~第7トレンチの中央部を南北に通る溝を掘り上げたが、時代、性格不明。畑の通路になっているところにはほぼ一致している。

4月20日 曇り

第1~第8トレンチの消掃をして全体写真を撮る。その後、断面図取り。平面は古代造構の検出がなかったので50分の1で平板実測をする。第5-Cでピットが一つと、その周囲に若干の焼土及び土師器片があったが、犬地がえし等の擾乱がひどい。

4月23日 曇りのち晴れ

D地区の平板実測及びレベル記入終了。これに並行し、前回の調査地B地区の窯跡だめ押しのため、それを横に切断する。

4月24日 晴れ

B地区窯跡切断面の図面取りを行なう。また井江遺跡の全体写真を撮るために、A地区全体の整備を行なう。

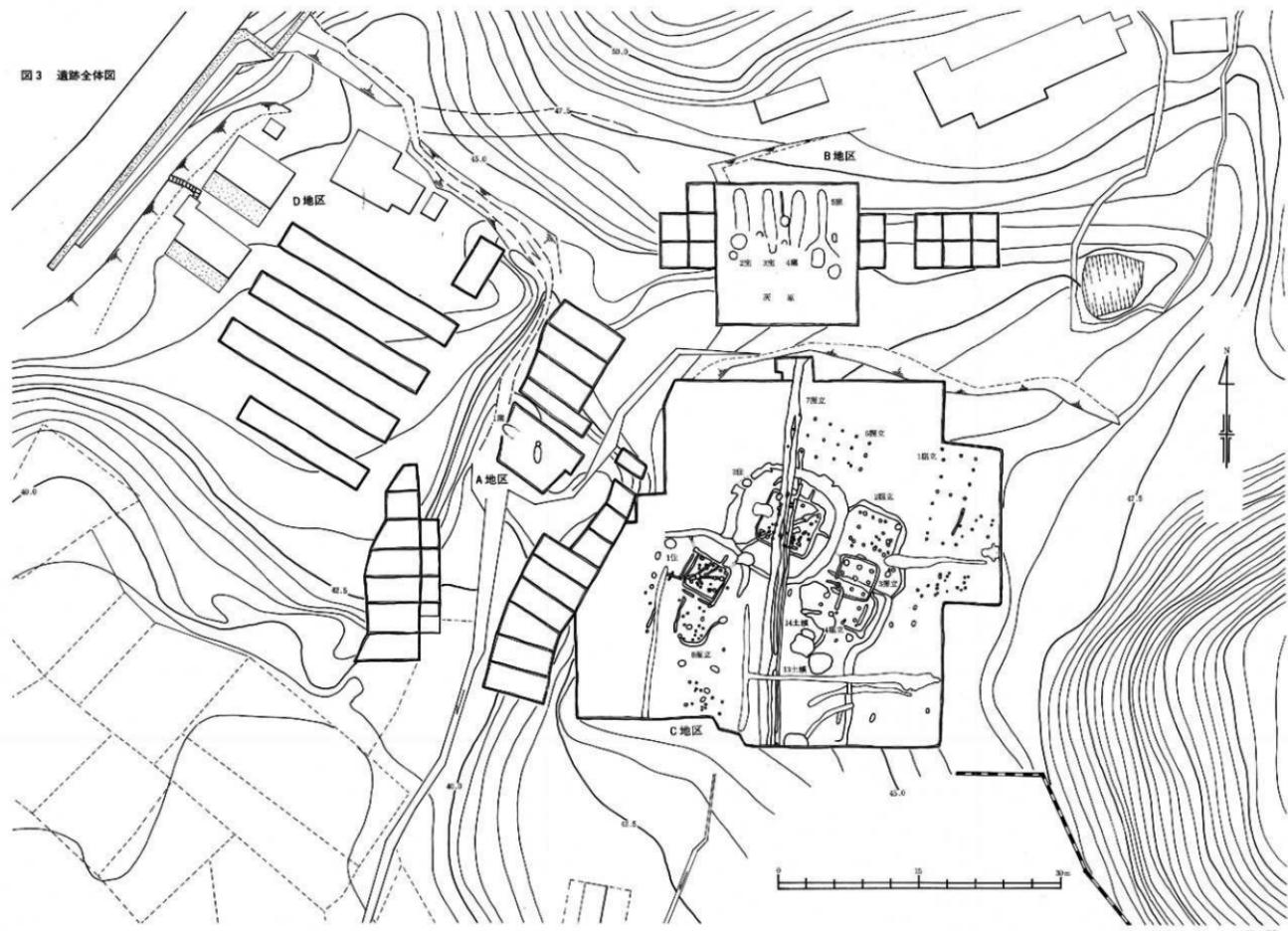
4月26日 曇り

窯跡断面の註記を行ない、その後、発掘器材の整理を行なう。

4月27日 雨

器材整理を終了し、今調査を終わる。

図3 道路全体図



V. 調 査 概 要

1. A 地区の概要

A 地区は与兵衛沼よりの用水路と沢田の両側に 3×3 m を基準としたトレンチを地形に応じて設定した。各トレンチは地形単位ごとに、A-I 区、A-II 区、A-II b 区に区分けして調査を行なった。

〈A-I 区〉

用水路の西側斜面に南側から第1～第6までトレンチを設定した。この地区は分布調査の際に多量の須恵器片、瓦片が散布していた用水路に面した遺構の存在が考えられた地区であったが、各トレンチ共に表土は浅く20～30cmで地山にたっする。出土遺物も少なく、第1、第2トレンチより各2点の瓦片が出土しただけで遺構は見られなかった。

このA-I 区の斜面は与兵衛沼からの用水路を作る際にできたものであり、分布調査の時に発見した遺物も他地区よりの流入品と考えられる。

〈A-II 区〉

用水路の東側斜面に南側より第1～第10トレンチを設定した。また第8～第10トレンチは、



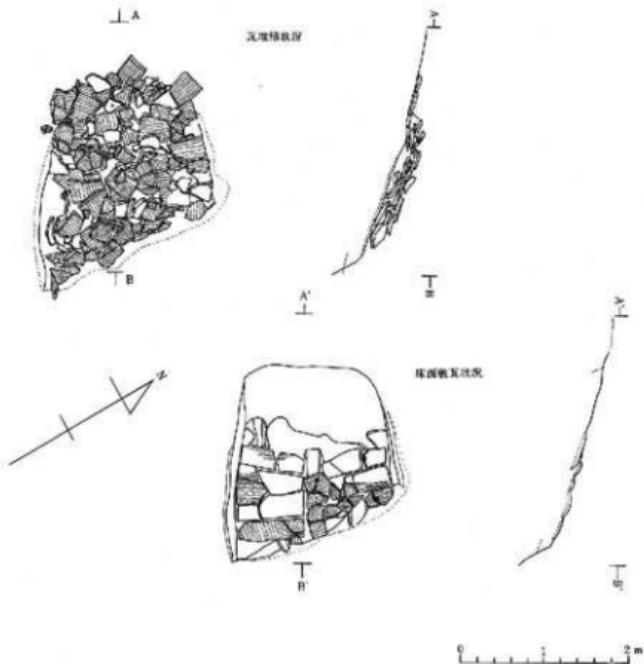
写真13 A 地区全景

沢田を境にA-II b区と同一のトレンチとなり、特に8a、9a、10aトレンチと呼称した。各トレンチ共層位は基本的に3層で、第2層の明褐色土層より土師器、須恵器が出土している。しかし大部分が破片であり、遺構も検出できなかったことより、C地区からの流入品と考えられる。またこのA-II区もA-I区同様、用水路開闢による地形の変更を受けている。

<A-II b☒>

沢田の西側斜面で背後は用水路が通り、奥行きのない地区である。A-IIと通し番号があるが第8b～第13bトレントまで設定した。遺構は第8bと第9bトレントにおいて、窯跡1基と土壤2基が検出された。この地区は北側が高く、南側へ傾斜している沢に段状の水田が作られたため、両側の斜面は裾部がかなり削られている。また各トレント最下層の青灰色土層からは、瓦片と共に炭や火を受けた燃えさしと思われる木材が出土している。特に最も北側の13bトレントでは100点をこえる瓦片と共に、炭、焼けた木材片が多量に出土しており、B地区において窯跡の存在を考えさせた。

図4 第1号窓跡実測図



〈発見遺構〉

(1) 窯跡

第1号窯跡

遺構の確認：A-II 8 bとA-II 9 bのベルト下で検出し、表土下約10cmで確認した。

窯体の構造：焚口部、燃焼部、焼成部の大部分が水田開墾の際に破壊され、わずかに焼成部の一部が残っていただけである。残存部は幅1m、長さ1.1m程で、焼成部の最奥部分と考えられる。壁は床より立ち上る屈曲部がわずかに残っているだけである。床面の最も低い位置で測って13~17cmで、平均7cm程でしかなく、水田開墾による破壊以前にも削平されていたと考えられる。床面は平坦で、傾斜は15度程である。方向は南北に対して約54度西へ偏している。

窯の内側はスサによってぬられていたと思われるが、残りが悪く、灰色に還元されている部分はわずかしか見られない。また床面下の地山は暗赤褐色に熱変化をうけているが、3~5cm程で、床面の厚さとも考えあわせると使用回数は少なかったと推定される。

窯内堆積：堆積土は薄く褐色土層であり、10cm程で瓦の堆積にあたる。瓦の堆積は、上面に不定形の大きさの瓦片を投げ上げたように積まれていたが、それをはずすと窯跡の中心線に対してほぼ直行するように、凸面を上にして2列に敷かれてあった。焼台として使用されたものらしく、瓦の下は還元されず橙色に熱変化を受けていた。

灰原：水田開墾のため残っていない。

(2) 土 壤

第1号土壤

遺構の確認：A-II 8 bにおいて検出し、地山面で確認した。

形態と構造：平面形は南北2.5m、東西1.1m程の長楕円形で、壁はゆるやかに立ち上り、断



写真14 第1号窯跡瓦堆積状況



写真15 第1号窯跡施設瓦状況

面形は若干凹凸のあるU字形をなす。

深さは確認面より20cm程である。

堆積土：5層に区分できるが、基本的には灰褐色シルト、灰色シルト、暗褐色砂質シルトの3層で、最下層の暗褐色砂質シルトより瓦、須恵器が出土した。

関連遺構：第2号土壙が接する。切り合は確認できなかった。

第2号土壙

遺構の確認：A-II 8 bにおいて検出し、地山面で確認した。

形態と構造：平面形は南北80cm、東西70cm程の楕円形で、壁は急に立ち上り、平坦な床面をなす。断面形はU字形で深さは30cm程である。

堆積土：堆土は第1号土壙とはほぼ同一で3層に区分できる。水平堆積で遺物は含まない。

関連遺構：第1号土壙と共に第1号窯跡の前庭部付近にあたるが、炭は全く含まれず、遺物も少ない。上部がかなり削平されており、窯跡との関連は不明である。



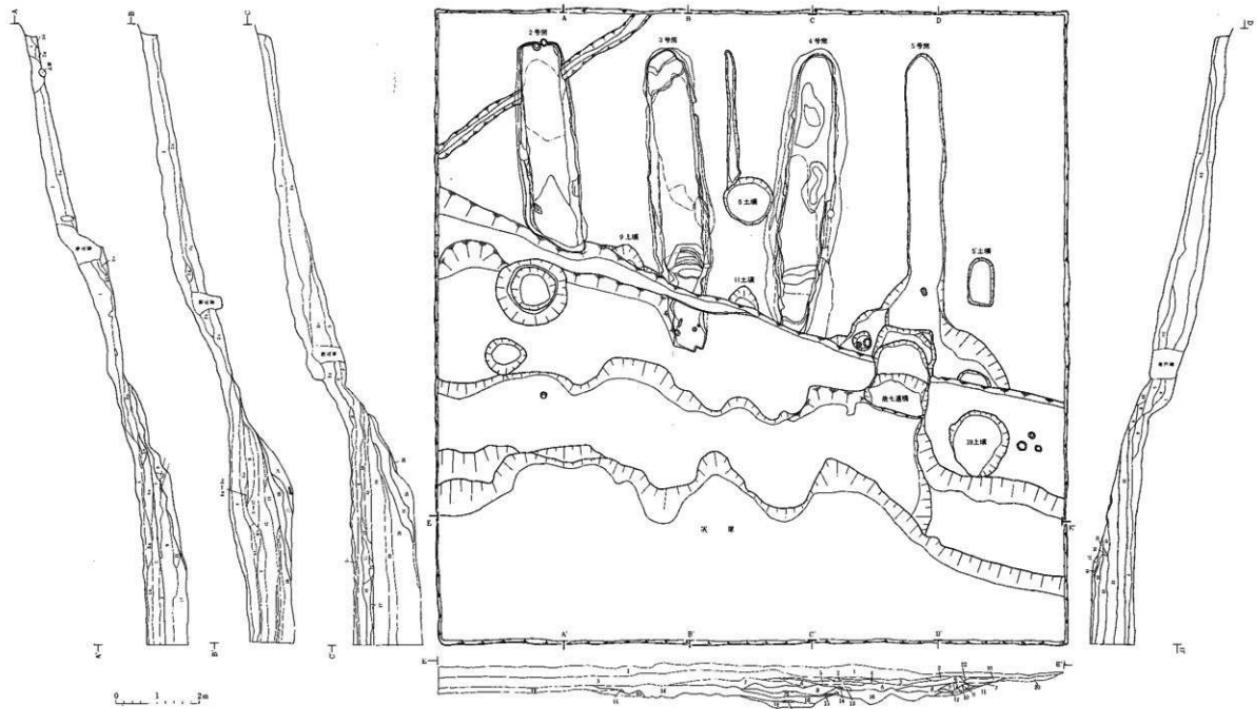
写真16 A地区出土の重弁蓮華文軒丸瓦片

2. B地区の概要

遺跡の北側を画する沢田路の南向斜面にC地区と共通のグリットを設定した。現状は大部分が畠であったが、A地区と接する西側は竹林で、さらにその中に多量の廃土、廃材が捨てられており、ユンボでそれらを排除した。畠地の部分は全体的に表土が浅く、最も薄い所で30cm～40cmで地山にあたった。表面調査でも瓦片が数点採集されただけであり、当初は開田の際に遺構が大部分破壊され、遺物もA地区の方へ投げ捨てられたであろうと考えていた。

調査では開田の影響は意外に少なく、耕作や水道管理によって一部破壊されているが、かなり良好な状態で遺構を検出することができた。

図5 B地区全体図



検出遺構は、窯跡4基、焼土造構1基、土壙6基、現代の井戸1基である。特に灰原は最下層まで調査できた。



写真17 B地区全体の状況

〈発見遺構〉

(1) 窯跡

第2号窯跡

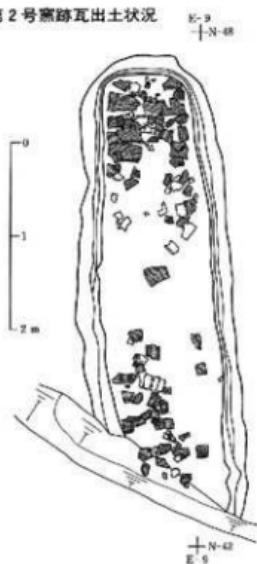
遺構の確認：B地区の西側、ちょうどE9ベルト下において発見した。表面調査では遺物は見られなかったが、第1層（暗褐色土）において廃棄物と共に瓦片が少量見られ、第2層（褐色土）において焼土、炭、瓦片が多量に混入し、第2層下面において窯跡を検出した。窯跡検出面は表土より30~40cmで浅く、遺構全面に耕作による影響を受け、斜面の上部ほど削平されている。

窯体の構造：窯体は丘陵斜面の暗褐色土に掘り込まれたものであるが、焚口と燃焼部の大部分を開



写真18 第2号窯跡(1)

図6 第2号窯跡瓦出土状況



っているが、奥壁の周辺は薄く、赤褐色の部分もある。床面の幅は中央部で90cm、傾斜角は20度である。また調査時には奥壁近くに一部しか残っていなかったが、焼台に使用した平瓦が中軸線に直行するように2列に敷いてあった。窯の使用時に焼成部全面に敷いたものと思われる。天井部は残っていないが、壁の高さは、そのカーブと床幅より1m前後と推定される。奥壁に見られるピットは窯跡に直接関係はないと思われるが、2層より掘り込まれている。性格は不明である。煙道は確認できなかった。

窯内堆積状況：8層に区分できる。割合に水平に堆積しているが、焼成部全体を通して堆積している層はない。各層ともスサと若干の焼礫を含み、遺物は割合少ない。

第3号窯跡

遺構の確認：2号窯跡の東側、正にベルト下において発見した。検出状況は2層下面において窯跡を確認した。窯跡確認面は表土から35cm～40cmで、斜面の下方がやや厚い。第1層（暗褐色土）は小砾とゴミを含み、第2a層（褐色土）、第2

田、井戸掘削、水道管理設によって失っている。焼成部の一部は暗渠用土管埋設のため切断されている。したがって窯体の残存長は中軸線上で4m52cmを測る。床面傾斜や両壁のカーブから推定すれば、窯体の全長は7m程度と考えられる。方向は窯体中軸線が磁北に対し西へ6度偏している。

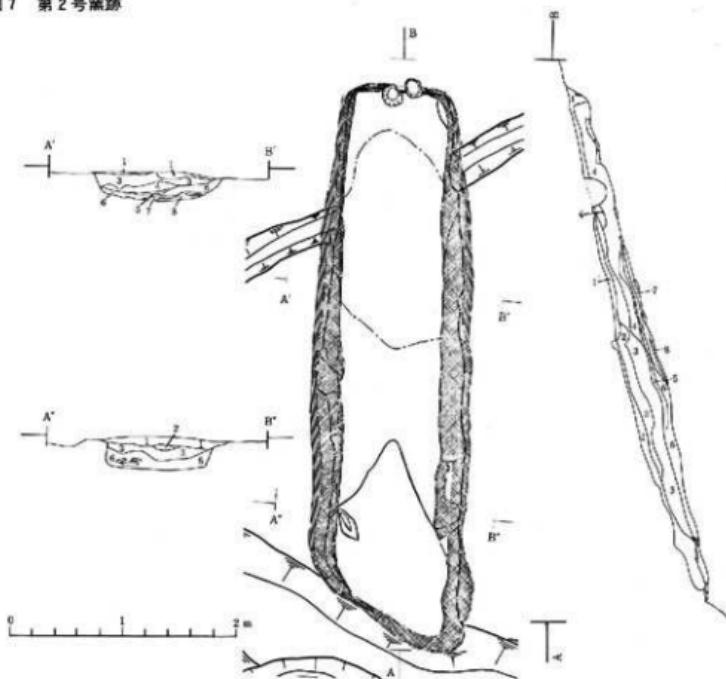
焚口部と燃焼部：焚口部は完全に破壊されているが、燃焼部については残存部に傾斜変換部が見られる。水道管理設によって切断された部分がそれにあたる。幅は1mで燃焼部としての長さは約2.5mと推定される。

焼成部：焼成部床面残存長は4.5mである。壁は両側共に削平され、高さは25～30cm程度しか残っていない。特に最も内側の壁面は窓内に崩落している。床面は青灰色の環元層とな



写真19 第2号窯跡(2)

図7 第2号窯跡



- | | | | |
|-----------------------|-------------------------------|-------------------|-------------------------------------|
| 1. 7.5YR 褐褐色シルト | 粘性。しまりとも弱い。 | 6. 10YR 黄褐色シルト | 粘性。しまりとも弱い。 |
| 2. 5YR % 褐色シルト | 粘性は弱く、しまりは非常に多い。
スサ・小礫を含む。 | 7. 5Y % 灰オーリーブ色砂 | 粘性弱く、しまりあり。
スサが多い。 |
| 3. 5YR % にいじ色シルト | 粘性弱く、しまりあり。
スサ・他土を多少含む。 | 8. 10YR % 明黄褐色シルト | 粘性・しまりとも弱い。
2つの東西セクションの付記は上記と同じ。 |
| 4. 7.5YR 褐褐色シルト | 粘性。しまりとも弱い。 | | |
| 5. 2.5G Y % 灰オーリーブ灰色砂 | 粘性弱く、しまりあり。
スサが多分に多い。 | | |

C層（暗褐色土）は焼土、炭、遺物と共にゴミを若干含み、窯跡確認面まで耕作の影響をうけている。

窯体の構造：窯体は暗褐色土をベースとしており、燃焼部の一部を水道管埋設によって切断されているだけで、窯の全様を知ることができる。中軸線で測った全長は8.2mである。方向は窯中軸線が磁北に対し西へ6度偏しておらず、2号窯跡とはほぼ同一方位である。

焚口部と燃焼部：焚口部は床幅52cmで、左右に広がらず、切り落したような開口部をなす。壁は赤褐色に熟変化をうけて、内部には多量の灰と炭が堆積している。

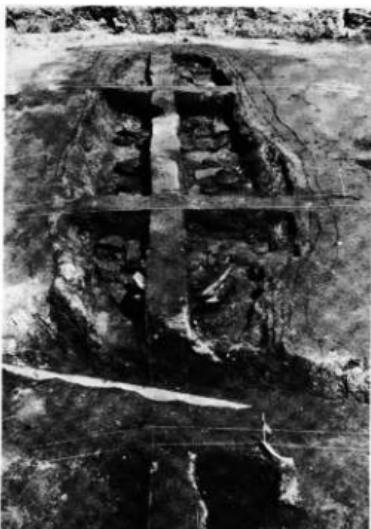


写真20 第3号窯跡(1)

図8 第3号窯跡瓦
出土状況

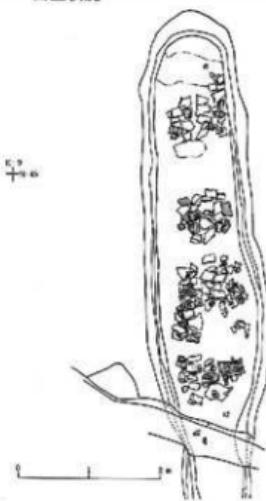
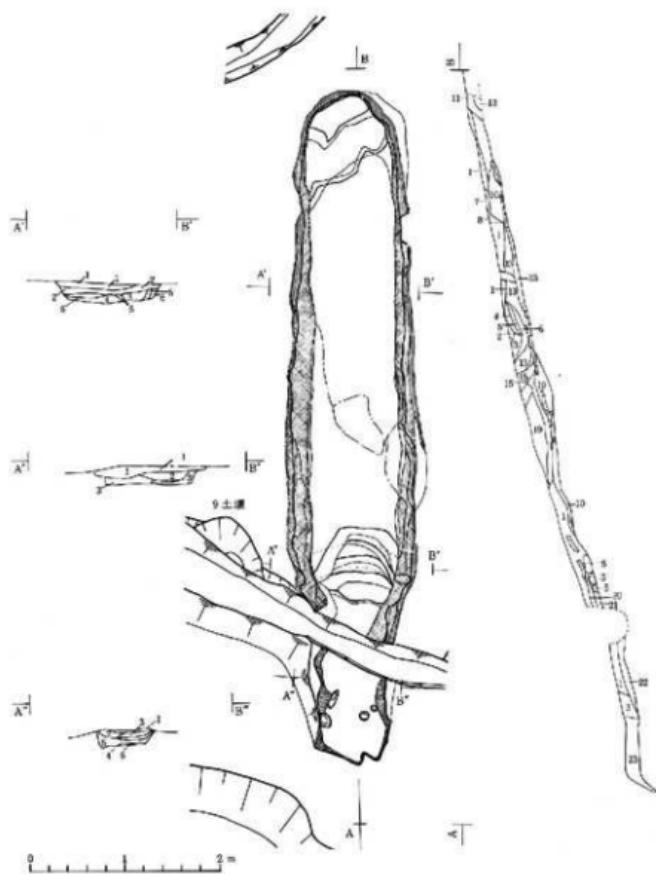


写真21 第3号窯跡(2)

焼成部は一部を水道管埋設のため切断されているが、窯幅がせまくなる部分に傾斜変換部が見られ焼成部と区分できる。長さは2.25mを測る。床面は暗灰色に環元されている。傾斜は20度程度で、炭、焼土と共に20cm前後の焼石が堆積している。側壁は中央部で東側が中軸線より内傾し、幅50cmと狭くなっているところもある。

焼成部：全長は中軸線で4.46mで、床面は凹凸があるが、傾斜は10～25度である。全体的に青灰色に還元され、堅く焼きしまっているが、奥壁の部分では還元されているところは薄く、床面は軟かい。幅は中央部で90cm、最も広いところで1mである。側壁は内側が青灰色で、外側は赤褐色となっている。還元層は3～5cmで薄い。壁の厚さは中央部が25cmで、奥壁に近いほど薄く、10cm程度である。

図9 第3号窓跡



1. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻複雑な地殻と同じ。地
殻を侵入する。
2. 10Y左斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
3. 10Y左斜面褐色シルト
地殻を侵入する。
4. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
5. 10Y左斜面褐色シルト
地殻を侵入する。地殻より
は浅く入りやすい。(4.よりやや深い)
6. 9Y左斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。地殻をあける。
7. 7.5Y右斜面褐色シルト
地殻を侵入する。地殻よりやや深い。
8. 7.5Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
9. 7.5Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
10. 7.5Y左斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
11. 7.5Y左斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
12. 7.5Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
13. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
14. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
15. 10Y右斜面褐色シルト
(7.5Y右斜面褐色シルト)
16. 10Y右斜面褐色シルト
(7.5Y右斜面褐色シルト)
17. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
18. 10Y左斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
19. 10Y左斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
20. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
21. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
22. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。
23. 10Y右斜面褐色シルト
地殻。しきりとも地殻よりやや深い。

煙道部は検出できなかったが長いものではなく、奥壁付近より上部にぬくものと推定される。床面は多量の瓦が中軸線にはば直行するように散布しており、焼台として焼成部に敷いたものであろう。

窯内堆積状況：19層に区分できたが、ほとんどが水平堆積ではなく、場合によっては上方が垂直に入り込む層もあり、雑然としている。各層とも焼土、焼磚をブロック状に含み、床面に近い層ほど遺物とスサを含む。

第4号窯跡

遺構の確認：3号窯跡の東側、E15ベルト下に位置する。検出状況は窯跡の上方が第2層下面で、下方は第3層下面で確認した。窯跡確認面は斜面上方で20~30cm、下方は最も厚いところで90cmで、下方ほど厚い。各堆積土の状況は、第1層（暗褐色土）は耕作土で礫とゴミを含む。第2a層（褐色土）は焼土、炭、遺物を若干含む。第2c層（暗褐色土）は遺物を多少含む。各層とも現代の遺物が混入しており、窯跡確認面まで耕作の影響をうけている。

窯体の構造：窯体は焚口部を水道管理設によって切断されている。全体的に窯跡上面は削平されているが、全様を知ることができる。残存長は7mを測る。方向は中軸線が磁北に対し東へ6度偏しており、2号窯跡、3号窯跡とは反対側に偏している。

焚口部と燃焼部：焚口部は欠損しているが、2号窯より推定して、水道管理設地点より1m程



写真22 第4号窯跡(1)

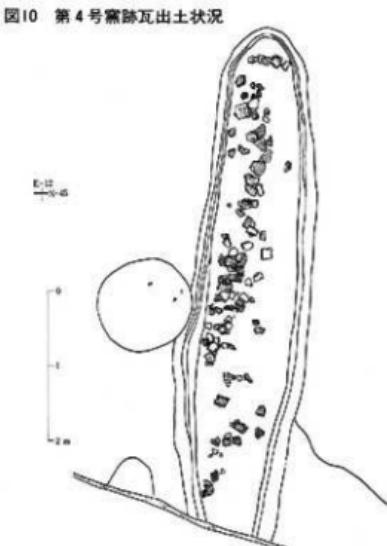


図10 第4号窯跡瓦出土状況

手前の地点と考えられる。

燃焼部は側壁が狭くなる地点に傾斜変換部があり、焼成部と区別できる。現存床長は1.3mである。側壁は床面からの立ち上りが直線的で、床面共青灰色に還元されている。西側壁は特に厚く、赤褐色に変化した部分まで測ると、最も厚いところで50cmある。東側は15cmで薄い。

床面の傾斜は15~16度で凹凸が見られる。

焼成部：焼成部床面長は5.2mである。床は中央部に凹凸があるが青灰色に還元しており、燃焼部付近は硬く、奥壁付近は軟らかい。傾斜は中央部で15~20度である。床幅は中央部で90cm、最大で1mを測る。側壁は東壁の保存は悪いが、西壁は一部二重に補修されている。壁の立ち上りは燃焼部に比べて緩やかにカーブしている。また窯壁は両壁共に厚く、赤褐色の部分もいれると、中央部で30cm、最大で50cmある。高さは削平されているため20~25cm程しか残っていないが、床幅、側壁のカーブより推定して1m前後と思われる。

煙道部は検出できなかったが、奥壁付近で天井部へぬけるものであろう。

窯内堆積状況：6層に区分できた。第3層が最も厚く、焼成部中央に堆積しているが、これは確認面から床面まで1層をなし、スサ、焼土をブロック状ないしは霜降り状に含入している。他の層はほぼブロック状に堆積しており、ともに不整合な堆積状況である。

第5号窯跡

位置と保存状態：4号窯跡の東側、E18ベルト下に位置する。検出状況は窯跡奥壁付近では第2a層（褐色土）下、下方は第3層（黒褐色土）下面において確認した。第2a層は瓦片や焼土を含み、それまで発見した窯跡と同様のものと考えていたが、確認面においては、それまでのようになにより窯壁による窯体輪郭の確認はできず、土色のちがいによって輪郭を確認した。全体的に耕作による削平をうけており、一部を水道管によって切断されている。焚口部と前庭は溝状遺構によって削りとられている。中軸線で計測した現存長は6.56mで、方向はほぼ真北を向いている。

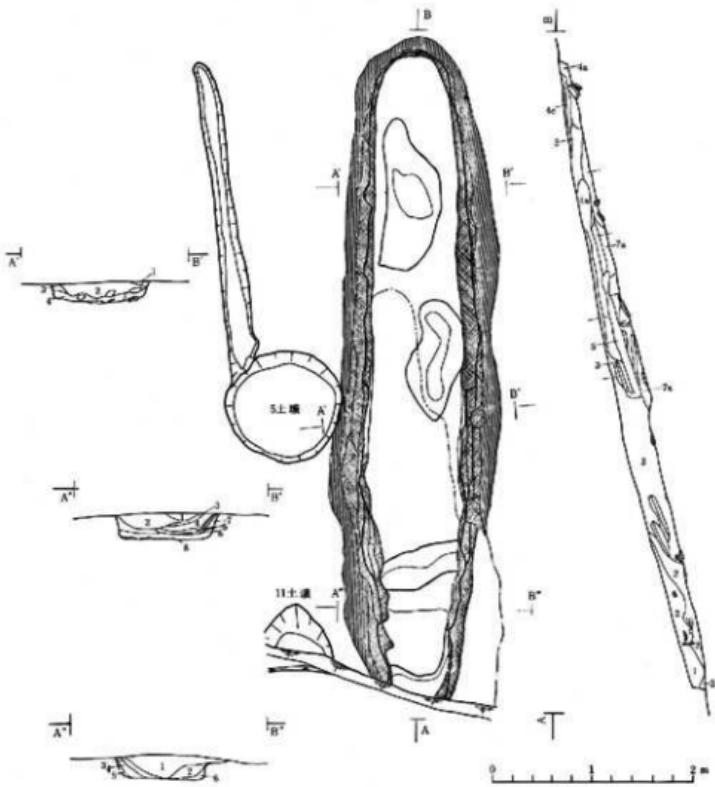
焚口部と燃焼部：焚口部は溝状遺構が切っているため不明である。またこの窯跡は他の窯跡とはことなり燃焼部付近が左右に広がっており、はたして焚口部が作られたか疑問を残した。燃焼部は左右に広がった付近と考えられるが、傾斜変換部は明確ではなく、焼成部との境界が判然としない。

焼成部：全長は5.5m程と考えられるが、境界は明確ではない。床面は左右に広がる部分で若



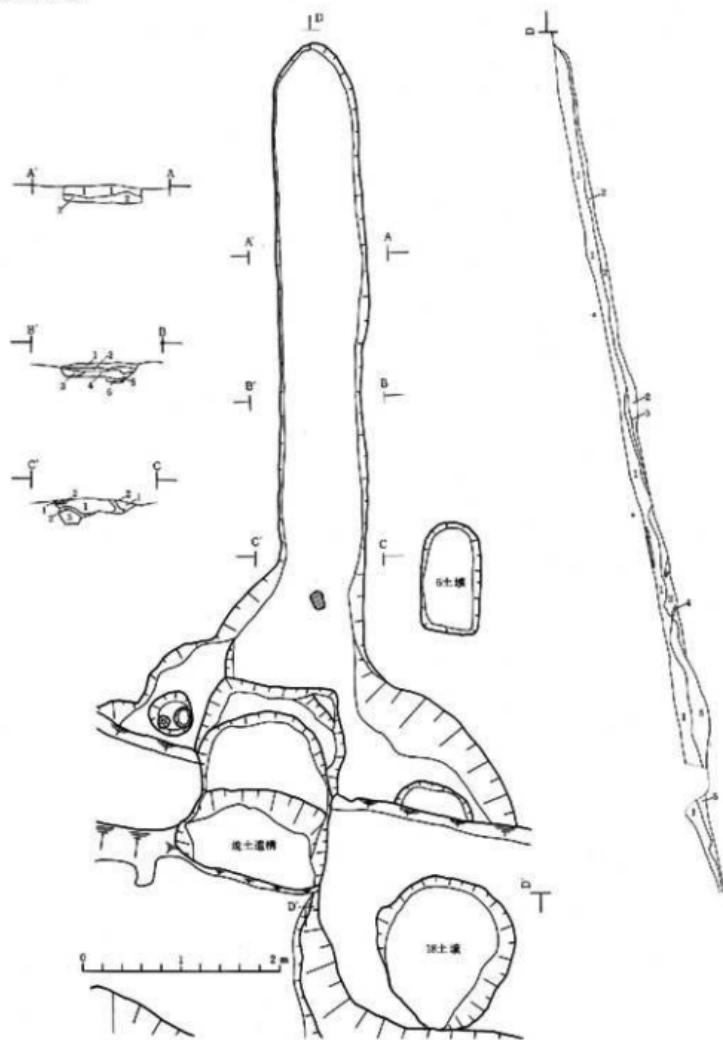
写真23 第4号窯跡(2)

図11 第4号窓跡



1. 10YR 5/8褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・地主を若干
舐入する。泥水を混入。
2. 10Y R褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・地主・ス
テム入り地主を若干舐入する。乱片を混入。
- 3a. 10Y R褐色褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・地主を若干
舐入する。
3. 10Y R褐色褐色シルト
粘性・しまりが1-1B-Hよりある。
地主・ステム入り地主をブロック状しもみ
り後に舐入する。小砂土を含む。
- 4a. 7.5Y R褐色褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし。
地主・ステム入り地主を小ブロック状・じもふり
状に舐入する。小砂土を含む。
- 4b. 10Y R褐色褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・地主を多くむ。
5. 7.5Y R褐色褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・地主・黄褐色粘土を若干含む。
- 6a. 7.5Y R褐色褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・スサ入り地主をブロック状に舐む。
- 6b. 7.5Y R褐色褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・
スサ入り地主・地主をしもみり既に含む。
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・
オーピー端の地主をブロック状に含む。
7. 10Y R褐色褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・
地主をより液に舐入。
8. 7.5Y R褐色褐色シルト
粘性弱い・可塑性なし・しまりなし・
地主・黄褐色粘土を若干含む。

図12 第5号窓跡



- 1) 10Y R%褐色シルト 粘性、可塑性なし。しまりも弱い。
- 2) 10Y R%褐色シルト 粘性、可塑性。I層に比べるとややあり。しまりもやや強い。
- 3) 10Y R%深褐色粘土 粘性、可塑性あり。しまりも強い。
- 4) 10R %赤色粘土 粘性、可塑性なし。しまりも弱い。
粘土にしては焼きがち。
- 5) 5Y R%暗褐色シルト 粘性、可塑性。I層に比べるとややあり。しまりは弱い。

下がるが、ほとんど平坦で、床幅も約90cm

で一定している。傾斜は中央部で10~15度である。壁はほぼ垂直に近く、高さは20cm前後残っている。床、壁共に火をうけた痕跡は全く見られない。

窯内堆積状況：4層に区分できるが、基本的には2層であろう。ほとんどが水平に堆積している。わずかに焼土、遺物を含む。自然堆積と考えられる。

焼土遺構

遺構の確認：第5号窯跡の焚口から前庭付近を切って作られている。検出状況は第5号窯跡南北セクション第1層下面（褐色土）において確認した。形体は長方形で、全体的に削平を受け、中央部を水道管理設のため切断されているが、遺構の底面までいたっておらず、輪郭を確認できた。

遺構の構造：南北2.2m、東西1.5mを測る。床面は2段となっており、下方は平坦で、上部



写真24 焼土遺構出土状況

表1 窯床面の傾斜角度

	焼成部	焼成部(前)	焼成部(奥)	備考
1号	不明	不明	15°	保存不良
2号	不明	10°	15°	奥で反り上る
3号	3°~4°	14°	20°	"
4号	5°~8°	16°	15°	"
5号	2°~3°	16°	10°	"

との境に35度程の傾斜の段があり、上段も平坦、奥壁で立ち上る。南北に長い長方形である。

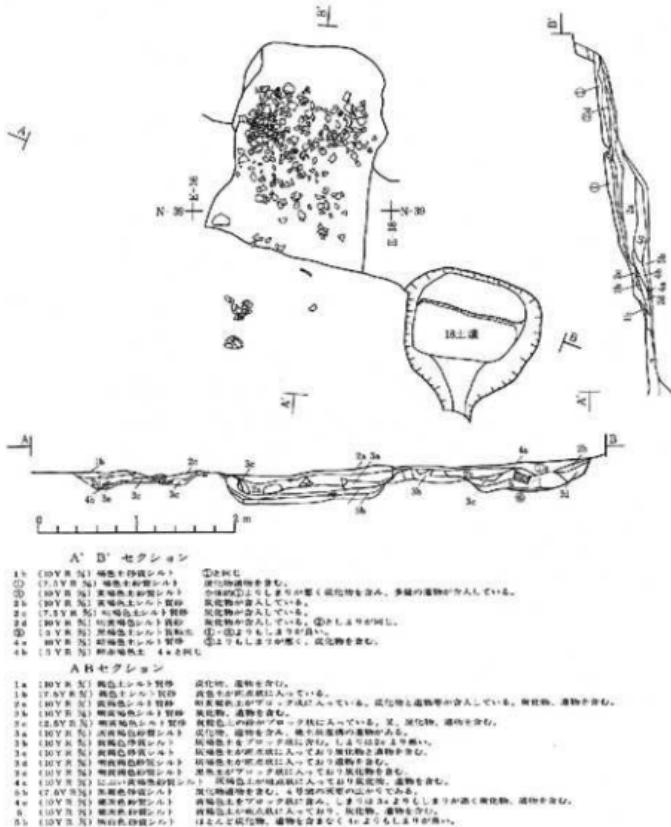
壁の高さは30~35cm程であり、壁、床面とも若干焼けており、壁と床面より若干の焼土を観察できた。上部の奥壁も若干の火を受けており、煙道部としての可能性がある。天井部は削平されて残っておらず不明である。方向は中軸線が東へ10度偏している。

遺構内堆積土：ほぼ水平堆積で、大きく区分して4層に分けられる。第1層より炭化物を含み、第2層から多量の炭化物と共に遺物が出土している。遺物は小型器形が大部分であり、床面に炭化物を敷き、その上に底部を下にして積み重ねられたような状態で押しつぶされていた。

器種	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环 類	口縁部	0	250	250	0	65
	体部	0	434	434	0	155
	底部	0	71	71	0	24
甕 類	口縁部	0	9	9	0	10
	体部	0	39	39	0	7
	底部	0	8	8	0	4
	計	0	811	811	0	265

表2 焼土遺構出土土器集成

図13 焼土遺構



灰原

灰原の範囲：今回調査を行なったグリッド内では、ほぼ灰原の範囲を確認した。この灰原は東西に流れる小沢に形成されたもので、東端はE21ラインまで、西端は6ラインまでである。ほぼ2号窓から4号窓までの下方に位置する。

灰原の堆積状況：堆積層は22層に区分できる。各窓に対応する灰原の東西セクションの観察では、第2号窓跡の灰原は非常に浅く、東西セクションでは3層（第1、3、19層）が観察できた。第3層に炭化物と遺物を多く含み、刻印平瓦が非常に多く見られた。

第3号窓跡灰原では東側が堆積層が多く、西側は第2号窓跡と同様である。一部第4号窓の



◀写真25
灰原の状況



◀写真26
灰原から出土し
た重弁蓮華文軒



◀写真27
灰原での平瓦と
須恵器壊の出土
状況

▶写真28
灰原出土の
刻印文字瓦



▶写真29
灰原での漆器
出土状況



▶写真30
灰原での木製
品出土状況



灰原と重複するようである。

第4号窯跡灰原は最も厚く、おおよそ9層に区分できる。ほぼレンズ状の堆積で、最下層（第18層）は小沢の旧沢道面と考えられる。

各窯跡に対応する灰原の層位の中で共通に見られる層は、第1層だけである。第2、3号窯跡で共通する層は、第1、3層である。第3、4号窯跡で共通する層は、第7、16層である。以上の観察から見ると、第4号窯跡の灰原が最も深く、その上に第3号窯跡の灰原がのり、その上にはそれと同様に第2、3号窯跡の灰原が堆積している。灰原の堆積状態から見た窯跡の操業開始の順序は、第4号窯跡→第3号窯跡→第2号窯跡である。ただし、共通した層も見られ、ある時期は同時操業の可能性がある。また第4号窯跡が東に偏し、第2、3号窯跡が西に偏していることより、窯跡の構築順序は第4号窯跡が早く、第2、3号窯跡がそれに次ぐものであると考えられる。

（2） 土 壤

第5号土壤

遺構の確認：B地区第3号窯跡と4号窯跡の間、N45E12地区において検出し、第2層で確認した。

平面形と構造：第4号窯跡の熱変化を受けた壁外側を切る。径約1mの円形で、底面は平坦で、緩やかな立ち上りをもつ壁をなし、深さは浅く13cmである。底面、壁に炭が薄くはりついている。

堆積土：埋土は1層で褐色土である。遺物は層中に1点と底面直上に1点見られた。

関連遺構と性格：第3、4号窯跡の中間にあり、第4号窯跡の焼成後に作られている。窯跡に関連する遺構であるが性格は不明である。

第6号土壤

遺構の確認：B地点第5号窯跡の東側、N42E18地区において検出し、第2層において確認した。

平面形と構造：東北1.3m×東西0.6mの南北に長い梢円形である。壁の立ち上りは緩やかで、非常に浅い。壁の大部分が焼けており、周縁は若干熱変化を受けている。底面の西側は焼けている。

堆積土：埋土は3層で、1層はにぶい黄褐色砂質シルト、2層はにぶい黄褐色シルト、第3層は暗褐色砂質シルトで、共に炭化物を含む。遺物は瓦1点、土師器片2点だけであった。

関連遺構と性格：第5号窯跡に近接するが、第5号窯跡は火を受けておらず、関連は考えられない。これは壁が若干変化する程度の火を使用した遺構であるが、性格は不明である。

第9号土壌

遺構の確認：B地区第2号窯跡と第3号窯跡の間にあり、N45E12、N42E12地区で検出し、第2層下面で確認した。

平面形と構造：水道管埋設のため南側が削られ、残存部は斜面上方で三角形にまとまる。径は80~50cm程度である。

堆積土：埋土は3層で、第1層褐色、第2層にぶい黄褐色、第3層黄褐色で、共に焼土と炭化物を含む。遺物は平瓦が2片見られた。

関連遺構と性格：保存状況が悪く、その形態も判然としないが、斜面を利用した土壌で、壁もわずかに火を受けた痕跡があり、焼土、炭化物も見られる。第11号土壌と同一の様相を呈している。窯跡に関連する遺構と考えられる。

第10号土壌

遺構の確認：B地区灰原、N3E39において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：東西1.15m、南北1mの楕円形である。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上る。

堆積土：埋土は4層に区分できる。砂層と粘土層が交互に水平地積して、底面には一部わらが敷かれた状態で見られた。遺物は含んでいない。

関連遺構と性格：堆積の仕方はほぼ水平で、他のB地区の土壌とはその在り方を異にする。この土壌の南に現代の井戸があり、底面にわらが見られたことから、井戸と同様現代の土壌と考えられる。

第11号土壌

遺構の確認：B地区、第3号窯跡と第4号窯跡の間、N42E15地区で検出、第2層下面で確認した。

平面形と構造：東西80×南北50cmの三角形で、南側は水道管埋設のため破壊されている。底面は斜面の傾斜と同一である。壁は火を受けている。

器種 器形 類 類	須恵器			上等器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环	口縁部	0	2	2	0	0
	体部	0	0	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0
甕	口縁部	0	0	0	0	0
	体部	0	3	3	0	0
	底部	2	1	3	0	0
	計	2	6	8	0	0

表3 A地区第1号土壌出土土器集成

堆積土：埋土は2層に分けて、1層暗褐色土、2層は黒褐色土で、共に炭、焼土を含む。

関連遺構と性格：埋土中に焼土と炭化物を含み、窯跡間に位置しており、第9土壌と形態、在り方が類似する。機能的には火を使用した窯跡に関連する遺構である。

器種	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏 類	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	0	0	0	0
	底 部	0	0	0	0	0
甕 類	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	0	0	0	0
	底 部	0	1	1	0	0
計		0	1	0	0	0

表4 B地区第10号土壤出土土器集成

関連遺構と性格：焼土遺構に近接し、東に小ピットが3個見られる。第18土壤は焼土遺構に関連する可能性があろう。

第18土壤

遺構の確認：B地区灰原、N42 E21地区において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：南北1.6m×東西1.4mの楕円形である。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上る。

堆積土：埋土は基本的に3層に区分できる。埋土中には瓦、須恵器、土師器片が含まれる。

3. C地区の概要

東側の丘陵部の裾より緩やかに傾斜し、南西に広がる平場である。北側は小沢によって切られ、西側は用水路によって画され南側の低湿地に至る。当初は遺構の存在を考えていなかった地区であったが、平場の整備とともに多量の土師器、須恵器が分布することがわかり、一次調査において平場全域に遺構の存在が推定されたものである。調査はC地区平場の学校建築予定地全域をその対称とした。すなわち、東は丘陵裾部を、西は用水路に接するA地区境までとし、北は小沢を南は民家との境界線までを区域としたものである。

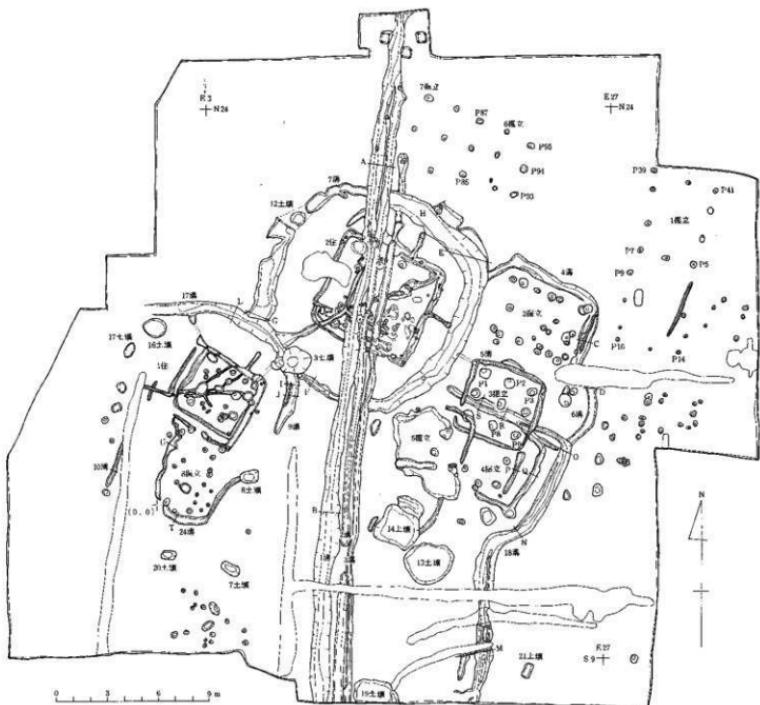
調査時の現状は、A地区との境界は防風林で、その他は畑地であり、果樹、苗圃なども見られた。全体的に水はけの悪い土質で、特に南西部は排水が悪く、表土剥ぎの段階では泥掘りの状態で作業は難渋した。

調査面積は約1,400m²であった。

〈基本層位〉

C地区的基本層位は、東西(E12ライン)とそれに直交する南北(N21ライン)の土層観察によって行なった。

図14 C地区全体図



C地区は北と東が高く、全体的に南西へ傾斜している。また東端、西端は堆積土の流失が著しく、中央部は耕作のため一部客土が行なわれている。そのため東西、南北畦状ベルトはその在り方に若干の差異がある。



写真31 C地区全体の状況

が表土より地山までの堆積層は基本的に2層認められた。

(1) 南北セクション基本層位

第1層

間隙性があり、柔らかくしまりがない。全体的な色調は暗褐色(10YR 3/3)である。この層は耕作による擾乱が著しく、厚さも全体的に薄く20cm前後である。北側には見られず、E11付近より南側に観察された。遺物はほとんど含まない。

第2層

第1層と同様にしまりなく柔らかい。色調は黒褐色(10YR 3/2)で第1層よりわずかに黒い。耕作による擾乱も第1層に比べて少ない。北側は厚さ30~40cmでは一定しているが、南側に行くにしたがって薄くなり、S2ラインより南側にはほとんど見られない。遺物は割合多く含み、地区によってはブロック状の地山が観察された。構造は一部2層中で、大部分は2層下面において確認した。

(2) 東西セクション基本層位

第1層

南北セクションと色調、土質共に同様なものである。東西セクションにおいてはA地区に傾斜する西端では薄くなるが、厚さ10cm位では全域にわたって観察された。

第2層

南北セクションと色調、土質共に同様なものである。ほぼ一定した厚さで全域に見られるが、

E13～E9の内には見られない。

第3層

地山よりややにぶい黄褐色（10YR 4/3）で、主としてE13～E9の間に見られる。若干の遺物とブロック状の非常にしまりある黄褐色土（10YR 5/6）を含む。遺構確認面は第1号溝が3層下面、第2号溝が2層下面である。

各層の広がりは第1層はほぼ全域に見られ、2層は南側が薄く、地域によっては無い所もあるが、全域に見られ、遺物も割合多く含んでいる。東西セクションに見られた第3層は部分的なものであり、広がりはない。

〈発見遺構〉

C地区において発見された遺構は、堅穴住居跡2軒、掘立遺構8軒、土壙13基、溝24本、ピット群などがある。

遺構の配置は、中央部に最も大きな住居跡（第2住）があり、それを切るかたちで、ほぼN12～N15ラインに沿って南北に3本の溝が通り、遺構を東部と西部に二分している。東部は緩斜面の上部にあり遺構の大半が存在する。西部は遺構は少なく、北西区には遺構は全くない。

(1) 堅穴住居跡

第1号住居跡

遺構の確認：C地区西部、N12E9、N9E9、N6E9、N12E6、N9E8、N6E6、N12E13、N9E3、N6E3地区において検出し、2層下面ないしは地表面で確認した。

遺存状況：東部、北部は保存良好だが、南部は壁が残っておらず、かなり削平されている。また南側と西側の周溝が二重になっており、改築されたことがわかる。

平面形と方向：北側に煙道をもつ隅丸方形である。規模は内側周溝で南北3m×東西4.3mであり、外側周溝では南北4.7m×東西4.6mである。方向は東壁を基準とすると南北に対して30度東へ偏している。

壁、床面：壁は東側と北側がほぼ垂直に立ち上る。北東隅で30cm、北側中央で15cm、東側中央で20cm程残っている。床面は10溝とピット15をおおうように東壁沿いに貼床がみられる。

住居内施設：①カマド—北壁の東よりに設けられている。トンネル状に掘り抜かれたと思われる。煙道は長さ1.25m、幅20～25cmで、焚口部は長さ35cm、幅30cmであり、両袖を瓦で補強している。カマド内堆積土は1層で暗褐色シルトである。層中には二次的に火を受けたと思われ

図15 第1号住居跡(I)と第8号掘立柱建物跡

A-Bセクション図註記

1. 黄褐色土 シルト質粘土、葉合入
2. 黄褐色土 シルト質粘土、葉合入
3. 黄褐色土 シルト質粘土、断続的にブロード斑にかけ
4. 黄褐色土 黒土、葉合入
5. 黄褐色土 シルト質粘土、葉合入
6. 黄褐色土 シルト質粘土、葉合入

A'-B'セクション図註記

1. 黑土 (深丸)
2. 黄褐色 シルト質粘土
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。たて穴中
部に水平分層。
3. 黄褐色 黑質粘土
黄褐色土と褐色土を含む。植物はほとんど含まない。
4. 黑褐色 黑質粘土
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。植物はほとんど含まない。
5. 黄褐色 シルト質粘土
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。植物は多く含まれる。
6. 黑褐色 シルト質粘土
7. 黑褐色 シルト質粘土
8. 黑褐色 シルト質粘土
9. 黄褐色 シルト質粘土
10. 黄褐色 シルト質粘土
11. 黄褐色 シルト質粘土

表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。たて穴中
部に水平分層。
黄褐色土と褐色土を含む。植物はほとんど含まない。
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。植物はほとんど含まない。
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。植物は多く含まれる。
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。植物は多く含まれる。
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。植物は多く含まれる。
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。植物は多く含まれる。
表面砂質を含む。炭化陶瓦等の遺物を含む。植物は多く含まれる。

51

図16 第1号住居跡(2)

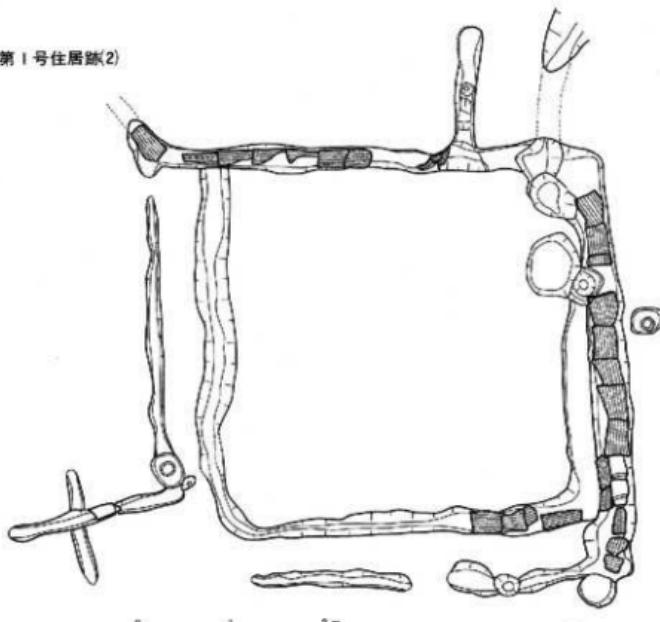
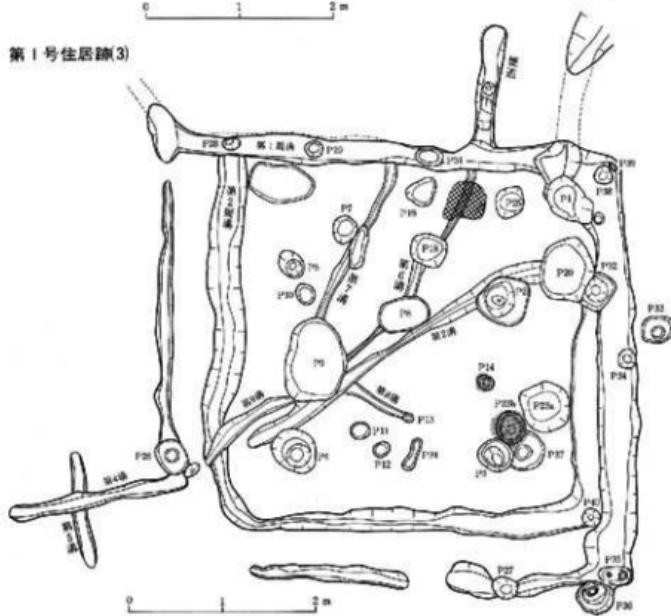


図17 第1号住居跡(3)



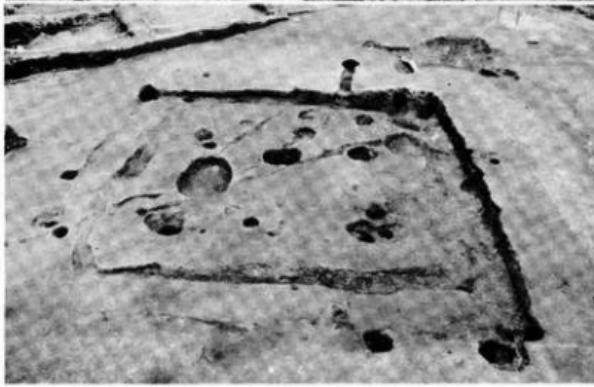
►写真32
第1号住居跡(1)



►写真33
第1号住居跡(2)



►写真34
第1号住居跡(3)



る土師器片と焼土、炭が多量に含まれる。

②柱穴—42個のピットが検出された。この中で柱穴と考えられるのは14個であり、その在り方によって二種に区別できる。

一つは住居跡内にあるピット2、3、4、5、37の5個で、2、3、4、5が組み合う。ピット37は貼床の下で検出した。

一つは東壁と北壁沿いに見られるもので、ピット28、29、31、32、34、35a、36、38、39である。掘り方の見られないものもある。

③溝—住居跡の内側を壁沿いに回る第1周溝とその内側をめぐる第2周溝の2本があり、さらにそれらの周溝に接する溝、床面を走る溝が10本見られた。

④その他の施設—ピット13、14、23bは火を受けており、鉄滓が混入している。東壁、北壁沿いの第1周溝上に瓦が敷かれている。一部第2周溝南側にも見られ、本来は第1、第2周溝の全面を覆っていた可能性がある。ピット1は貯水穴であり、トンネルによって第3土壤に接続する。

堆積土：埋土は11層に区分できるが、基本的には3層で黒褐色土、褐色土、暗褐色土であり、共に焼土、炭化物、遺物を含む。南、西は削平がはげしい。多量に

出土し特異なものとしては、轆火口、手捏ね土器、異形土製品が見られた。

遺構の性格：この住居跡は改築され、南、西に拡大されたものであり、改築後に鍛冶の作業を行なったものであろう。南に近接する第8号孤立建物跡よりも鉄滓が出土しており、鍛冶を行なった時の関連遺構であろう。



写真35 第1号住居跡カマドの状況

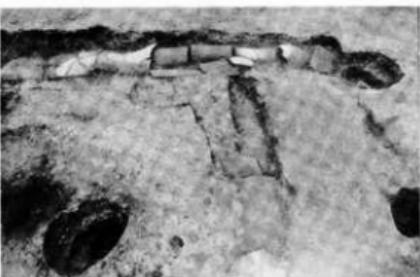


写真36 第1号住居跡改築の状況

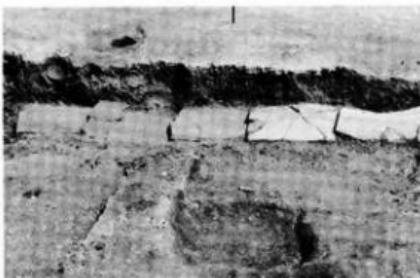


写真37 第1号住居跡周溝上の施設瓦

表5 第1号住居跡ピット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性	備考
1	47	7.5Y R3/3 暗褐色	砂質粘土	腐穴、炭化物、燒土、土師器、須恵器多量出土
2	40	#	#	柱穴、炭化物、燒土、土師器片
3	30	#	#	炭化物、柱穴
4	35	7.5Y R3/2 黒褐色	#	炭化物、燒土、柱穴
5	35	7.5Y R3/3 暗褐色	#	炭化物、燒土
6	8	10Y R4/4 棕褐色	#	炭化物、土師器片
7	7	7.5Y R2/3 深暗褐色	#	炭化物、燒土多量
8	28	10Y R4/4 棕褐色	#	遺物多量、柱穴?
9	18	7.5Y R3/4 棕褐色	#	炭化物物、燒土、土師器片多量
10	14	7.5Y R3/1 黑褐色	#	炭化物、燒土、土師器片
11	4	10Y R4/4 棕褐色	#	
12	12	10Y R3/3 暗褐色	#	
13	4	10Y R3/2 黑褐色	#	炭化物多量、鐵津有り。か?
14	5	#	#	炭化物多量、か?
15	4	7.5Y R5/4 にじい褐色	#	炭化物
16	28	7.5Y R3/3 暗褐色	#	
17	6	#	#	
18	20	10Y R5/8 實褐色	#	炭化物、土師器片
19	23	7.5Y R5/4 にじい褐色	#	土師器片多い。
20	26	#	#	炭化物、燒土多量、土師器、須恵器片
21	32	#	#	炭化物
22	24	#	#	炭化物
23	20	7.5Y R3/3 暗褐色	#	炭化物多量、鐵津、土師器片、か
24	10	10Y R3/3 暗褐色	#	
25	5	7.5Y R5/8 明褐色	#	
26	6	7.5Y R5/6 明褐色	#	
27	5	7.5Y R4/4 棕褐色	#	須恵器片
28	7	7.5Y R5/6 明褐色	#	木炭
29	12	#	#	土師器片
31	27	10Y R4/6 棕褐色	#	土師器片
32	11	10Y R6/4 にじい黄褐色	#	炭化物、土師器片
33	32	#	#	炭化物、土師器片
34	6	7.5Y R5/6 明褐色	#	
35	15	10Y R4/6 棕褐色	#	
36	40	#	#	炭、土師器片、柱穴
37	10	#	#	炭、土師器片、柱穴
38	16	10Y R5/2 黑褐色	#	炭
39	10	#	#	炭
40	6	#	#	炭、土師器片
41	17	10Y R4/3 にじい黄褐色	#	炭、土師器片

表6 第1号住居跡周溝観察表

番	位置	周溝 ピット 等	壤 土	出土遺物	備考
第1周溝	狭い大方形にめぐる。	第2周溝を切る。丸が上を覆う。 第1Pが切る。	7.5Y R 5/3	灰、土器等、 鉄滓	
第2周溝	第1周溝の内側を大方形にめぐる。	第1周溝に切られる。一部丸が上を覆う。	7.5Y R 4/4	灰、土器等	
溝 1	東壁に接する。	丸の上を通り、P23a、P204につながる。	褐色 7.5Y R 4/3	灰、土器等	貼家の上
溝 2	住居跡中央。	P2、4、8、9に切られる。	暗褐色 7.5Y R 4/4	灰、土器等	
溝 3	住居跡東端。	第2周溝に切られる。	暗褐色 7.5Y R 4/6	灰	洗く削平がはげしい。
溝 4	第1周溝南。	P26に切られる。	褐色 7.5Y R 4/6	灰、瓦	"
溝 5	第4墓の西。	第4を切る。	褐色 7.5Y R 4/6	灰	"
溝 6	住居跡中央、カマドより南へ伸びる。	P8、18に切られ、P9に接する。	暗褐色 7.5Y R 3/2	灰、焼土、土師器、 須恵器	上部が上を覆う。
溝 7	北壁に接する。	北窓の瓦の上を通り、P7、9に切られる。	灰褐色 10Y R 4/8	灰、焼土、土師器	
溝 8	住居跡中央南。	P13により第2周溝とつなぐ。	褐色 7.5Y R 4/6	灰、焼土	浅い。
溝 9	住居跡西。	P9と第2周溝をつなぐ。	褐色 7.5Y R 4/4	灰、土器等、 須恵器	上器がいたをしている。
溝 10	東壁沿い。	第2周溝に切られる。	褐色 10Y R 4/4		贴床の下

第2号住居跡

遺構の確認：C地区中央で、東部、南部にまたがる。東西はN18~N12、南北E12~E18の9個のグリッドで検出し、第2層下面、一部は地山面で確認した。

遺存状況：住居跡の西側はアルドーザーや耕作によって削平され、壁の残りは悪い。そして第1号、2号、3号溝によって東西に切断されている。北壁に2本、東壁に1本の煙道があり、住居内にそれに対応する4本の周溝があり、3時期の重複または改築を考えられるので、各期ごとにその実態を述べていく。

第Ⅲ期

平面形と方向：平面形は隅丸方形で、東側に煙道（第3号カマド）が付く。規模は周溝の内側で南北4.4m×東西4.4mである。方向は煙道を通る線でみると、南北に対して115度程東へ偏している。

壁と周溝：南側と西側は削平されて残っておらず、わずかに残っていた第2周溝によって輪郭を確認した。東側と北側の壁は残っているが、第1段階の住居跡内周溝である第1周溝がめぐらされ、本来の壁であるかどうかは不明である。第2号周溝は第3号カマドの焚口付近を除いてほぼ全体を回っていたものである。またこの第2号周溝の南側にわずかに痕跡が残った第4号周溝が観察され、一部改築の可能性がある。

床面：第1床面を剥がしたのちに確認した。各時期のピットや溝で切られているが、ほぼ平坦である。大部分はぶい黄褐色の地山であるが、東側に焼土や炭の分布があり、若干の土器が

図18 第2号住居跡(1)

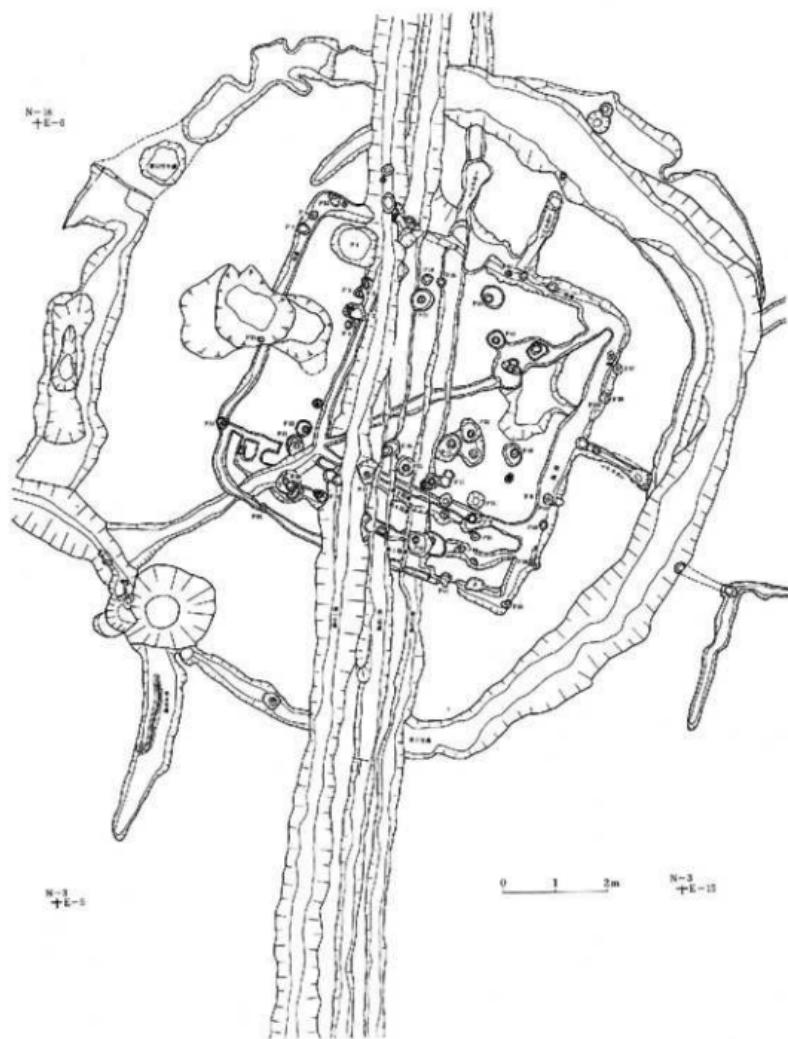
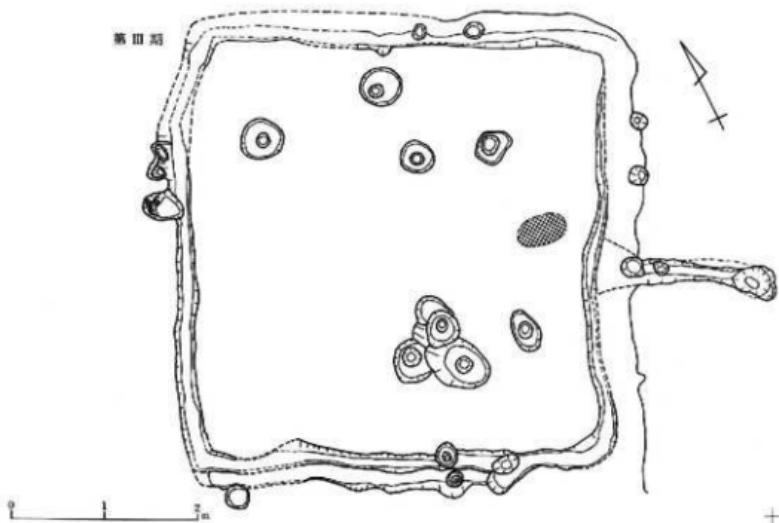


図19 第2号住居跡(2)



含まれる。

柱穴：ピット32、41、42が組み合い、それにピット16が組み合う可能性がある。

カマド：東壁のほぼ中央に設けられている。トンネル状に掘り抜かれたものと思われる。煙道は長さ160cm、幅20~15cmである。焚口部は第1号周溝によって切られ、残っていない。わずかに第2次床面の焚口部付近で焼土と炭が観察された。

第Ⅱ期

平面形と方向：平面形は隅丸方形である。北側に煙道（第2号カマド）が付く。規模は周溝の内側で南北5m×東西5.5mである。方向は煙道を通る線でみると南北に対して30度程東へ偏している。

壁と周溝：壁は第Ⅲ期同様南側と西側は削平されて残っておらず、わずかに南側に残っていた第3周溝によって輪郭を確認した。東側と北側の壁は残っているが、第Ⅰ期の段階の改築を受けていると思われる。東側は削平されており、かならずしも明確ではない。第3号周溝は南側で確認できたが、北側と東側は第1号周溝と重複し切断されており、西側は南西コーナーだけが確認できた。

床：第Ⅰ期の床面とはほぼ同じで、第2号カマドの焚口付近で多量の焼土と炭が遺物と共に、かためられた状態で平坦になっていた。

柱穴：柱穴は掘り方を持つものはあるが、重複や削平のため組み合いか不明であった。

カマド：北壁のやや東側に設けられたもので、煙道の長さは170cmで、幅は20~30cmで、焚口部分は第1号周溝によって切られ、焼土、炭が多量に確認された。

第Ⅰ期

平面形と方向：平面形は隅丸方形で北側にカマド（第1号カマド）が取り付く。規模は周溝の内側で、南北5.5m、東西6mである。方向は煙道を通る中軸線で、南北に対して23度東へ偏している。

壁と周溝：壁は北側と東側は良く残り、高さ30cm程で直立している。南側の壁はわずかに残り、西側は周溝だけが存在している。周溝は第1号周溝が四辺を取り巻く。また北東隅から南西隅をへて第3土壤に通じる溝を切っている。

床面：床面は酸化鉄を若干含む黄褐色砂質シルトで、しまりが良い。東側で部分的に白色粘土が見られ、貼り床の可能性がある。床面は全体的に平坦である。

柱穴：床面では掘り方を持つピットは確認できたが、組み合わせは不明である。東側と北側の壁に等間隔でピットが見られ、壁柱穴の可能性がある。

カマド：北壁のやや西側に設けられている。煙道部の長さは130cmで、幅は25~45cmである。焚口部の長さは約60cmで、袖が残っている。カマドの下を通るマドの下を通り第1号周溝には平瓦と丸瓦で暗渠が設けられている。カマド内からは多量の焼土と遺物が出土している。

住居跡内の堆積土：南部と西部は削平が激しく、特に西側では地山が露出していた。全体的に溝、ピットが重複し、全体の堆積状況はあまり良く把握できなかった。堆積土は東西セクションの観察では9層に分けることができる。黄褐色土の間に黒褐色土ないしは褐色土の遺物を多量に含む層がブロック状に入っている。各層の広がりは残りが悪くつかめなかった。

関連遺構とまとめ：第2住居跡はそのままわりを円形に取り巻く第7号溝によって全体が囲まれている。第7号溝と関連する遺構は後述する。

第2号住居跡は、最初に第III期が構築され、一部改築されたのち第II期に拡張され、第I期でさらに拡張されている。第III期には東壁に見られた煙道が、第II、I期には北壁に構築されている。以上のことから3時期4回の改築が考えられる。ただし第I期と第II期の時間差は大きなものとは考えられない。また第I期と第II期の煙道の方向は第1号住居跡と同一であり、時間的な同一性を考えさせられる。

図20 第2号住居跡(3)

第Ⅱ期

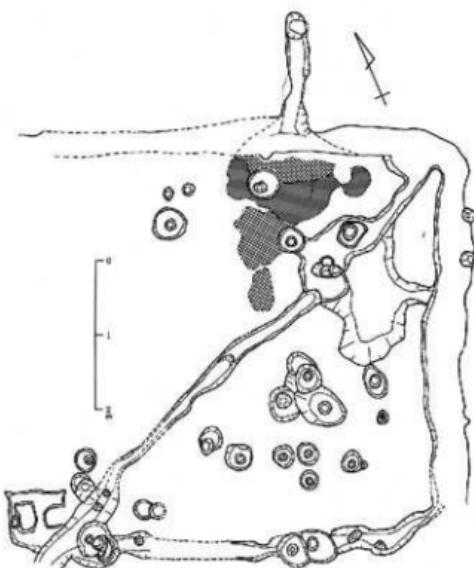
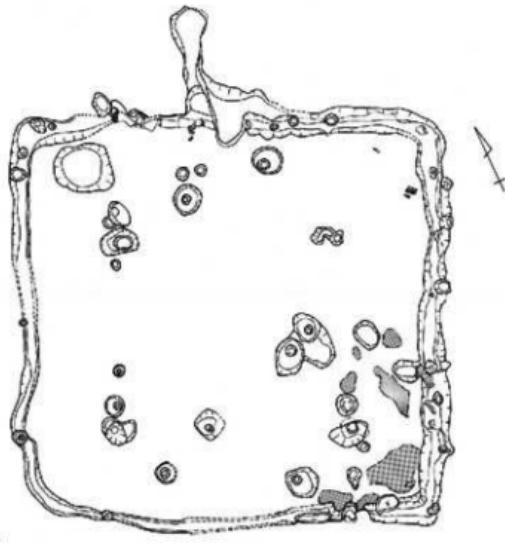


図21 第2号住居跡(4)

第Ⅰ期



►写真38

第2号住居跡(1)



►写真39

第2号住居跡(2)



►写真40

第2号住居跡の
カマド状況

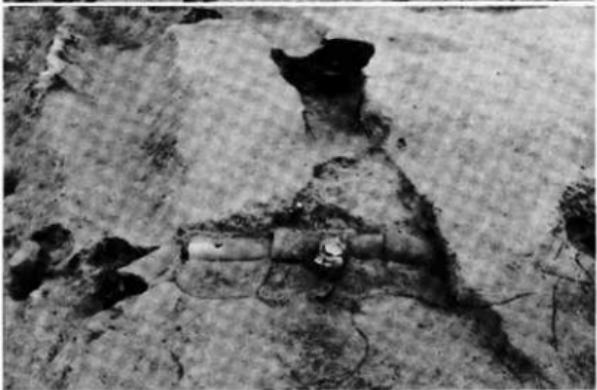


表7 第2号住居跡ピット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性	備考
1	27	10YR 4/4 黄褐色	砂質シルト	本炭、假想器、土鰐器片、鉛蟲穴状
2	40	10YR 5/6 黄褐色	シルト	炭化物、燒土
3	44	"	砂質シルト	平瓦片
4	23	10YR 4/4 黄褐色	"	假想器、土鰐器片
5	11	10YR 3/3 黄褐色	"	土鰐器片
6	14	10YR 4/4 黄褐色	"	
7	21	"	"	
8	5	10YR 5/4 に赤い黄褐色	砂質シルト	燒土、炭化物、平瓦片
9	14	"	"	土鰐器、假想器片、柱穴
10	15	10YR 4/3 に赤い黄褐色	"	
11	27	10YR 5/6 赤褐色	"	柱穴
12	38	10YR 6/6 明黄褐色	シルト	燒土、炭化物、柱穴
13	36	10YR 6/4 に赤い黄褐色	砂質シルト	燒土、炭化物、柱穴
14	27	10YR 5/4 に赤い黄褐色	"	平瓦片、柱穴
15	27	10YR 6/6 赤褐色	粘土	土鰐器片、柱穴
16	13	10YR 5/4 に赤い黄褐色	砂質シルト	
17	30	"	"	土鰐器片、柱穴
18	9	10YR 5/2 黒褐色	"	
19	33	10YR 5/4 に赤い黄褐色	"	柱穴
20	37	"	"	柱穴
21	16	"	"	土鰐器片、柱穴
22	25	10YR 3/2 黑褐色	"	柱穴
23	18	10YR 5/8 深褐色	"	柱穴
24	23	10YR 5/4 に赤い黄褐色	"	炭化物
25	40	"	"	
26	48	"	"	
27	12	"	"	壁柱穴
28	12	"	"	"
29	10	"	"	"
30	16	"	"	
31	42	10YR 5/8 に赤い黄褐色	"	土鰐器、平瓦片、柱穴
32	29	10YR 5/6 赤褐色	"	柱穴
33	40	10YR 4/3 に赤い黄褐色	"	炭化物、柱穴
34	10	10YR 5/4 に赤い黄褐色	"	
35	9	"	"	
36	10	10YR 3/2 黑褐色	"	
37	17	10YR 3/4 深褐色	"	
38	24	10YR 5/8 黄褐色	"	柱穴
39	40	10YR 5/6 赤褐色	"	
40	5	10YR 3/3 赤褐色	"	假想器片
41	30	10YR 5/4 に赤い黄褐色	"	土鰐器片、柱穴
42	15	"	"	炭化物、柱穴
43	30	10YR 5/6 黄褐色	砂質シルト	壁木穴?
44	30	"	砂質シルト	炭化物、柱穴
45	36	10YR 6/3 に赤い黄褐色	"	炭化物、柱穴
46	14	10YR 6/4 に赤い黄褐色	"	燒土、炭化物、柱穴
47	34	10YR 4/4 黄褐色	"	炭化物、柱穴
48	30	10YR 5/6 黄褐色	"	炭化物、平瓦、土鰐器片、柱穴
49	37	10YR 6/3 に赤い黄褐色	"	燒土、炭化物多量、柱穴
50	10	10YR 4/4 黄褐色	"	炭化物、柱穴
51	12	10YR 5/4 に赤い黄褐色	"	
52	10	"	"	
53	10	"	"	
54	20	"	"	
55	8	"	"	
56	6	10YR 5/8 黄褐色	"	
57	4	"	"	
58	20	10YR 5/4 に赤い黄褐色	"	炭化物、柱穴
59	40	"	"	
60	48	"	"	
61	54	"	"	
62	30	"	"	



図22 第2号住居跡部分図(1)

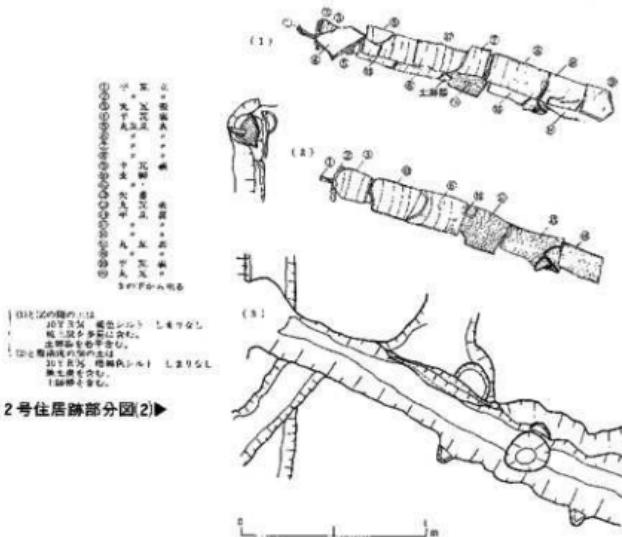


図23 第2号住居跡部分図(2)▶

(2) 挖立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

位置：C地区東部北東端にあり、四隅はN21E36、N21E30、N18E30、N18E33において検出し、第2層下面にて確認した。

規模と構造：ピット41、40、39、38、37、7、6、5、43、42の10個の柱穴が組み合う。桁行3間（4.6m、約1.5m等間隔）×梁行2間（3.3m、約1.6m等間隔）の南北棟で、桁方向は南北に対して東へ15度前後ずれている。側柱だけの建物である。

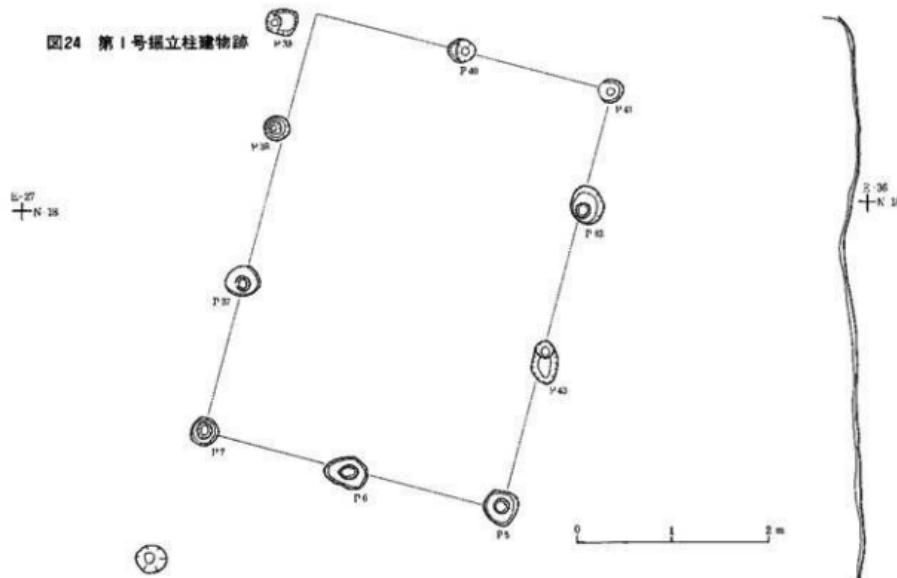
掘り方と柱痕：掘り方は径24~50cmの楕円形で、柱痕は径11~16cmの円形あるいは楕円形である。掘り方の埋土は黄褐色土、柱痕の埋土は褐色である。掘り方の埋土には炭化物と少量の土師器が見られた。

第2号掘立柱建物跡

位置：C地区東部中央にあり、四隅はN15E27、N12E27、N12E21、N9E24において検出し、第2層において確認した。

重複：2間×3間の掘立（A）と、2間×2間の掘立（B）の2棟が同一位置に建つ。

図24 第1号掘立柱建物跡



►写真41
掘立柱建物跡群



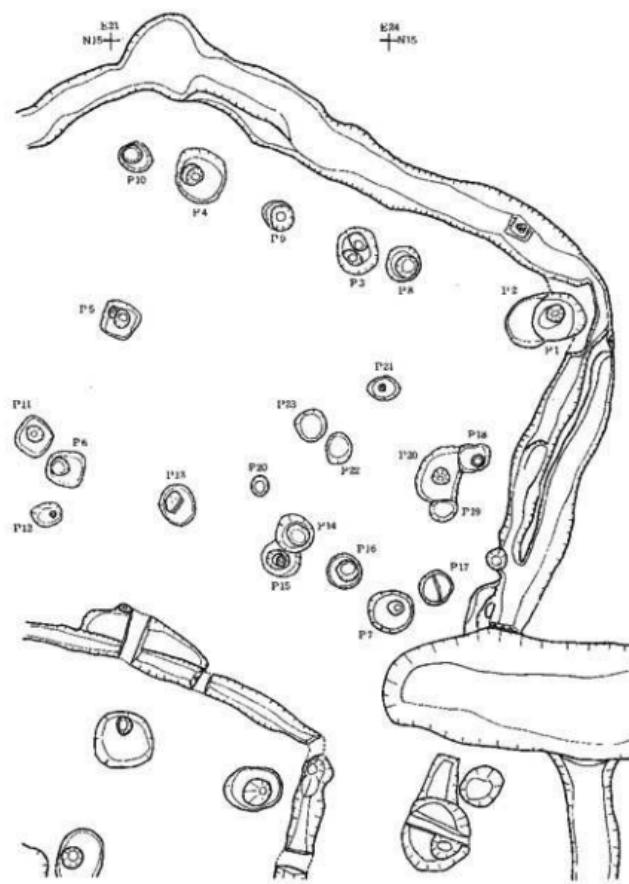
表8 第1号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性	備考
5	47	10Y R 4/6 嘉色	砂質シルト	炭化物、柱穴
6	45	"	"	埴輪片、柱穴
7	43	10Y R 5/6 黄褐色	"	炭化物、柱穴
37	33	10Y R 4/6 嘉色	"	柱穴
38	36	"	"	柱穴
39	25	"	"	柱穴
40	40	10Y R 3/4 嘉褐色	"	炭化物、柱穴
41	45	10Y R 4/6 嘉色	"	炭化物、柱穴
42	40	"	"	炭化物、土師器、柱穴
43	37	10Y R 5/6 黄褐色	"	炭化物、土師器、柱穴

表9 第2号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性	備考
1	31	10Y H 4/4 嘉色	シルト	土師器
2	28	10Y R 5/6 黄褐色	"	土師器、柱穴
3	31	"	"	
4	22	10Y R 6/6 明黄褐色	"	柱穴
5	18	10Y R 4/4 嘉褐色	"	炭化物、土師器、柱穴
6	27	10Y H 5/6 黄褐色	"	柱穴
7	31	10Y R 5/4 に赤い黄褐色	"	土師器、柱穴
8	34	"	"	柱穴
9	57	"	"	柱穴
10	26	10Y R 4/6 黄褐色	"	柱穴
11	16	10Y R 5/6 嘉褐色	"	柱穴
12	18	10Y R 6/6 明黄褐色	"	
13	21	10Y H 5/4 に赤い黄褐色	"	瓦、埴輪器、土師器片、柱穴
14	20	10Y R 5/3 に赤い黄褐色	"	
15	16	10Y R 4/4 嘉褐色	"	柱穴
16	17	10Y R 5/4 に赤い黄褐色	"	
17	15	10Y R 4/4 嘉褐色	"	土師器
18	33	10Y R 5/4 に赤い黄褐色	"	土師器、柱穴
19	12	10Y R 5/6 黄褐色	"	
20	19	"	"	
21	15	10Y R 6/6 明黄褐色	"	
22	26	"	"	柱穴
23	12	"	"	
24	14	"	"	

图25 第2号据立柱建筑物

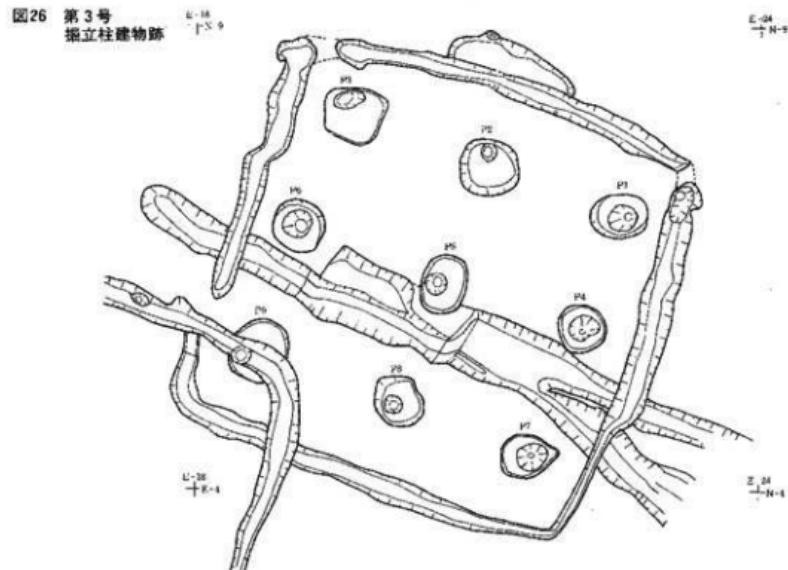


規模と構造：24個のピットがあり、A、B 2棟の建物がある。A棟はピット 2、8、9、4、5、6、13、15、7、18が組み合う。桁行3間（4m、約1.3m等間隔）×梁行2間（3.4m、約1.2m等間隔）の東西棟で、桁行方向は南北に対し65度程西へ偏している。側柱だけの建物である。B棟はピット 8、9、10、11、13、15、22が組み合い、2間（東西3.2m、約1.6m等間隔）×2間（南北3.2m、約1.6m等間隔）であるが、ピット10とピット11を結ぶ地点に柱穴を検出できなかった。側柱だけの建物である。方向は東西柱列線が南北に対し65度西へ偏している。柱穴の在り方より見ればB棟が新しい可能性がある。

掘り方と柱痕：検出したピットのほとんどが掘り方と柱痕をもつ。掘り方は径27~51cmの楕円形で、埋土は黄褐色である。柱痕はピット1が不明であったが径10~24cmの円形で、埋土は褐色ないしはにぼい黄褐色であった。

遺物の分布：ピット3に平瓦がつききしてあり、ピット1、2、5、7、17、18より土師器片が出土し、ピット13よりは半瓦、須恵器、土師器片が出土している。

関連遺構と問題点：A、B棟の東側、北側は第4号溝によって区画されており、この掘立柱建物跡は当初より溝をめぐらしたものと考えられる。検出したピットの大部分が掘り方と柱痕を持ち、ピット間に切り合いが見られ、さらに柱穴以外のピット中よりも若干の遺物が検出されており、A、B棟以外の遺構が存存した可能性がある。



第3号掘立柱建物跡

位置：C地区東部中央にあり、N 9 E 24、N 6 E 24、N 9 E 21、N 6 E 21において検出し、第2層において確認した。

重複：ピット5が第18、21、22号溝を切っており、ピット7が第23号a溝に切られている。また第4号掘立柱建物跡を切っている。

規模と構造：ピット1～9の柱穴が組み合い、2間(南北3.3m、約1.6m等間隔)×2間(東西2.8m、約1.4m等間隔)である。桁方向は南北に対して東へ23度偏している。建物内部にも柱穴をもっている。

掘り方と柱痕：検出した9個のピットに全て掘り方と柱痕が見られた。掘り方は径45～60cmで楕円形である。柱痕は径17～28cmで円形である。埋土は掘り方が明黄褐色で柱痕は褐色である。

遺物の分布：ピット1、4、5、6、9より土師器片が出土し、ピット6、7より須恵器片、ピット1より平瓦が出土した。またほとんどのピットより炭化物を検出した。

関連遺構と問題点：第5号溝が柱穴群を方形に取り巻いて区画している。第4号掘立柱建物跡のかなりの部分を切っており、柱穴の配置より見るとピット7、8、9が4号掘立で検出したピットと対応しそうである。あるいは4号掘立の柱穴をそのまま利用した可能性もあるが判然としない。

表10 第3号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性	備考
1	41	7.5YR 3/4 増溝色	シルト質粘土	瓦、土師器片、柱穴
2	38	10YR 4/4 緋色	粘質シルト	炭化物、柱穴
3	41	#	#	炭化物、柱穴
4	40	#	#	土師器片、柱穴
5	40	10YR 6/4 にぶい黄褐色	#	炭化物、土師器片、柱穴
6	43	10YR 4/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化物、土師器、須恵器片、柱穴
7	51	#	粘質シルト	炭化物、須恵器片、柱穴
8	57	10YR 2/3 黒褐色	#	炭化物、柱穴
9	43	10YR 4/4 暗褐色	#	炭化物、土師器片、柱穴

第4号掘立柱建物跡

位置：C地区東部中央、N 3 E 21、S 3 E 21地区において検出し、2層において確認した。

重複：第3号掘立柱建物跡に切られ、さらに第5号掘立柱建物跡に切られている。

規模と構造：6個のピットが検出されたが、そのうち柱痕が確認されるのは4個あるが、組み合うと思われるものはない。

関連遺構と問題点：第3号掘立柱建物跡と関連する可能性があるか明らかでない。第21号溝によって東側、北側、南側の一部が区画されており、溝でかこわれた掘立柱建物跡である可能性

が強い。

第5号掘立柱建物跡

位置：C地区東部中央、N 6 E 18、N 3 E 18、N 6 E 15、N 3 E 15地区において検出し、2層下面において確認した。

重複：ブルドーザーによって大部分が削平されており、柱穴の重複は不明であるが、5号掘立柱建物跡を方形に開む第23a溝が第4号掘立柱建物跡と第3号掘立柱建物跡を切っている。

規模と構造：6個のビットが検出されたが、柱痕が認められたのは一つで、組み合うものはない。全体を削平されて実態は不明であるが、周溝の在り方から第5号掘立柱建物跡と同様の形態が推定される。

第6号掘立柱建物跡

位置：C地区東部北端、N 24 E 24、N 21 E 24、N 24 E 21、N 21 E 21地区において検出し、第2層下面において確認した。

規模と構造：ビット95、92、86、85、89、93、94、91、89の9個の柱穴が組み合う。2間（東西3.3m、約1.6m等間隔）×2間（南北3.1m、約1.5m等間隔）である。東西棟とすれば桁方向は南北に対し19度南に偏している。建物内部にも柱穴がある。

掘り方と柱痕：掘り方は径23~43cmの楕円形、円形及び隅丸方形である。柱痕は径11~15cmの円形である。掘り方の埋土はにぶい黄褐色で、柱痕は褐色である。掘り方の埋土には少量の炭化物を含む。ビット87、88、89から土師器片、ビット92からは須恵器片が見られた。

関連遺構：西側に同規模の第7号掘立柱建物跡が平行して存在する。

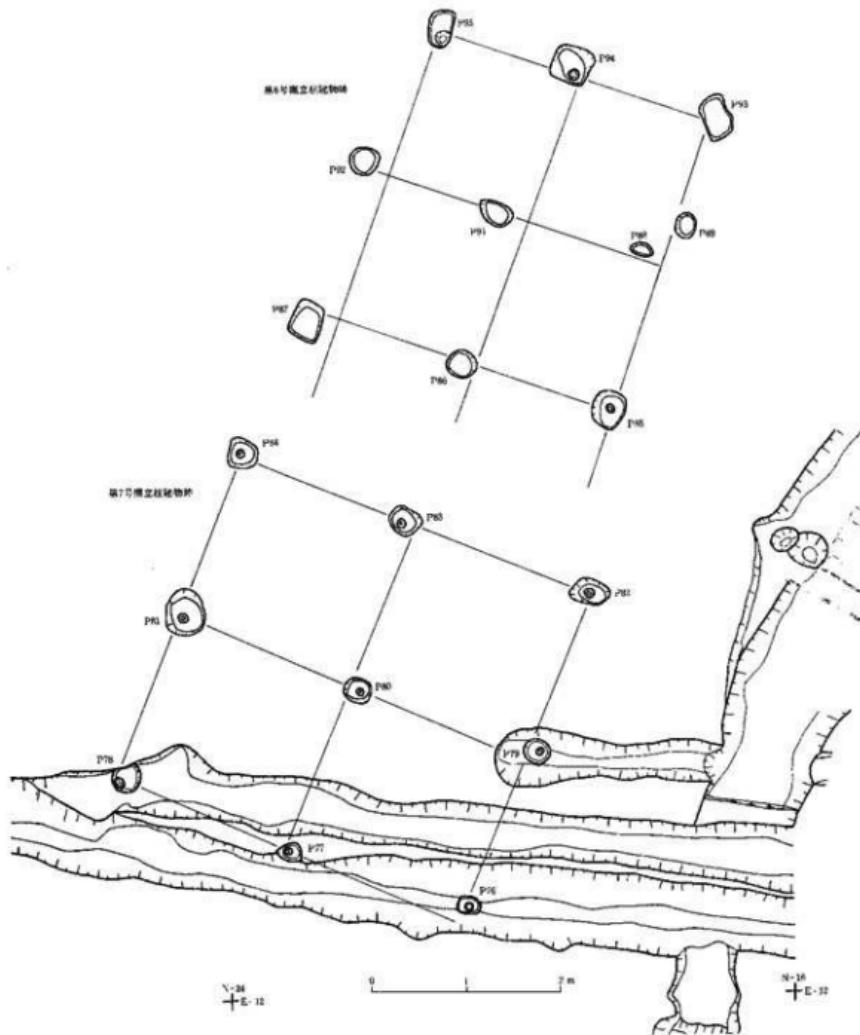
表II 第6号掘立柱建物跡ビット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性	備考
85	43	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭化物、柱穴
86	39	"	"	柱穴
87	47	"	"	炭化物多量、上師器片、柱穴
88	28	10YR 5/6 黄褐色	"	上師器片、柱穴
89	15	10YR 5/4 にぶい黄褐色	"	土師器片、柱穴
91	27	"	"	炭化物、柱穴
92	23	"	"	炭化物、須恵器片、柱穴
93	51	7.5YR 6/8 棕色	"	炭化物多量、柱穴
94	32	10YR 6/8 明黄褐色	"	炭化物、柱穴
95	18	10YR 7/8 黄褐色	"	炭化物、柱穴

第7号掘立柱建物跡

位置：C地区東北端、N 27 E 18、N 24 E 18、N 21 E 18、N 27 E 15、N 24 E 15、N 24 E 21地区に

图27 第6、7号振立柱建筑物



おいて検出し、第2層不面ならびに第1号溝、第2号溝底面において確認した。

重複：第1号溝と第2号溝に切られる。

規模と構造：ピット84、81、78、77、76、79、82、83、80が組み合う。2間（東西4m、約2m等間隔）×2間（南北3.6m、約1.8m等間隔）である。東西棟とすれば桁方向は南北に対して19度南に偏している。建物内部にも柱穴がある。

掘り方と柱痕：掘り方は径26~45cmの隅丸方形ないしは梢円形である。柱痕は径13センチ前後である。埋土は掘り方がにぶい黄褐色で柱痕は褐色である。埋土は掘り方、柱痕共に炭化物を含むものが大部分である。ピット79、80、83よりは土師器片が少量出土している。

関連遺構：東側に第7号掘立柱建物跡がある。

表12 第7号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性	備考
76	10	10YR 4/4 場色	シルト	炭化物、柱穴
77	24	10YR 5/4 にぶい黄褐色	#	炭化物、柱穴
78	16	10YR 6/6 明黄褐色	#	炭化物、柱穴
79	30	10YR 5/4 にぶい黄褐色	#	炭化物、燒土、土師器、瓦片、柱穴
80	42	10YR 6/6 明黄褐色	#	炭化物、土師器片、瓦片、柱穴
81	48	#	砂質シルト	柱穴
82	37	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト	炭、柱穴、燒土
83	38	#	#	土師器片、柱穴
84	43	#	#	炭、柱穴

第8号掘立柱建物跡

位置：C地区西南部、N 6 E 6、N 3 E 6、S 3 E 6、N 6 E 3、N 3 E 3、S 3 E 3地区で検出し、第2層において確認した。

規模と構造：平面形は南から北へコ字型に開む第24号溝によって画されている。区画された内部に18のピットを検出したが組み合うものがない。中央部の最も大きなピットより鉄滓が多量に出土した。

掘り方と柱痕：掘り方の見られたのはピット2、3、13、14、15、16、17、18で、径は20~30cmで柱穴は9~16cmである。埋土は掘り方が黄褐色で柱痕は褐色である。

関連遺構：第1号住居跡に接しており、その位置より考えて第1号住居跡の付属施設の可能性がある。

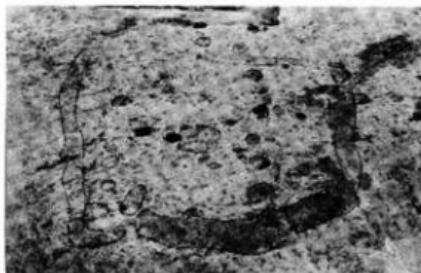


写真42 第8号掘立柱建物跡

表13 第8号掘立柱建物跡ピット註記表

番号	深さ(cm)	土色	土性
1	9	10YR 4/4 棕色	砂質シルト
2	45	10YR 5/4 にぶい黄褐色	#
3	23	10YR 5/6 黄褐色	#
4	38	10YR 3/4 暗褐色	#
5	42	10YR 4/4 棕色	#
6	5	10YR 4/6 棕色	#
7	7	#	#
8	19	#	#
9	5	10YR 3/4 暗褐色	#
10	26	10YR 4/6 棕色	#
11	52	10YR 5/6 黄褐色	#
12	49	#	#
13	13	#	#
14	40	#	#
15	16	#	#
16	29	#	#
17	34	10YR 4/4 棕色	#
18	30	10YR 5/6 黄褐色	#

(3) 土 壤

第3号土壤

遺構の確認：C地区西部中央、N12E9、N9E9、N9E12地区で検出し、第3層で確認した。

重複：第4号溝、第9号溝、第17号溝を切り、第4号土壤に切られる。

平面形と構造：径2~1.6mの楕円形である。底面は平坦な円形をなし、割合急に立ち上る。

堆積土：堆土は12層に区分できるが、基本的には褐色土、明褐色土、黄褐色土の3層で、これが交互に堆積している。堆積の仕方は土壤の周縁より埋まり、第6層（褐色土）の堆積によって埋まり切っている。各層共遺物を含み、総数では土師器片67、須恵器片87出土している。

間連遺構と性格：第4号土壤によって切られている。溝は水流方向は全て土壤に向っており、土壤に接する部分が凹み、水が流れた痕跡がある。土壤内にも水を貯蔵した痕跡を観察することができる。3号土壤は水が流れ込み、一定量になると第17号溝を通して排水されたものである。また第1号住居跡ともトンネル状の溝でつながっている。レベル差は住居側がわずかに低いが、水流方向はたしかめられなかった。この土壤は接する溝から水を集め、第1号住居跡、第6号住居跡に関する貯水用として利用されたと思われる。

第4号土壤

遺構の確認：C地区西部中央、N 9 E 9
で検出し、第3層で確認した。

重複：第6号溝に掘り込まれ、第3号土壤を切っている。

堆積土は3層に区分できるが基本的には2層である。第1層は褐色土で第2層は明褐色土であり、かなりの土師器、須恵器片を含む。

平面形と構造：50~70cmの横円形である。縁やかな立ち上りをもつ壁で、全体的に第3号土壤の方に傾斜している。
関連遺構と性格：第6号溝が第3号土壤に接する位置に掘り込まれており、第6号溝よりの水が流れやすいように、第6号溝を作った後に第4号土壤を掘り込んだものである。

器形	須 惠 器			土 師 器		
	確認面	埋 土	計	確認面	埋 土	計
坏	口縁部	3	17	20	4	0
	体 部	11	11	14	0	11
	底 部	0	2	2	0	3
甕	口縁部	0	3	3	0	0
	体 部	0	3	3	0	47
	底 部	0	2	2	0	2
計		6	38	44	4	63
67						

表14 第3号土壤出土土器集成

器形	須 惠 器			土 師 器		
	確認面	埋 土	計	確認面	埋 土	計
坏	口縁部	0	1	1	0	4
	体 部	0	3	3	0	0
	底 部	0	2	2	0	1
甕	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	17	17	0	30
	底 部	0	0	0	0	0
計		0	23	23	0	35
35						

表15 第4号土壤出土土器集成

第7号土壤

遺構の確認：C地区西部、S 6 E 6で検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：65×112cmの長楕円形である。かなり削平されており、深さは8cm程である。壁は緩やかに立ち上り、熱変化により厚いところでは10cm程赤褐色となっている。底面にも熱がくわわり、歯などではいが赤褐色に変化している。壁、底面共炭化物が付着している。

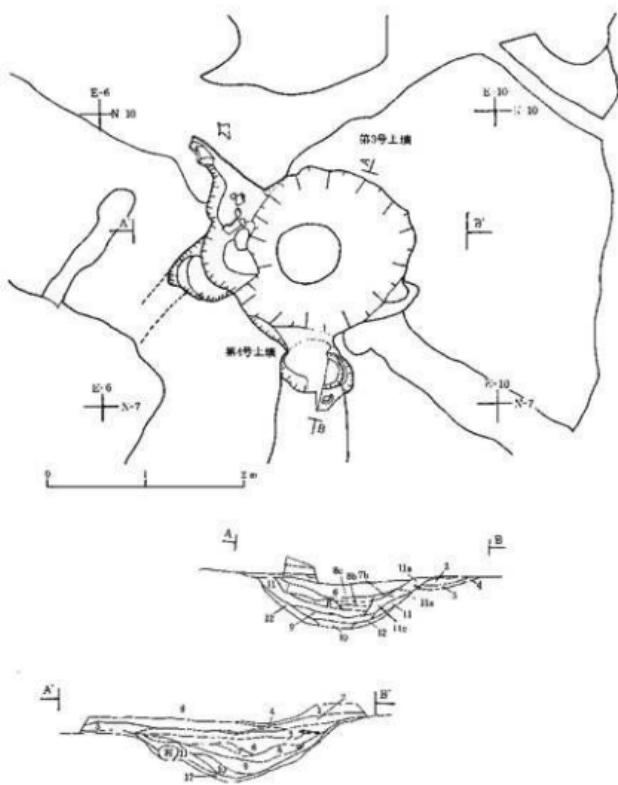
器形	須 惠 器			土 師 器		
	確認面	埋 土	計	確認面	埋 土	計
坏	口縁部	0	2	2	0	4
	体 部	0	14	14	0	1
	底 部	0	5	5	0	3
甕	口縁部	0	7	7	0	2
	体 部	0	8	8	0	61
	底 部	0	0	0	0	2
計		0	36	36	0	73
73						

表16 第7号土壤出土土器集成

堆積土：埋土は3層で、1層は暗褐色、2層は黒褐色、3層は黑色土である。遺物は大部分が土師器である。

関連遺構と性格：南側に小ピット群があるが特に関連するものと思われず、単独で存在している。埋土の中には鉄津等も見られない。かなりの高熱をうけた焼土遺構である。

図28 第3、4号土壤



1. 明褐色 シルト質粘土、炭土
2. 黄色 シルト質粘土
3. 明褐色 シルト質粘土、黄褐色土が介入
4. 黄色 シルト質粘土
5. 浅色 シルト質粘土 (遺物を多量に含む)
6. 黄色 シルト質粘土 (明褐色土を介し、遺物多量に出土)
7. 黄褐色 シルト質粘土 (砂を多量に含む。遺物は少量であるが出土する)
8. 黄色 シルト質粘土 (明褐色土を介す。炭化物を含む)
9. 黄色 シルト質粘土 (明褐色土を介す。炭化物及び遺物を含む)
10. 黑褐色 粘土 (多量に炭化物及び遺物を含む)
11. 明褐色 シルト質粘土 (黄褐色土深入り)
12. 黄褐色 シルト質粘土 (砂を多量に含む)

第8号土壤

遺構の確認：C地区西南部、第1号住居跡の南東部、N3E6、N3E9で検出し、第2層下面で確認した。

重複：第24号溝を切る。

平面形と構造：東西に長い72×105cmの長方形である。底面は平坦で急に立ち上り、深さは30cm程度である。壁面は全て地山の黄色土が露出している。

堆積土：埋土は3層に区分できる。第1層は黒褐色、第2層黒褐色土、第3層黄褐色土で、各層共炭化物を含み、大量の土師器が出土している。ほぼ水平な堆積状態である。

関連遺構と性格：第8号掘立柱建物跡を区画する第24号溝を切って作られており、8号掘立柱建物跡に関連する遺構で、一時的に水を溜めたものと考えられる。

第12号土壤

遺構の確認：C地区西部、第7号溝中のN18E9地区において検出し、第2層において確認した。

重複：第7号溝を切って構築している。

平面形と構造：径75×125cmの楕円形である。比較的浅いため上部は削平されていると思われるが、深さは15cm程度である。

壁は緩やかな立ち上りをもち、壁周辺が赤色に熱変化を受けている。底面は中央及び北西側は熱変化を受けず、地山が底面となっていた。底面南側は壁同様に熱変化を受けて赤色を呈している。

堆積土：埋土は4層で、第1層黄褐色シルト、第2層にぶい黄褐色シルト、第3層褐色シルト、第4層明るい褐色シルトで、共に炭化物、焼土を含み、土師器片、須恵器片も出土する。

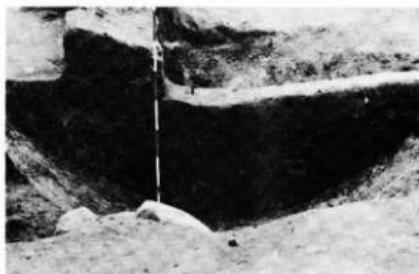


写真43 第3号土壤

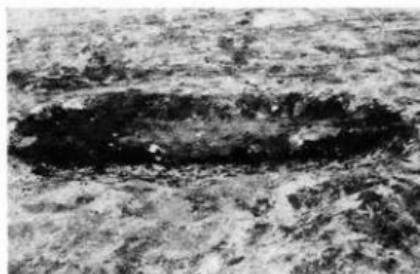
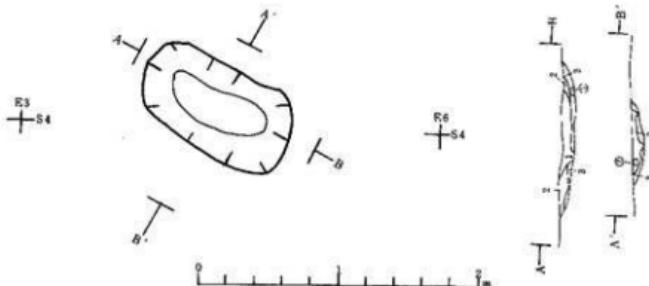


写真44 第7号土壤

器種 器形	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环 類	口縁部	1	7	8	0	1
	体 部	0	11	11	0	14
	底 部	0	4	4	1	6
甕 類	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	0	0	5	58
	底 部	0	0	0	0	2
計		1	22	23	6	81
87						

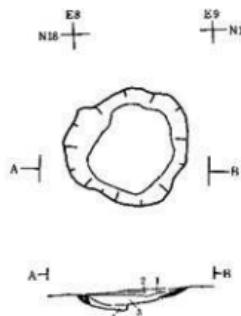
表17 第8号土壤出土土器集成

図29 第7号土壤



1. 10Y R 5% 黄褐色・粘性有り。塊土をブロック状に含む。
2. 10Y R 5% 黄褐色・粘性やや有り
3. 10Y R 5% 黄色・粘性なし。塊土及び地山をブロック状に含む。遺物を含む。
- ① 10Y R 5% 黄色
- ② 10Y R 5% 黄褐色 } 地山と第1層との隙間土がブロック状で第3層に進入している。
- 10Y R 5% 赤色 } 塵土と塊土が混り合ひ・ブロック状に入る。
- 10Y R 5% 黄褐色 }

図30 第12号土壤



1. 10Y R 5% に10Y R 5% 黄褐色シルト。炭化物、塊土、土器等含む。
2. 10Y R 5% に10Y R 5% 黄褐色シルト。炭化物、塊土、土器等含む。
3. 10Y R 5% に10Y R 5% 黄褐色シルト。土器等、削落等含む。
4. 10Y R 5% 黄褐色シルト。土器等含む。

関連遺構と性格：第7号溝が掘り込まれており、7号溝が溝として機能しなくなった時に作られたものである。位置的には第2住居跡に近接しており、時期的には2号住居跡の最後の段階と一致する可能性がある。また第7号土壤と類似し、若干の鐵滓が見られたことより、鍛冶に関連する遺構と考えられる。

第13号土壤

遺構の確認：C地区の東南部、S 3 E 18、S 6 E 18地点において検出し、第2層下面において確認した。

平面形と構造：径2.45mと2.8mの円形で、壁はほぼ直立する。底面は平坦で底面上に灰黄色の砂質シルトが見られる。

器形	須 恵 器			土 師 器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环 類	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	0	0	0	0
	底 部	0	0	0	0	0
表 類	口縁部	0	0	0	2	9
	体 部	0	0	0	9	9
	底 部	0	1	0	0	0
部	0	1	1	0	11	11

表18 第12号土壤出土土器集成

器形	須 恵 器			土 師 器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环 類	口縁部	0	41	41	0	13
	体 部	0	44	44	0	26
	底 部	0	29	29	0	25
表 類	口縁部	0	0	0	36	36
	体 部	0	2	2	0	219
	底 部	0	2	2	0	22
計	0	118	118	0	341	341

表19 第13号土壤出土土器集成

形である。壁は南側が急に立ち上り、北側では一度立ち上り再び落ち込む。南北の断面で見ると二つの土壤が接合したように見えるが、平面及びセクションにおいても切り合いは見られず同一のものと考えられる。底面は平坦で、第13号土壤で見られる灰黄色の砂質シルトが床面上に見られた。

堆積土：埋土は13層に区分できる。基本的には黒褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトでブロック状の堆積が目立ち、炭化物を含む。堆積状況は壁側から堆積し、中央部は水平に近いがブロック状の層が間に混入する。出土遺物は各層共多量で、瓦、風字磚、卜石、手捏ね土器が見られ、土師器は、1400点、須恵器片は500点を越えた。

関連構造と性格：第23 b 溝が接している。

これは平面形では切り合いを認められず、14号土壤に排水したものと思われる。第

堆積土：埋土は15層に区分できる。大部分が黄褐色砂質シルトでその中に褐色砂質シルトが交互に堆積し、各層に炭化物を含む。堆積状況は壁側から堆積し、中央部はほぼ水平堆積している。遺物は各層より多量に出土している。瓦、土玉があり、土師器片は300点、須恵器片は、100点を越えた。

関連構造と性格：東南に近接する第14号土壤に次ぐ規模で、堆積状況も同様であり、共に廃棄用の土壤と考えられる。

第14号土壤
構造の確認：C地区東部中央、N 3 E 18、S 3 E 18、N 3 E 15、S 3 E 15地区において検出し、第2層下面で確認した。
重複：第23 b 溝が接する。

平面形と構造：径2.45m×3.2mの楕円

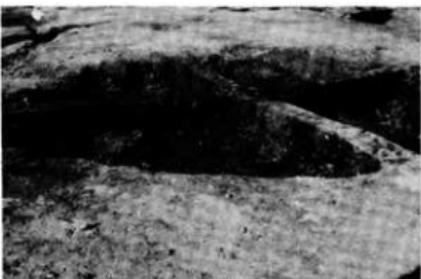
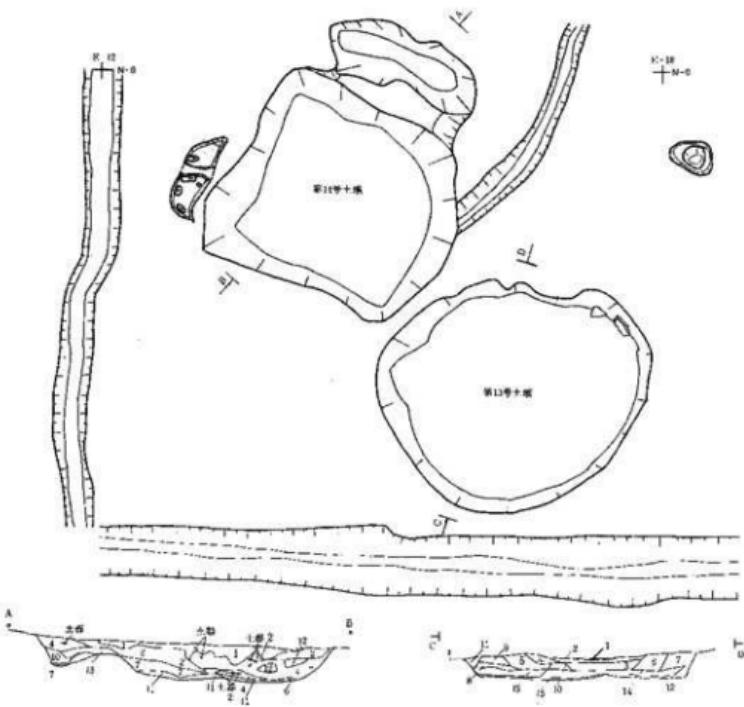


写真45 第14号土壤

図31 第13、14号土壤



A-B セクション

1. 33Y H為赤色シルト 稀少中等しく、しまりなし。2層の土を少し含み+鉄鉱を多く含む。
2. 33Y H為赤褐色鉄質シルトを多く含む。2層の土を多く含む。鉄鉱を多く含む。
3. 7.5YR 5為黒褐色鉄質シルト 稀少。しまりとも土層に同じ。1層の土をブロック状に含む。
4. 10Y H為褐色多苔色シルト 稀少。しまりとも土層より多い。鉄鉱を多少含む。
5. 7.5Y H為黒褐色多苔色シルト 稀少やや稀少。しまりとも土層より多い。鉄鉱を多少含む。
6. 10Y H為黒褐色多苔色シルト 稀少は多く、鉄鉱、しまりも。土層を多少含む。
7. 10Y H為黒褐色多苔色シルト 稀少。

C-D セクション

1. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性と土性は2層で同じ。
2. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性と土層1層より古に遡る。黑色土をブロック状に含む。
3. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層2層は25cmで鉄鉱を多く含む。
4. 10Y H為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層1よりやや古い1層鉄鉱は2層よりやや薄い。シルトの2つ山がある。
5. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層1よりやや薄く鉄鉱はやや薄い。
6. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層1よりやや薄く鉄鉱は4層の間に散在。
7. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層1よりやや薄く鉄鉱は4層の間に散在。
8. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層1よりやや薄く鉄鉱は4層の間に散在。
9. 10Y S為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層1よりやや古い鉄鉱はやや薄い。鉄鉱を燃すと同様に燃む。
10. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層4より古く鉄鉱を解すようやや薄い。
11. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層4より古く鉄鉱を解すようやや薄い。
12. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層4より古く鉄鉱を解すようやや薄い。
13. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層10より古く鉄鉱を解すようやや薄い。
14. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層10より古く鉄鉱を解すようやや薄い。
15. 10Y R為より古に遡る赤褐色砂質シルト しまり性層10より古く鉄鉱を解すようやや薄い。

4号土壌はC地区最大の土壌で遺物の出土もきわめて多量であり、堆積状態より見て、第13号土壌同様、廃棄用土壌であろう。

器種 器形	須恵器			土師器			
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計	
壺 類	口縁部	3	136	139	0	49	49
	体部	0	213	213	0	232	232
	底部	0	71	71	0	42	42
甕 類	口縁部	0	16	16	0	41	41
	体部	2	63	65	11	61	152
	底部	0	13	13	1	61	62
計		5	512	517	12	532	544

表20 第14号土壌出土土器集成

器種 器形	須恵器			土師器			
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計	
壺 類	口縁部	0	2	2	0	5	5
	体部	0	10	10	3	1	4
	底部	0	0	0	0	4	4
甕 類	口縁部	0	0	0	0	1	1
	体部	0	0	0	0	15	15
	底部	0	0	0	0	2	2
計		0	12	12	3	28	31

表21 第15号土壌出土土器集成

器種 器形	須恵器			土師器			
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計	
壺 類	口縁部	2	2	4	0	0	0
	体部	5	1	6	0	0	0
	底部	3	0	3	0	0	0
甕 類	口縁部	0	0	0	2	0	2
	体部	1	1	2	9	1	10
	底部	0	0	0	0	0	0
計		11	4	15	11	1	12

表22 第16号土壌出土土器集成

平瓦が見られた。

関連遺構と性格：第1住居跡に近接する。保存が悪く性格は不明である。

第15号土壌

遺構の確認：C地区東南部、S3E21において検出し、第2層で確認した。

平面形と構造：92×102cmの楕円形で深さは10cm程である。壁は急に立ち上り部分的に熱を受け赤褐色に変色している。床面は多少凹凸がある。熱変化は受けていない。

堆積土：埋土は3層に区分できるが、基本的には2層で、第1層はにぶい黄褐色シルト、第2層暗褐色シルトで焼土、炭化物を含む。ほぼ水平堆積である。遺物は土師器、須恵器が多少見られた。

関連遺構と性格：第4号柱立柱建物跡に近接している。性格はかるく火を受けている焼土土壌である。

第16号土壌

遺構の確認：C地区西部中央、N12E3、N12W3地区において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：67×106cmの東西に長い楕円形である。全体的に削平されて遺存状況は悪く、壁は大部分消滅して、からうじて輪郭がわかる程度である。

堆積土：埋土は黄褐色土1層で、底面に

第17号土壌

遺構の確認：C地区西部中央、N12W3、N9W3地区において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：50×100cmの楕円形である。削平がはげしくかろうじて輪郭がわかるものである。深さは2cm程度である。

堆積土：黄褐色土がわずかに見られる。

遺物は土師器が少數見られた。

関連遺構と性格：第16号土壌が近接するが、共に削平がはげしく実態は不明である。

器形	器種	須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏 類	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体 部	0	0	0	0	0	0
	底 部	0	0	0	0	1	1
甕 類	口縁部	0	0	0	0	4	4
	体 部	0	0	0	0	19	19
	底 部	0	0	0	0	1	1
計		0	0	0	0	25	25

表23 第17号土壌出土土器集成

第19号土壌

遺構の確認：C地区東南端、S12E15地区において検出し、第2層で確認した。

重複：第12号が接する。

平面形と性格：グリットの壁に接し、一部調査地区外にはみだしているため全形を確められなかつたが、ほぼ楕円形を呈するものと思われる。底面は平坦で灰黄色砂質シルトが堆積し、壁は直立する。

調査部分の最大径は2.6mで、深さは28cmを測る。

堆積土：埋土は5層に区分できる。ほぼ水平堆積であり、基本的には黒褐色土、灰黃褐色土、褐灰色の3層でブロック状の土が混入している。遺物は瓦、手捏ね土器、風字碗である。

関連遺構と性格：形態、規模、底面上堆積土が第13、14号土壌と類似しており、それらと同様の廃棄用土壤であろう。

器形	器種	須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏 類	口縁部	5	36	41	0	3	3
	体 部	6	54	60	0	30	30
	底 部	3	28	31	0	16	16
甕 類	口縁部	0	1	1	0	9	9
	体 部	0	17	17	23	151	174
	底 部	0	5	5	3	12	15
計		14	14	155	26	221	247

表24 第19号土壌出土土器集成

第20号土壌

遺構の確認：C地区西南部、S3E3、S6E3地区で検出し、第2層で確認した。

平面形と構造：57×87cmの東西に長い楕円形である。底面は平坦で、壁は直立し、深さは26cm程度である。

堆積土：埋土は3層に区分できる。第1層暗褐色シルト、2層暗褐色シルト、3層黒褐色シルトで、各層共炭化物を含む。遺物は土師器が172片、須恵器が19片発見された。

関連構と性格：西南部に孤立している。性格は不明である。

第21号土壌

造構の確認：C地区東南部、S 12E 24地区において検出し、地山面で確認した。

平面形と構造：45×85cmの南北に長い隅丸長方形である。底部は平坦で壁は直立し、部分的に熱が加わり赤褐色に熱変化している。深さは17cm程度である。

堆積土：埋土は3層で、南北セクションは第1層褐色シルト、第2層にぼい黄褐色シルト、第3層は暗褐色シルトで東西セクションとは若干ことなる。壁端より堆積し、弓なりの堆積状態を呈する。遺物は須恵器、土師器片が少數見られた。

関連構と性格：東西部に孤立している。火を受けた焼土土壌である。

器形	須 恵 器			土 師 器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环	0	8	8	0	0	0
体 部	0	8	8	0	0	0
底 部	0	2	2	0	2	2
甕	0	0	0	0	2	2
体 部	0	0	0	0	66	66
底 部	0	0	0	0	0	0
計	0	18	18	0	70	70

表25 第20号土壌出土土器集成

器形	須 恵 器			土 師 器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环	0	0	0	0	0	0
体 部	0	0	0	0	0	0
底 部	0	0	0	0	0	0
甕	0	0	0	0	0	0
体 部	0	0	1	2	0	2
底 部	0	1	1	0	0	0
計	0	1	2	2	0	2

表26 第21号土壌出土土器集成

(4) 溝

第1号溝

造構の確認：C地区中央部を南北に縦断している。その南端はS 12E 12、北端はN 30E 18区において検出し、第2層下面で確認した。

重複：第7号溝、第2号住居跡、第2号溝、第7号掘立柱建物跡を切り、第16号溝（現代の溝）によって切られている。

形態と構造：南北に長い溝で、北は小沢に落ち込み、南は調査区域外にも伸びて、計測可能なだけでも42mである。横断面形状はU字形を呈し、深さは約40cmである。上幅は最大で1.2m、最小で約50cmで、底面幅は40cmである。南部は幅広く段をなしている。底面傾斜方向は北から南である。

堆積土：埋土は7層に区分できる。第1層、第2層、第3層はほぼ水平堆積であるが、第4層、第5層、第6層は不整形な堆積状態である。遺物の出土は第1層から3層に多く、第4層から6層は少ない。特に第2層は多く、土師器片は200点を越えた。最初に西側より第7層が埋ま

り、次いで第6、5、4層が埋まり、3層が堆積した後、西側に一部拡張されて使用され、第2層、1層と堆積したものと思われる。第2層に特に多いという遺物の在り方からも表付けられる。この溝は掘られてから溝として機能した時期が少なくとも2回あったと考えられる。

関連遺構：第1号溝とほぼ平行して第2

号溝、第3号溝が走っている。3本の溝

のうち、第1号溝が一番長く、第2号溝を切っていることより、第1号溝が最も新しい。遺構の方は北東から南東に伸びており、第1号住居跡の中軸線にほぼ平行する。

遺構の性格：埋土中の出土遺物は全て古代のもので現代のものが混入していないことから、古代の溝と断定しても間違いはない。また接する全ての遺構を切断するかたちで構築されており、C地区発見遺構の中でも最も新しい時期に属する。西側に見られた第1住居跡と、それに近接する遺構群との関連が考えられる。

溝としての機能は、水性粘土の堆積も見られず、遺構単位の区画としては十分な関連遺構も見られないことから、當時水が流れたものではなく、雨大時の水抜き的な性格が考えられる。

第2号溝

遺構の確認：C地区中央部に第1号溝の東側に平行して南北に伸びている。南端はS12E12、北端はN27E15において検出し、第2層下面で確認した。

重複：第7号溝、第2号住居跡、第7号掘立柱建物跡を切り、第1号溝、第16号溝（現代の溝）によって切られている。

器形	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
壺	口縁部	0	36	36	2	23
	体部	2	41	43	7	69
	底部	0	10	10	2	9
甕	口縁部	0	7	7	1	43
	体部	0	23	23	3	476
	底部	0	14	14	2	45
計		2	131	133	17	665
						682

表27 第1号溝出土土器集成

形態と構造：南北に長い溝で、北端は第1号溝によって切られているものの、本来は小沢に落ち込んでいたものであろう。南端は一部切れるところもあるが調査区外にも伸びている。38.5mまで計測できる。横断面形はU字形を呈し、深さは30cm程度である。壁は急に立ち上り、上幅は30~80cm、底面幅は10~50cm、底面は丸味をおびている。底面傾斜方向は北から

表28 第2号溝出土土器集成

南である。

堆積土：埋土は南部で2層に区分され、第1層は茶褐色シルト、第2層は茶黃褐色砂質シルトである。北部Bセクション（E21）では褐色砂質シルト1層だけであり、共に遺物の混入は少ない。南部と北部では堆積土に差異が認められた。

関連遺構：第1号溝に切られており、現存長では第1号溝より短いがほぼ同一の規模であり、第1号溝と同様西部遺構群との関連が考えられる。

遺構の性格：堆積土中の出土遺物はきわめて少ないが、現代の遺物は混入していない。溝としての機能も水抜き的なものである。第1号溝と同様な性格であり、時期的には1号溝に次ぐ新しさが考えられる。

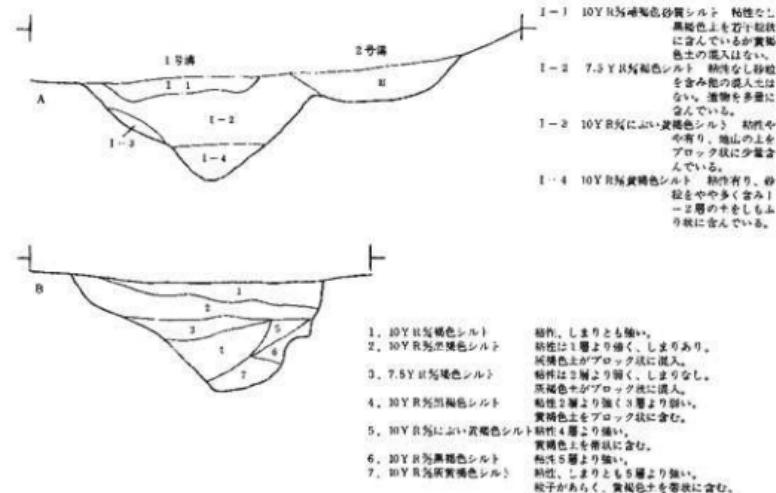
第3号溝

遺構の確認：C地区中央部を南北に縦断し、南端はS12E12、北端はN24E15Wにおいて検出し、第2層下面で確認した。

重複：第7号溝、第2住居跡、第7号掘立建物跡を切り、第16号溝（現代溝）に切られている。

形態と構造：南北に細長い溝で、北は小沢の手前、南端は調査区域外にも伸びている。全長は33mでC地区中央部を縦断する3本の溝では最も短い。横断面形は第1、第2号溝よりきつい。

図32 第1、2号溝断面図



器形	須 惠 器			土 師 器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环 類	口縁部	1	1	2	1	1
	体 部	2	0	2	11	15
	底 部	0	0	0	1	1
甕 類	口縁部	0	1	1	0	0
	体 部	2	1	3	26	32
	底 部	0	0	0	1	1
	計	5	3	8	32	50

表29 第3号溝出土土器集成

立ち上りをもつU字形で深さは10cm程度ある。幅は上面で30~40cm、下面で10~20cmである。壁は南部では崩壊が著しい。底面傾斜方向は北から南である。

堆積土：埋土は2層からなり、第1層は黒褐色砂質シルト、第2層は茶褐色粘土質シルトである。出土遺物は2層に多く、特に土師器片が多い。

関連遺構と性格：第1号、第2号溝と同一の遺構を切り、また平行して走っていることから同一の性格をもつ溝と考えられる。南端で一部第2号溝に切られており、第1号、第2号溝よりも古い。

第4号溝

遺構の確認：C地区東部、N15E27、N12E27、N9E27、N18E24、N15E24、N15E12の各区において検出し、第2層下面で確認した。

重複：第7号溝、第2号掘立柱建物跡の第1ピット及び第13号溝（現代溝）に切られる。

形態と構造：第2号掘立柱建物跡の東から北を囲むようにコの字型を呈する。横断面形は逆台形をなし深さ10cm程度で底面は平坦である。幅は上面で最大70cm、最小40cm、底面では最大幅40cm、最小幅20cm程度である。

堆積土：埋土は2層で、第1層黒褐色シルト、第2層黄褐色砂質シルトである。出土遺物は多く、土器以外に鉄製品片、鉄津、焼石などが見られる。出土土器は土師器が多く、大半は第1層より出土している。

関連遺構と性格：第4号溝は第2号掘立柱建物跡の周溝である。しかし方形にまわるものではなく、当初より東と北だけをコ字形に作られたもので、第7号溝に

図33 第4号溝断面図



器形	須 惠 器			土 師 器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环 類	口縁部	6	8	14	3	4
	体 部	8	9	17	0	46
	底 部	3	6	9	3	9
甕 類	口縁部	5	1	6	0	0
	体 部	2	20	22	0	0
	底 部	0	1	1	0	0
	計	24	45	69	6	62

表30 第4号溝出土土器集成

接する部分はその地点よりも伸びておらず、切られたというよりも接続させたものである。面傾斜方向は南を向いているが、水性粘土は見られず、水抜きの性格をもつものである。また溝の北東コーナーは第2号掘立柱建物跡のピット1に切られ、溝の東側も改築の痕が見られる。掘立柱の改築にともなうものと考えられる。

第5号溝

遺構の確認：C地区東部、N 9 E 24、N 6 E 24、N 9 E 21、N 6 E 21区において検出し、第2層下面で確認した。

重複：第18号溝、第19号溝、第20号溝、第22号溝、第22号土壤を切り、第23号溝に切られている。

形態と構造：南西コーナーが1ヶ所あいでいるが、ほぼ1辺が4.4m前後の方形を呈する。横断面形はU字形で深さ10cm

器種 器形	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
環 類	口縁部	0	8	8	0	1
	体 部	0	5	5	0	43
	底 部	0	3	3	0	2
甕 類	口縁部	0	1	1	0	2
	休 部	0	6	6	0	9
	底 部	0	0	0	0	1
計		0	23	23	0	58
表31 第5号溝出土土器集成						

程、急に立ち上る壁をなす。幅は上面で15~35cm、下面では5~15cmを測る。

堆積土：埋土は1層で黄褐色シルトである。出土遺物は土師器が大半で割合が多い。

関連遺構と性格：第5号溝は第3号掘立柱建物跡を方形にめぐる周溝である。機能的には自己完結的な水抜きである。切り合いより見ると、隣接する第4号掘立柱建物跡を切り、第5号掘立柱建物跡に切られている。これらの前後関係は4号→3号→5号掘立柱建物跡遺構の順となる。

第6号溝

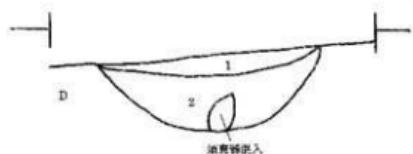
遺構の確認：地区東部、N 9 E 27、N 6 E 27で検出し、第2層下面において確認した。

重複：北端を第13号溝（現代溝）に切れ、南端を第18号、第19号溝に切られている。

形態と構造：横断面形はU字形で幅は上面では35~60cm、下面では25~45cmで、丸味をおびた底面からなだらかに立ち上

器種 器形	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
環 類	口縁部	7	2	9	0	0
	体 部	6	1	7	6	3
	底 部	5	1	6	2	3
甕 類	口縁部	0	0	0	3	0
	体 部	2	3	5	21	0
	底 部	1	0	1	0	1
計		21	7	28	33	6
表32 第6号溝出土土器集成						

図34 第6号溝断面図



1. 10YR 4/8 黒褐色シルト
シルト質粘土。しまりとも強く、砂が混入する。
2. 10YR 5/8 黄褐色シルト
シルト質粘土。しまりとも強く、層より層くずや強い。
炭酸物混入。炭化物混入。

る壁をなす。

堆積土：埋土は基本的には2層で、第1層は暗褐色シルト、第2層は褐色シルトであり、ブロック状の地積をしている。第2層からは須恵器、土師器の片が多く出土し若干の炭化物が混入している。

関連遺構と性格：遺構の南北端をそれぞれ第18、19号溝と第13号溝に切られてい

るが、切られた位置からさほど伸びるものではない。埋土中には現代の遺物は混入しておらず古代の遺構であることは確実であるが、遺構としての性格は不明である。

第7号溝

遺構の確認：C地区の東部から南部にまたがる中央にあり、東西はN21~N9、南北はE21~E6の地区で検出し、第2層下面で確認している。

重複：第1号、2号、3号、9号、17号溝に切られ、また第3号、4号、12号土壤にも切られている。第4号溝が接する。

形態と構造：径約14mの円形にまわる溝である。横断面形は保存状態によって若干異なるが底面が平坦な逆台形を呈し、深さは15~20cm、幅は上面で40~150cm、下面では20~90cmで東部が幅広く深い。南部はかなり削平されている。また第3号土壤に接する南側は最も幅が狭くなる。幅の広さに大きな差があり、かならずしも同時に作られたものではない。

堆積土：各位置において異なるがおよそ2層に分けられる。第1層は褐色砂質シルト、第2層は黄褐色砂質シルトである。各層共多量に遺物を含み、土師器片は1756点、須恵器片は390点を越える出土である。

関連遺構と性格：円形にまわった溝の中に第2号住居跡があり、それを取り巻く周溝である。溝の作り方は部分によって異なる。東部は幅広く溝の壁に段を有する部分があり何度かの改造が考えられる。西部の第3号土壤に切られる部分は幅狭く、第3号土壤に水を流すために付けたした感がある。

図35 第7号溝断面図(I)

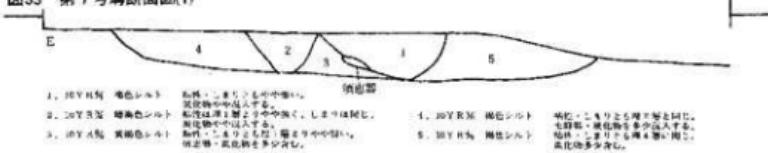
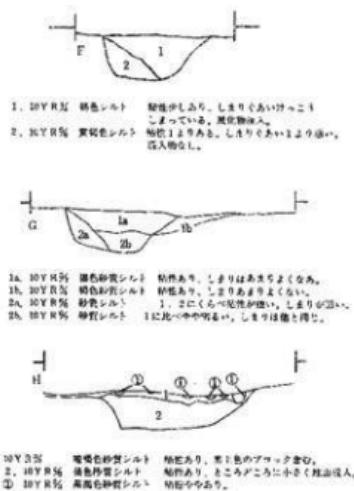


図36 第7号溝断面図(2)



形態と構造：南北17m程の溝で横断面形は緩やかなU字形をなし、深さは10cm程、幅は上面で35~70cm、下面で20~35cmである。

堆積土：大部分が腐食土で現在のゴミが多量に混入している。

関連遺構と性格：現代のゴミが混入していることより水抜きのための現代溝であろう。地主の話でも数年前まで使われていたとのことである。

以上のことより考えると本溝は当初より円形であったのではなく、東側からの流水を止めるために作られ、その後住居跡の増改築に伴ない円形になったものと推定される。また南西部の溝中に第12号土壙（焼土遺構）があり、溝としての機能は十分でなく、当初から区画程度のものであったと考えられる。

第8号溝

遺構の確認：地区内西縁を画するように南北に長い溝で、N 9 W 3、N 6 W 3、N 3 W 3、S 3 W 3、S 6 W 3、S 3 W 6、S 6 W 6、S 9 W 6 地区において検出し、第3層上面において確認した。

重複：第10号溝と第1号住居跡西側周溝の一部を切っている。

第9号溝

遺構の確認：C地区西縁、第1号住居跡と第2号住居跡の中間に当たる N 9 E 6、N 6 E 6 において検出し、第2層下面において確認した。

重複：第3号土壙にそぎ、第7号溝を切っている。

形態と構造：長さ3.8mの南北に細長い溝である。南端は浅く10cm程で第3号土壙に接する地点で深くなり30cmを測る。

器種	須恵器		上部器		計		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土		
坏	口縁部	2	101	103	2	63	65
類	体 部	44	77	121	5	188	193
	底 部	1	54	55	2	35	37
妻	口縁部	1	14	15	44	83	127
類	体 部	3	39	42	1	1210	1211
	底 部	1	36	37	0	55	55
	部	52	321	373	54	1634	1688

表33 第7号溝出土土器集成

横断面形は底面が平坦な逆三角形である。幅は上面が最大幅80cm、最小40cm、底面で最大55cm、最小15cm程度である。

堆積土：埋土は2層からなり、第1層はにふい黄褐色土、灰褐色土をブロック状に含む。第2層は明黄褐色シルトで炭を含む。出土遺物は多く土師器片は100点を越えた。

関連遺構と性格：溝のある位置は第1号住居跡の排水路的性格が考えられる。また溝の中には水性堆積物はほとんどなく一時的に第3号土壤に流したものであろう。

第10号溝

遺構の確認：C地区の西縁、N6E3、N3E3、N3E6地区において検出し、第2層下面で確認した。

重複：第8号溝（現代溝）に切られる。
形態と構造：東西に3mの細長い溝で、横断面形は底面が平坦な逆台形であり深さは10cm程度である。底面傾斜は南に向いている。幅は上面で15~30cm、底面で10~20cmである。かなり削平されている。

堆積土：埋土は1層で、褐色土の遺物を若干含む層である。

関連遺構と性格：第8号溝（現代溝）に切られているが他の遺構とは接していない。第1号住居跡に関連するかはっきりしない。

器形	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环	0	2	2	0	3	3
体 部	0	2	2	0	17	17
底 部	0	2	2	0	0	0
甕	0	0	0	0	2	2
体 部	0	0	0	0	34	34
底 部	0	0	0	0	1	1
計	0	6	6	0	57	57

表34 第8号溝出土土器集成

器形	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环	0	3	3	0	17	1
体 部	0	15	15	0	73	73
底 部	0	0	0	0	1	1
甕	0	2	2	0	5	5
体 部	0	8	8	0	104	104
底 部	0	2	2	0	2	2
計	0	30	30	0	186	186

表35 第9号溝出土土器集成

図37 第9号溝断面図

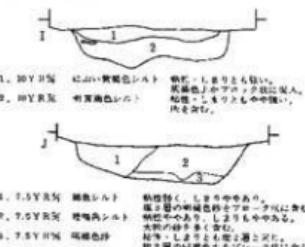


図38 第10号溝断面図



第11号溝

遺構の確認：C地区東南側、東端はS 9 E 30、西端はS 9 E 18で検出し、第1層下面で確認した。

重複：第18号、19号溝を切る。

形態と構造：弧状で東西に11.8m程の長さである。横断面形は緩やかに立ち上るU字形で、深さは10cm程である。幅は上面で40~80cm、底面で10~60cmでかなり不規則な状態で掘られている。

堆積土：腐食土に現代のゴミが混入している。

関連遺構と性格：現代の水抜き溝と思われる。

第12号溝

器形	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
坏	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	1	1	0	0
	底 部	0	0	0	0	0
甕	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	0	0	0	0
	底 部	0	0	0	0	0
計	0	1	0	0	0	0

表36 第12号溝出土土器集成

遺構の確認：C地区東南部、東端はS 9 E 24、西端はS 12 E 18地区において検出し、第1層下面で確認した。

重複：第18号溝、第19号溝、第19号土壤を切っている。

形態と構造：東から西南へ湾曲して伸びる6m程の細長い溝である。横断面形は緩い立ち上りをもつU字形である。幅は上面で25~55cm、底面で5~35cmを測る。

堆積土：埋土は暗褐色土であるが腐食土とゴミが多量に混入している。

関連遺構と性格：第11号溝と同一方向へ展開している。第19号土壤と接する付近で終っており、第19号土壤を切っているというよりも上層を通過しているという表現が適当である。第11号溝同様に現代の溝である。

第13号溝

遺構の確認：C地東側中央部、東端はN 9 E 33、西端はN 9 E 21地区において検出し、第2層において確認した。

重複：第4号、6号溝を切っている。

形態と構造：東西約11mで横断面形は緩やかな弧状で深さは10cm以内と浅い。幅は不規則で30~80cmである。

堆積土：黒褐色土で現代のゴミを混入している。

関連遺構と性格：東端に現代の第12号土壤とピット49があり、これに関連する現代の溝。

第14号溝

遺構の確認：C地区東側、N15E33、N12E33地区において検出し、第1層下面において確認した。

重複：第1号掘立柱建物跡南にあるピット8を切っている。

形態と構造：南北に細長い3.5mの溝である。横断面形は急に立ち上るU字形を呈し深さは約50cmである。底面はわずかに南へ傾いている。幅は上面で15~25cm、底面で5~10cmである。

堆積土：埋土は黄褐色シルトで若干の須恵器、土師器片を含む。

関連遺構と性格：ピットは溝の底面で確認しており、特に関連する遺構もなく、他の溝と比較しても類似するものはなく性格は不明である。

第16号溝

遺構の確認：C地区東部より東西に伸び、西部にいたって東西に伸びる。東端はS

6E30、南端S9E9、北端N3E9地区において検出し、表土でくぼみが観察され、第1層において確認した。

重複：第1号、2号、3号、18号、19号溝を切る。

形態と構造：東西21m、南北15mのT字形をしている。横断面は緩やかな弧状を

なし、深さは10cm以内である。幅は最大で2.3m、最小40cmである。底面傾斜方向は東から西へ、更に南を向いている。

堆積土：暗褐色の腐食土で現代のゴミが混入している。表土から観察でき水を含み泥状になっている。

関連遺構と性格：最近まで使用されていた現代の溝である。

器種 器形	須 恵 器			土 師 器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	3	3	0	6
	底 部	0	1	1	0	0
甕	口縁部	0	0	0	0	0
	体 部	0	0	0	0	5
	底 部	0	0	0	0	0
計		0	4	4	0	11
計						

表37 第16号溝出土土器集成

第17号溝

遺構の確認：C地区的南部、東端はN12E9、西端はN15E3地区になり、第1号住居跡と第2号住居跡の間において検出し、第2層で確認した。

重複：第7号溝を切っている。

形態と構造：第1号住居跡側に弓状にまわり、第3号土壤に接しA地区に落ち込んでいる。横断面は底面が平坦な逆台形をなし、第3号土壤付近が最も深く50cm程度である。幅は上面で60~

65cm、底面では10~65cmである。底面傾斜方向は、中ほどから東が第3号土壌に向って傾き、西側半分がA地区に落ち込んでいる。

堆積土：埋土は3層からなり、第1層は暗褐色砂質シルト、第2層がによい黄褐色砂質シルト、第3層が黄褐色砂質シルトで若干粘土が混っている。各層とも多量の遺物が混入しており、特に上部器は多く、第1層では100点をこえ、総数では400点を越えた。

開通造構と性格：第9号溝と同様第3号土壌に水を集めるように作られており、一定以上貯水されると西側斜面に排出されるようになっている。集水と排水を兼ねた溝である。

第18号溝

遺構の確認：C地区東南部、北端がN9E18、南端がS12E2地区において検出され、第2層において確認した。

電査：第11、12、16号の現代溝に切られ、さらに第3号掘立柱建物跡の周溝である第5号溝、柱穴であるピット5に切られている。また第6、12、22号溝を切っている。

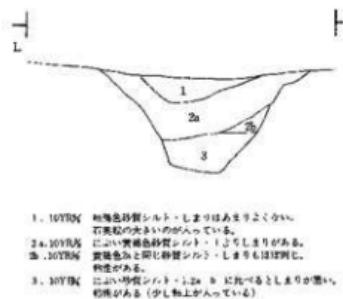
形態と構造：第4号掘立柱建物跡の周溝である第21号溝の東をカギ状に囲み、屈曲して南へ伸びる全長27.5m程の溝である。底面は平坦で壁が急に立ち上り、横断面形は逆台形である。

図40 第18、19号溝断面図(i)



- 1. 10Y 8/5 黒褐色シルト 壁厚少しあり、こまりや深い部分あり、深八重壁。
- 2. 10Y 8/5 黒褐色シルト 壁厚少しあり、こまりや深い部分あり、深八重壁。
- 3. 10Y 8/5 黑褐色シルト 壁厚少しあり、こまりや深い部分あり、深八重壁。
- 4. 10Y 8/5 黑褐色シルト 壁厚少しあり、こまりや深い部分あり、深八重壁。
- 5. 10Y 8/5 黑褐色シルト 壁厚少しあり、こまりや深い部分あり、深八重壁。
- 6. 10Y 8/5 黑褐色シルト 壁厚少しあり、こまりや深い部分あり、深八重壁。
- 7. 10Y 8/5 黑褐色シルト 壁厚少しあり、こまりや深い部分あり、深八重壁。

図39 第17号溝断面図



1. 10Y 8/5 黑褐色砂質シルト・しまりはあまりよくない。

石英砂の大きいのが入っている。

2a. 10Y 8/5 によい黄褐色砂質シルト・しまりがありがある。

黄褐色及び同じ砂質シルト・しまりはほとんどない。

3. 10Y 8/5 によい黄褐色シルト・しまりは多い。

粘土がある。(少し土上がんんでいる)

器種	須恵器			土師器		
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环 体 部	0	15	15	0	5	5
	1	14	15	0	102	102
	0	7	7	0	5	5
甕 体 部	0	0	0	0	13	13
	1	8	9	0	269	269
	0	4	4	0	4	4
計	2	48	50	0	398	398

表38 第17号溝出土土器集成

器形	器種	須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
环 類	口縁部	8	29	37	0	22	22
	体 部	2	25	27	4	35	39
	底 部	5	21	26	1	29	30
甕 類	口縁部	3	4	7	7	9	16
	体 部	6	25	31	51	70	121
	底 部	1	3	4	0	3	3
計		25	107	132	63	168	231

表39 第18号溝出土土器集成

深さは約40cm、幅は上面で40~50cm、底面で10cm程度である。底面傾斜方向は南である。

堆積土：埋土は5層に区分できる。第1層は黒褐色シルト、第2層はにぶい黄褐色シルト、第3層も黒褐色土が混入するにぶい黄褐色シルト、第4層は褐色シルト、第5層はにぶい黄褐色シルトである。

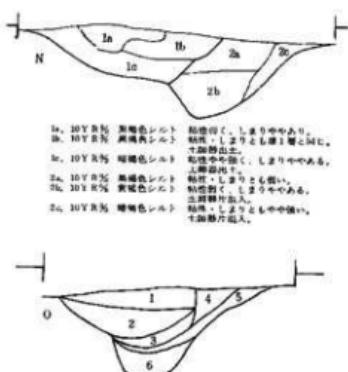
基本的には第2層と第3層、第4層と第

5層が同一で3層に大別できる。遺物は第1層に多く、土師器は200点、須恵器片も100点を越えた。

関連遺構と性格：第17号溝に切られているが、方向、屈曲の仕方が同一であり、第18号溝を掘りなおしたものであろう。カギ状に屈曲しながらも南北に長く、溝の南側の遺構群の区画と水抜きを兼ねたものであろう。

第19号溝

図41 第18、19号溝断面図(2)



- 1. 10Y R 8% シルト 勾配なし、しまりでいいやあり。
2. 10Y R 8% シルト 勾配なし、しまりでいいやあり。
- 3. 10Y R 8% シルト 勾配なし、しまりでいいやあり。
4. 10Y R 8% シルト 勾配なし、しまりでいいやあり。
5. 10Y R 8% シルト あまりなし、しまりでいいやし。
6. 10Y R 8% シルト Eと同じ様、しまりなし。

遺構の確認：C地区東部、第18号溝と重複するように存在する。北端はN 9 E 27、南端はS 3 E 21地区にあり、第2層において確認した。

重複：第6号溝と第18号溝の一部を切る。

形態と構造：第6号溝を切る地点から始まり、第18号溝と平行してコ字形に湾曲する南北17mの細い溝である。横断面形は底面が平坦な逆台形で深さ15cm程度である。幅は上面で30~50cm、底面で10~20cmを測る。南北の底面傾斜方向は南、東西は西を向いている。

堆積土：埋土は水平に2層堆積している。

第1層は黒褐色シルト、第2層は暗褐色シルトで多量の遺物を含む。土師器は、100点を越え、須恵器も50点を越えた。第

1層が多い。

関連遺構と性格：第18号溝を掘りなおしたものであり、同様の性格をもつものである。

第20号溝

遺構の確認：C地区東部、第4号掘立柱建物跡内、N 6 E 24、N 3 E 24、N 3 E 21地区において検出し、第2層で確認した。

形態と構造：南北に2.8m程の細く短かい溝である。横断面形は底面が平坦で壁が急に立ち上る逆台形をなし、深さ10m程である。幅は上面で25~40cm、下面是10~20cmである。底面傾斜方向は南へ向いている。

堆積土：埋土は暗褐色シルト1層で炭化物と数点の遺物を含む。

関連遺構と性格：切り合う遺構はないが第4号掘立柱建物跡の一部をなすものと考えられる。

第21号溝

遺構の確認：C地区東部、第19号溝の西側にある。北端はN 3 E 24、南端はS 3 E 21地区において検出し、第2層において確認した。

重複：第5号、18号、22号溝に切られている。

形態と構造：西に屈曲したコ字形を呈する。横断面形は底面が平坦で壁が急に立ち上る逆台形をなし、深さは約10cmであ

器形	種類	須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
壺	口縁部	0	23	23	0	17	17
	体部	0	19	19	1	69	70
	底部	0	4	4	0	7	7
甕	口縁部	0	6	6	0	6	6
	体部	0	8	8	3	22	25
	底部	0	5	5	1	3	4
底計		0	65	65	5	124	129

表40 第19号溝出土土器集成

図42 第20号溝断面図

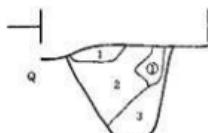


10Y R 5% 暗褐色シルト粘性はやや強く、しまりなし。炭化物、土師器混入。

器形	種類	須恵器			土師器		
		確認面	埋土	計	確認面	埋土	計
壺	口縁部	0	1	1	0	1	1
	体部	0	1	1	0	0	0
	底部	0	0	0	0	0	0
甕	口縁部	0	0	0	0	0	0
	体部	0	0	0	0	2	2
	底部	0	0	0	0	0	0
計		0	2	2	0	3	3

表41 第20号溝出土土器集成

図43 第21号溝断面図



1. 8Y R 5% 暗褐色シルト
粘性強く、しまりややある。
黒色土をブロック状に盛入。
 2. 10Y R 5% 暗褐色シルト
粘性・しまりとも薄い層と
等しい粘性シルトを含む。
 3. 10Y R 5% 暗褐色シルト
粘性・しまりとも薄い層と
同じ。
- ① 10Y R 5% 黑褐色粘性シルト
粘性・しまりとも薄い層と
同じ。

器種	須恵器			土師器			
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計	
壊 類	口縁部	0	4	4	0	1	1
	体部	0	6	6	0	1	1
	底部	0	3	3	0	3	3
甕 類	口縁部	0	0	0	0	5	5
	体部	0	2	2	0	37	37
	底部	0	0	0	4	4	
	計	0	15	15	0	51	51

表42 第21号溝出土土器集成

る。東側では第18号溝と平行しており、なんらかの関連が考えられる。性格は第4号掘立柱建物跡の排水溝と考えられる。

第22号溝

遺構の確認：C地区東部中央、N 9 E18、N 9 E21、N 6 E21、N 6 E24地区において検出し、第2層で確認した。

重複：第5号、18号溝に切られ、第21号溝を切る。

形態と構造：東西に細長い8m程の溝である。

堆積土：埋土は2層からなり、第1層、第2層ともに黄褐色シルトである。100点を越える土師器と若干の須恵器片を含む。

関連遺構と性格：第21号溝を切り第18号

溝に切られているが、第21号溝との関係

は深く掘りなおした状態で切り、第18号

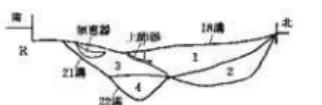
溝にはその拡張によって切られている。底面傾斜方向も同一であり、順序としては21号→22号→18号となるが、掘り下げ、そして拡張したものであり、機能的には同時に働いたもので、共に排水溝である。第5号溝が作られた段階で機能を停止したものである。

幅は上面で20~50cm、底面で10~20cmである。

堆積土：埋土は3層で、第1層は暗赤褐色シルト、第2層は褐色砂質シルト、第3層はにぶい黄褐色シルトであり各層共土師器、須恵器片を含む。ところによつては第1層が見られない所もある。

関連遺構と性格：南から東へ流れ南へ向きを変える点で第22号溝と交わり、第3号掘立柱建物跡の東端で第18号溝と接す

図44 第21、22号溝断面図



- 1. 10YR4/5に由い黄褐色シルト
- 2. 10YR4/5に由い黄褐色シルト
- 3. 10YR4/5に由い黄褐色シルト
- 4. 10YR4/5に由い黄褐色シルト

- 褐色・しまりとも弱い(18号)
- 層、土質節理入
れ、堆積量多く、しまりややあり(21号)
- 堆積量なし、
地盤物もしまりとも強く(22号)
- しまりややあり、底、地盤物
堆積量多く、しまりややあり(22号)



- 18号10YR4/5に由い黄褐色シルト
- 2. 10YR4/5に由い黄褐色シルト
- 3. 10YR4/5に由い黄褐色シルト

- 堆積量多く、しまりややあり
以多か堆積する
- 褐色・しまりとも弱い(22号)
- 褐色・しまりとも弱い(22号)

器種	須恵器			土師器			
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計	
壺 類 藏 類	口縁部	0	7	7	0	7	
	体 部	0	5	5	0	77	
	底 部	0	3	3	0	3	
	口縁部	0	1	1	0	10	
	体 部	0	3	3	0	63	
	底 部	0	0	0	2	2	
計		0	19	19	0	162	
162			162			162	

表43 第22号溝出土土器集成

bは南北に伸びる。横断面形は共に緩やかな立ち上りをもつU字形で、深さは10cm程、幅は15~35cmである。全体的にブルドーザーの削平をうけ残りは悪い。

堆積土：埋土は土師器をわずかに含む黄褐色シルト1層である。

関連遺構と性格：aは第3号掘立柱建物跡を切り、第5号掘立柱建物跡を囲んでいる周溝である。bは第14号土壤に接しているが、aと接合するものか第5号掘立柱建物跡に間違するものか不明である。観察のため観察が十分でない。

第24号溝

遺構の確認：C地区西南部、東端はN3E6、S3E6、S3E3、N3E3、N6E3の各区において検出し、第2層下面で確認した。

重複：第8号土壤によって切られたまた第1号住居跡の第2号周溝に切られている。一部削平のため切られている。

形態と構造：第8号掘立柱建物跡の北側を除く3方をコ字型に囲む。横断面形は

第23号溝(a、b)

遺構の確認：C地区東部中央、aはN3E18、N3E21地区、bはN3E21、N3E18、S3E18地区において検出し、第2層で確認した。

重複：aは第5号溝と第3号掘立柱建物跡の南西コーナーピットを切る。bは第14号土壤に接する。

形態と構造：aはL字形の平面をもつ。

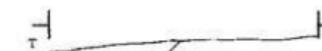
器種	須恵器			土師器			
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計	
壺 類 藏 類	口縁部	0	0	0	0	0	
	体 部	0	0	0	0	3	
	底 部	0	0	0	0	0	
	口縁部	0	0	0	0	0	
	体 部	0	0	0	0	1	
	底 部	0	0	0	0	2	
計		0	0	0	0	6	
6			6			6	

表44 第23号溝出土土器集成

器種	須恵器			土師器			
	確認面	埋土	計	確認面	埋土	計	
壺 類 藏 類	口縁部	0	0	0	0	0	
	体 部	0	0	0	0	12	
	底 部	0	0	0	0	0	
	口縁部	0	0	0	0	1	
	体 部	0	0	0	0	2	
	底 部	0	0	0	0	0	
計		0	0	0	0	15	
15			15			15	

表45 第24号溝出土土器集成

図45 第24号溝断面図(I)



10YR5/6に近い黄褐色砂質シルト。粘性、しまりとも弱い液化性を含む。

図46 第24号溝断面図(2)



緩やかなU字形をなし、深さ5cmで底面は平坦である。幅は上面で30~50cmである。

堆積土：埋土は1層でやや粘性のある褐色シルトである。遺物もほとんど見られない。

関連遺構と性格：第24号溝は第8号掘立柱建物跡の周溝である。しかし方形に回ったものではなく、当初より北側を除く3方だけをコ字形に作られたもので、第8号土壤に接する部分はその地点より伸びていない。

(5) ピット群

ピット群はC地区東端中央、N12E36、N12E33、N9E36、N9E33、N6E36、N6E33、N6E30、N6E21地区と、西部南西、S9E3、S9W3、S6E3、S6W3地区において検出した。確認面は共に地山であった。

前者の地積土は黄褐色砂質シルトで、掘り方が見られるものもあったが組み合わせが不明で建物の構造は明らかにできなかった。

後者の地積土は黄褐色砂質シルトないし褐色砂質シルトで、大部分のものは掘り方が見られなかった。少數遺物を含むピットもあったがその性格は不明である。

4. D地区の概要

D地区はA、B、C区と異なり遺構が確認されなかった。その理由としては、天地がえし等の耕作もさることながら、それ以前にこの地が削平されたためと思われる。それはA地区の沢の西斜面に削平を受けた窓跡1基（第1号窓跡）が確認されたことによる。それを見れば、その部分とD地区は与兵衛沼からの用水路で切られているがかつては一体となっており、A地区西側を含むD地区は小丘陵端部であったと思われるからである。

VI. 出土遺物について

今回の調査で出土した遺物は、瓦類、土器類、鉄製品、土製品、木製品、石製品等がある。そのうち瓦類が最も多く全体の7割を占めている。遺物の総量は平箱で200箱にも達した。出土した全量に対して資料化を試みたが、あまりの多量のため詳部にいたるまでの十分な観察を行なうことが出来なかつたので資料化した遺物は造構別にできうる限り、掲載することとして、図表として後述した。

そこで、ここにおいては、出土した主要な遺物を器種ごとに略述し、本遺跡における遺物の概略を検討して見たい。

1. 瓦類

瓦はA地区、B地区の窯跡、灰原よりの出土が多く、C地区では住居跡、溝、土壙等において、若干見られるが量的には少ない。種別は、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、道具瓦類があり、その他に刻印文字瓦、ヘラ書文字瓦、埠が見られた。

(1) 軒丸瓦

1) 重弁蓮華文軒丸瓦

直径26センチの8葉の重弁蓮華文で、直径4.4センチの中房上に1+4の蓮子があり、中央の蓮子は円形であるが周囲の4個の蓮子は棍棒形に近い。蓮子の延長は、間弁に一致する。胎土に若干の小石粒を含む焼成は緻密で灰白色を呈する。

出土状況：主としてB地区の灰原、A B地区の窯跡より出土しているが、C地区にも若干見られる。橋江窯跡の主要軒丸瓦である。

2) 細弁蓮華文軒丸瓦

外区珠文と細弁が観察できるが、出土した2点共、小片の為、蓮子の配置、弁数、珠文類は不明である。推定直径は19センチ前後である。

出土状況：C地区において4点出土しただけである。2点は第2住居跡付近より出土しているが、他の2点は造構外の第1層より出土している。

(2) 軒平瓦

単弧文軒平瓦

直に1本の弧線がヘラ書きされ、頭には縦方向に繩印目が施こされている。

出土状況：本遺跡より出土した唯一の軒平瓦で、B地X灰原より出土している。

(3) 鬼板

重弁蓮華文鬼板の中房破片と考えられる。直径5.7cm、厚さ3.3cmの破片で裏側は指ナデ状の痕跡が見られる。中房上の蓮子の配置は1+4であり、その形態は中央の1個が円形で周囲の4個は楕棒形である。前記の軒丸瓦と共に通する意匠である。

出土状況：A地区において1点だけ出土した。

(4) 道具瓦

I) 隅瓦

焼成前に平瓦の隅を切り取したものである。凹面はほとんどすり消すか、わずかに布目が

表46 文様瓦、文字瓦等出土表

種別 遺構	軒丸瓦		軒平瓦 単弧文	鬼板 重弁蓮華文	文字瓦		その他		
	重弁蓮華文	細弁蓮華文			割印	ヘラ呂	隅瓦	雙斗瓦	塙
A	1号窯跡	1					1 (場比)	11	1
	第1土壤 遺構外	2 7	1		1			5	1
	2号窯跡					物 不明 (1) (1)			
B	3号窯跡	3				丸 (3)			
	4号窯跡	1				物 不明 (1) (1)			
	5号窯跡								
C	灰 塵	22		5		物 占伊田 (3) (3) (1) (1)	3		
	その他の	1				丸 矢 不明 (1) (1) (2)			
	1号住居	2							
	2号住居		3						
	第3土壤								1
	その他の	2							
計		39	6	5	1	19	1	19	1
注：小破片も1点と数えたため、かならずしも表の数字は個体数を表わしているものではない。									

見られる。糸切痕が見られるものもある。凸面は一部すり消されているか縦目叩きが見られる。少數であるが凹面に布目痕の見られるものもある。

出土状況：第1号窯跡よりの出土が多く、他にA地区遺構外、B地区灰原よりも出土している。

2) 襲斗瓦

幅は上弦13.5cm、下弦14.5cm、厚さ2.5cmの幅の狭い瓦で廻斗瓦と思われる。凹面は布目が見られ、凸面には横方行の縦目叩きが見られる。

出土状況：第1号窯跡より1点だけ出土した。

(5) 文字瓦

1) ヘラ書き文字瓦

平瓦の凸面にヘラ書きで「鳴比」と二字が書かれている。前の文字は「鳴」であるが、後の圓文字は「比」とも「治」とも見えるが不明である。凸面は全面にすり消しされているが、縦方向の縦目叩きが確認できる。凹面はすり消されて布目は見られない。

出土状況：第1号窯跡より1点だけ出土した。

2) 刻印文字瓦

3cm程の方形の枠内に文字一字を表わしたもので、スタンプの手法によって刻印されている。刻印には「丸」、「物」、「伊」、「占」、「矢」、「田」の6種類があり、判読不明の物もある。丸瓦に刻印されていたのは「田」、「伊」、「占」。平瓦に刻印されていたのは「物」、「矢」、「丸」である。最も多いのが「物」で5点、次が「丸」の4点、「占」の3点、「伊」、「矢」、「田」各1点、不明4点である。

出土状況：第2号窯跡から「物」1点、不明1点、第3号窯跡から「丸」が3点、第4号窯跡から「物」が1点、不明1点、灰原からの出土は最も多く、「物」が3点、「占」が3点、「伊」、「田」、「丸」、「矢」が各1点、不明2点出土している。第1号窯跡と未使用の第5号窯跡を除く各窯跡と灰原より出土している。第2号、3号、4号窯跡で焼成された可能性がある。

(6) 平 瓦

本遺跡における出土量は数万点を越える量が出土し、全ての瓦について観察することができなかつたので製作技法に基づいた詳細な分類は後日に機し、ここにおいては主として完形品を

基にした若干の分類と特色を述べ、本遺跡出土平瓦の概略をあげて見たい。

現在までの観察では粘土板の合せ目や明確な棒板痕は見られず、ほとんどが一枚作り技法によったものと考えられるので、主として凹面と凸面の観察によって分類した。

1) 1類

凹面：全体的にヘラ削りあるいはナデによってすり消されている。一部すり消しが不十分な部分に布目や粘土塊より粘土板を切り取った糸切痕が観察できる。

凸面：縦目叩きが縱方向あるいは斜め方向に見られる。一部がすり消されているものや、凹面同様糸切痕が観察できるものもある。

出土状況：刻印文字瓦がこの類にあたる。主として窯跡ならびに灰原よりの出土量が多い。

法量：上弦幅は広端で23cm、狭端で21cm、下弦幅は広端で24.5cm、狭端で22.2cm、厚さ2cm、長さ33cm程で、焼成はややあまく、色調は灰白色で胎土に砂粒を少々含む。

2) 2類

凹面：精布の布目が見られる。明確な糸切痕を残しているものが多い。すり消しは行なわれていない。

凸面：縦目叩きが縱方向に施されている。2次調整は行なわれていない。

出土状況：C地区第1住居跡施設瓦として使用されているのが目立つ。

法量：上弦幅は広端で25cm、狭端で20cm、下弦幅は広端で27cm、狭端で21cm、弧深2cm、厚さ2.3cm、長さ38cm程である。焼成は良好で色調は灰白色ないし灰色で胎土に砂粒を少々含む。

3) 3類

凹面：すり消されているが、わずかに布目が見られる。

凸面：縦目叩きが縱方向に見られる。2次調整は行なわれていない。

出土状況：灰原に多く見られる。完形品は見られない。

法量：不明。焼成は良好で堅い。色調は灰色で小色、砂粒を含む。

4) 4類

凹面：全面にすり消しを受けている。わずかに布目が見られるものもある。

凸面：全面にすり消しが行なわれ、叩き目が見えない。糸切痕が見られるものもある。

出土状況：B地区の窯跡、灰原に見られる。

法量：不明。焼成は良好で堅い。色調は灰色で胎土に砂粒を含む。

5) 5類

凹面：精布の布目が見られる。

凸面：太い縦目叩痕を2次調整として板状のもので叩き凹凸をつぶしている。

出土状況：灰原に多いがほとんどが破片である。焼成は良く堅い。色調は灰色で胎土に砂粒を含む。

以上5類に大別したが、さらに細分できよう。また特異なものとしては凸面にも布目痕がわずかに見られるもの、凸面に叩き板の側面で叩いた痕が見られるものがある。さらにかなり多数のものの凸面にも糸切痕が見られた。

(7) 丸 瓦

出土した丸瓦は全て玉縁付の有段丸瓦で、粘土紐巻作りによる。玉縁部は回転を利用して、削り、ナデ調整を行なっている。筒部は繩目叩きで全体を叩き締め、ナデで成形している。回転を利用した痕跡が明確に残るものもある。

出土状況：B地区の窯跡、灰原で多量に出土した。C地区でも多数出土しているが、住居跡の内部で施設瓦として使用されていたのが日立った。

法量：B地区出土丸瓦は全長35.5～30cmである。玉縁長は全長の1/6程度で6.5～6cmである。第2住居跡出土丸瓦は全長41.7cm～38.2cm、玉縁長11.5～11cmで、玉縁長が全長の1/4程度を占める。前者に比べてやや大きい。

(8) 塚

小破片のため全様を知ることはできないが布目痕が観察できるものもあり、レンガ状の形態になるものであるが一定の規格は把握できなかった。焼成は悪く、色調は黒色で胎土には多く含む。

出土状況：B地区灰原、C地区第3号土壙等から数点出土している。

2. 土器類

(1) 須 惠 器

1) 坎

全て平底であり、底部の切り離し並びに再調整によって分類できる。

第1類：ロクロを回転させた状態で糸切り技法によってロクロより切り離し、再調整を行なわない。

第2類：1類と同様回転糸切り技法によってロクロから切り離しを行なったのち、底部の中央部を残してヘラ削り再調整を行なっている。

第3類：ロクロを静止した状態で糸切り技法で切り離し、再調整を行なわないものである。破片の場合は第1類と判別しにくいものもある。1類としたものの中に混入している可能性もある。

第4類：回転ヘラ切りによってロクロから切り離し、再調整を行なわないものである。

第5類：回転ヘラ切りによってロクロから切り離し、回転ヘラ削りを行なっている。

第6類：回転ヘラ切りによってロクロより切り離し、手持ちヘラ削によつて再調整を行なう。

第7類：切り離し技法は不明で、底部全体に手持ちヘラ削を行なっている。

第8類：第7類同様切り離し技法は不明で、底部を回転ヘラ削りしているものである。

出土状況：环は出土した土器類の中でも最も多量に出土したもので、A、B、C地区の全域より出土している。第1類は各遺構から出土し、量的にも最も多い。特にB地区焼土遺構において一括して出土している。第2類は第1類と共に出土状態が多く、B地区焼土遺構においては明確に共伴している。第3類は各地区より出土しているが量的には少ない。第4類は各遺構より出土しているが第1類よりは多くない。第5、第6類は切り離し技法を確認できたものは少なかった。第7、8類は各地区で検出された。B地区の灰原、焼土遺構ではほとんどの類が一括して出土した。

2) 环

全体の形のわかるものはない。つまみは退化した宝珠形をしたものだけであった。天井部はロクロ回転のヘラ削りをし、口縁部は短く下方に反り、断面三角形に近いものが大部分であった。

出土状況：C地区で比較的多く見られたが、いずれも小破片であり全体の器形は判然としない。

3) 台付环

体部下端に稜をもって内湾しつつ広がるもので、体部はロクロによって整形され高台が付く。ロクロからの切り離しは不明である。

出土状況：B地区灰原より完形に近いものが出土しているが、あまり多くない。

4) 長頸壺

口縁部から頸部の破片が大部分で、器形の判然としたものはない。口縁部が断面三角形状に外側に折り返しされているものが多い。壺の底部としたものに混入している可能性がある。

出土状況：出土量はきわめて少ない。A地区、C地区でわずかに見られた。

5) 瓢

全てが破片であり、器形の判然としたものはない。口縁部は外側に断面三角形状に折り返すのと、大きく外反し口縁端に稜をもつものが多い。体部外面は平行叩きによって整形され、内面はナデ調整を受けている。底部は平底で、ほとんどがヘラ削りを受けているが、少數回転糸切り痕を観察できるものもある。

出土状況：A、B、C地区共、割合に多量に出土しているが、個体数としては比較できなかった。

6) 瓦

いわゆる風字瓦と呼ばれるものと高台の付く円面瓦の2種類がある。さらに風字瓦は頂部がある時をもつものと方形になるものがある。円面瓦は小片のため分類できなかった。

出土状況：C地区に多く大部分が遺構に伴なわず、確認より上層で出土した。

7) その他

(1) 破片のため形態は不明であるが、叩きとヘラ削りで整形された、大型の風字瓦状を呈するものである。焼成は割合に硬いが、色調はにぶい橙色で、胎土に若干の砂粒を含む。

(2) 底部を焼成前に穿孔し、ヘラ削りで整形した大型瓦の底部状のものであり、焼成は割合に硬く、色調は橙色で胎土は緻密である。

出土状況：共に第1号住居跡の床面より出土している。炉や鉄滓と関連するものだろうか。

(2) 土師器

出土量は多く、A、B、C各地区より出土している。特にC地区では調査地域全域より出土している。しかしその大部分が細片であり、形態のわかるものも磨滅が著しいものが多い。

1) 壺

土師器の内では最も出土量の多いものである。ほとんどが平底であり、丸底は1点しか見られなかった。底部のロクロから切り離し、調整技法によって分類すると4類に分類できる。

第1類：回転糸切りによってロクロから切り離し、再調整を行なわないもの。

第2類：回転糸切りによってロクロから切り離し、底部周縁だけをヘラ削りするもの。

第3類：ロクロから切り離しは不明であるが手持ちヘラ削りによって再調整を行なう。

第4類：ロクロからの切り離しは不明であるがヘラ削りによって再調整し丸底にしているもの。

1類～3類までは平底で内面を黒色処理したものもある。口縁部、体部のあり方により更に細分化が可能である。第4類は磨滅が著しく、ロクロの使用について問題がある。

出土状況：第1類は各地区に見られたが、特にC地区に多く、第1号住居跡、第2号住居跡でも検出できた。第2類はB地区、C地区で見られた。B地区焼土遺構にも若干混入している。第3類は各地区に見られるが、特にC地区土壤で出土している。第4類はB地区灰原で1点だけの出土である。

2) 壺

完形は少なく形態は判然としない。大型器形は口縁部は外反し、口縁端が立ち上るものが多い。体部は削り調整されている。底部はヘラ削り調整を受けているものが大部分である。形態は長胴の壺と考えられる。

小型器形は口径が8cm、器高が5.5cm程のもので、口縁部は外反している。体部は再酸化を受けているものが多く不明であるが、おそらくナテ調整であろう。底部も磨滅が著しく判然としないものが多いが、回転糸切り無調整のものがある。

出土状況：大型器形、小型器形共にC地区に多く、溝、土壤中から多量に出土した。

3) 罌

罌の取手と思われるものが見られた。コ字形をした取手でヘラ削りによって器形を整えている。

出土状況：C地区第2号住居跡から1点だけ出土した。

4) 異形土製品

(1) 小形手捏ね土器

器形は皿形、甕形、壺形などの種類がある。成形技法は体部外面がヘラ削りされ、内面は指でおさえながら器形を整えている。

(2) 土鉢

楕円形の体部に把手が付いた形態をしており、体部は中空である。把手の部分に糸を通す穴が見られ、体部に1つの穴が観察できた。破片のため確かではないが、体部の穴は複数あったものであろう。

(3) 土製笄

台形をし、一方を厚くし他方を薄くして刃の形を作り笄形にしている。胎土は荒く、焼成も良くないが、割合に硬い。色調はにぶい橙色で部分的に赤褐色、黒色となっている。

(4) 土玉

円形の土玉で糸を通す穴があいている。胎土に砂を含み、色調は橙色であり割合に堅い。全体をみがいている。

(5) その他

前記以外にもコ字形を呈するものや分銅形を呈するものなどがあり、形態、性格共不明なものである。

出土状況：全てC地区から出土しており、溝、土壌をはじめ、C地区の各遺構より出土している。特に第1号住居跡より(1)、(3)、(4)、第2号住居跡からは(1)、(4)が出土し、層位的にも住居跡に伴うことは確実であるが、特にまとまった出かたはしていない。

(3) 灰釉陶器

高台の付く浅い杯形を呈し、口縁は怪く内湾し、内側に沈線をもつ口唇部に至る。外面、内面共にミガキないしはナデによって丁寧に調整されている。胎土は緻密で、色調は灰白色を呈し焼成は堅い。推定口径4.4cm、器高2.5cm程の小砂片である。灰釉陶器の可能性がある。

出土状況：C地区第2号住居跡より1点だけ出土している。

3. 鉄製品

鉄製品は保存状態が悪く形態が完全に判明したものはない。種類の判別できたものとしては、鉄鎌、刀子、カマ（？）などがある。

出土状況：全てC地区の第1、第2号住居跡より出土している。

4. 木製品

(1) 漆 器

高台が付く椀が数点見られた。いずれも小片で形・態は不明であるが内外共黒色を呈している。

(2) 割り材

製品として作ったものかは不明であるが、木材を縱方向に割って板状にしたもののが多数出土

した。

出土状況：漆器、割り材共にB地区の灰原の沢跡から出土している。

5. 石製品

(1) 磨り石

大型楕円形の磨り石で中央部に擦痕が観察できる。C地区第2号住居跡に捉えてあったものである。このほかに小形のものが数点見られた。

(2) 砧石

砂岩質の自然石を使用したもので長方形に近い形をしており、かなり使いこまれ両面が凹型に磨りへっている。C地区第1号住居跡で出土した。

(3) 石器

C地区において石器が若干見られた。器種としては石斧、石鎌、楔形石匙などがある。

6. その他

(1) 鉄津

鍛冶のさいに出たと思われる鉄津で、ほとんどが小塊である。

(2) 蔵火口

數点の破片を発見した。全て高温を受け、自然釉が見られるものもある。

出土状況：C地区第1号住居跡において出土した。炉の存在も考え合わせると小鋳冶を行なっていたと判断できる。

VII. 総 括 と 考 察

1. 遺構について

今回の調査において発見できた遺構は、窯跡5基、焼上遺構1基、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡8棟、土壙21基、溝24本、ピット群であった。ここでは遺構のまとめを行ない、個々の遺構と遺跡全体の性格を考えてみたい。

(1) 窯跡について

窯跡の分布：窯跡は第1号窯跡がA地区、第2、3、4、5号窯跡がB地区の2ヶ所において発見した。A地区は南東向きの斜面である。発見できたのは1基だけであったが沢中の出土遺物よりみて更に数基存在した可能性があるが、地形の変化が著しく確認できなかった。

B地区は南向き斜面で4基発見された。第2、3、4号窯跡においては瓦焼成を行なっているが第5号窯跡は窯を作りながら火入れの作業は一切行なわれていない。

窯跡の構造：窯跡は地山を掘り下げ、スサ入り粘土で天井を構築した半地下式無階無段登窯であった。同様の構造をもつ窯跡は台原・小田原窯跡群中には比較的多く、近接するものとしては安養寺下窯跡、安養寺中畠窯跡があげられる。未調査であるが同一の旧河川沿いにある与兵衛沼窯跡も同様の構造を持つものと思われる。

窯跡の単位：A地区においては窯跡は1基しか発見できなかつたが、B地区では4基の同一構造の窯跡が発見された。これらの窯跡は同一の斜面に構築され、灰原の観察によると若干の前後関係はあるが、ほぼ窯跡の分布範囲に対応する同一の灰原を共有している。

以上のことより発見した4基の窯跡は一つの単位であった可能性がある。第5号窯跡は構築後に湧水等のため使用できず放棄したものではないだろうか。

(2) 建物跡群について

遺構の分布：C地区の平場は地形的に見て両側にはわずかしか伸び得ないものであり、分布する遺構のほぼ全様を調査できたと言える。

遺構の配置：中央部に第2号住居跡があり、その東側に7棟の掘立柱建物跡群があり、西側に第1号住居跡と第8号掘立柱建物跡が位置する。

遺構の重複：第1号住居跡は2時期1回の増改築があり、そのさい第8号掘立柱建物跡の一部を切っている。第2号住居跡は3時期4回の増改築がある。その東側に位置する掘立柱建物群の中では第2号掘立柱建物跡は1回の重複があり、第3号、第4号、第5号掘立柱建物跡は互いに重複しており、第4号を第3号が切り、更に第3号が第5号によって切られている。この掘立柱建物群の重複は第2号住居跡の増改築に対応する可能性があるが、どの時期に対応するかは判然としない。しかし第1号住居跡、第2号住居跡は共に拡大するかたちで増改築されており、掘立柱建物跡群も同一基調で増改築が進行したと考えられる。

(3) 遺構群の性格

本遺跡において発見された遺構群は遺構内出土遺物から考えて一つのまとまりを示す遺構群であると考えられる。すなわちC地区で発見した遺構群が住居跡2棟、掘立柱建物跡8棟という組み合わせであり、通常の集落としては不自然である。つまり掘立柱建物跡群は居住するという性格のものではなく、住居跡に附属し、貯蔵、保管的性格を持つと考えられる。住居跡は第1号住居跡が住居内に鍛冶の施設をもつなど工房的色合いが強く、各住居内をはじめC地区全体から多量の瓦を出土し、かつ使用している。

また今回発見した瓦窯跡群に最も近接する唯一の半場に立地する遺跡であることを考えると、瓦作りに密接に関連する遺構群といえる。「瓦屋」ないしは「造瓦所」と呼ばれる瓦製作を行なった工房遺跡という性格を考えることができる。

2. 出土遺物について

瓦をはじめ各種の遺物が多量に出土しており、個々の遺物に対する検討は後日行なうこととし、ここでは主として文様瓦、文字瓦、須恵器について検討し、遺跡の年代的位置付けを行なってみたい。

文様瓦：耕江遺跡において出土した文様瓦は重弁蓮華文軒丸瓦、綿弁蓮華文軒丸瓦、単弧文軒平瓦であった。この中で重弁蓮華文軒丸瓦と単弧文軒平瓦は窯跡においてセットとなることが確認されている。

出土した重弁蓮華文軒丸瓦に近似するものとしては多賀城跡出土の250とされる重弁蓮華文がある。これは現在までの例では多賀城跡よりわずかに出土するもので、弁の形や胎土が210重弁蓮華文と極めて類似しており、多賀城第II期の瓦文様と考えられている。（「多賀城跡」）

昭和52年度発掘調査概報)

細弁蓮華文軒丸瓦は、多賀城跡では310と分類され、多賀城第III期の瓦文様とされている。
(「多賀城跡」昭和45年度発掘調査概報)

単弧文軒平瓦は多賀城分類では640とされるもので多賀城第II期の文様である。

文字瓦：一字刻印の文字瓦は多賀城跡をはじめ、同附属寺院、陸奥国分寺、同尼寺より出土している。時期的には多賀城第II期に位置付けられている。

須恵器：東北地方における須恵器の編年はまだ確立していないが、环形土器の底部技法によって一つの試論がなされている。これによると①ロクロからの切り離しはヘラ切りで、再調整としてヘラ削り、まれに静止糸切りを行なうもの。②ヘラ切りで再調整を行なわないもの。③回転糸切りで再調整をほとんど行なわないもの。と変遷すると考えられ、①は多賀城の第I期を中心とし、②は多賀城の第III期を中心とし、③は多賀城第IV期を中心とする位置付けがされている。(岡田、桑原「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」1974、桑原「東北地方の8、9世紀を中心とした土器編年」1979)

しかしこれは資料が十分と言い難く、若干の問題点を含んでいる。多賀城第II期の瓦を生産した仙台市蟹沢中窯跡では回転手切り無調整の环が出土しており、同様に多賀城第III期の瓦を焼成した仙台市安養寺下窯跡においても回転糸切りの环が出土している。今後再検討の必要を感じる。

橋江遺跡出土の环については、前記の①、②、③の全ての技法をもつ环が確認でき混在している。

遺物の年代：瓦より見た上限は、重弁蓮華文軒丸瓦と単弧文軒平瓦ならびに文字瓦は多賀城の第II期に相当し奈良時代後半に位置付けることができる。細弁蓮華文軒丸瓦は多賀城第III期に相当し平安時代初期に位置付けることができる。

須恵器は各種の底部技法があり、若干の問題もあるが、奈良時代後半より平安初期を中心とするものと考えられる。

3.まとめと問題点

橋江遺跡は瓦窯跡と瓦作りを行なった工房とが一つの単位、すなわち瓦屋としての性格を持つものである。しかし平場の遺構群は橋江窯跡が使用されなくなったのちにも、現在与兵衛沼となっている旧河川の北側沿いに近接する蟹沢中窯跡、与兵衛沼窯跡の工房としての性格を持続けたものと考えられる。蟹沢中窯跡は重弁文軒丸瓦と単弧文軒平瓦をセットする瓦窯跡

であり、与兵衛沼窯跡は細弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦をセットとする窯跡である。桥江窯跡が使用停止したのち、蟹沢中窯跡、次いで与兵衛沼窯跡が造営されたものであり、C地区平場の建物跡群はそれらの工房として活動を続けたものであろう。遺物の出土状況もこれを裏付けている。

このほかに工房的性格をもつ遺跡としては、この台原・小田原窯跡群中では前山遺跡、二の森遺跡等があり、今後の検討が望まれる。

4. おわりに

台原・小田原窯跡群の調査もようやく進展し、これまで行なわれていたような瓦ないしは土器だけを取りあげるやり方より、遺跡の性格並びに各種出土遺物をも含めた総合検討を行なう時期がきたようである。今後は前記のような見方で今までの調査、研究を見なおし、更に進展させていきたい。

追記・この報文を作製中に茨城県勝田市で瓦屋の性格を持つ遺跡が発見されているが、その詳細については知ることができなかった。

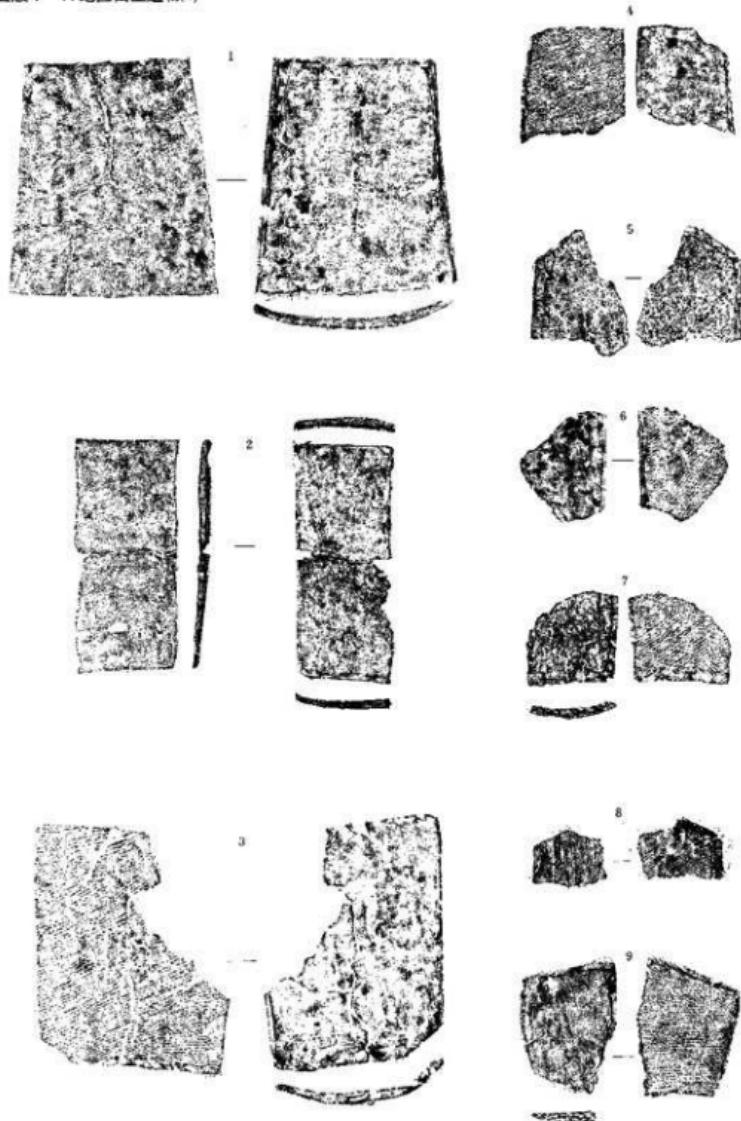
1979年12月28日脱稿

参考文献

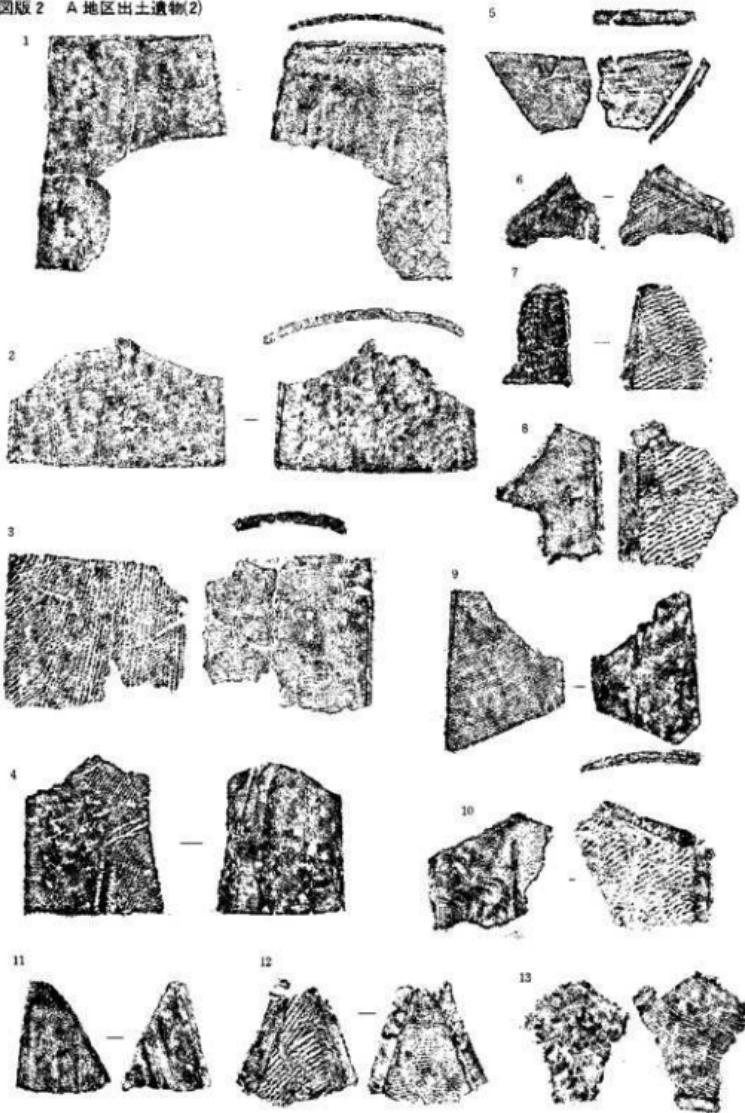
- 「多賀城跡」—昭和45年度発掘調査概報—1970年・宮城県多賀城跡調査研究所
- 「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」—研究紀要Ⅰ、岡田茂弘・桑原滋郎—1974年・宮城県多賀城跡調査研究所
- 「多賀城跡」—昭和52年度発掘調査概報—1977年・宮城県多賀城跡調査研究所
- 「東北地方の8、9世紀を中心とした土器編年」—桑原滋郎、1979年・日本考古学協会昭和54年度大会研究発表・シンポジウム資料
- 「蟹沢中瓦窯跡発掘調査報告書」—研究報告第一冊、1972年・古窯跡研究会
- 「陸奥国官窯跡群」—研究報告第二冊、1973年・古窯跡研究会
- 「陸奥国官窯跡群II」—研究報告第四冊、1976年・古窯跡研究会

図版表
写真図版
観察表

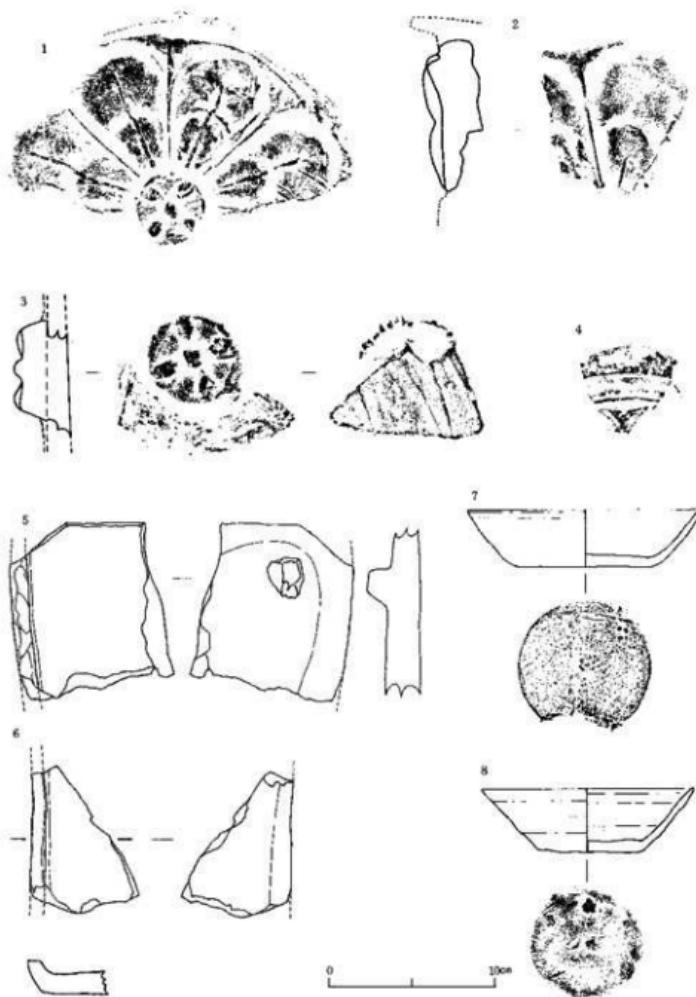
图版 I A 地区出土遗物(1)



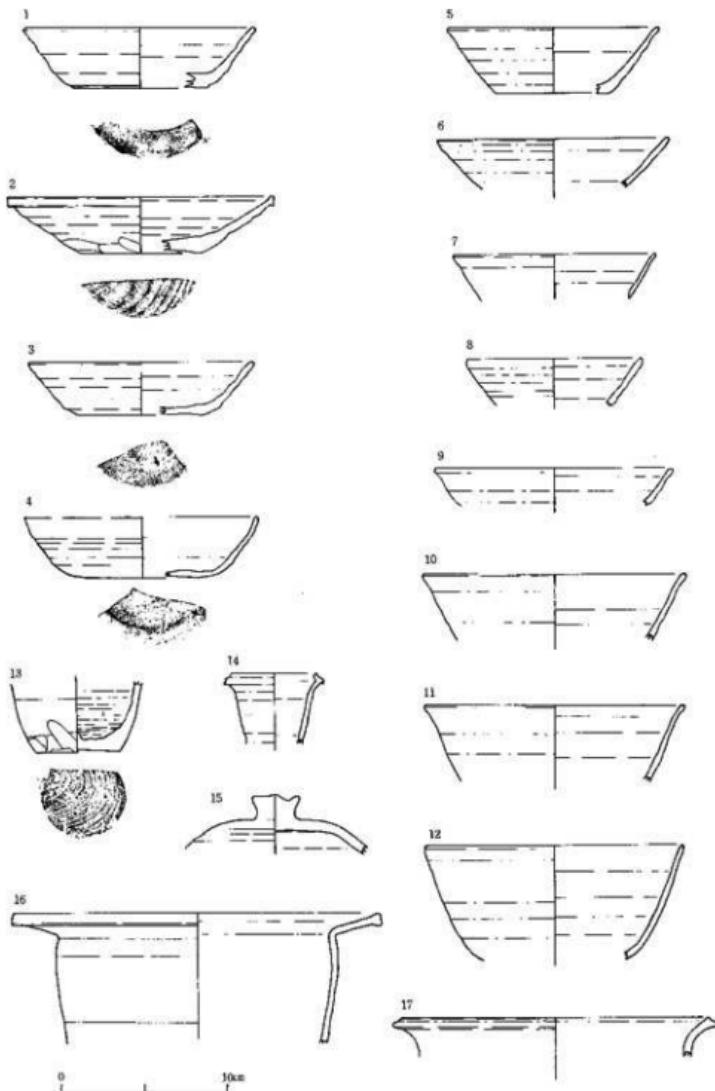
图版2 A地区出土遗物(2)



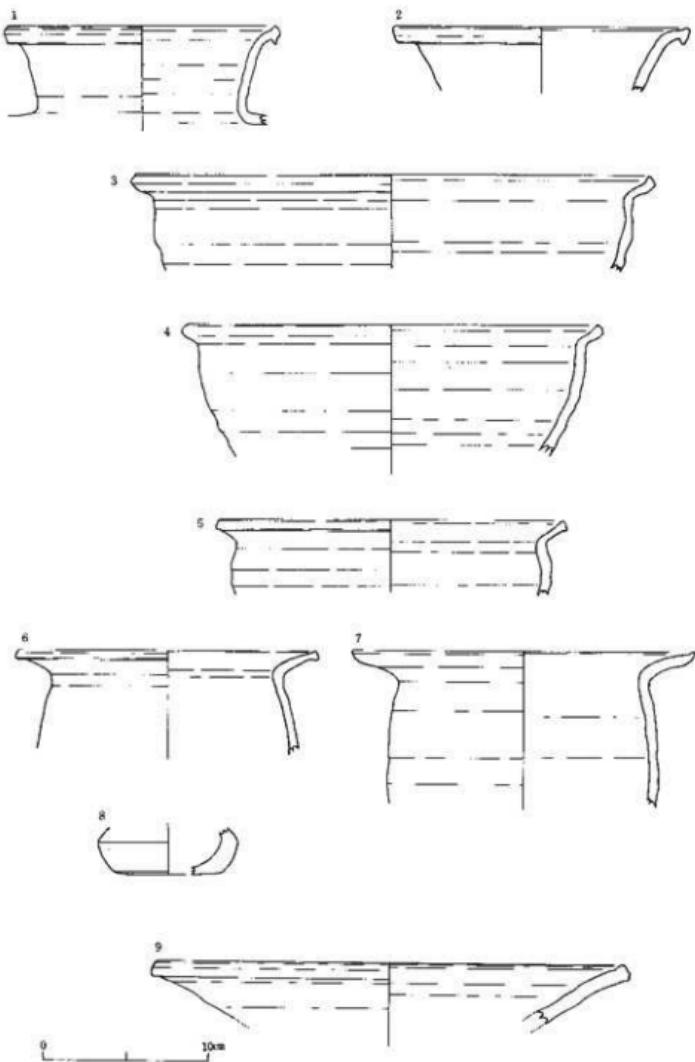
图版 3 A 地区出土遗物(3)



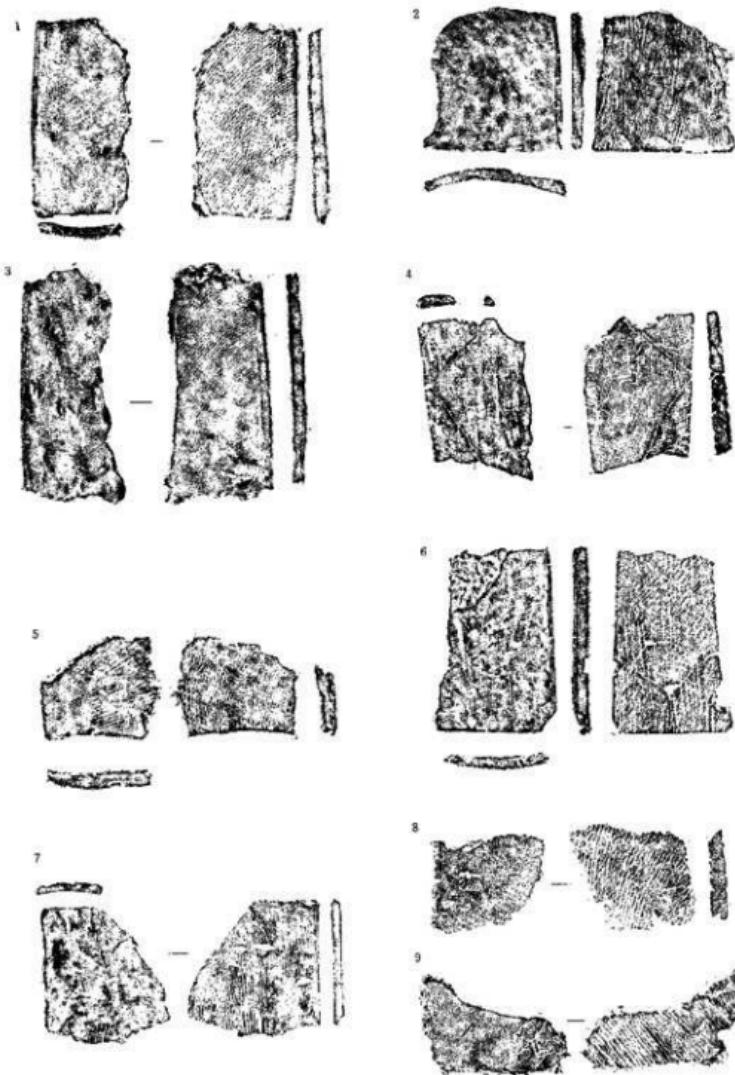
图版4 A地区出土遗物(4)



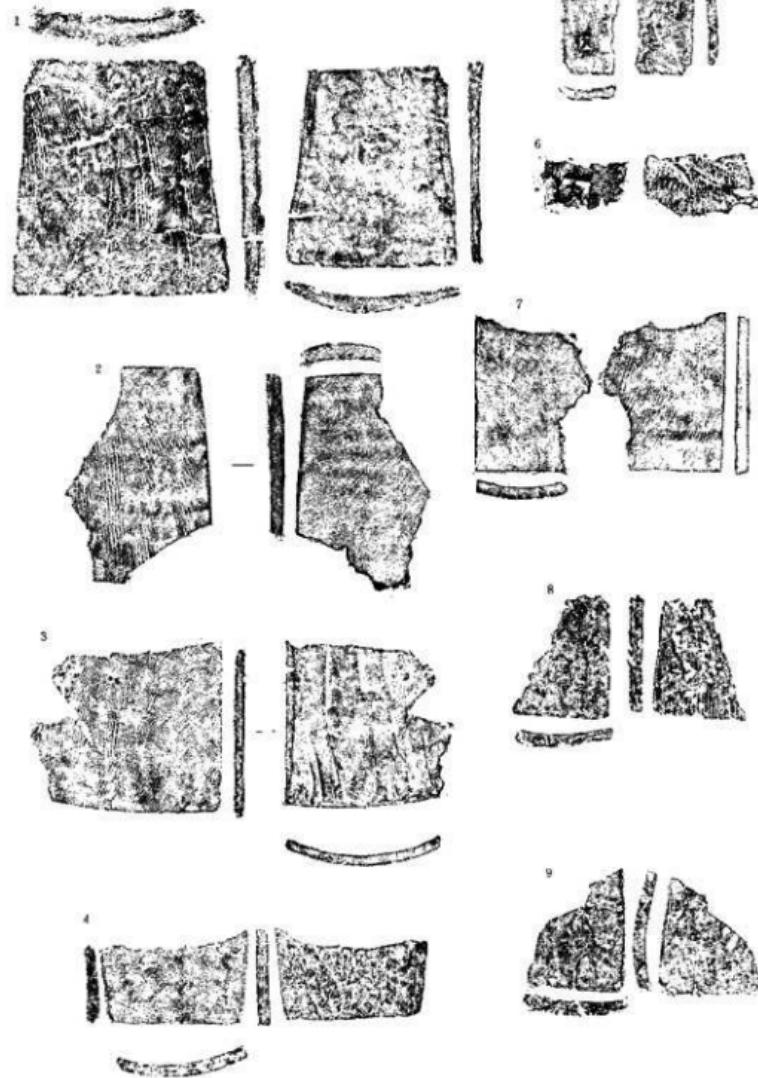
图版 5 A 地区出土遗物(5)



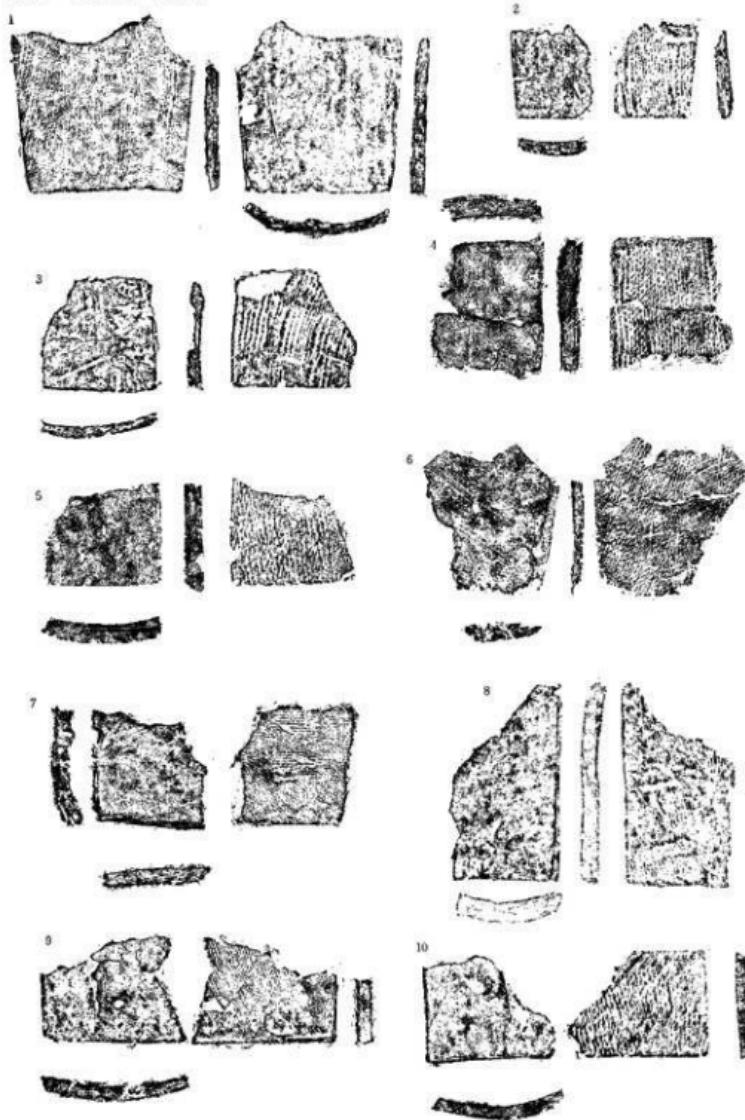
图版6 B地区出土遗物(I)



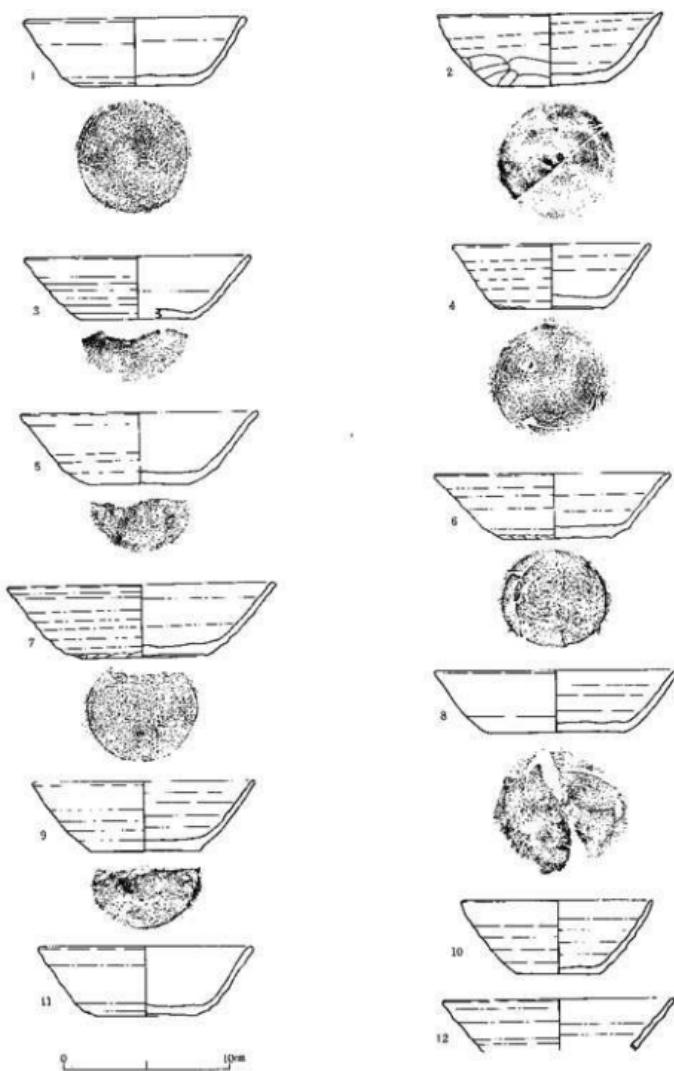
图版 7 B 地区出土遗物(2)



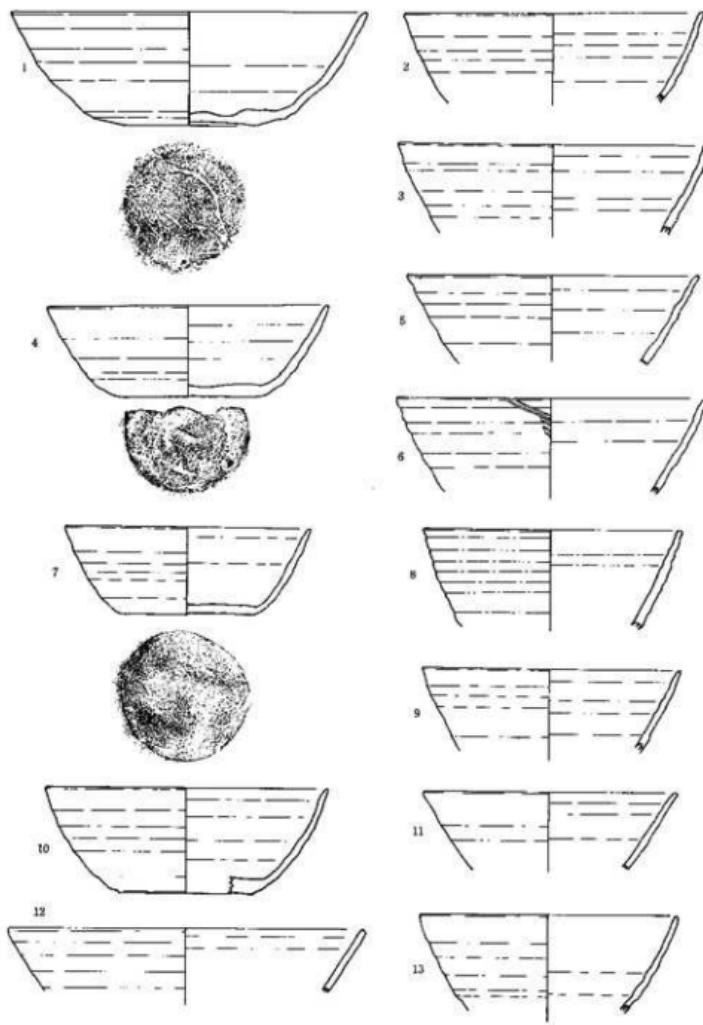
图版 8 B 地区出土遗物(3)



图版9 B地区出土遗物(4)

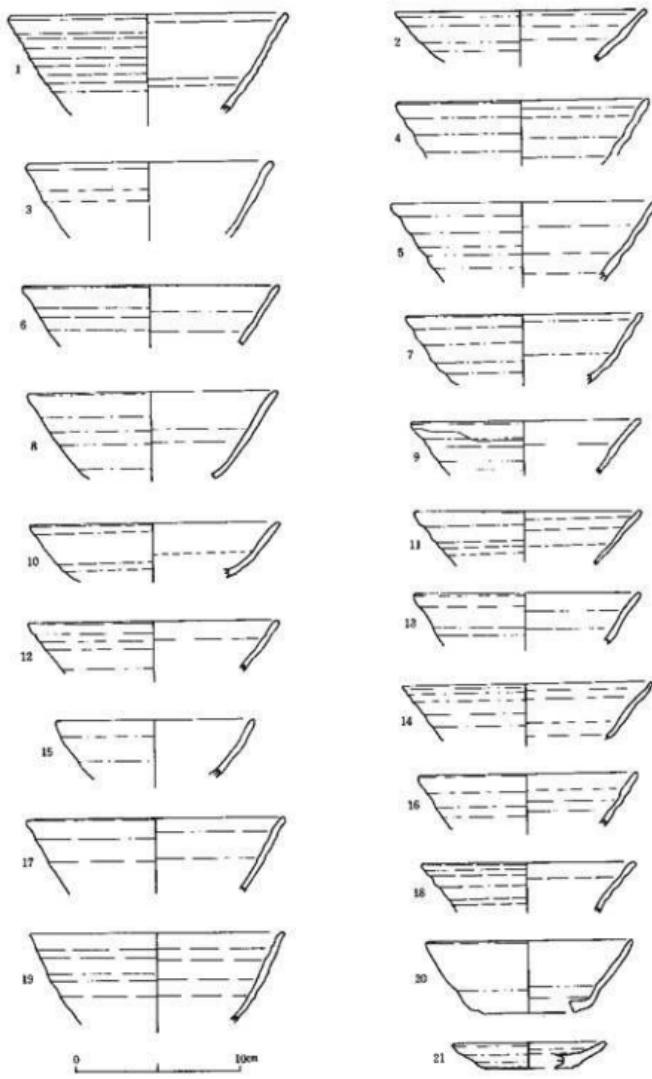


图版10 B地区出土遗物(5)

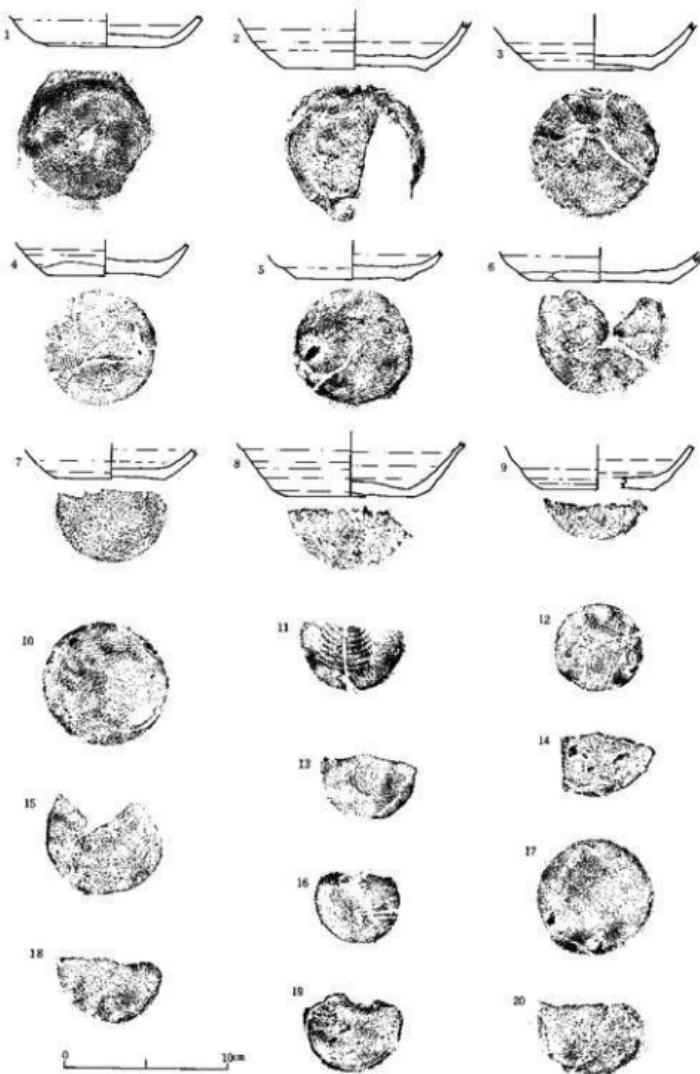


0 1 10cm

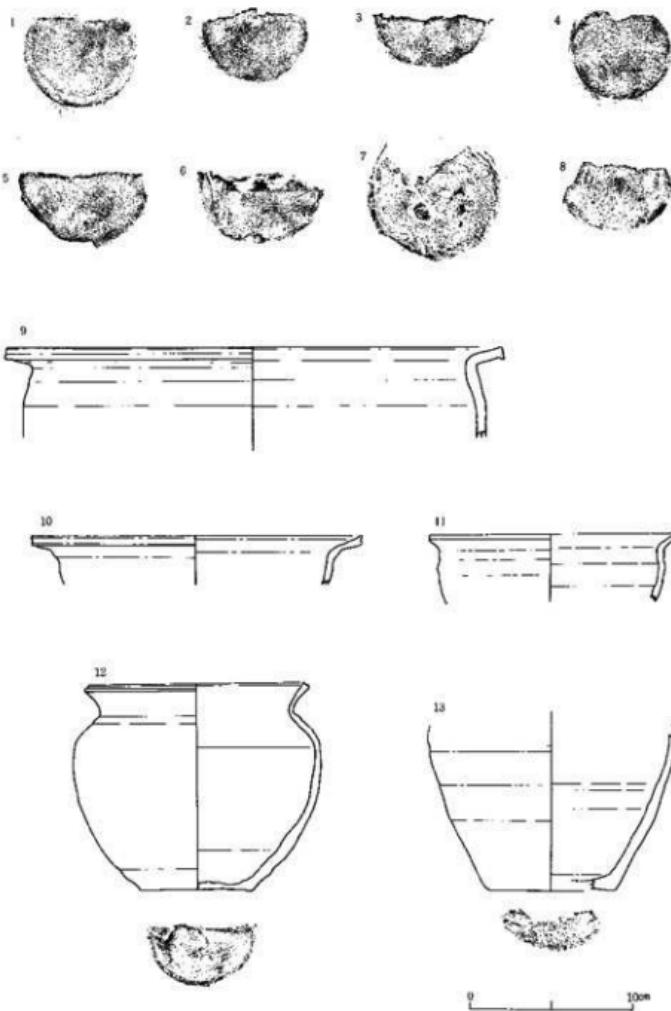
圖版II B 地區出土遺物(6)



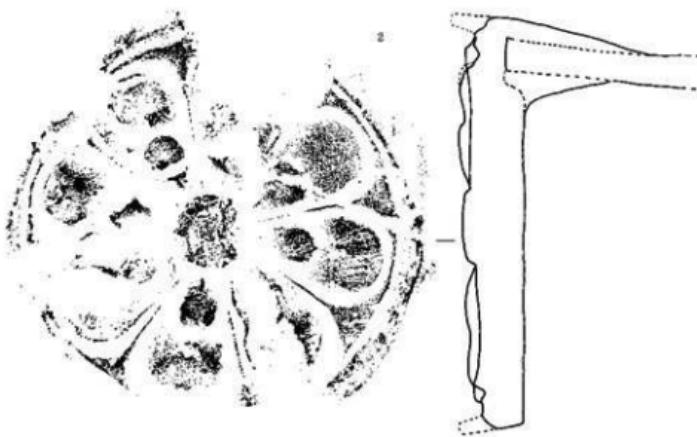
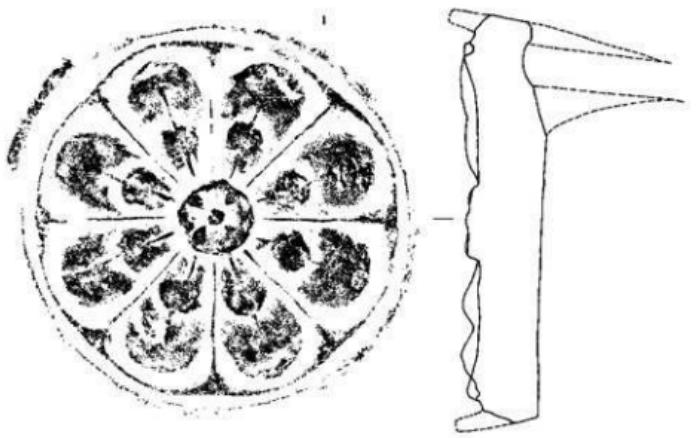
図版12 B地区出土遺物(7)



图版I3 B地区出土遗物(8)

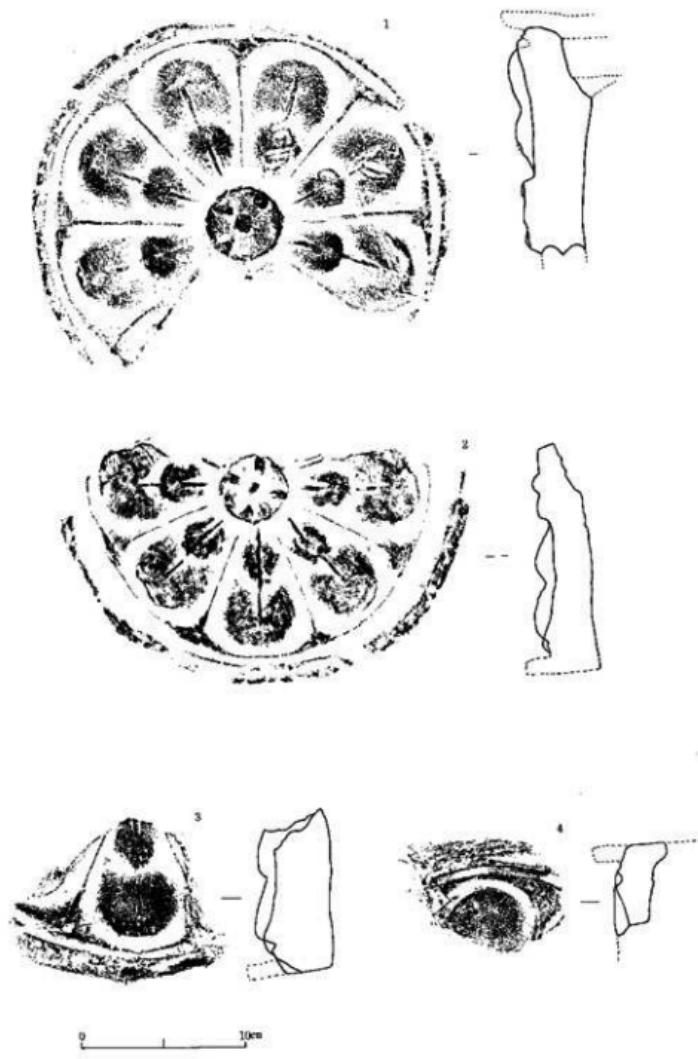


图版14 B地区出土遗物(9)

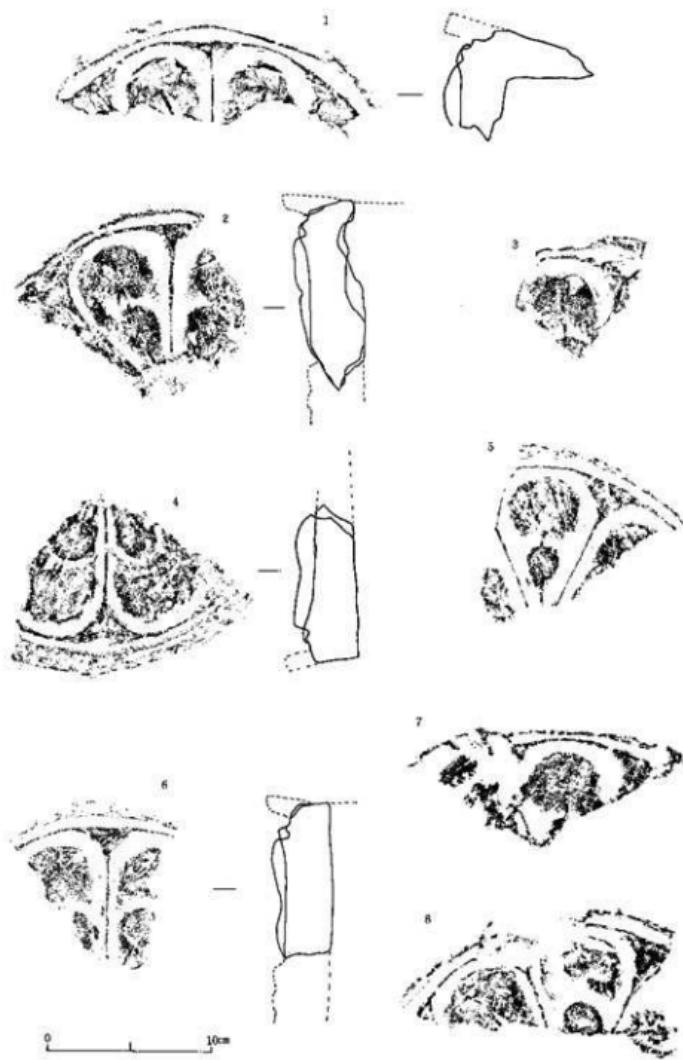


0 10cm

図版15 B地区出土遺物(10)



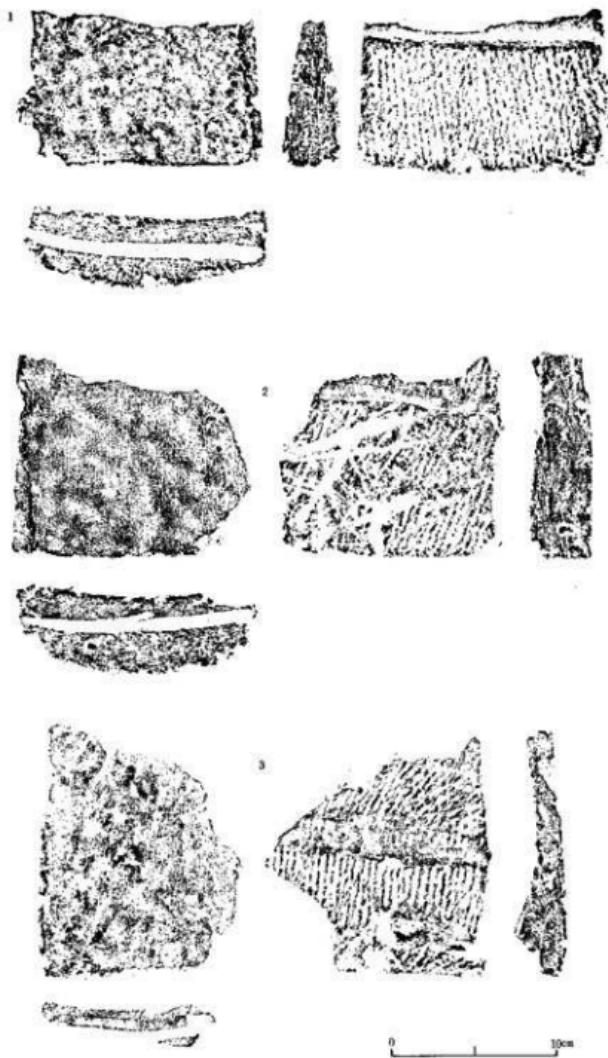
图版16 B 地区出土遗物(1)



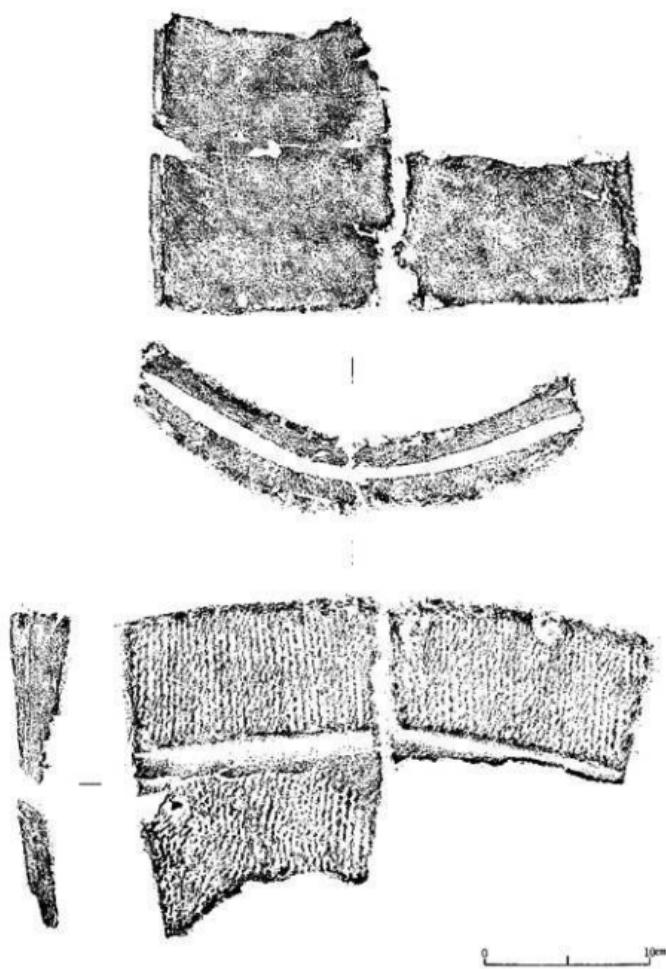
图版17 B 地区出土遗物(12)



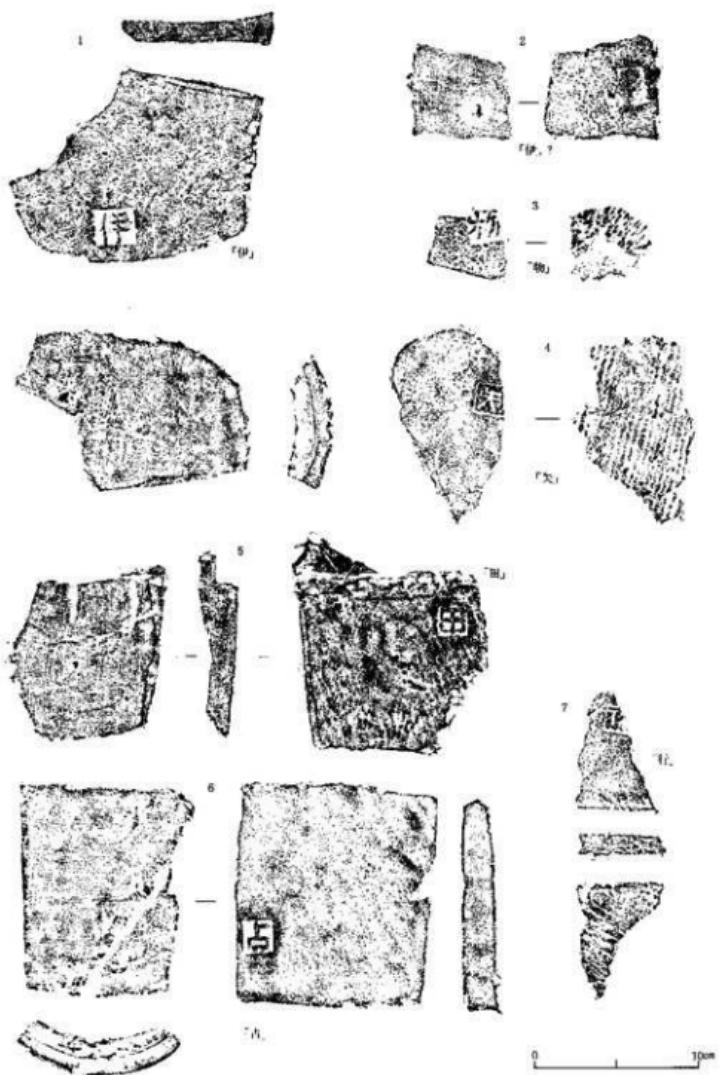
图版18 B地区出土遗物(3)



图版 I9 B 地区出土遗物(4)



图版20 B 地区出土遗物(5)



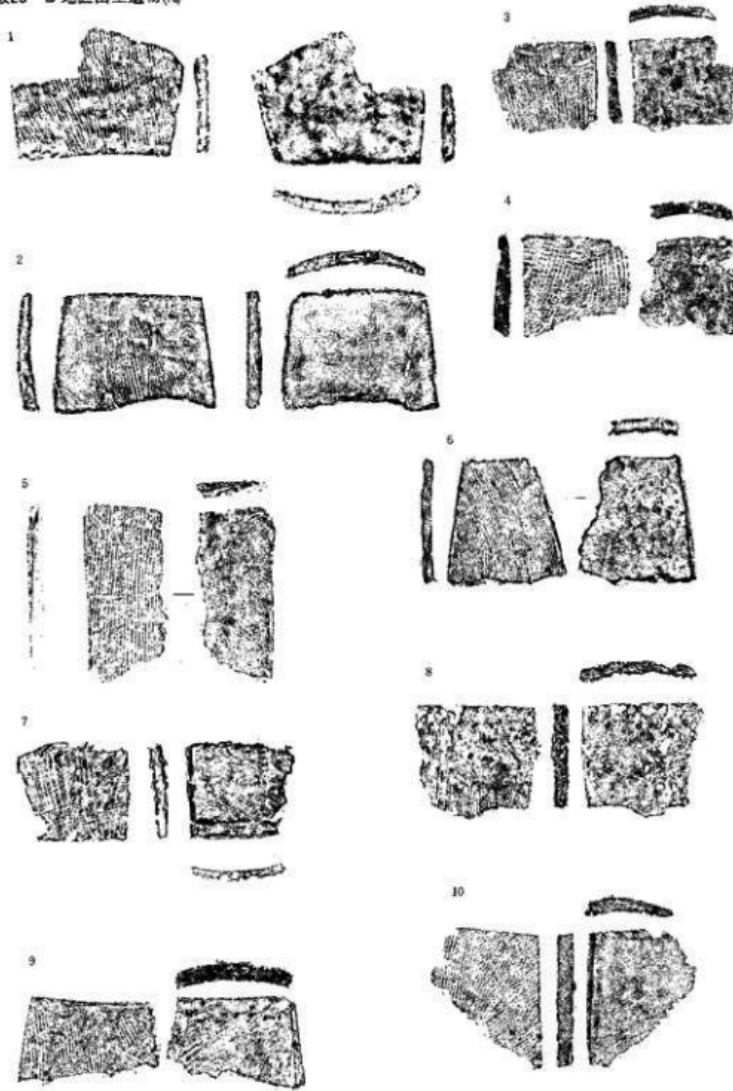
图版21 B地区出土遗物(16)



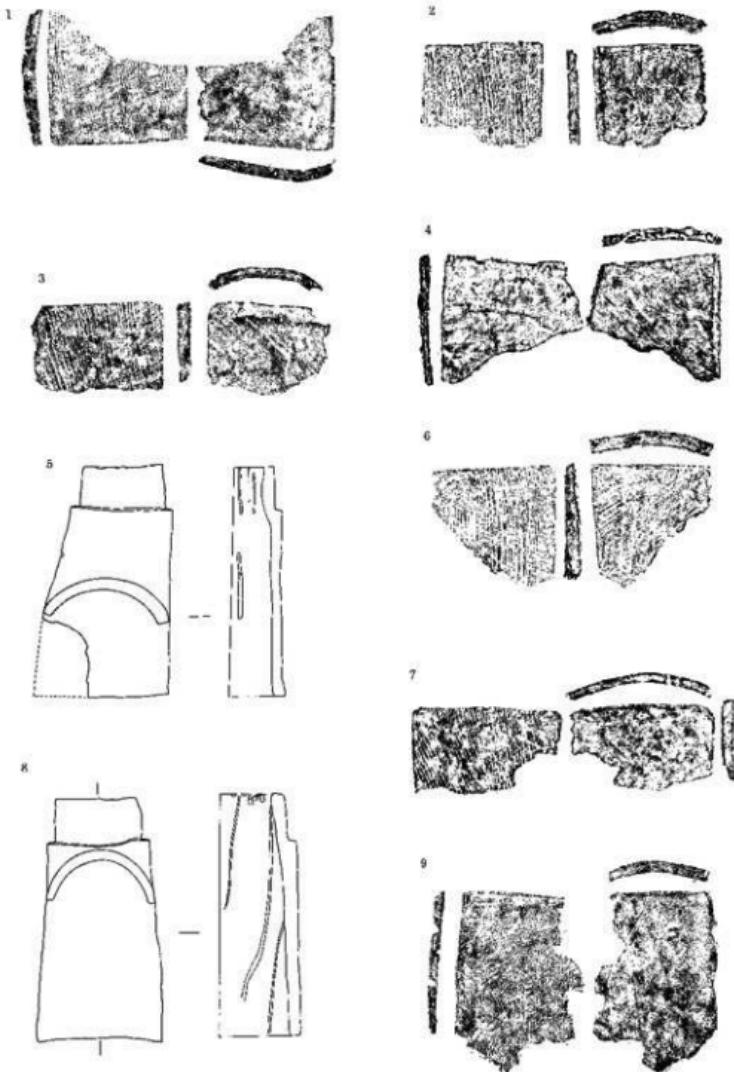
图版22 B 地区出土遗物(1)



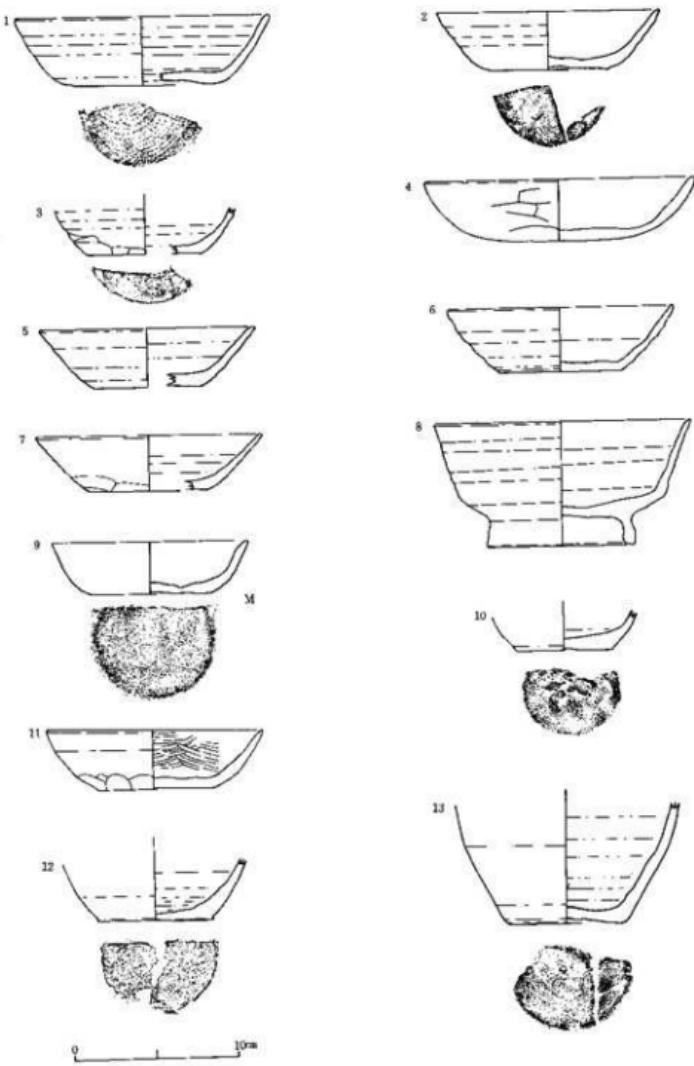
图版23 B 地区出土遗物(8)



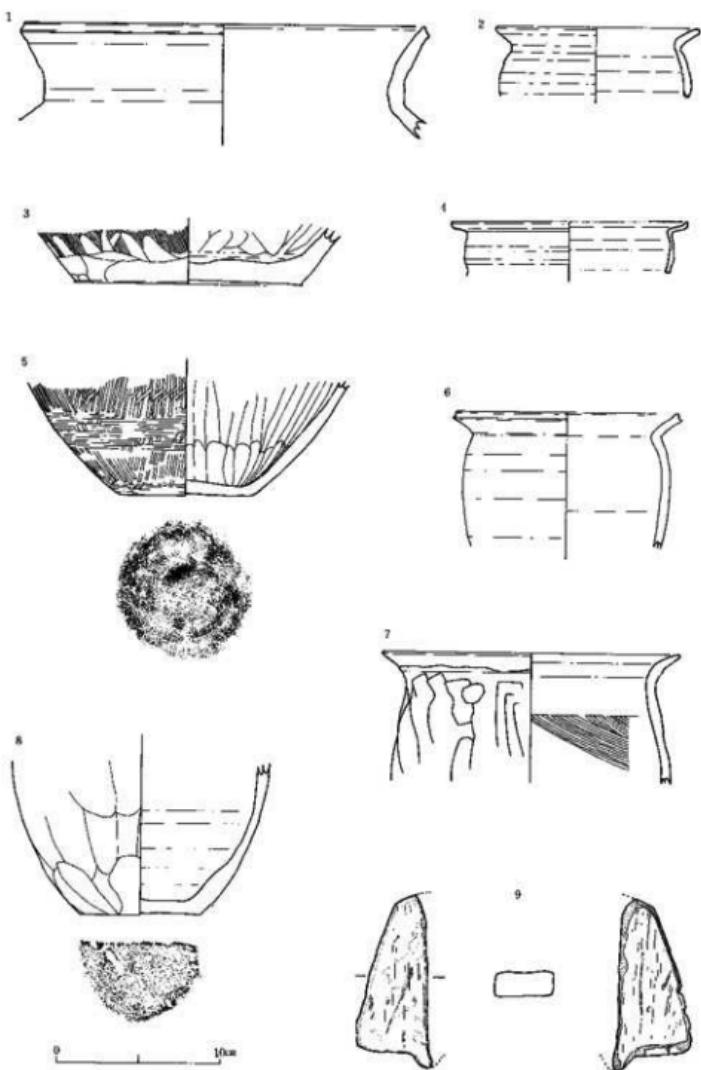
图版24 B地区出土遗物(1)



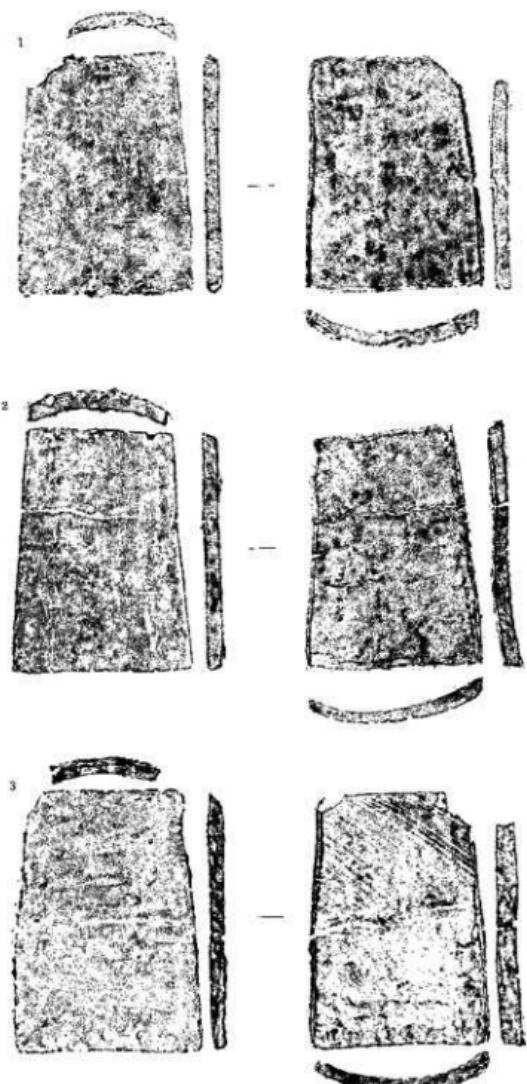
图版25 B 地区出土遗物(2)



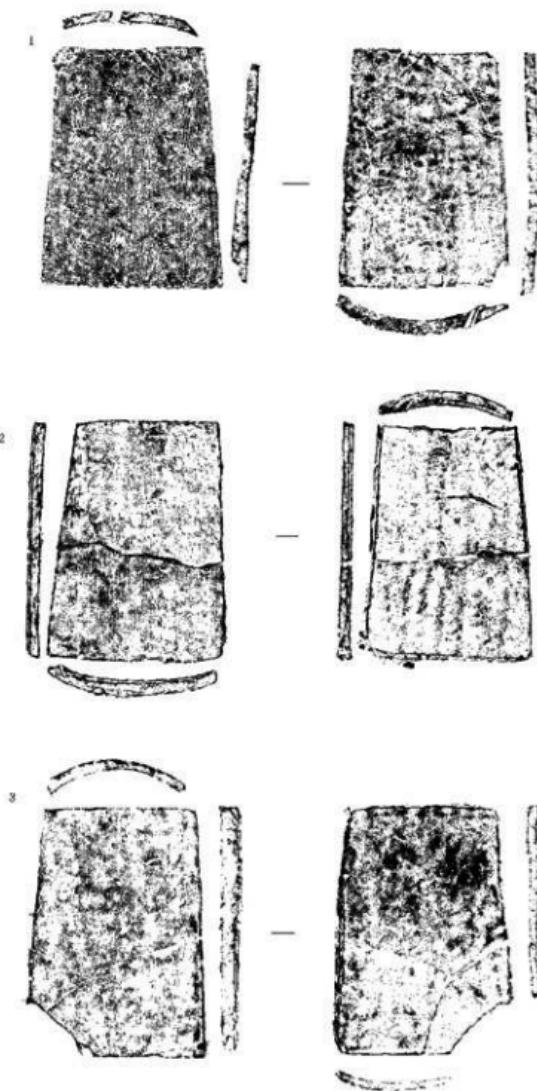
图版26 B 地区出土遗物20



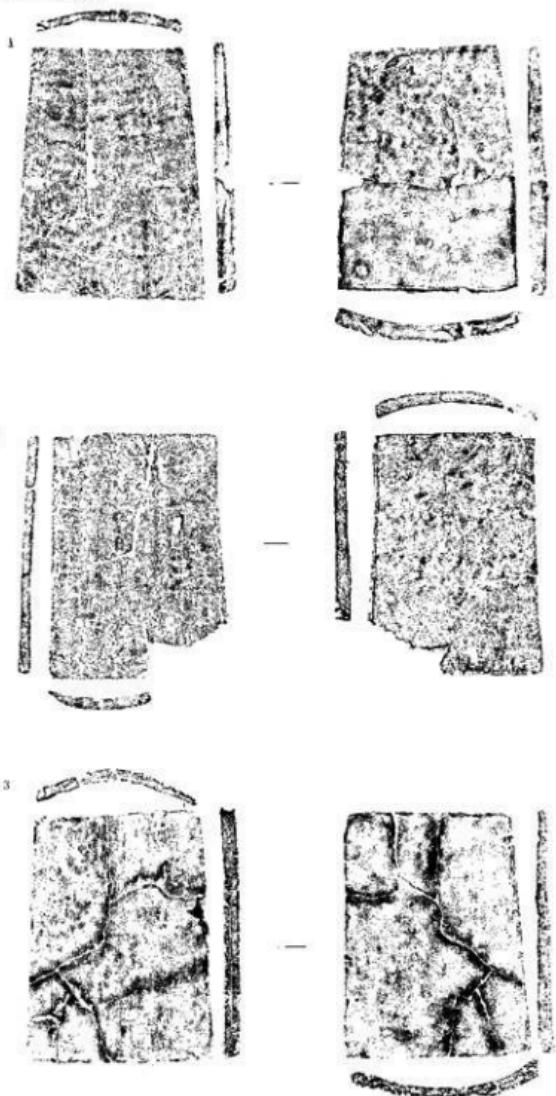
图版27 C地区出土遗物(I)



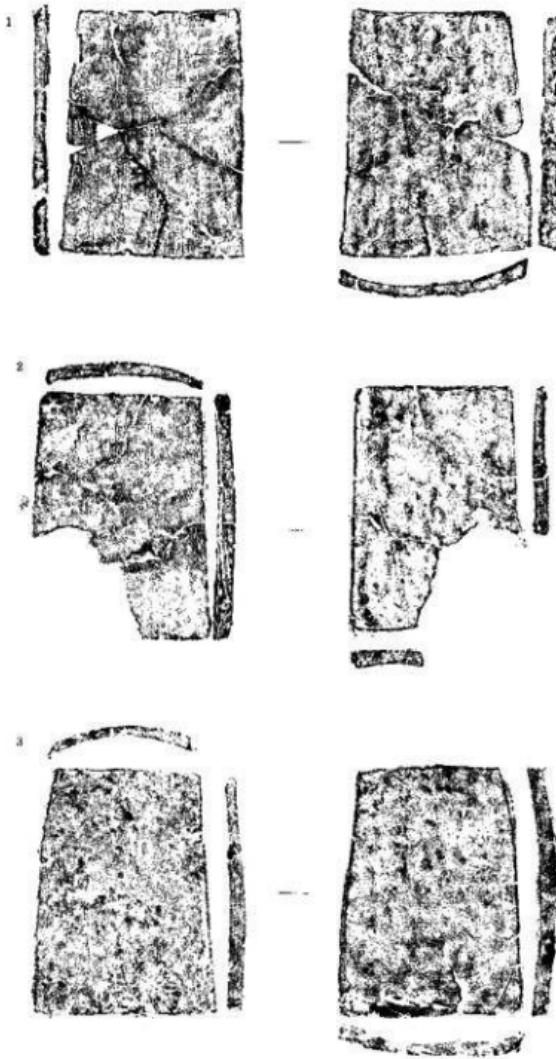
图版28 C地区出土遗物(2)



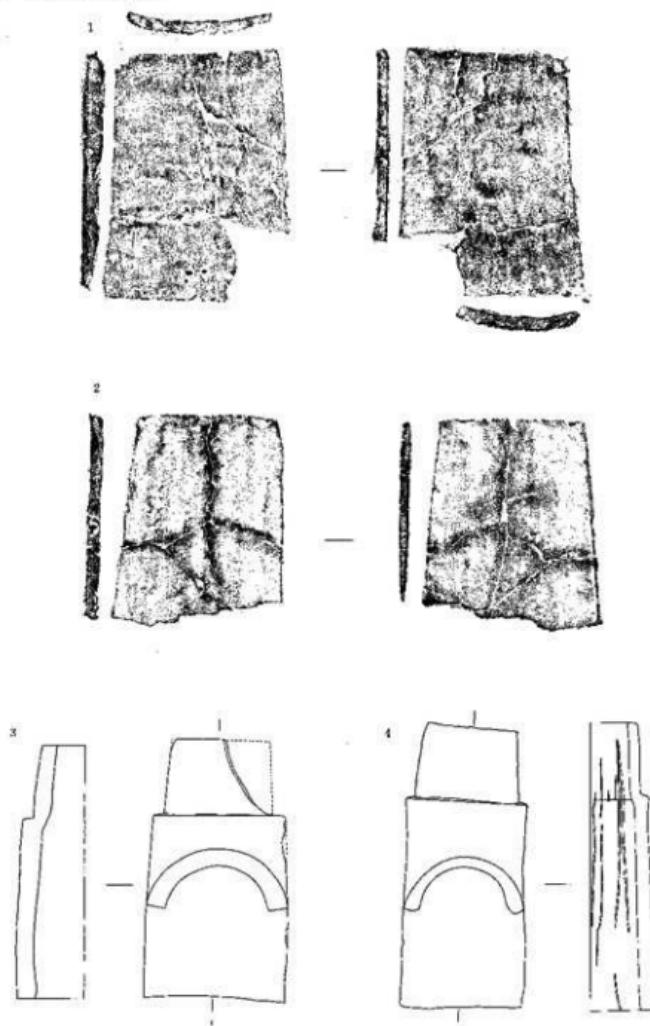
图版29 C 地区出土遗物(3)



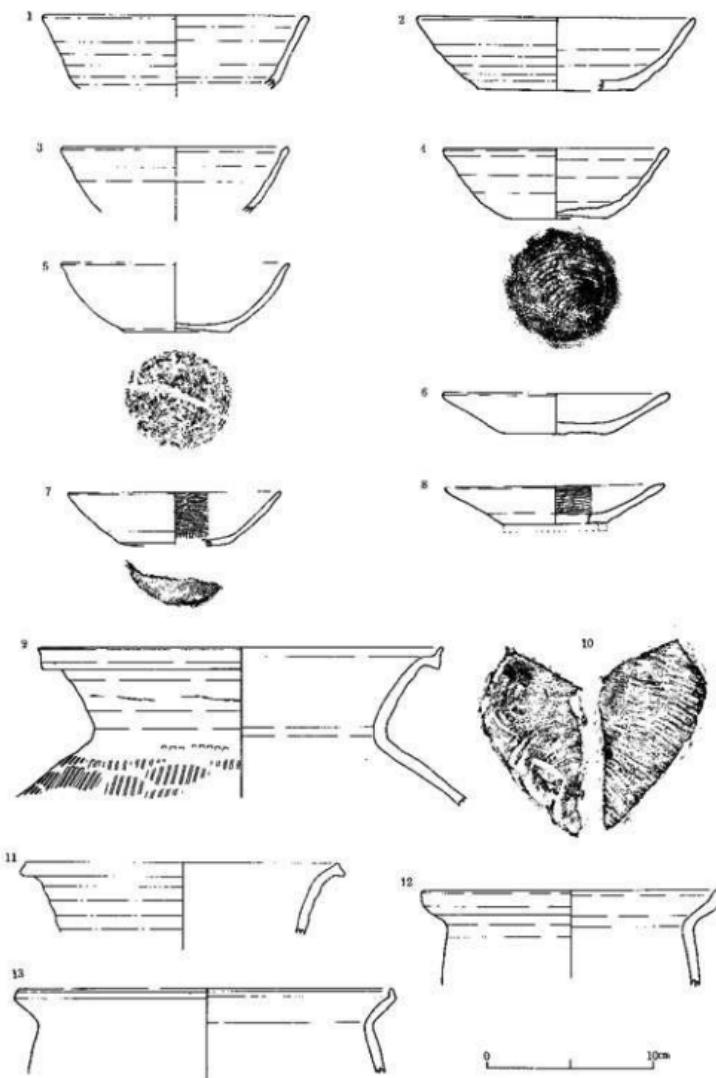
图版30 C 地区出土遗物(4)



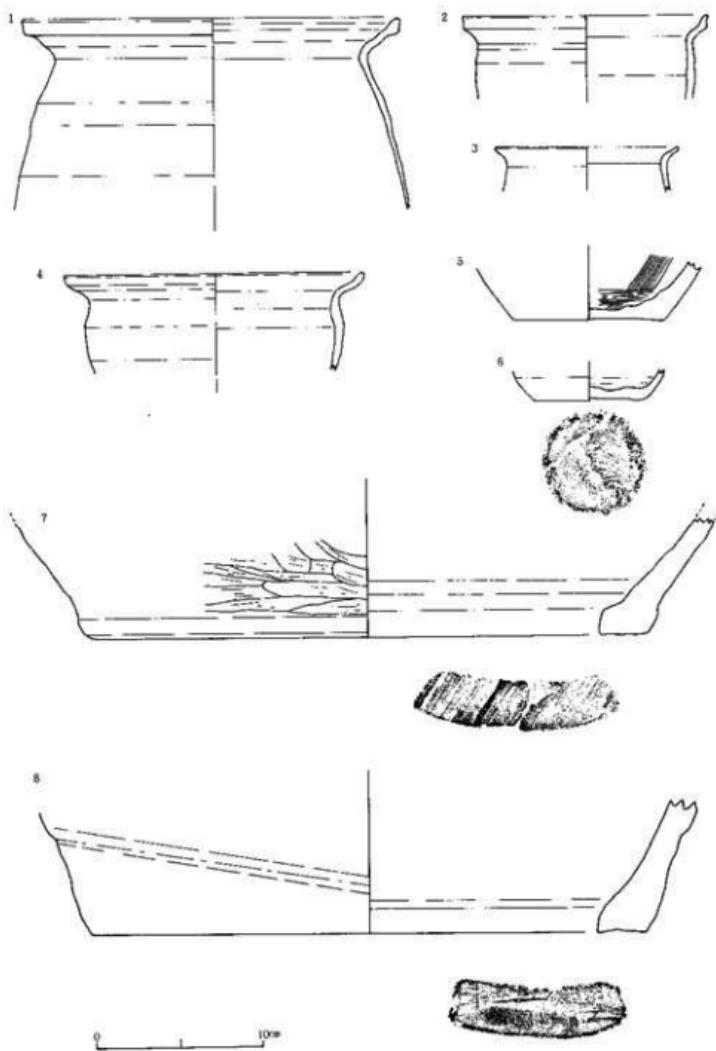
图版31 C地区出土遗物(5)



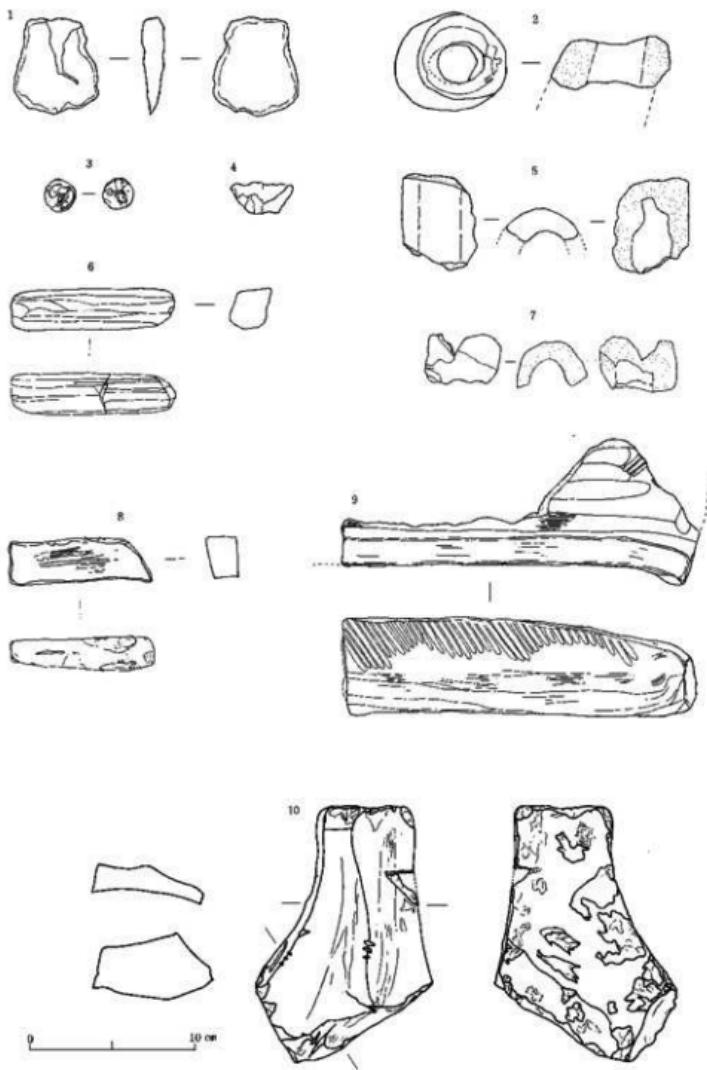
图版32 C 地区出土遗物(6)



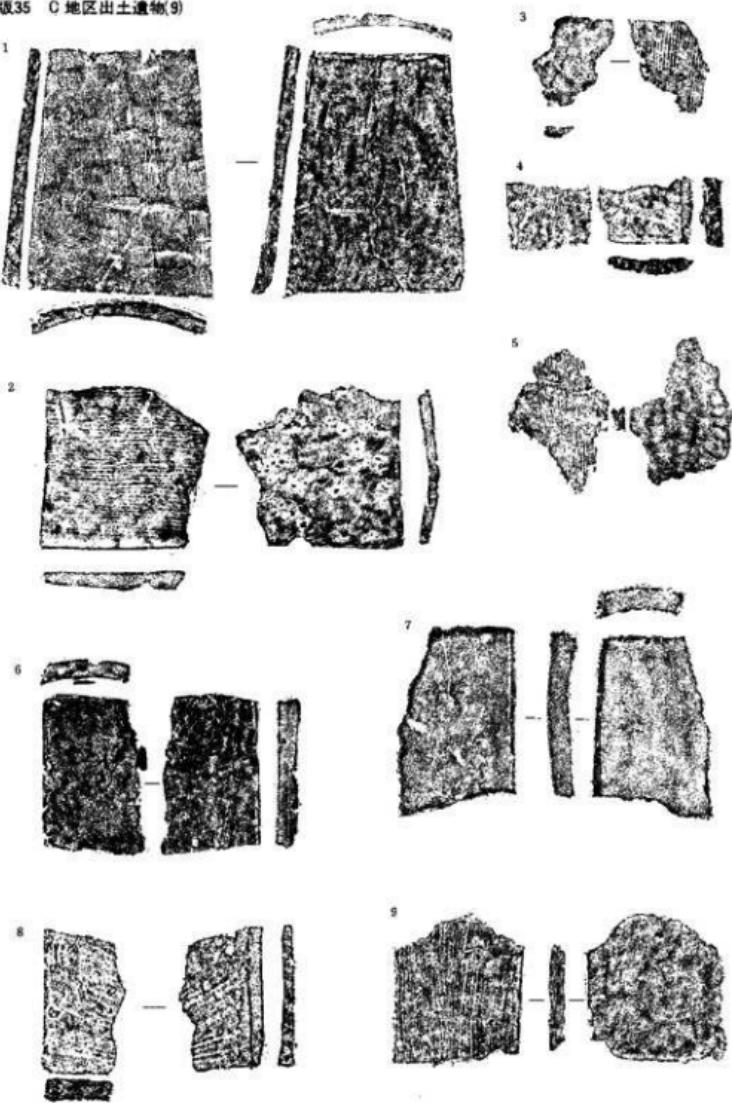
图版33 C 地区出土遗物(7)



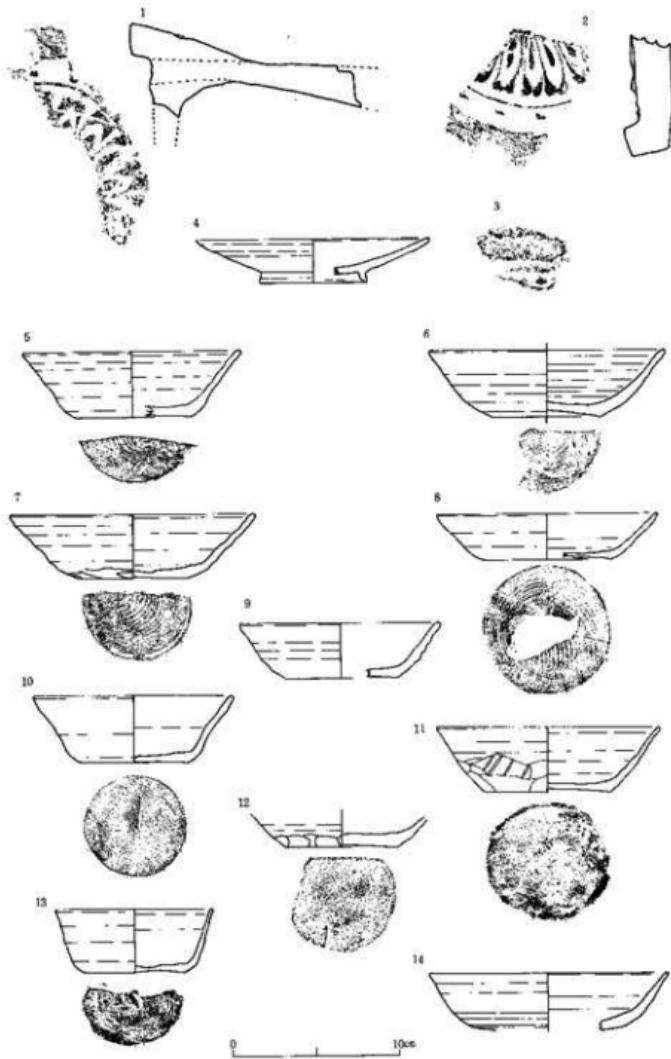
图版34 C 地区出土遗物(8)



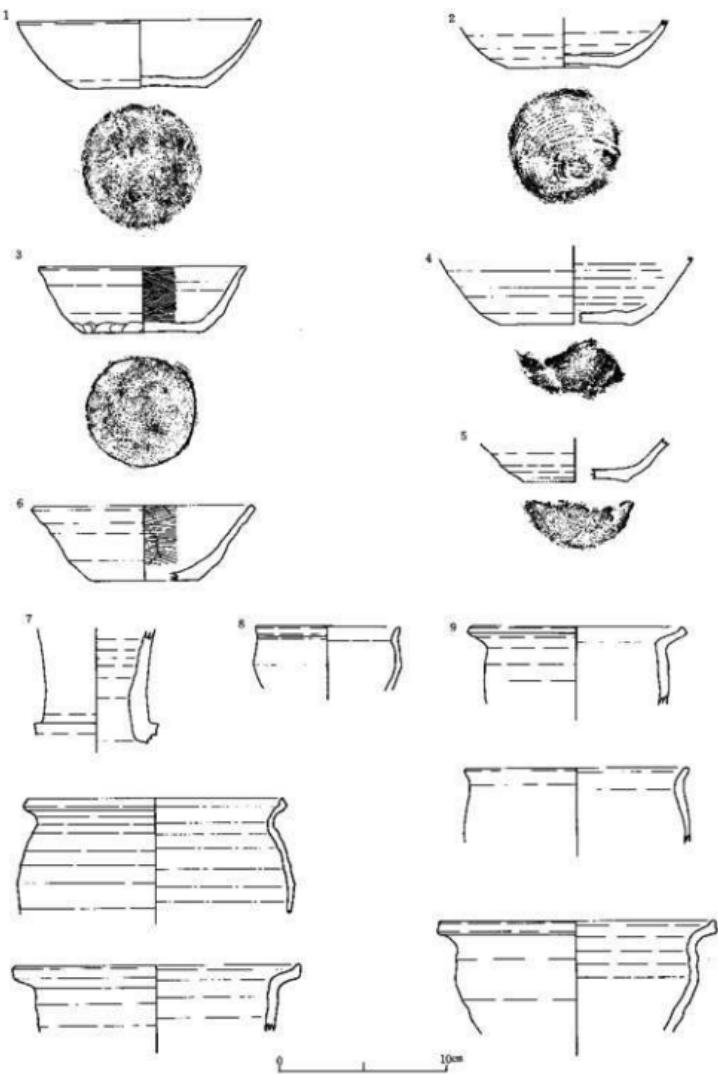
图版35 C地区出土遗物(9)



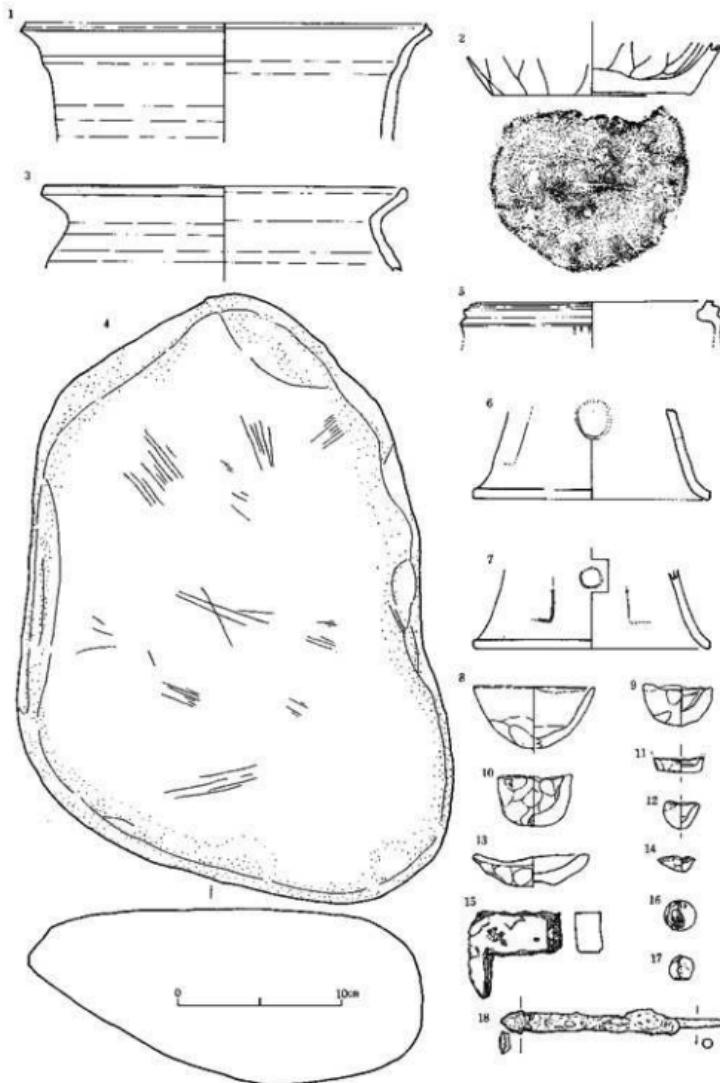
圖版36 C 地區出土遺物(10)



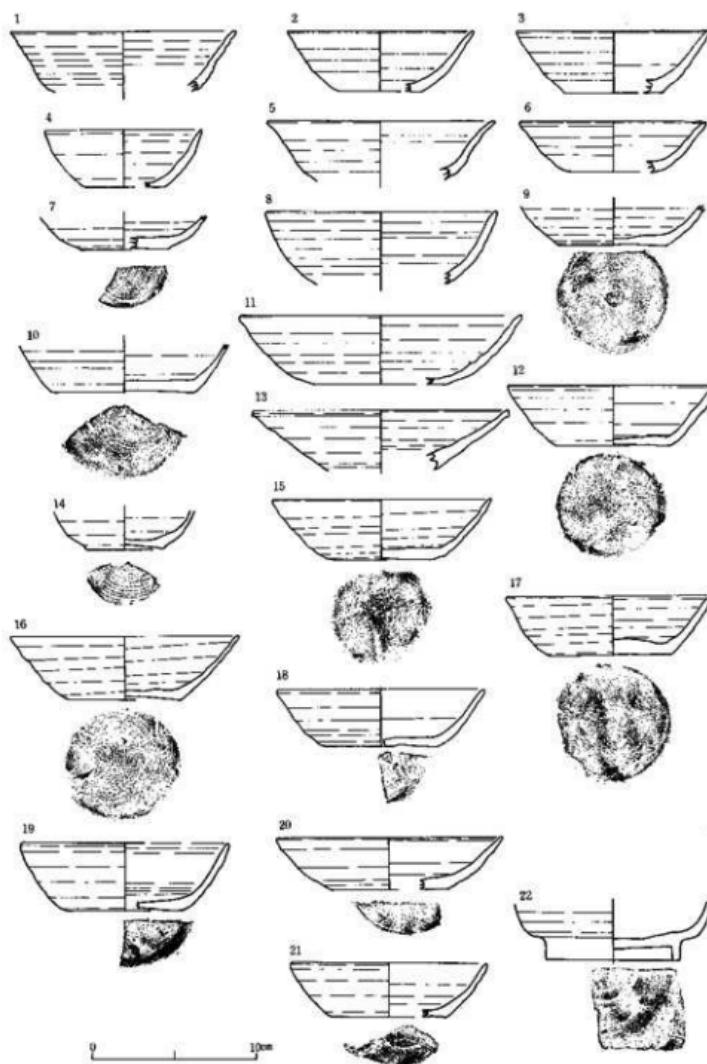
图版37 C 地区出土遗物①



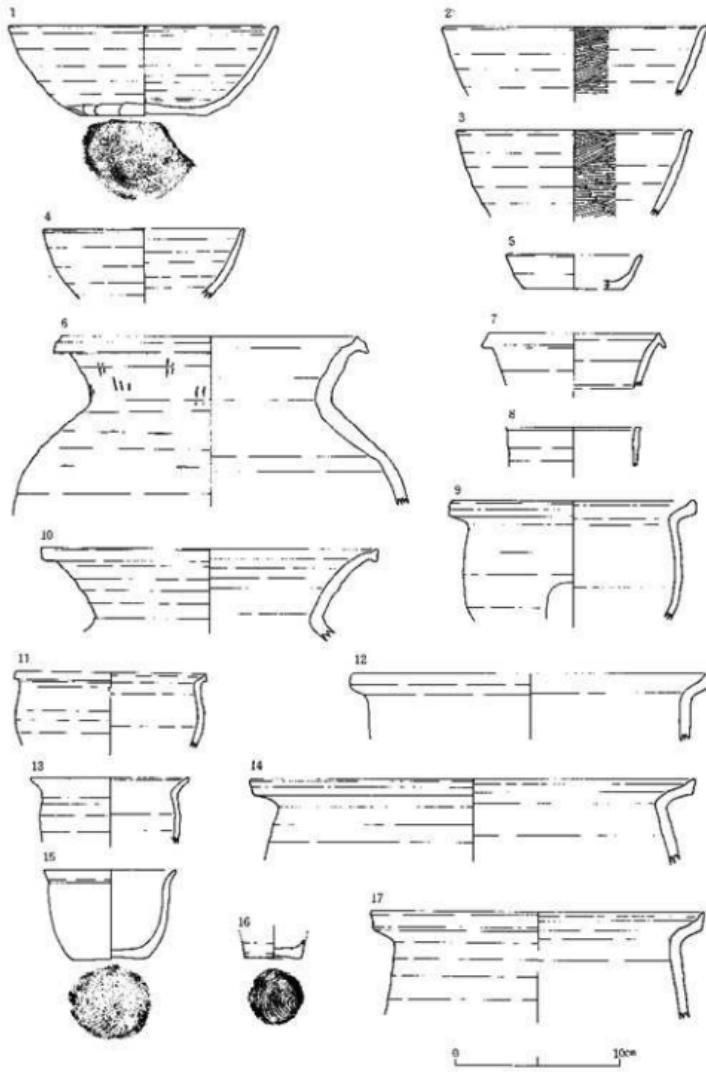
图版38 C 地区出土遗物(2)



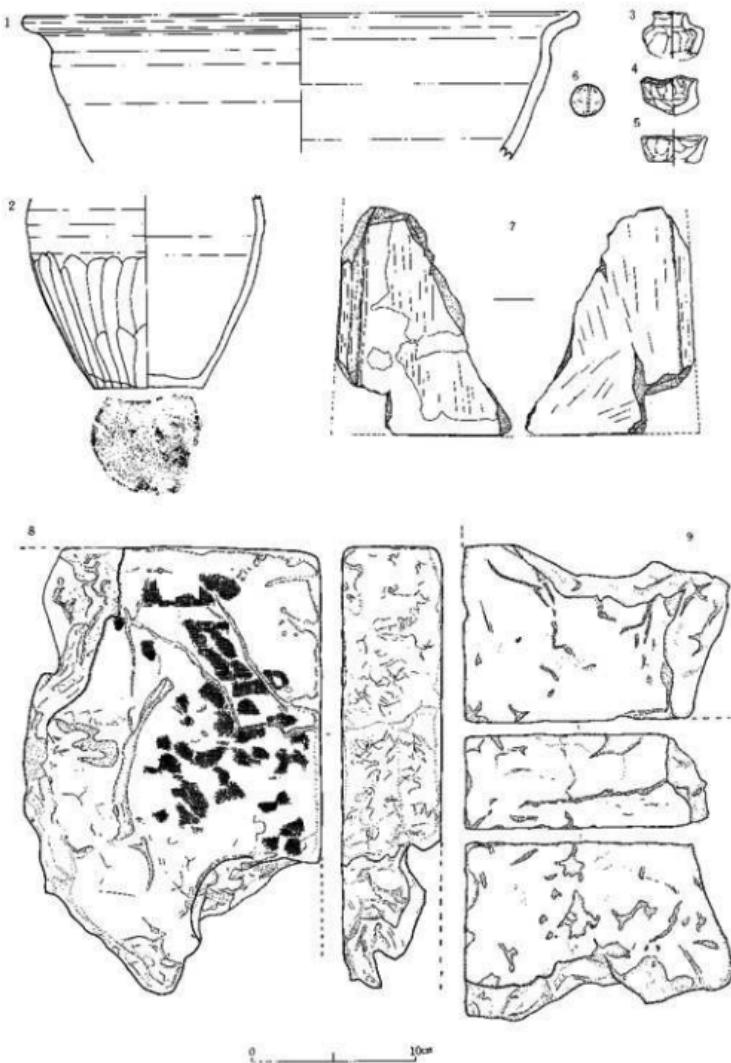
図版39 C地区出土遺物(13)



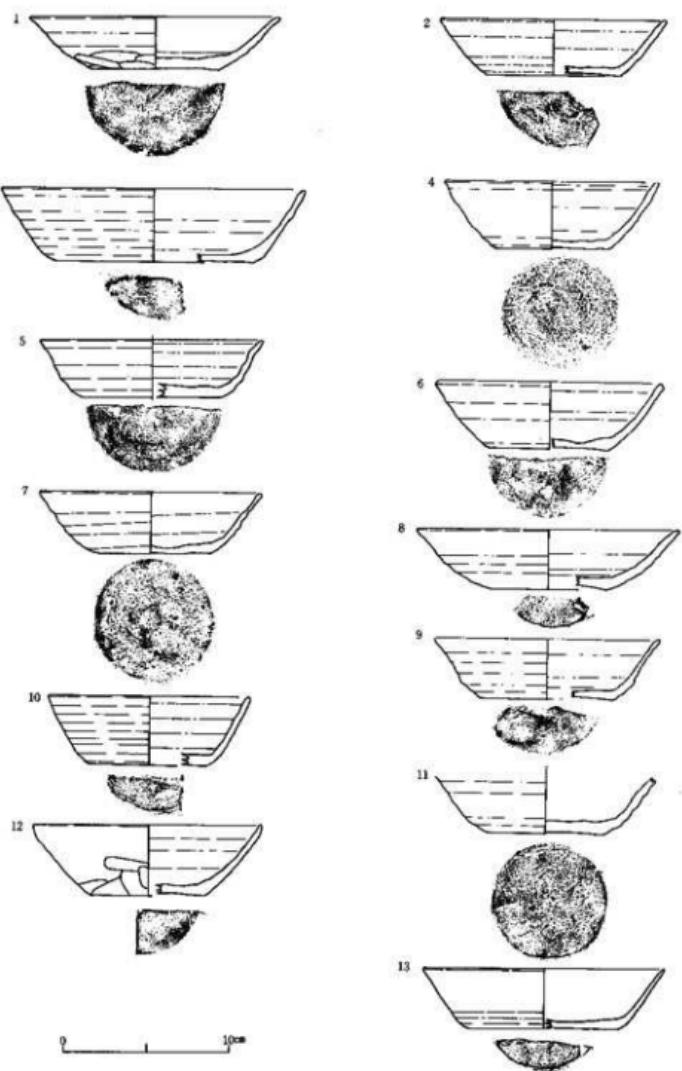
图版40 C 地区出土遗物(14)



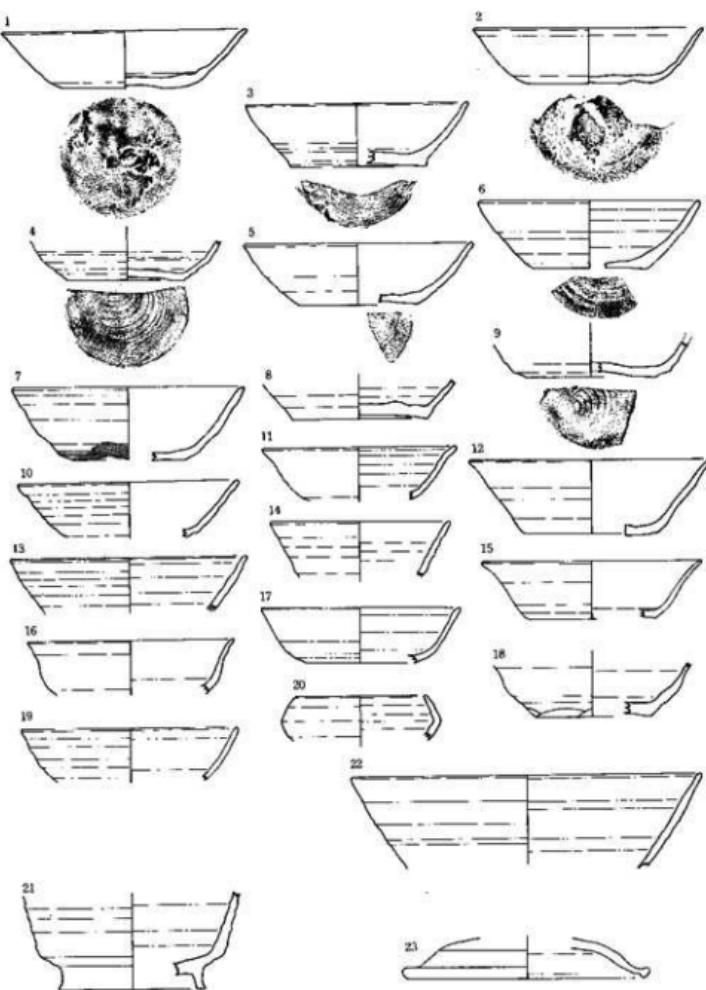
图版41 C 地区出土遗物(1)



图版42 C 地区出土遗物(16)

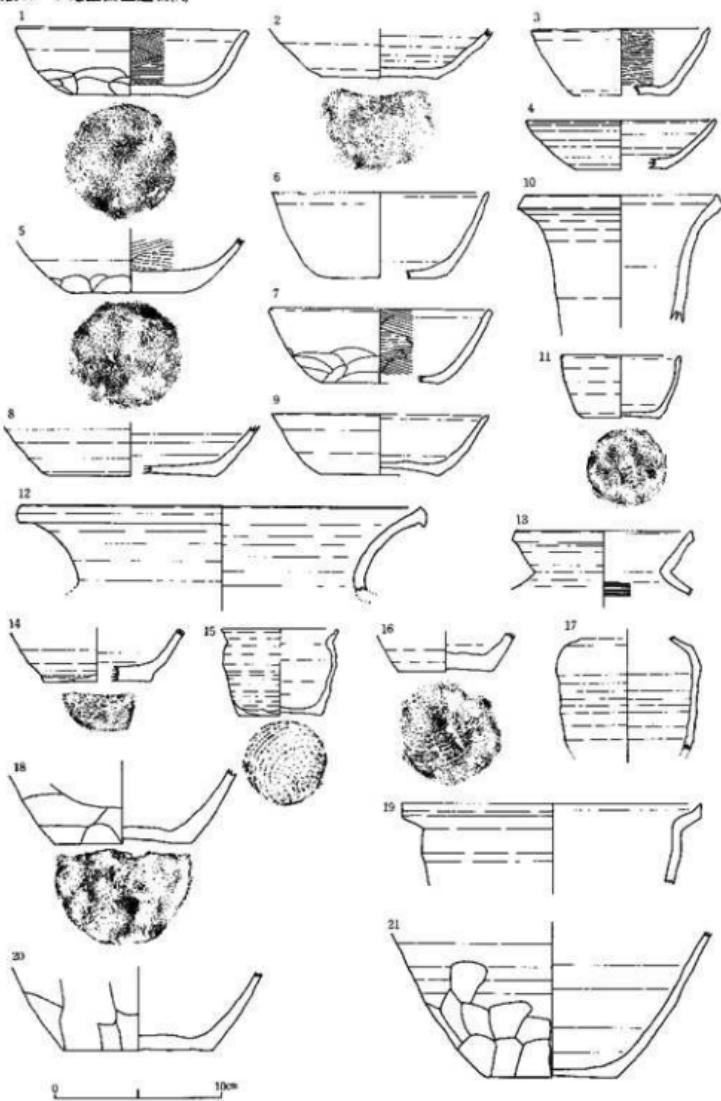


図版43 C地区出土遺物(1)

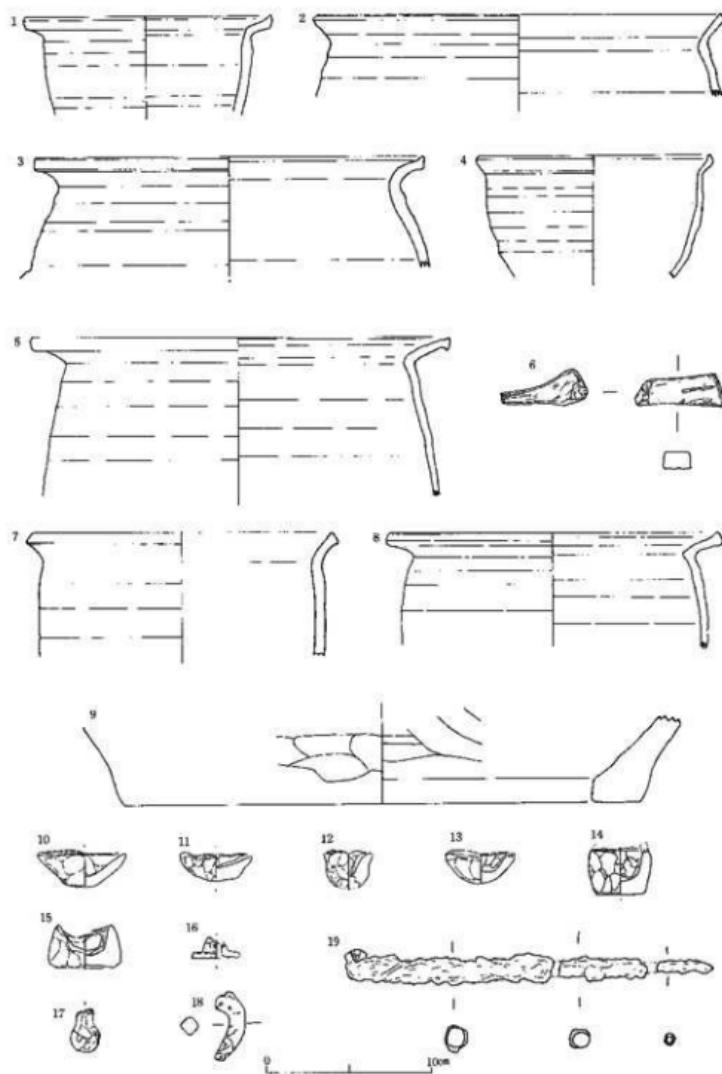


0 1 10cm

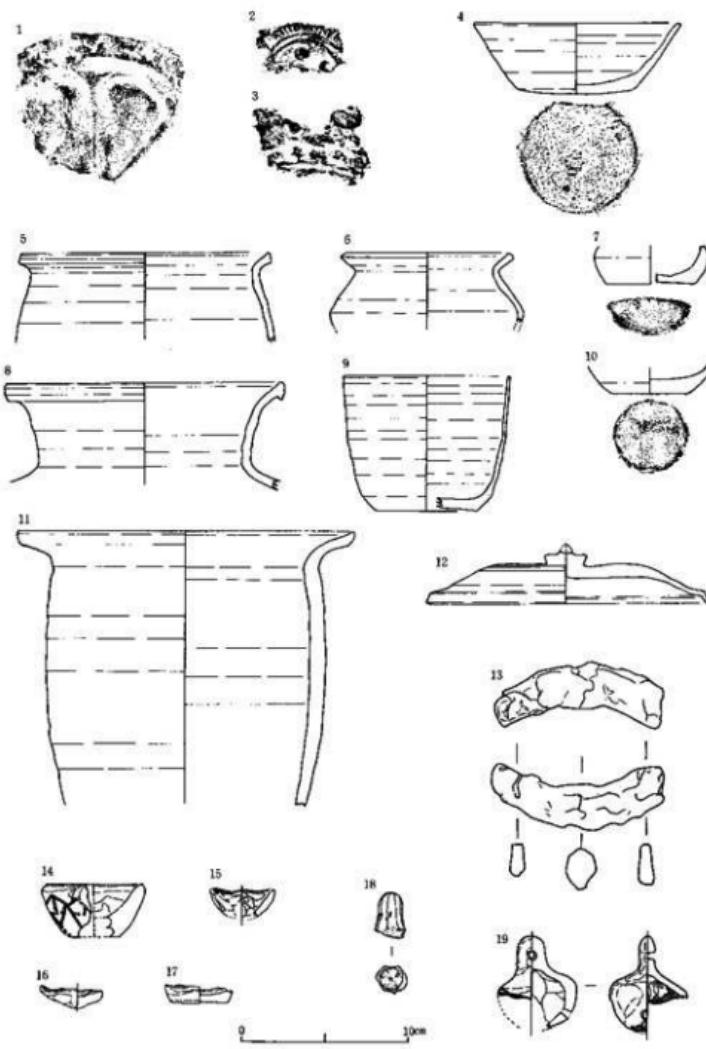
图版44 C 地区出土遗物(8)



图版45 C 地区出土遗物(19)

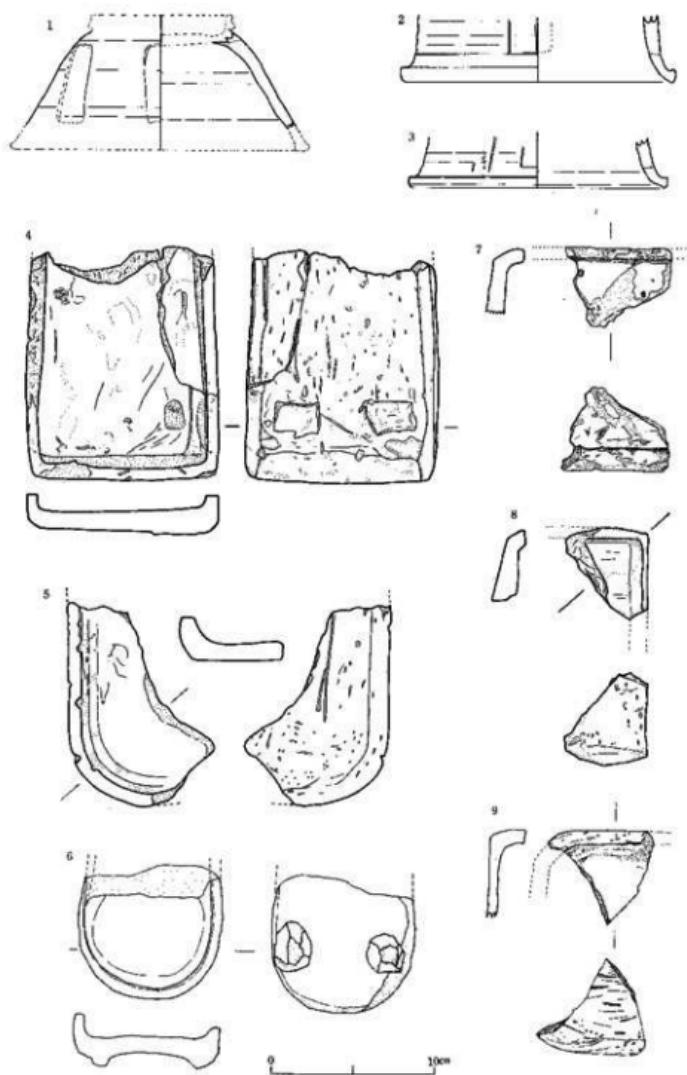


图版46 C 地区出土遗物20

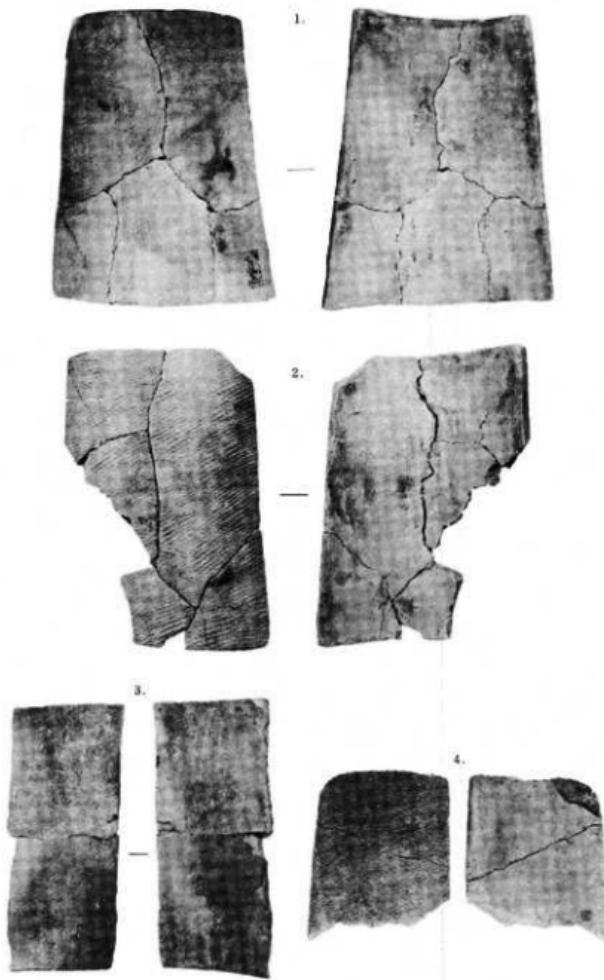


0 1 10cm

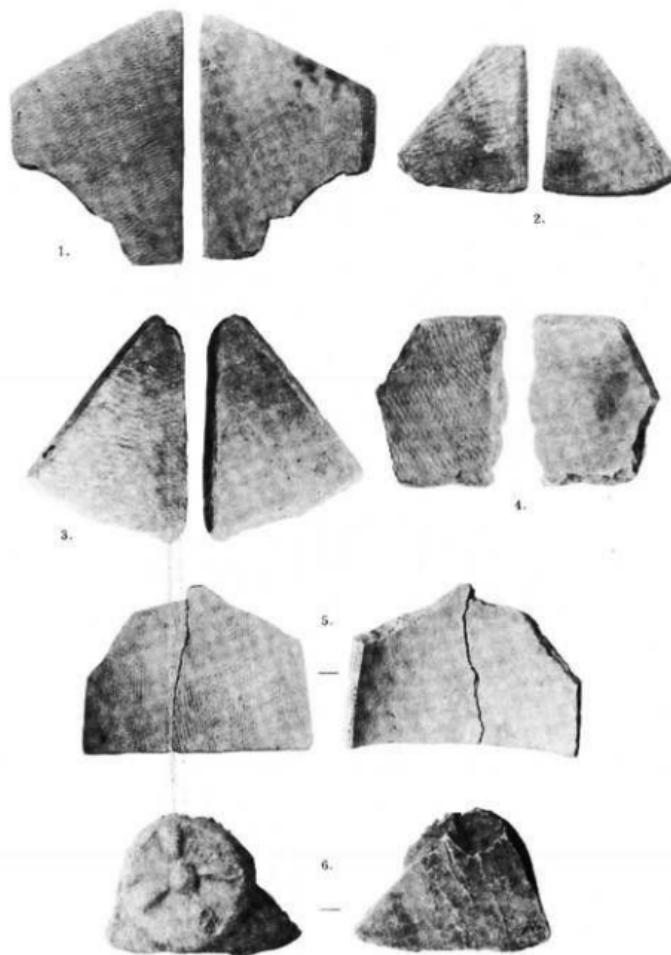
图版47 C地区出土遗物(2)



写真図版 I



写真図版 2



写真図版 3

1.



2.



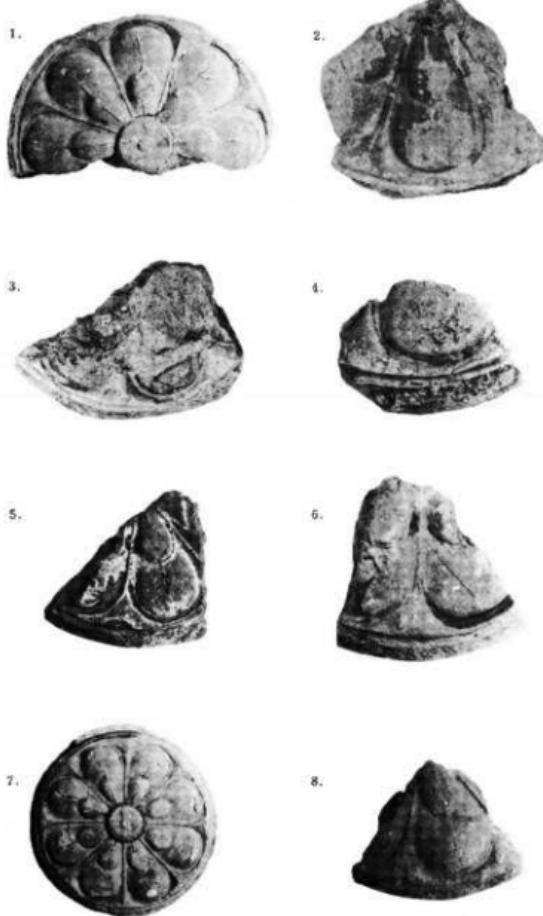
3.



4.



写真図版 4



写真図版 5

1.



2.



3.



4.



5.



6.



7.

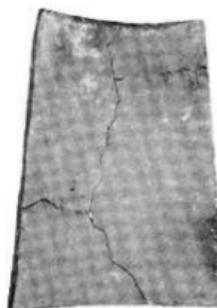


8.

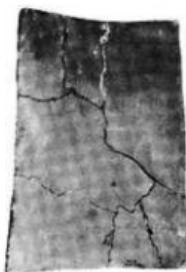


写真図版 6

1.



2.

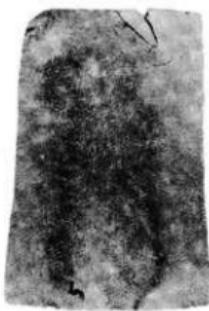


3.

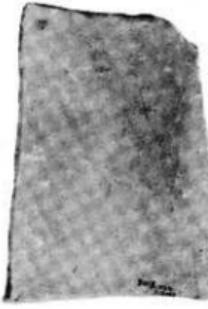


写真図版 7

1.



2.

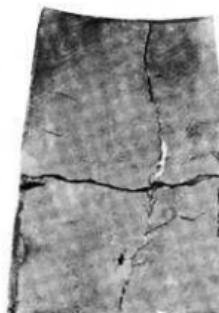


3.

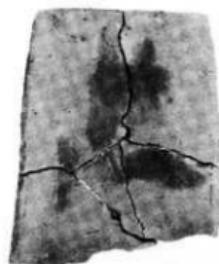
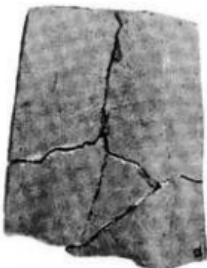


写真図版 8

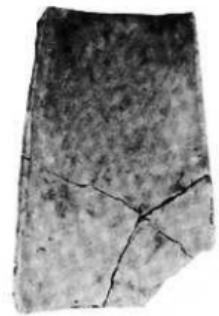
1.



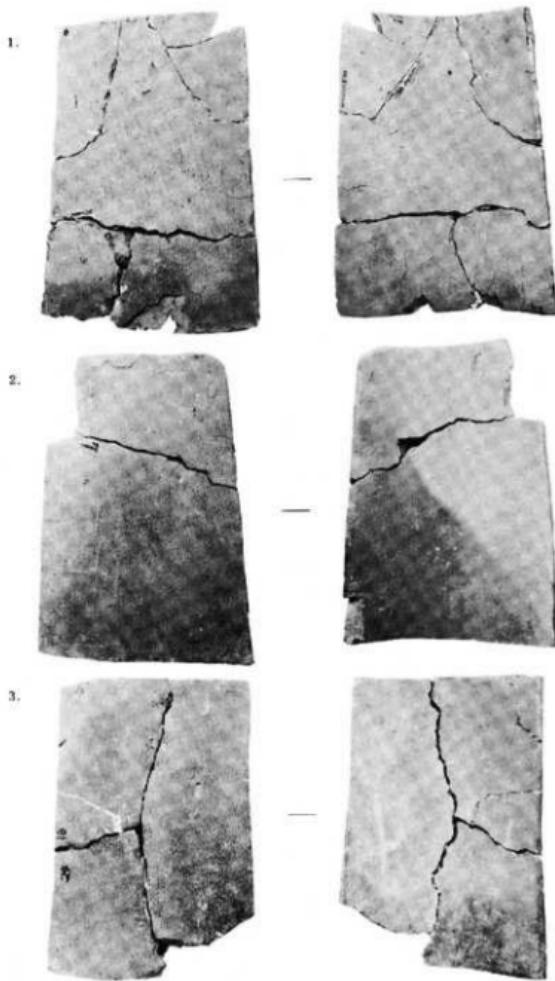
2.



3.

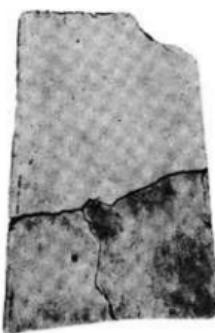


写真図版 9

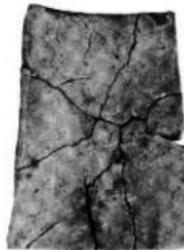


写真図版10

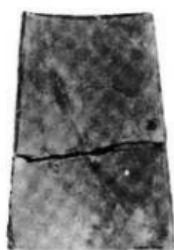
1.



2.

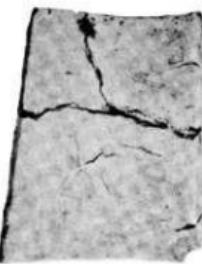


3.



写真図版II

1.



2.



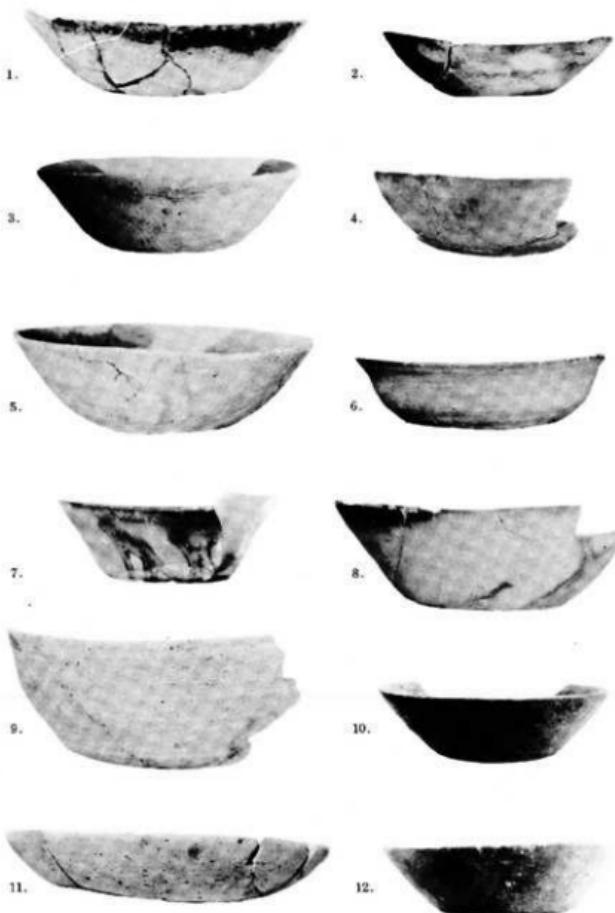
3.



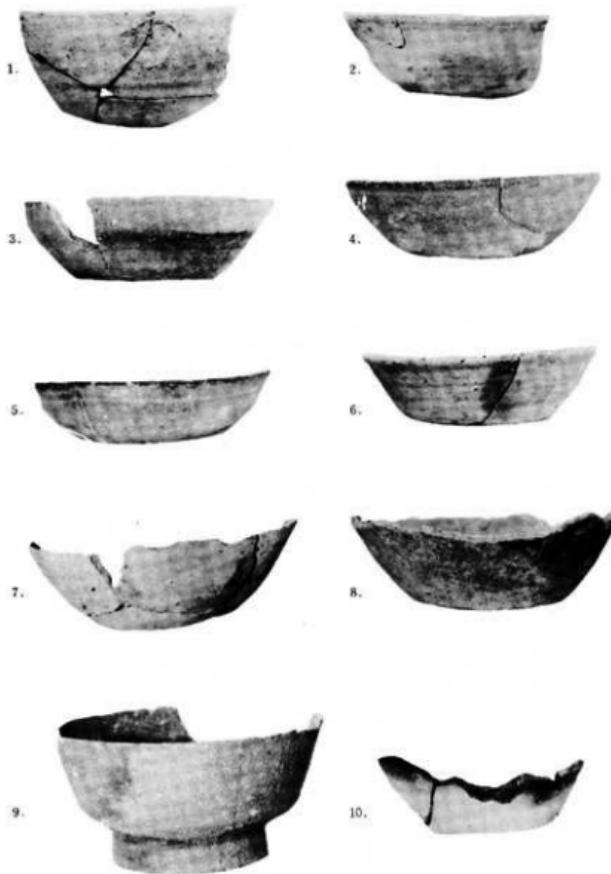
4.



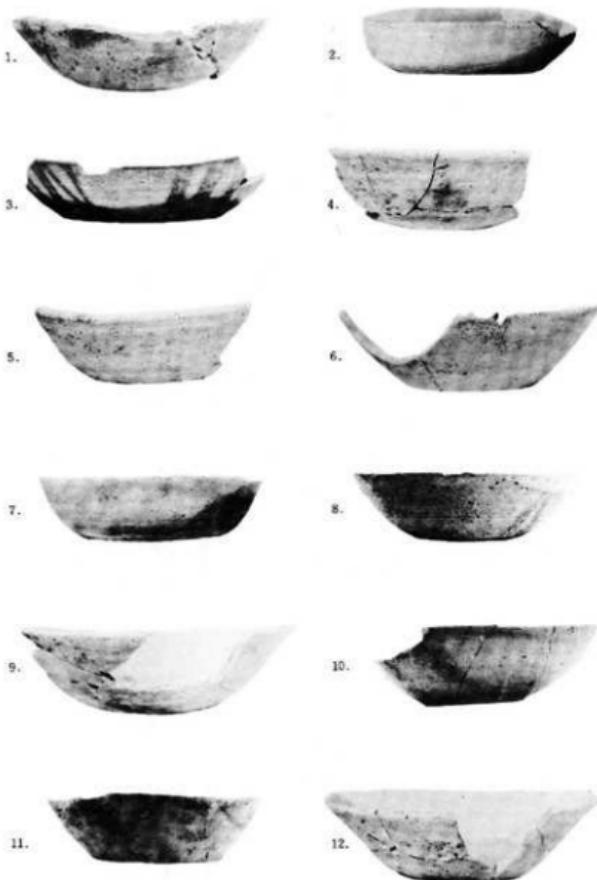
写真図版12



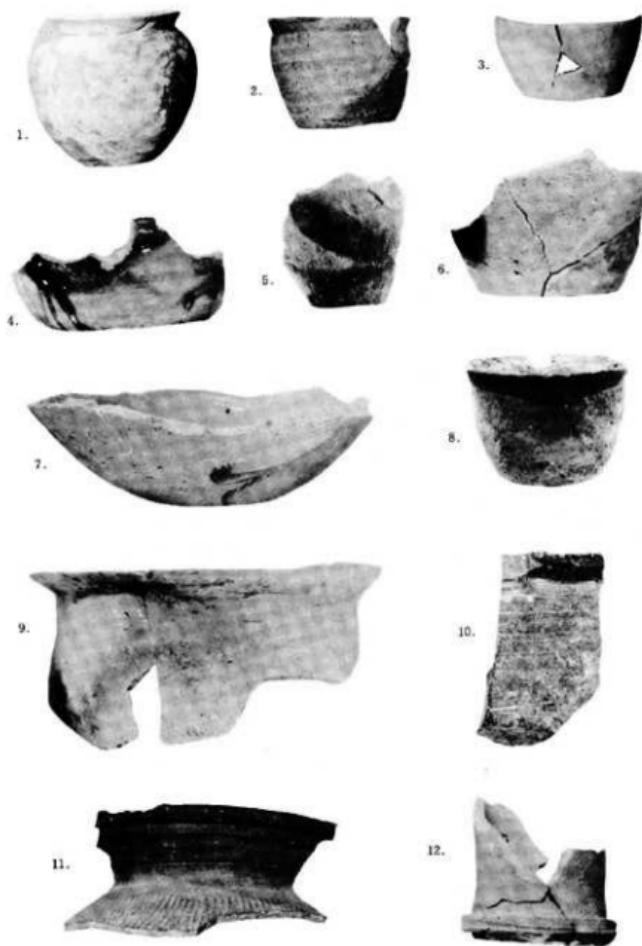
写真図版13



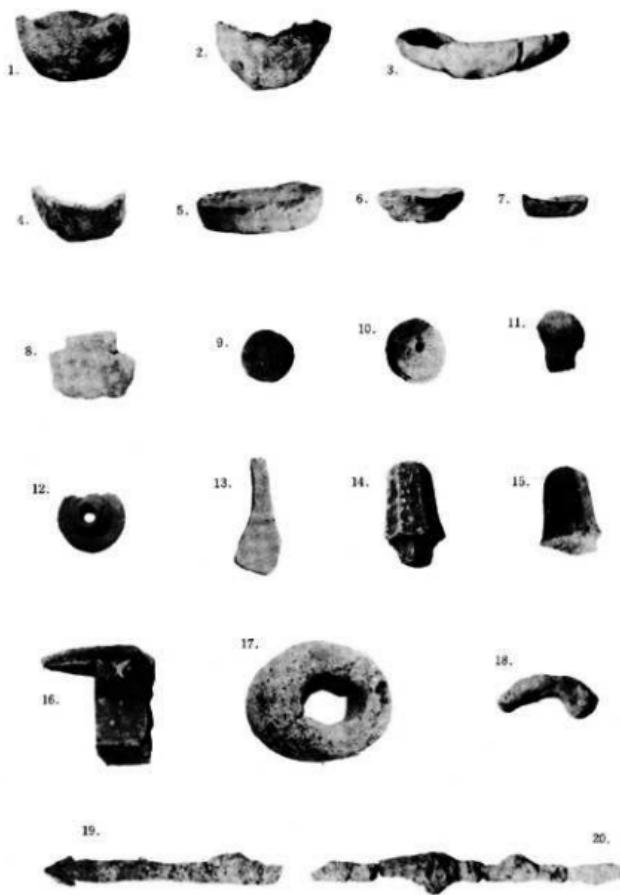
写真図版14



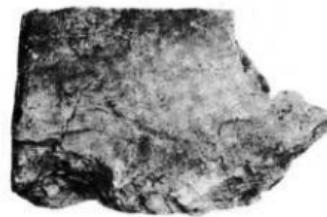
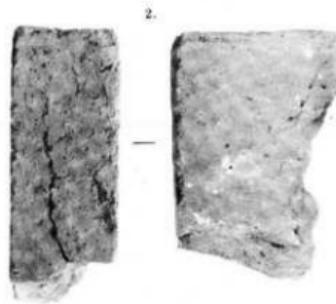
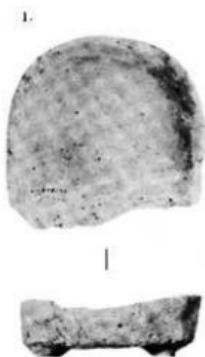
写真図版15

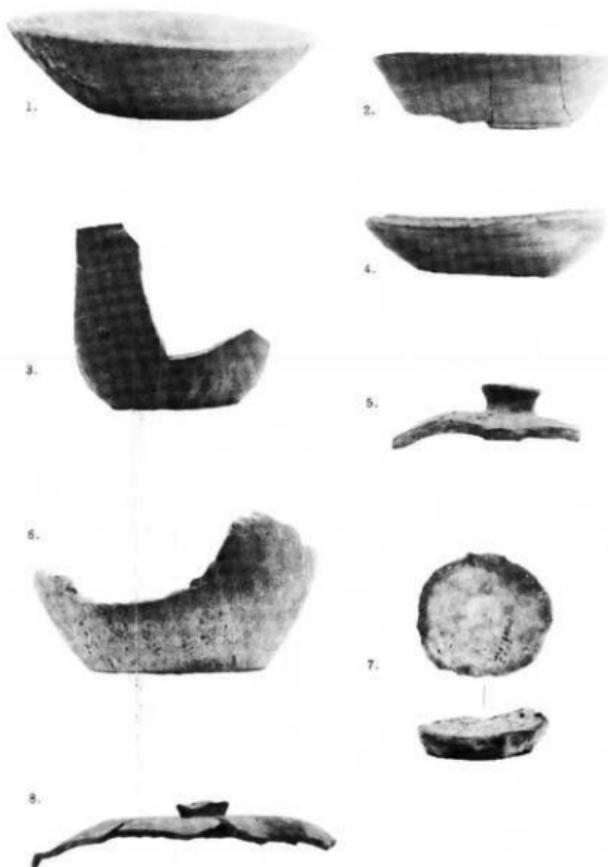


写真図版16

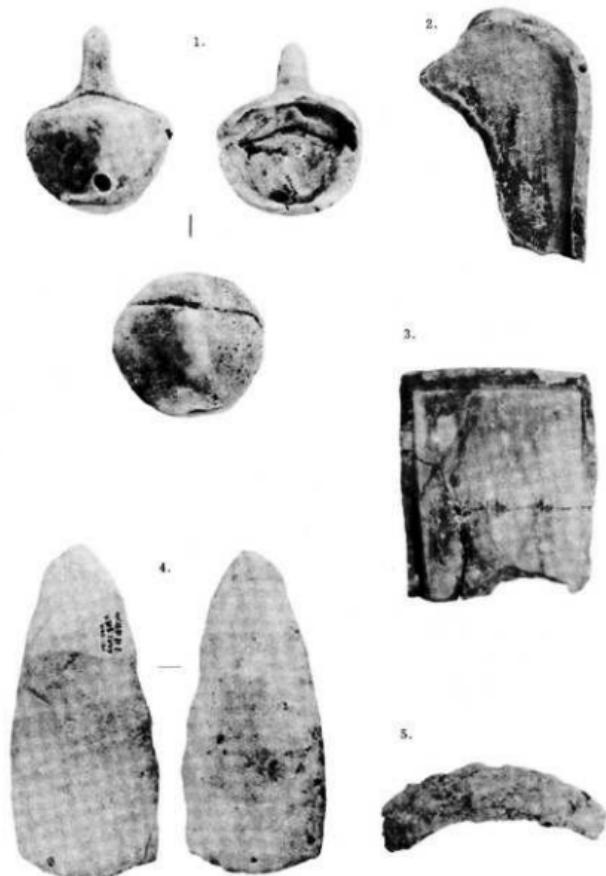


写真図版17





写真図版19



A地区出土遺物観察表

図版番号	種類	遺構層	特徴	備考
1-1	平瓦	第1窓跡 No.4	凸面 繩目印、縦方向 凹面 布目6×6、系切側、大部分スリケシ 焼成堅い、色調赤褐色、胎土砂粒含む。	写真図版1-1
1-2	平瓦	第1窓跡 ヘラ吉文字瓦 No.628	凸面 繩目印、縦方向、一部スリケシ コーナー端に「帆比(?)」のヘラ書き 凹面 全面スリケシ 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む	写真図版1-3
1-3	平瓦	第1窓跡 No.30	凸面 繩目印、斜方向 凹面 布目7×6、大部分スリケシ 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む	写真図版1-2
1-4	道具瓦	第1窓跡 No.1	凸面 繩目印、斜方向 凹面 布目6×5、幅が狭く楕斗瓦か。 焼成堅い、色調明赤灰色、胎土小石含む	写真図版1-4
1-5	道具瓦	第1窓跡 No.21	凸面 繩目印斜方向、端を切りとっている。 凹面 布目8×6、楕斗瓦か 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む	
1-6	平瓦	第1窓跡 No.22	凸面 繩目印斜方向、一部斜方向に布目底 凹面 布目6×5、ヘラケズリ既存り 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む	
1-7	平瓦	第1窓跡 No.11	凸面 繩目印斜方向、繩日の上に一部布目底 凹面 布目スリケシ 焼成堅い、色調によい褐色、胎土砂粒含む	
1-8	道具瓦	第1窓跡 No.12	凸面 繩目印斜方向、端を切りとっている。 凹面 布目大部分スリケシ 焼成堅い、色調によい褐色、胎土砂粒含む	写真図版2-4
1-9	道具瓦	第1窓跡 No.179	凸面 繩目印斜方向、端を切りとっている。 凹面 布目大部分スリケシ 焼成ややもろい、色調淡黄褐色、胎土雲母・小石含む。	
2-1	道具瓦	第1窓跡 No.5	凸面 繩目印斜方向、一部スリケシ・ナデ 凹面 布目6×5、一部スリケシ、系切痕 焼成堅い、色調淡赤褐色、胎土砂粒含む。	
2-2	平瓦	第1窓跡 No.13	凸面 繩目印斜方向 凹面 布目7×6、全面スリケシ、わずかに右側有り。 焼成やもろい、色調淡赤褐色、胎土雲母含む。	写真図版2-5
2-3	平瓦	第1窓跡 No.10	凸面 繩目印斜方向 凹面 布目6×7 焼成堅い、色調によい褐色、胎土少々砂含む。	
2-4	平瓦	第1窓跡 No.2	凸面 繩目印斜方向、一部スリケシまたはナデ 凹面 布目6×5、一部スリケシ、布目の他に斜線 焼成堅い、色調によい褐色、胎土砂粒含む。	
2-5	道具瓦	第1窓跡 No.150	凸面 繩目印斜方向、一部布目底6×7 凹面 布目5×5、一部スリケシ、楕斗瓦か 焼成堅い、色調淡褐色、胎土砂粒含む。	
2-6	道具瓦	第1窓跡 No.56	凸面 繩目印斜方向、端を切りとっている。 凹面 全面スリケシ布目見えず、楕斗瓦か 焼成やもろい、色調灰赤褐色、胎土雲母含む。	

閉版番号	種類	直構	特徴	備考
2-7	平瓦	第1直脚	凸面 織目叩打方向 凹面 布日全面スリケシ 焼成もらい、色調によい橙色、胎土雲母含む。 No.41	
2-8	道具瓦	第1直脚	凸面 織目叩打方向、端を切りとつてある。 凹面 布日全面スリケシ 焼成もらい、色調によい橙色、胎土雲母含む。 No.34	
2-9	道具瓦	第1窓脚	凸面 織目叩打方向、端を切りとつてある。 凹面 布日6×5、系切底あり、熨斗瓦 焼成堅い、色調淡褐色、胎土砂粒含む。 No.3	写真図版2-1
2-10	道具瓦	第1窓脚	凸面 織目叩打方向、端を切りとつてある。 凹面 布日スリケシ、熨斗瓦か 焼成堅い、色調によい橙色、胎土砂粒含む。 No.29	
2-11	道具瓦	第1窓脚	凸面 織目叩打方向、一部布日痕あり。 凹面 布日スリケシ 焼成堅い、色調赤褐色、胎土砂粒含む。 No.26	写真図版2-2
2-12	道具瓦	第1窓脚	凸面 織目叩打方向、端を切りとつてある。 凹面 布日スリケシ、ヘラケズリ痕あり。 焼成堅い、色調淡赤褐色、胎土砂粒含む。 No.23	写真図版2-3
2-13	道具瓦	第1窓脚	凸面 織目叩打方向交叉、端を切りとつてある。 凹面 布日6×6、スリケシ、熨斗瓦か 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒多し。 No.24	
3-1	軒丸瓦	A-II b11 12脚	伝文達草文。中房の蓮子の配置は1+4。 No.682	写真図版5-3
3-2	軒丸瓦	A-II b22 No.22	軒弁達草文。蓋弁の大きさは、No.682と同様。 焼成堅い、色調灰白色、胎土鐵密	
3-3	道具瓦	A地区 沢表模	蓋弁達草文が、中房上の蓮子は1+4で中央が円形、周囲が楕円形。 No.676	写真図版2-6
3-4	軒丸瓦	A-I No.693	軒弁達草文、周分が觀察できる。 焼成ややもらい、色調によい黃褐色、胎土石英小石粒含む。	
3-5	碗 風字碗	A-II b9 5脚 No.1	全体ケズリによって調整済は研磨 二脚か。 焼成堅い、色調灰色、胎土鐵密	
3-6	碗	A-II b8 風字碗 3脚	全体ケズリによって調整、海は研磨 焼成堅い、色調暗緑灰、胎土鐵密	
3-7	須恵器	A-II b8 3層 No.6	口縁外反、体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り。 回転ヘラ調整、火だすきあり。 焼成堅い、色調褐灰色、胎土砂粒含む。	
3-8	須恵器	A-II b8 3層 No.11	口縁外反、体部ロクロナデ、底部回転ヘラ切り。 回転ヘラ調整 焼成堅い、色調灰白色、胎土石英砂粒含む。	
4-1	須恵器	A-II b8 6割上面 No.16	口縁外反、体部ロクロナデ、底部切り離し不明。 手持ヘラケズリ調整、内面外面に黒跡あり。 焼成堅い、色調によい褐色、胎土砂粒含む。 No.5複合	
4-2	須恵器	A-II b8 3層 No.13	口縁外反、上下に縫をもつりかえし端部となす。 体部ロクロナデ、体部下端より底部回転を手持ヘラケズリ。 底部静止永切り 焼成堅い、色調橙色、一部黒褐色、胎土砂粒・石英を若干含む。	

回数 番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
4-3	須恵器 环 No314	A-II 8 3層上面	口縁外反、体部ロクロナデ、底部凹軸ヘラカリ。 黒はんが、内面、外面に見られる。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
4-4	須恵器 环 No.8	A-II 8 3層上面	口縁外反し立上る。体部ロクロナデ、底部凹軸ヘラ切り調整なし、ややあげ底。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
4-5	須恵器 环 No152	A-I b9 6層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部手持ヘラケズリか。 焼成堅い。色調灰色。胎土1mm程の小石を含む。	
4-6	A-II 6 环 No291	A-II 6 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。火だすき痕あり。 内面・外面とも焼滅。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土小さい砂粒を多量に含む。	
4-7	須恵器 环 No240	A-II 8 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土小石を含むが均質。	
4-8	須恵器 环 No130	A-II 8 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調によい黄橙。胎土砂粒を多量に含む。	
4-9	須恵器 环 No292	A-II 6	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調灰色。胎土少井砂粒を含むが均質。	
4-10	須恵器 环 No239	A-II 8 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 内面・外面に黒はんあり。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土0.1mmの小砂を含む。	
4-11	須恵器 环 No208	A-II 8 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土1mm程の小石粒を含む。	
4-12	須恵器 环 No75	A-II 2 8層	口縁外反。体部長く、ロクロナデ。底部不明、あるいは高台が付くものか。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土砂粒わずかに含む。	
4-13	須恵器 小形壺 No234	A-II 8 3層上面	口縁不明。体部ロクロナデ、内部凹凸がはげしい。 底部静止糸切調整なし。 焼成堅い。色調灰白色。胎土1mm以下砂粒含む。	
4-14	須恵器 長颈甕 No114	A-II 3 七	口縁外反し端部に内反し、下に縫をもつおりかえし状の口縁をなす。底部にロクロナデ。長頸壺の頸部である。 焼成堅い。色調暗青灰色。1.5mm以下の石英粒多量に含む。	
4-15	須恵器 壺 No.9	A-II 1 4層	口縁部不明。天井部端ロクロナデ、中央へラケズリ。 擬宝珠のつまみがつく。 焼成堅い。色調体部灰白色、つまみ灰白色。胎土石英・砂粒を多量に含む。	
4-16	須恵器 壺 No12	A-II 8 6層	口縁大きく外反してかるいおりかえし口縁をなす。 体部外側ロクロナデ、内側かるいロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調淡黄橙色。胎土1mm以下砂粒が多量に含む。	
4-17	須恵器 甕	A-II 6	口縁外反し、端部は直立しかるいおりかえし。体部ロクロナデ。 外面に自然軸がみられる。 焼成堅い。色調外側黒色、内側灰白色。胎土0.7mm程の砂粒を多量に含む。	
5-1	須恵器 甕	A-II 8 5層	口縁外反し、上下に縫を持つおりかえし口縁をなす。 口縁部に自然軸がみられる。体部ロクロナデ。底部不明。	

図版番号	種類 遺物番号	造構層	特徴	備考
5-1	須恵器 No.128		焼成堅い。色調灰褐色。粘土大粒の砂粒、多量の石英砂粒を多量に含む。	
5-2	須恵器 甕 No.174	A-II 8 5層	口縁外反し、にぶい棱をもつおりかえし口縁をなす。 体部内外共にロクロナデ。底部不明。	
5-3	須恵器 甕 No.76	A-II 2 8層	焼成堅い。色調黒褐色。粘土0.7mm程の砂粒を多量に含む。	
5-4	須恵器 甕 No.232	A-II 8 5層	口縁外反し、端部を内側に折り返している。 体部まるみをおびる。内外共にロクロナデ。底部不明 焼成堅い。色調外側暗灰色、内側灰色、断面赤色。粘土砂粒多量に含む。	
5-5	須恵器 甕 No.67	A-II 6	口縁外反し、上下に棱を持つおりかえし口縁をなす。 体部はまるみをおび、内外共にロクロナデ。	
5-6	土師器 甕 No.111	A-II 8 5層	口縁外反し、端部はかるいおりかえしをなす。 体部内外共に磨滅。 焼成やや堅い。色調黄褐色。粘土1mm程の小石粒を含む。	
5-7	土師器 甕 No.121	A-II 8 5層	口縁大きく外反し、端部がたちあがる。 体部まるみをおびた長甕。底部不明。 焼成もろい。色調洗黄褐色。粘土1mm程の小石粒を含む。	
5-8	土師器 甕 No.28	A-II b9	口縁不明。体部ロクロナデ。底部丸転へら切りか。 体部から底部に火だすきらしきものあり。 焼成堅い。色調にぶい黄褐色。粘土1mm程の小石粒を含む。	
5-9	土師器 甕 No.288	A-I 6	口縁外反し、かるいおりかえしをなす。 体部内外共にロクロナデ。 焼成もろい。色調浅黄褐色。粘土1mm以下の石英粒を含む。	

B地区出土遺物観察表

図版番号	種類 遺物番号	造構層	特徴	備考
6-1	平瓦 No.362	第2窓跡 2層	凸面 繩目叩斜方向 凹面 布目5×6、大部分スリケン 焼成堅い。色調暗灰黄色。粘土砂粒を含む。	
6-2	平瓦 No.500	第2窓跡 2層	凸面 繩目叩継方向 凹面 布目7×5、糸切痕 焼成堅い。色調灰白色。粘土石英小石粒を含む。	
6-3	平瓦 No.338	第2窓跡 床面直上	凸面 繩目叩斜方向 凹面 全面スリケン 焼成もろい。色調暗灰色。粘土小石砂粒を含む。	
6-4	平瓦 No.353	第2窓跡 2層	凸面 繩目叩斜方向 凹面 布目6×5、スリケン、糸切痕 焼成堅い。色調明褐色。粘土砂粒を含む。	
6-5	平瓦 No.504	第2窓跡 2層	凸面 繩目叩継方向 凹面 布目7×5、大部分スリケン、糸切痕 焼成堅い。色調にぶい赤褐色。粘土砂粒を含む。	
6-6	平瓦	第2窓跡 床面直上	凸面 繩目叩斜方向、糸切痕 凹面 布目7×7、大部分スリケン、糸切痕	

因版番号	種類	遺物番号	層	特徴	備考
6-6		No.371		焼成堅い。色調によい黄褐色。胎土雲母を含む。	
6-7	平瓦	No.560	第2窯跡 床面直上	凸面 繩目印縦方向、糸切痕。 凹面 布目7×7、一部スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調によい黄褐色。胎土小石粒を含む。	
6-8	平瓦 文字瓦	No.639	第2窯跡 3層	凸面 繩目印縦方向。叩きをかるくナデしている。 凹面 布目9×8、大部分スリケシ、糸切痕。 「物」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	
6-9	平瓦 文字瓦	No.634	第2窯跡 2層	凸面 繩目印斜方向、叩きをナデしている。 凹面 日6×7、スリケシ、糸切痕。 「行」?の刻印有り。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土小石粒を含む。	
7-1	平瓦	No.659	第3窯跡 2層	凸面 繩目印縦方向、一部斜、部分的にナデ。 凹面 布目大部分スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒少々含む。	写真因版3-2
7-2	平瓦	No.612	第3窯跡 1層	凸面 繩目印縦方向、一部ナデ。 凹面 布目スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰黄色。胎土小石粒を含む。	
7-3	平瓦	No.556	第3窯跡 2層	凸面 繩目印縦方向、一部ナデあり。 布目8×6、かるいスリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調橙色。胎土雲母砂粒を含む。	
7-4	平瓦	No.407	第3窯跡 2層	凸面 繩目印縦方向、ナデによるスリケシ、糸切痕。 凹面 布目全面スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	
7-5	平瓦 文字瓦	No.635	第3窯跡 1層	凸面 繩目印縦方向、ナデによりスリケシ。 凹面 布目7×7、スリケシ。 「丸」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	
7-6	平瓦 文字瓦	No.698	第3窯跡 1層	凸面 繩目印、大部分ナデスリケシ。 凹面 布目全面スリケシ。 「丸」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土は砂粒を含む。	
7-7	平瓦 文字瓦	No.631	第3窯跡 2層	凸面 繩目印縦方向、糸切痕。 凹面 布目6×7、スリケシ、糸切痕。 「丸」の刻印有り。 焼成堅い。色調によい橙。胎土小石粒を含む。	
7-8	平瓦	No.477	第3窯跡 床面	凸面 繩目印縦方向、部分的に黒鉛。 凹面 布目全面スリケシ。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土小石を含む。	
7-9	平瓦	No.503	第3窯跡 2層	凸面 叩きを全面スリケシ。 凹面 布目全面スリケシ。 焼成堅い。色調暗赤褐色。胎土小石を含む。	
8-1	平瓦	No.624	第4窯跡 梵口	凸面 繩目印縦方向。 凹面 布目8×7、かるいスリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
8-2	平瓦 文字瓦	No.634	第4窯跡 3層	凸面 繩目印縦方向。 凹面 布目6×6、一部ケズリ。 「田」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	

図版番号	種類	遺構	特徴	参考
8-3	平瓦	第4窓跡 3層 No513	凸面 隅日印縦方向。 凹面 布目スリケン、系切痕。 焼成堅い。色調にない橙色。粘土砂粒を含む。	
8-4	平瓦 文字瓦	第4窓跡 3層 No538	凸面 隅日印縦方向。 凹面 布目6×6、スリケン。 「物」の割印有り。 焼成堅い。色調灰黄色。粘土小石を含む。	
8-5	平瓦	第4窓跡 3層 No537	凸面 隅日印縦方向ナデ。 凹面 布目7×6、スリケン、系切痕。 焼成堅い。色調灰色。粘土砂粒を含む。	
8-6	平瓦	第4窓跡 3層 No586	凸面 隅日印斜方向、じるしあり。 凹面 布目スリケン、系切痕。 焼成堅い。色調灰白色。粘土小石を含む。	
8-7	平瓦	第4窓跡 3層 No547	凸面 隅日印縦方向。 凹面 布目6×6、スリケン。 焼成堅い。色調灰色。粘土小石を若干含む。	
8-8	平瓦	第4窓跡 たき口 No611	凸面 隅日印縦方向ナデ。 凹面 布目4×5、大部分スリケン。 焼成堅い。色調灰黄色。粘土小石を含む。	
8-9	平瓦	第4窓跡 3層 No562	凸面 隅日印斜方向、黒錆一部あり。 凹面 布目6×5、スリケン、黒錆一部あり。 焼成堅い。色調暗灰色。粘土小石を若干含む。	
8-10	平瓦	第4窓跡 3層 No557	凸面 隅日印縦方向、一部ナデ。 凹面 布目7×7、スリケン、系切痕。 焼成堅い。色調灰白色。粘土砂粒を含む。	
9-1	須恵器 环	焼上遺構 2層 No231	口縁かるく内凹みに外反。体部ロクロナデ。底部へラ切り。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調淡黄褐色。胎土1mm以下の砂粒を多く含む。	写真図版14-2
9-2	須恵器 环	焼上遺構 2層 No3	口縁外反非常にうすくなる。体部ロクロナデ。底部凹板へラ切り、手持ちヘラケズリ調整。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土多量の石英粒、砂粒を含む。	写真図版13-7
9-3	須恵器 环	焼上遺構 2層 No232	口縁外反。体部ロクロナデ。底部齊滅。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版14-5
9-4	須恵器 环	焼上遺構 2層 No245	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒混入のためあらい。	写真図版13-6
9-5	須恵器 环	焼上遺構 2層 No167	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。全般的に二次焼成をうけている。 焼成もろい。色調灰白色。胎土0.5mm程の砂粒を含む。	写真図版13-2
9-6	須恵器 环	焼上遺構 2層 No198	口縁外反。体部ロクロナデ。底部下端ケズリかるい縫をなす。 手持ヘラケズリ調整。体部下端をケズリかるい縫をなす。 焼成堅い。色調淡黄褐色。胎土1mm程の砂粒を含む。	写真図版14-12
9-7	須恵器 环	焼上遺構 2層 No233	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。体部下端ケズリかるい縫をなす。 焼成堅い。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版14-9
9-8	須恵器 环	焼上遺構 3層 No249	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。器面の磨擦がはげしい。 焼成もろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版12-1

図版番号	種類	遺構層	特徴	備考
9-9	須恵器	焼土遺構	口縁外反、体部ロクロナデ。底部へラ切か。手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調淡黄橙。胎土1mm程の小石粒を含む。	
		No190 环	1層	
9-10	須恵器	焼土遺構	口縁内湾ざみに外反。体部ロクロナデ。底面切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。表面磨滅。 焼成ややもろい。色調淡茶色。胎土砂粒を含む。	
		No37 环	1層	
9-11	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。。表面磨滅。 焼成もろい。色調淡黄橙。胎土砂粒を多量に含む。	
		No205 环	2層	
9-12	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 表面磨滅。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
		No139 环	1層	
10-1	須恵器	焼土遺構	口縁内湾ざみに外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調淡黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	写真図版12-9
		No254 环	5層	
10-2	須恵器	焼土遺構	口縁内湾ざみに外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成ややもろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
		No93 环	2層	
10-3	須恵器	焼土遺構	口縁内湾ざみに外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成堅い。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。	
		No119 环	2層	
10-4	須恵器	焼土遺構	口縁内湾ざみに外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調淡黄褐色。胎土0.5mm以下の砂粒を含む。	
		No203 环	3層	
10-5	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
		No260 环	2層	
10-6	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。ヘラキズあり。 底部不明。再焼成をうけている。	
		No114 环	3層	
10-7	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。底部削軋へラ切り。 手持ちヘラケズリ。 焼成ややもろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
		No200 环	2層	
10-8	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成ややもろい。色調淡褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
		No273 环	2層	
10-9	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 表面磨滅。再焼成をうけている。 焼成もろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
		No132 环	3層	
10-10	須恵器	焼土遺構	口縁内湾ざみに外反。体部ロクロナデ。底部も切りはなし不明。写真図版13-1 手持ちヘラケズリ。 焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
		No239 环	2層	
10-11	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成もろい。色調淡褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
		No296 环	2層	
10-12	須恵器	焼土遺構	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。 焼成ややもろい。色調淡黄褐色。胎土1mm程の小石を含む。	No261検合
		No243 环	2層	
10-13	須恵器	焼土遺構	口縁内湾ざみに外反。体部ロクロナデ。底部不明。	

図版番号	種類 遺物番号	遺構層	特徴	備考
10-13	环 No.94	2層	焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-1	須恵器 环 No.204	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。	
11-2	須恵器 环 No.235	焼土遺構 1層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-3	須恵器 环 No.116	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 黒はんあり。	
11-4	須恵器 环 No.228	焼土遺構 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-5	須恵器 环 No.234	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	
11-6	須恵器 环 No.215	焼土遺構 2層	焼成ややもろい。色調淡灰色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-7	須恵器 环 No.246	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	
11-8	須恵器 环 No.95	焼土遺構 2層	焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-9	須恵器 环 No.220	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。粘土紐状のものが見られる。	
11-10	須恵器 环 No.237	焼土遺構 2層	底部不明。再焼成をうけている。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-11	須恵器 环 No.323	焼土遺構 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。つみあげ状の痕跡あり。	
11-12	須恵器 环 No.157	焼土遺構 2層	底部不明。	
11-13	須恵器 环 No.224	焼土遺構 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-14	須恵器 环 No.241	焼土遺構 2層	焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-15	須恵器 环	焼土遺構 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土石英粒を含むが密。	
11-16	須恵器 环	焼土遺構 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土石英粒を含むが密。	

国宝 番号	種類 遺物番号	遺構 層	特 徴	備 考
11-16	No138		焼成ややもろい。色調にぶい褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
11-17	須恵器 环 No42	焼土造構 3層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	
11-18	須恵器 环 No256	焼土造構 2層	焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。 口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	
11-19	須恵器 环 No115	焼土造構 2層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含むが密。 口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 再焼成をうけている。	
11-20	土師器 环 No266	焼土造構 2層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。 口縁内湾みに外反。体部ロクロナデ。底部不明。 穿孔は焼成前にくりぬかれたもの。径5~5.4cm。	
11-21	土師器 环 No334	焼土造構	口縁外反。体部ロクロナデ。一部ケズリ。底部不明。 小窓灯明風か。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を含むが均質。	
12-1	須恵器 环 No139	焼土造構 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底盤へラケツ。 手持ちヘラケツリ調整。一部ナデ。	
12-2	須恵器 环 No186	焼土造構 3層	焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含むが密。 口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケツリ。再焼成をうけている。	
12-3	須恵器 环 No173	焼土造構 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。 口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケツリ調整。体部下端ヘラケツリ。	
12-4	須恵器 环 No201	焼土造構 2層	焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。 口縁不明。体部ロクロナデ。下端ヘラケツリ。 底部回転糸切りのち縫隙。手持ちヘラケツリ調整。	
12-5	須恵器 环 No141	焼土造構 2層	焼成堅い。色調灰白色。底盤切りはなし不明。 底部下端より底部にかけて段あり。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
12-6	須恵器 环 No123	焼土造構 2層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を多量に含む。 口縁不明。体部ロクロナデ。下端ヘラケツリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケツリ調整。	
12-7	須恵器 环 No202	焼土造構 2層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土小石粒を含む。 口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケツリ。	
12-8	須恵器 环 No10	焼土造構 1層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。 口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケツリ。	
12-9	須恵器 环 No183	焼土造構 2層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。 口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケツリ。一部ハクリ。	
12-10	須恵器 环 No140	焼土造構 2層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。 口縁不明。体部ロクロナデ。体部下端ヘラケツリ。 底部回転糸切り調整なし。	
12-11	上師器 环 No303	焼土造構 1層	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土均質で密。 口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り、四縁ヘラケツリ。 内面内黒。	

図版番号	種類	遺物番号	遺物名	特徴	備考
12-12	須恵器	焼土造構 环 No154	3層	口縁不明。体部不明。底部回転糸切り。 手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
12-13	須恵器	焼土造構 环 No165	2層	口縁不明。体部下端ケズリ。底部回転糸切り、一部ケズリ調整。 焼成もらい。色調淡黄色。胎土砂粒を含む。	
12-14	須恵器	焼土造構 环 No155	2層	口縁不明。体部不明。底部回転糸切り、一部ヘラケズリ。 焼成堅い。色調淡黄色。	
12-15	須恵器	焼土造構 环 No16	2層	口縁不明。体部下端ケズリ。底部回転糸切り。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調によい橙色。胎土砂粒を多量に含む。	
12-16	須恵器	焼土造構 环 No171	2層	口縁不明。体部不明。底部回転糸切り。一部ケズリ。 焼成もらい。色調浅黄褐色。胎土砂粒を含む。	
12-17	須恵器	焼土造構 环 No104	4層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。墨はんあり。 焼成堅い。色調灰白色。胎土均質で密。	SWベルト
12-18	須恵器	焼土造構 环 No172	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。 焼成もらい。色調浅黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
12-19	須恵器	焼土造構 环 No158	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り調整なし。 焼成もらい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
12-20	須恵器	焼土造構 环 No135	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
13-1	須恵器	焼土造構 环 No133	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調浅黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
13-2	須恵器	焼土造構 环 No152	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
13-3	須恵器	焼土造構 环 No136	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。下端ケズリ。 底部回転糸切り。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調浅黄褐色。胎土砂粒を含む。	
13-4	須恵器	焼土造構 环 No177	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。下端ケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
13-5	須恵器	焼土造構 环 No168	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調浅黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
13-6	須恵器	焼土造構 环 No180	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。下端ケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調浅黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
13-7	須恵器	焼土造構 环 No180	2層	口縁不明。体部ロクロナデ。下端ケズリ。 底部手持ちヘラケズリ調整。 焼成もらい。色調浅黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
13-8	須恵器	焼土造構		口縁不明。体部ロクロナデ。	

回版 番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
13-8	环 No164	2層	底部凹凸へ大切り。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調淡黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
13-9	須恵器 腰 No.9	焼上造構 2層	口縁外反し。上下に棱をもつおりかえし口縁をなす。 体部ロクロナベ。底部不明。 い。色調ひびい褐色。胎土石英粒を多量に含む。	
13-10	須恵器 腰 No.9	焼上造構 2層	口縁外反、端部がたち上る。体部ロクロナベ合底部不明。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土砂粒を多量に含む。	
13-11	須恵器 腰 No.257	焼上造 4層	口縁外反し端部内反。体部ロクロナベ。底部不明。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
13-12	土師器 腰 No.47	焼上造構 4層	口縁外反し、端部に平って内湾。体部ロクロナベと思われるが 激しく黒化され、底部も観察できない。 焼成もろい。色調淡褐色。胎土砂粒を含む。	写真図版15-1
13-13	土師器 腰 No.117	焼上造構 2層	口縁不明。体部ロクロナベ。基部ヘラケズリ。 体部外面に黒はん。 焼成もろい。色調外側灰白色、内側淡黄褐色。胎土石英粒多量 に含む。	
14-1	軒丸瓦 No.667	N 12 5層	重弁蓮華文。8葉の重弁で中房上の蓮子の配置は1+4である。写真図版4-7 蓮子は中央が円形で周囲が棍棒形。蓮子の延長が間弁には一致する。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含むが緻密。	
14-2	軒丸瓦 No.674	N 39 E 12 5層	重弁蓮華文。8葉の重弁で中房上の蓮子は中央に円形のものが 1個みられただけで、蓮子はつぶれている。焼成前につけられた ものである。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含むが緻密。	663, 681, 680, 接合
15-1	軒丸瓦 No.666	N 36 E 12	重弁蓮華文。8葉の重弁、中房上の蓮子は1+4で、中央が円形で周囲が棍棒形。蓮子の延長が間弁には一致する。	666, 668接合
15-2	軒丸瓦 No.677	N 39 E 12 4層	重弁蓮華文。8葉の重弁で中房上の蓮子は前述品にくらべてや や小さい。1+4で中央円形、周囲棍棒形。蓮子の延長は間弁 に一致。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含むが緻密。	
15-3	軒丸瓦 No.665	N 39 E 15 11層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。 焼成堅い。色調灰白色。胎土表面小石粒を含むが緻密。	写真図版4-8
15-4	軒丸瓦 No.664	N 39 E 12 3層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土表面小石粒を含む。	写真図版4-4
16-1	軒丸瓦 No.675	N 39 E 18 4層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。	写真図版5-1
16-2	軒丸瓦 No.683	N 39 E 12 2層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土表面小石粒を含む。	写真図版4-2
16-3	軒丸瓦 No.689	N 39 E 15 2層	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土表面小石粒を含む。	
16-4	軒丸瓦	N 39 E 15	重弁蓮華文。8葉の重弁と思われる。	

図版番号	種類 遺物番号	断面 層	特徴	備考
16-4	No688	3 層	焼成ややもろい。色調灰白色。胎土小石砂粒を含む。	
16-5	軒丸瓦 No663	N 39 E 15 5 層	重介連繩文。8葉の重介と思われる。	写真図版 4-5 681、680、674と接合。
16-6	軒丸瓦 No678	N 39 E 15 11 層	焼成堅い。色調灰白色。胎土小石砂粒を含む。	写真図版 4-6
16-7	軒丸瓦 No681	N 39 E 15 5 層	重介連繩文。8葉の重介と思われる。	663、680、674と接合。
16-8	軒丸瓦 No680	N 39 E 9 3 層	重介連繩文。8葉の重介と思われる。	681、663、674と結合。
17-1	軒平瓦 No647	N 39 E 15 5 層	單弦文。凸面 繩目印縱方向、張同縫あり。 凹面 布目6×8、一部スリケン。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含むが緻密。	写真図版 5-5 648と接合。
17-2	軒平瓦 No661	N 39 E 15 5 層	單弦文。凸面 繩目印縱方向、張同縫あり。 凹面 布目8×8、一部スリケン、糸切痕あり。 焼成ややもろい。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版 5-4
18-1	軒平瓦 No648	N 36 E 12 5 層	單弦文。凸面 繩目印縱方向、張同縫あり。 凹面 布目6×7、一部スリケン、糸切痕あり。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版 5-6 647と接合。
18-2	軒平瓦 No657	N 39 E 15 5 層	單弦文。凸面 繩目印縱方向、張同縫あり。ヘラキズあり。 凹面 布目6×8、一部スリケン。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版 5-8
18-3	軒平瓦 No650	N 39 E 9 3 層	單弦文。凸面 繩目印縱方向、張同縫あり。ヘラキズあり。 凹面 布目8×7、一部スリケン。 焼成ややもろい。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版 5-7
19-1	軒平瓦 No647	N 39 E 15 5 層	註記 17-1、18-1 と同様。	648と接合
20-1	丸瓦 文字瓦 No643	N 39 E 21 5 層	凸面 繩目印スリケン・ナデ、「伊」の刻印有り。 凹面 布目7×8 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
20-2	丸瓦 文字瓦 No642	N 39 E 12 5 層	凸面 繩目印スリケン・ナデ、「伊」?の刻印有り。 凹面 布目8×8 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
20-3	平瓦 文字瓦 No636	N 36 E 21 5 層	凸面 繩目印縱方向 凹面 布目スリケン、「物」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石粒を含む。	
20-4	平瓦 文字瓦 No637	N 36 E 15 6 層	凸面 繩目印縱方向 凹面 布目7×5、大部分スリケン。「矢」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
20-5	丸瓦 文字瓦 No645	N 39 E 9 3 層	凸面 一部繩目印きスリケン。「日」の刻印有り。 凹面 布目7×7 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
20-6	丸瓦 文字瓦	N 39 E 18 4 層	凸面 スリケン、「占」の刻印有り。 凹面 布目7×6	

図版番号	種類 遺物番号	造構層	特徴	備考
20-6	No644		焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母を含む。	
20-7	丸瓦 文字瓦 No632	N 39 E 9 2層	凸面 繩目印スリケシ。 凹面 布目6×7、スリケシ、「行」の刻印有り。 焼成堅い。色調褐色。胎土小石粒を含む。	
21-1	平瓦 文字瓦 No640	N 39 E 15 2層	凸面 繩目印縦方向 凹面 布目7×7、スリケシ、「物」の刻印有り。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
21-2	平瓦 文字瓦 No641	N 39 E 15 6層	凸面 繩目印斜方向。一部ナデ。 凹面 布目6×6、スリケシ、「尺」の刻印有り。糸切痕。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土小石粒を含む。	
21-3	平瓦 No610	N 39 E 15 2層	凸面 繩目印縦方向、長方形の凸出部あり。 凹面 布目スリケシ。 焼成堅い。色調に青い橙色。胎土小石粒を含む。	
22-1	平瓦 文字瓦 No725	N 39 E 9 2層北2層	凸面 繩目印縦方向ナデ。 凹面 布目7×7、スリケシ、「丸」の刻印有り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母砂粒を含む。	
22-2	平瓦 第5號 確認面 No662	第5號 2層	凸面 繩目印縦方向ナデ。 凹面 布目5×4、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母を含むが密。	写真図版3-1
22-3	平瓦 No163	N 39 E 15 2層	凸面 繩目印斜方向。 凹面 布目6×5、スリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石雲母を含む。	
22-4	平瓦 No160	N 39 E 15 6層	凸面 繩目印縦方向。 凹面 布目5×5、スリケシ、糸切痕。 焼成ややもろい。色調灰白色。胎土小石を含む。	
22-5	平瓦 No312	N 36 E 18 4層	凸面 繩目印斜方向ナデ。 凹面 布目7×8、ケズリ。糸切痕。 焼成堅い。色調黄灰白。胎土雲母小石を含む。	
22-6	平瓦 No219	N 36 E 12 2層	凸面 繩目印縦方向ナデ。 凹面 布目スリケシ。 焼成堅い。色調灰色。胎砂粒を含む。	
22-7	平瓦 No625	N 21 E 24 2層	凸面 繩目印縦方向、一部ナデ、黒點あり。 凹面 布目6×5、スリケシ。、沈線による区域あり。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母小石を含む。	
22-8	平瓦 No626	N 36 E 12 7層	凸面 繩目印ナデ。 凹面 布目スリケシ。角をもつ四角あり。 焼成堅い。色調褐色。胎土小石粒を含む。	
22-9	平瓦 No151	N 34 S 15 5層	凸面 繩目印スリケシ、糸切痕。 凹面 布目4×4、スリケシ。 焼成堅い。色調赤褐色。胎土小石を含む。	
23-1	平瓦 No224	N 39 E 15 5層	凸面 繩目印斜方向ナデ。 凹面 布目7×5、スリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母を含む。	
23-2	平瓦 No174	N 33 E 9 3層	凸面 繩目印縦方向ナデ。 凹面 布目7×6、スリケシ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土雲母小石を含む。	
23-3	平瓦 No472	N 39 E 15 5層	凸面 繩目印縦方向ナデ。 凹面 布目5×5、スリケシ。 焼成堅い。色調暗灰色。胎土小石を含む。	

測定番号	種類 遺物番号	造様 解	特徴	備考
23-4	平瓦 No472	N 39 E 15 5層	凸面 鋸目印 凹面 布目10×9、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調灰白色。粘土雲母小石粒を含む。	
23-5	平瓦 No310	N 39 E 18 4層	凸面 鋸目印縦方向ナデ。 凹面 布目8×6、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調灰白色。粘土小石雲母を含む。	
23-6	平瓦 No241	N 39 E 15 4層	凸面 鋸目印縦方向。 凹面 布目8×7、スリケシ。 焼成度ややもろい。色調暗灰色。粘土小石を含む。	
23-7	平瓦 No193	N 39 E 12 2層	凸面 鋸目印縦方向ナデ。 凹面 布目6×7、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調灰白色。粘土雲母砂粒を含む。	
23-8	平瓦 No294	N 39 E 12 2層	凸面 鋸目印縦方向。 凹面 布目6×6、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調灰黑色。粘土砂、小石を多量に含む。	
23-9	平瓦 No214	N 39 E 12 2層	凸面 鋸目印縦方向、糸切痕。 凹面 布目7×8、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調暗灰色。粘土砂粒を含む。	
23-10	平瓦 No614	N 37 E 30 2層	凸面 鋸目印斜方向。 凹面 布目8×5、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調にやい黄褐色。粘土小石粒を含む。	
24-1	平瓦 No496	N 39 E 15 4層	凸面 鋸目印縦方向。 凹面 布目6×5、大部分スリケシ。 焼成度ややもろい。色調灰褐色。粘土小石を含む。	
24-2	平瓦 No188	N 36 K 18 5層	凸面 鋸目印縦方向ナデ。 凹面 布目8×7、スリケシ。 焼成度ややもろい。色調暗灰色。粘土砂粒を含む。	
24-3	平瓦 No482	N 39 E 15 5層	凸面 鋸目印縦方向ナデ、糸切痕。 凹面 布目9×8、スリケシ。 焼成度ややもろい。色調暗褐色。粘土雲母を含む。	
24-4	平瓦 No250	N 36 E 15 3層	凸面 鋸目印スリケシ。墨耗あり。 凹面 布目8×8、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調灰色。粘土雲母を含む。	
28-5	丸瓦 No440	N 36 E 18 5層	凸面 鋸目印一部、全面スリケシ。 凹面 布目ヘラナデ、全体に黒釉あり。 焼成度ややもろい。色調灰白色。粘土小石粒を含む。	
24-6	平瓦 No253	N 39 K 9 3層	凸面 鋸目印縦方向。 凹面 布目6×8、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調灰黑色。粘土雲母小石を含む。	
24-7	平瓦 No576	第5窓跡 1層	凸面 鋸目印縦方向。 凹面 布目6×6、スリケシ、糸切痕。 焼成度ややもろい。色調にやい黄褐色。砂粒を含む。	
24-8	丸瓦 No84	第2窓跡 床面	凸面 鋸目印一部、全面スリケシ。 凹面 布目ナデ。 焼成度ややもろい。色調浅黄褐色。砂粒を含む。	
25-1	須恵器 No34	N 39 E 15 9層	口縁内湾ぎみに外反。体部クロナデ。 底部凹軸糸切。同縁手持ちヘラケズリ。 焼成度ややもろい。色調灰白色。粘土砂粒を含む。	No33接合
25-2	須恵器	N 39 K 15	口縁内湾ぎみに外反。体部クロナデ。	写真同版14-6

団 版 番 号	種 類 道 物 番 号	道 構 制	特 徴	備 考
25-2	环	3 層 No.37	底部回転糸切、測線手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調黒褐色。粘土石英粒を多量に含む。	
25-3	須 惠 器 环 No.38	N 39 E 12 2 層	口縁不規。体部ロクロナデ、下端ケズリ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調に青い黄褐色。粘土砂粒を含む。	
25-4	土 鍋 器 环 No.29	N 39 E 15 5 層	口縁外反。体部削減、わずかにミガキあり。 底盤磨滅のため不明。 焼成もろい。色調淡青褐色。粘土砂粒を含む。	写真図版12-11
25-5	須 惠 器 环 No.67	B 地 区 表 土	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。粘土石英粒、砂粒を多量に含む。	
25-6	須 惠 器 环 No.39	N 39 E 15 3 層	口縁内縫ぎみに外反。体部ロクロナデ。底 部回転ヘラ切り。 焼成ややもろい。色調灰白色。粘土砂粒を含む。	
25-7	須 惠 器 环 No.61	N 36 E 12 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調青灰色。粘土砂粒を多量に含む。	
25-8	須 惠 器 高 古 付 环 No.1	N 39 E 15 9 層	口縁直立ぎみに外反。体部ロイナデ、高台ロクロナデ。 底部切りはなし不明。回転ヘラナデ調整。 焼成堅い。色調青灰色。粘土石英粒、砂粒を多量に含む。	
25-9	土 鍋 器 环 No.25	N 39 E 18 5 层眉	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 ヘラナデ調整。再焼成をうけている。 焼成もろい。色調褐灰色。粘土砂粒を含む。	
25-10	土 鍋 器 环 No.23	N 39 E 15 5 層	口縁不規。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切、調整なし。 全体に磨滅。 焼成もろい。色調淡青色。粘土砂粒を多量に含む。	
25-11	土 鍋 器 环 No.14	N 36 E 21 4 層	口縁外反。体部ロクロナデ、下端ケズリ。内側ミガキ内黒。 底部切りはなし不明。手卓ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調色灰色。粘土砂粒を含むが均質。	
25-12	土 鍋 器 环 No.23	N 39 E 15 5 層	口縁不規。体部ロクロナデ、下端ケズリ。 焼成ややもろい。色調灰白色。粘土砂粒を含む。	
25-13	土 鍋 器 环 No.24	N 39 E 18 5 層	口縁不規。体部ロクロナデ。底部手持ちヘラケズリ。 全体磨滅。 焼成もろい。色調灰白色。粘土砂粒を含む。	写真図版15-6
26-1	須 惠 器 麦 No.45	N 42 E 18 3 層	口縁外反し端部直立。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調灰色。粘土均質。	
26-2	土 鍋 器 麦 No.85	N 36 E 21 2 層	口縁外反、体部ロクロナデ、底部不明。 焼成ややもろい。色調 黄褐色。粘土石英砂を含む。	
26-3	須 惠 器 麦 No.15	N 39 E 12 4 層	口縁不規。体部外側タクキの上を手持ちヘラケズリ、内側ロク ロナデの上をおさえ。底部切りはなし不明。ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調黄褐色。粘土砂粒を多量に含む。	
26-4	土 鍋 器 麦 No.70	N 39 E 12 7 層	口縁外反して端部直立。体部ロクロナデ。 底部不明。 焼成堅い。色調灰白色。粘土砂を含む。	
26-5	須 惠 器 麦 No.70	N 36 E 18 6 層	口縁不規。体部外側タクキ・ナデ、内側指ナデ。 底部切りはなし不明。ヘラナデ調整。	写真図版15-7

図版番号	種類 遺物番号	構 成 層	特 徴	備考
26-5	No.8		焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を多量に含む。	
26-6	土器	N 39 E 12 5層 No.8	口縁外反して端部直立。体部ロクロナデ。	
			焼成堅い。色調灰白色。胎土石英粒を多量に含む。	
26-7	土器	N 39 E 9 8層 No.10	口縁外反。体部外側ケズリ、内側ハケナデ。	写真図版15-9
			底部不明。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
26-8	土器	N 39 E 18 5層 No.26	口縁不明。体部外側ヘラケズリ、内側ロクロナデ。 底部切りはなし不明。ヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
26-9	土器	N 39 E 16 2層 No.103		

C 地区出土遺物観察表

図版番号	種類 遺物番号	構 成 層	特 徴	備考
27-1	平瓦 No.63	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向。 凹面 布目6×5、かるいスリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土質地を含む。	写真図版7-2
27-2	平瓦 No.64	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向。 凹面 布目7×6、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母を含む。	
27-3	平瓦 No.65	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向。 凹面 布目7×6、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土雲母を含む。	写真図版7-3
28-1	平瓦 No.68	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向。 凹面 布目7×6、糸切痕。 焼成堅い。色調灰白色。胎上小石を含む。	写真図版7-1
28-2	平瓦 No.71	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向。 凹面 布目8×8、かるいスリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石を含む。	写真図版10-3
28-3	平瓦 No.72	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向、かるいナデ。 凹面 布目7×6、スリケシ、糸切痕、T字形のヘラ書あり。 焼成堅い。色調灰白色。胎土小石を含む。	写真図版8-3
29-1	平瓦 No.74	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向。 凹面 布目7×5、かるいスリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石雲母を含む。	写真図版8-1
29-2	平瓦 No.81	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向。 凹面 布目6×8、全体的にスリケシ。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土の粒を含む。	写真図版9-3
29-3	平瓦 No.90	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向、かるいスリケシ。 凹面 布目7×8、全体的にスリケシ。 焼成堅い。色調黑色。胎土砂粒を含む。	写真図版6-2
30-1	平瓦 No.105	1 住居 施設瓦	凸面 織目印織方向、黒釉あり。 凹面 布目7×6、かるいスリケシ、糸切痕。 焼成堅い。色調黄褐色。胎土小石を含む。	写真図版10-2
30-2	平瓦	1 住居	織目印織方向、一部ナデ。	

開版番号	性別	遺構名	特徴	備考
30-2		施設瓦 No116	凸面 布目7×7、スリケン、系切質。 焼成堅い。色調に古い橙色。胎土小石を含む。	
30-3	平瓦	1 住居 施設瓦 No120	凸面 凹面 面目印記方向。 布目6×6、全体的にスリケン。 焼成堅い。色調に古い橙色。胎土小石を含む。	写真開版 6-3
31-1	平瓦	1 住居 施設瓦 No132	凸面 凹面 面目印記方向。 布目7×6、かるいスリケン。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
31-2	平瓦	1 住居 施設瓦 No70	凸面 凹面 面目印記方向。 布目6×5、全体的にスリケン。 焼成堅い。色調灰色。胎土骨母を含む。	写真開版 8-2
31-3	丸瓦	1 生居 施設瓦 No33	凸面 金剛スリケン。面目印痕あり。 凹面 布目7×8 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
31-4	丸瓦	1 住居 施設瓦 No83	凸面 全面スリケン。面目印痕あり。 凹面 布目7×7、布じわ。 焼成堅い。色調に古い橙色。胎土小石粒を含む。	
32-1	須恵器 环	1 住居 ピット4 No43	口縁外反、体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄褐色。胎土砂粒を含む。	
32-2	須恵器 环	1 住居 ピット4 No194	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調浅黄褐色。胎土砂粒を含む。	
32-3	土師器 环	1 住居 ピット4 No47	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
32-4	土師器 环	1 住居 カマド付近 No4	口縁外反。体部ロクロナデ。底部面糞系切り、周縁ケズリ。 焼成もろい。色調橙色。胎土骨母の砂を含む。	写真開版 12-3
32-5	土師器 环	1 住居 No7	口縁外反。体部ロクロナデ。底部面糞系糞調整なし。 全体的に素面。 焼成もろい。色調灰黄色。胎土砂を含む。	写真開版 12-4
32-6	上師器 高台付环	1 住居 表 No6	口縁外反。体部内側ヘラミガキ黑色処理。外側ロクロナデ。 底部骨母焼けはげしい。高台が付く。 焼成ややもろい。色調に古い橙色。胎土均質。	
32-7	上師器 高台付环	1 住居 ピット25 No7	口縁外反。体部内側ヘラミガキ黑色処理。外側ロクロナデ。 底部切切りはなし。不明。同軸ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調に古い橙色。胎土均質。	
32-8	上師器 高台付环	1 住居 ピット9 No150	口縁外反。体部内側ヘラミガキ黑色処理、外側ロクロナデ。 底部骨母焼成、高台が付く。 焼成もろい。色調浅黄褐色。胎土小石粒を含む。	
32-9	須恵器 瓢	1 住居 眼窓穴 No2	口縁外反し、上下に棱をもつおりかえし口縁をなす。 額部ロクロナデ。体部平行叩き。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒、石英粒を含む。	写真開版 15-11
32-10	須恵器 瓢	1 住居 表 No68	裏面 同心円文あり 表面 平行叩き 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
32-11	須恵器 瓢	1 住居 2層	口縁外反し、おりかえし口縁をなす。体部ロクロナデ。	

図版番号	種類 遺物番号	造構層	特徴	備考
	No179		地成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
32-12	土器 甕 No13	1 住居 ビット8	口縁外反し、おりかえし口縁をなす。体部ロクロナデ。 全体的に病滅。	
	No173		地成もうろい。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
32-13	土器 甕 カマド付近	1 住居	口縁外反し端部が内反。体部ロクロナデ。 全体的に病滅。	
	No1		地成もうろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。	
33-1	土器 甕 標準部	1 住居	口縁外反し端部が直立する。体部ロクロナデ。 一部にヘラケズリ。	
	No49		地成堅い。色調淡黄色。胎土砂粒を多量に含む。	
33-2	土器 甕 No48	1 住居 ビット1	口縁外反し端部が直立する。体部ロクロナデ。	
	No49		地成もうろい。色調におい褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
33-3	土器 甕 No48	1 住居 ビット1	口縁外反。体部ロクロナデ。 磨滅がはげしい。	
	No121		地成もうろい。色調におい褐色。砂粒を含む。	
33-4	土器 甕 No171	1 住居 1 層	口縁外反。体部磨滅のため観察できます。	
	No23		地成もうろい。色調におい褐色。胎土砂粒を含む。	
33-5	土器 甕 No23	1 住居 3 層	口縁不明。体部内側ミガキ、外側磨滅がいちじるしい。	
	No83		地成もうろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。	
33-6	土器 甕 No23	1 住居 ビット7	口縁外反。体部ロクロナデ。底部凹軸条件調整なし。	
	No83		地成もうろい。色調黒褐色。胎土砂粒を含む。	
33-7	須恵器 異形上器	1 住居 床面	口縁不明。体部ケズリ。底部地成以前に穿穴されている。	
	No83		地成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
33-8	須恵器 異形土器	1 住居 床面	口縁不明。体部ナデ、一部ケズリ。底部地成以前に穿穴されている。	
	No90		地成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
34-1	土製品 No99	1 住居 4 層	地成堅い。色調におい褐色。胎土砂粒を含む。	
	No97		火口、黒色の釉が表面にみられる。	写真図版16-17
34-2	土製品 幅火口	1 住居 2 層	地成ややもうろい。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
	No97		穿穴されている。	写真図版16-9
34-3	土製品 七玉 No100	1 住居	地成堅い。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。	
	No98		全般的に凸凹。指ナデをしている。	
34-4	土器 手提土器	1 住居 3 層	地成ややもうろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。	
	No96		外表面磨滅している。指ナデをしている。	
34-5	土製品 輪火口	1 住居 2 層	地成もうろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。	
	No110		長軸方向に磨かれている。	
34-6	石製品 磨石	1 住居 床面		

因数 番号	種類 遺物番号	造形	特徴	備考
34-7	土製品 No.49	1 住居 壁 火口 ピット 1	上部は黒く硬質であるが、下部は磨成。 焼成ややもろい。色調灰褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
34-8	ト 石 No.130	1 住居 3 潟	ほぼ長方形	
34-9	土製品 No.85	1 住居 2 層	大形の風字碗状の土製品。外側にタタキ模様あり。 全体をヘラケツで調整。 焼成堅い。色調によい橙色。胎土砂粒を含む。	
34-10	ト 石 No.54	1 住居 2 層	大型。弓状に巻がかれている。 使用面は二面。	
35-1	平 瓦 No.726	1 住居 施設 瓦	凸面 繩目印継方向。 凹面 布目9×8、スリケン。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版 6-1
35-2	平 瓦 No.618	2 住居 施設 瓦	凸面 繩目印継方向、黒施あり。 凹面 布目スリケン。 1号カマド 焼成堅い。色調黒色。胎土小石粒を含む。	
35-3	平 瓦 No.601	2 住居 施設 瓦	凸面 繩目印継方向、かるいスリケン。 凹面 布目6×5、スリケン。 焼成堅い。色調黄褐色。胎土小石粒、雲母を含む。	
35-4	平 瓦 No.716	2 住居 床 面 (2次)	凸面 繩目印継方向。 凹面 布目6×5、スリケン。糸切痕。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	
35-5	平 瓦 No.722	2 住居 1 層	凸面 繩目印継方向。 凹面 布目6×5、スリケン。 焼成もろい。色調浅黄色。胎土砂粒を含む。	
35-6	平 瓦 No.723	2 住居 施設 瓦 1号カマド	凸面 繩目印全面スリケン。。糸切痕。 凹面 布目7×7、スリケン。 焼成堅い。色調灰褐色。胎土砂粒を含む。	
35-7	平 瓦 No.599	2 住居 施設 瓦 1号カマド	凸面 繩目印斜方向、スリケン。 凹面 布目7×6、スリケン。 焼成堅い。色調灰褐色。胎土小石粒を含む。	
35-8	平 瓦 No.720	2 住居 施設 瓦 2号カマド:2層	凸面 繩目印スリケン。 凹面 布目7×7、スリケン、糸切痕。 焼成堅い。色調暗赤褐色。胎土小石粒、雲母を含む。	
35-9	平 瓦 No.602	2 住居 施設 瓦 1号カマド	凸面 繩目印スリケン。 凹面 布目5×6、スリケン。 焼成堅い。色調暗赤褐色。胎土小石を含む。	
36-1	軒丸瓦 No.714	2 住居 1 層	細弁連華文。周縁と瓦当面のみ残存。 凸面 スリケン。凹面 布目7×7、スリケン。 焼成堅い。色調灰色。胎土小石粒を含む。	写真図版 11-4
36-2	軒丸瓦 No.483	2 住居 1 層	細弁連華文。周縁と瓦当面残存。 焼成堅い。色調灰褐色。胎土砂粒を含む。	写真図版 11-2
36-3	軒丸瓦 No.672	2 住居 周溝 内	細弁連華文。珠文があり、細弁連華文と思われる。 焼成ややもろい。色調灰褐色。胎土小石粒を含む。	
36-4	灰釉陶瓦 No.25	2 住居	口縁外反し、かるく内湾し、まるみのある端をなす。	

回版番号	種類 遺物番号	遺構層	特徴	備考
	No279	2 層	体部ナデ。底部高台が付く。灰褐色。 焼成堅い。色調灰白色。胎土均質で緻密。	
36-5	須恵器 环 No.8	2 住居 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。下端回転ヘラケズリ。 底部回転糸切り。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真回版12-8
36-6	須恵器 环 No429	3 上 繩 7 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り、調整なし。 焼成堅い。色調明褐色。	写真回版14-10
36-7	須恵器 环 No266	2 住居 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。下端ケズリ。 底部回転糸切り。周縁手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
36-8	須恵器 环 No272	2 住居 ビット70	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り、調整なし。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真回版14-2
36-9	須恵器 环 No.268	2 住居 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
36-10	須恵器 环 No.274	2 住居 4 湯 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ。火ダメスキあり。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	写真回版12-7
36-11	須恵器 环 No.25	2 住居 周溝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。下端ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調浅黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。	写真回版12-5
36-12	須恵器 环 No.267	2 住居 ビット1	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ。×じるしあり。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
36-13	須恵器 环 No.9	2 住居 ビット28	口縁直立ぎみに外反。体部ロクロナデ。 底部回転ヘラ切り調整なし。 焼成堅い。色調灰色。胎土砂粒を含む。	
36-14	須恵器 环 No.94	2 住居 ビット25	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調明褐色。胎土砂粒を含む。	
37-1	土器 环 No.275	2 住居 5 周溝 1 層	口縁外反。体部磨削がかけしい。 底部切りはなし不明。ケズリか。 焼成ひょううにもろい。色調褐色。胎土砂粒を多量に含む。	
37-2	土器 环 No.25	2 住居 1 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り調整。 焼成堅い。色調浅黄褐色。胎土砂粒を含む。	写真回版14-7
37-3	土器 环 No.26	2 住居 2 次床 画	口縁外反。体部内側ヘラミガキ黒色処理。外側ロクロナデ。 底部切りはなし不明。体部下端より手持ちヘラケズリ。 焼成ややもろい。色調淡黄褐色。胎土均質である。	
37-4	土器 环 No.52	2 住居 第2カマド	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 体部下端より手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調浅黄褐色。胎土砂粒を含む。	写真回版14-1
37-5	土器 环 No.18	2 住居 1 号回溝	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ。 焼成堅い。色調淡黄色。胎土砂粒を多量に含む。	
37-6	土器 环	2 住居 1 層	口縁外反。体部内側ミガキ。外側ロクロナデ。 底部回転糸切り、周縁ヘラケズリ。	

図版番号	種類 遺物番号	道構 属	特徴		備考
			成形	色調	
	No265	一	焼成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。		
37-7	須恵器 No259	2 住居 2 周縁	口縁不明。端部ロクロナデ。体部とのさかいに凸帯をめぐらす。	写真図版15-12	
37-8	須恵器 No46	2 住居 1 周縁	焼成堅い。色調灰白色。胎土石粒を多量に含む。 口縁からく外反し、外側に沈線がめぐる。体部ロクロナデ。 底部不明。		
37-9	土師器 No236	2 住居 2 周縁	焼成堅い。色調黄灰色。胎土砂粒を多量に含む。 口縁大きく外反し、端部直立。体部ロクロナデ。 底部不明。		
37-10	土師器 No43	2 住居 2 せかみ 焼造	口縁かるく外反し、端部直立。体部まるみをおびる、ロクロナデ。 底部不明。 焼成もろい。色調浅黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。		
37-11	土師器 No175	2 住居 2 次床面	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。		
37-12	土師器 No4	2 住居 ビット98 1 烟	焼成もろい。色調橙色。胎土砂粒を多量に含む。 口縁大きく述べ外反し、端部直立。体部ロクロナデ。		
37-13	土師器 No271	2 住居 ビット19 柱穴埋土	口縁外反して端部直立。体部ロクロナデ。 焼成もろい。色調橙色。胎土砂粒を多量に含む。		
38-1	土師器 No205	2 住居 1 周縁	焼成堅い。色調に上い橙色。胎土砂粒を多量に含む。 口縁かるく外反して端部直立する。体部ロクロナデ。		
38-2	土師器 No6	2 住居 ビット77 1 周縁	焼成堅い。色調浅黄褐色。胎土砂粒を多量に含む。 体部内側指ナデ、外側へラケズリ。 底部ケズリ。		
38-3	土師器 No37	2 住居 1 周縁	口縁外反し、端部直立する。体部ロクロナデ。		
38-4	スリ石 No127	2 住居 2 次床面	焼成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。 表面にすてあつたものである。 表面に使用痕あり。		
38-5	鏡 円面鏡 No278	2 住居 2 周縁	体部に三条の沈線。四枚端部の破片。		
38-6	鏡 円面鏡 No65	2 住居 2 周縁	焼成堅い。色調赤灰色。胎土砂粒を含む。 体部に円穴と長方形のスカシをもつ。		
38-7	鏡 円面鏡 No14	2 住居 2 周縁	焼成堅い。色調灰色。胎土均質。 体部に円穴と長方形のスカシをもつ。		
38-8	土師器 手捏土器 No20	2 住居 2 周縁	口縁内側さみに外反。体部から底部指ナデあり。		
38-9	土師器 手捏土器 No13	2 住居 2 周縁	焼成もろい。色調浅黄褐色。胎土砂粒多い。 全体的に磨滅。体部指ナデ。 焼成もろい。色調褐灰色。胎土砂粒多し。	写真図版16-1	

図版番号	種類 遺物番号	遺構	特徴	備考
38-10	土器 手挽土器 No276	2 住居 2 次床面	口縁かるく外反。全体的に指ナデ。 焼成もろい。色調淡黄褐色。胎土石英砂粒を含む。	写真図版16-2
38-11	土器 手挽土器 No105	2 住居 1 周溝 1 層	全体的に磨滅。指ナデ。 焼成もろい。色調黄褐色。胎土均質。	
38-12	土器 手挽土器 No21	2 住居 ピット22	全体的に磨滅。	
38-13	土器 手挽土器 No280	2 住居 2 層	口縁大きく外反。圓型を呈する。	写真図版16-3
38-14	土器 手挽土器 No184	2 住居 4 溝	焼成ややもろい。色調淡黄色。胎土砂粒を含む。	
38-15	須恵器 見形土器 No174	2 住居 1 周溝	形態不明。	写真図版16-16
38-16	土製品 土玉 No176	2 住居 土玉 2 周溝	土玉穿穴されている。	
38-17	土製品 土玉 No297	2 住居 ピット60	穿穴されている。	
38-18	鉄製品 鉄環 No48	2 住居 2 次床面 2 号カマド	焼成ややもろい。色調橙色。胎土均質。 三角形の長い矢線と長い矢柄をもつ。 酸化が著しい。	写真図版16-19
39-1	須恵器 环 No431	第3土壤 7層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	
39-2	須恵器 环 No44	第12土壤 1層	焼成堅い。色調暗青灰色。胎土石英砂粒を多量に含む。	
39-3	須恵器 环 No41	第13土壤 1層	口縁内湾。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。	
39-4	須恵器 环 No126	第14土壤 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39-5	須恵器 环 No425	第14土壤 2層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	
39-6	須恵器 环 No50	第19土壤 1層	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を少量含む。	
39-7	須恵器 环 No.5	第19土壤 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転ホーリ。	写真図版12-2
39-8	須恵器	第14土壤	口縁内湾。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	

図版 番号	種類 遺物番号	遺構 層	特徴	備考
	環 No423	2 層	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を多量に含む。	
39-9	須恵器 环 No123	第14土 壤 10 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 手持ちヘラケズリ調整。	
			焼成堅い。色調灰白色。胎土少量の砂粒を含む。	
39-10	須恵器 环 No57	第14土 壤 2 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。	
			焼成堅い。色調灰白色。胎土1mm程の砂粒を含む。	
39-11	須恵器 环 No105	第19土 壤 11 層	口縁内窪みに外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 回転ヘラケズリ調整。	
			焼成堅い。色調青灰色。胎土砂粒を含む。	
39-12	須恵器 环 No354	第14土 壤	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 回転ヘラケズリ調整。	
			焼成堅い。色調灰白色。胎土3mm程の砂粒を含む。	
39-13	須恵器 环 No390	第3土 壤	口縁軽い折り返しが見られる。体部ロクロナデ。 底部切りはなし不明。	
			焼成堅い。色調によい橙色。胎土0.5mm以下砂粒を含む。	
39-14	須恵器 环 No167	第14土 壤 7 層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。	
			焼成堅い。色調褐灰色。胎土砂粒を含む。	
39-15	須恵器 环 No343	第14土 壤 1 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。	写真図版14-8
			焼成堅い。色調灰白色。胎土石英を含む。	
39-16	須恵器 环 No351	第13土 壤 16 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。	写真図版12-10
			焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒含む。	
39-17	須恵器 环 No355	第14土 壤 9 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。	写真図版14-11
			焼成ややもろい。色調灰白色。胎土石英を含む。	
39-18	須恵器 环 No252	第14土 壤 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 手持ちヘラケズリ調整。	
			焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39-19	須恵器 环 No17	第16土 壤 1 层	口縁やや内凹。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	
			焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39-20	須恵器 环 No357	第13土 壤 9 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。	
			焼成堅い。色調灰黄色。胎土砂粒を含む。	
39-21	須恵器 环 No135	第14土 壤 5 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。	
			焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
39-22	須恵器 高台付环 No142	第14土 壤	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。	写真図版13-9
			焼成堅い。色調によい褐色。胎土砂粒を含む。	
40-1	土器 环 No80	第13土 壤 5 层	口縁外反。体部ロクロナデ。内面黒色処理。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。	
			焼成堅い。色調橙色。胎土砂粒を含む。	
40-2	土器 环	第14土 壤 3~4 层	口縁外反。体部ロクロナデ。内面ヘラミガキ黒色処理。 底部切りはなし不明。	

図版番号	種類	遺構層	特徴	備考
	遺物番号			
No247			焼成もろい。色調に古い褐色。胎土砂粒を含む。	
40-3	上 鋸 磨 环	第14土 壤 D 3 ~ 4 層	口縁外反。体部ロクロナデ。内面ヘラミガキ黑色処理。 底部切りはなし不明。	
	No246		焼成もろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。	
40-4	上 鋸 磨 环 No22	第13土 壤 2 層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	
40-5	土 鋸 磨 环 No212	第14土 壤 1 層	焼成堅い。色調淡黄褐色。胎土少量の砂粒を含む。 口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。	
40-6	須 悪 器 甕 No327	第8土 壤 2 層	焼成堅い。色調灰色。胎土粗砂粒を含む。 口縁おり返し。体部ロクロナデ。底部不明。	
40-7	須 悪 器 長 瓢 瓶 No38	第13土 壤 1 層	焼成堅い。色調灰色。胎土不明。 口縁おり返し。体部不明。底部不明。	
40-8	須 悪 器 不 明 No256	第14上 壤 1 层	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。 口縁凸筋有り。体部不明。底部不明。	
40-9	上 鋸 磨 甕 No238	第14土 壤 3 ~ 4 層	口縁外反し、口唇部に至り直立。体部ロクロナデ、一部ケズリ有り。 底部不明。	
40-10	須 悪 器 甕 No6	第19土 壤 1 层	焼成ややもろい。色調淡褐色。胎土砂粒を含む。 口縁おり返し。体部叩き目有り。底部不明。	
40-11	土 鋸 磨 甕 No386	第14上 壤 1 层	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。 口縁外反し、口唇部に至って直立する。体部ロクロナデ。 底部不明。	
40-12	上 鋸 磨 甕 No330	第14土 壤 1 层	焼成ややもろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。 口縁外反し、口唇部直立。体部ロクロナデ。底部不明。	
40-13	土 鋸 磨 甕 No318	第14土 壤 12 層	焼成もろい。色調褐色。胎土2mm程の砂粒を含む。 口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	
40-14	上 鋸 磨 甕 No270	第13土 壤 3 层	焼成もろい。色調淡黄褐色。胎土石英を含む。 口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	
40-15	土 鋸 磨 甕 No341	第13土 壤 床 面	焼成もろい。色調口縁部黑色。体部褐色。胎土砂粒を含む。 口縁不明。体部ロクロナデ。底部不明。	写真図版15-8
40-16	土 鋸 磨 甕 No70	第19上 壤 2 层	焼成もろい。色調褐色。胎土粗砂粒を含む。 口縁外反し。口唇部において直立する。体部ロクロナデ。	
40-17	上 鋸 磨 甕 No232	第14土 壤 3 ~ 4 層	焼成もろい。色調淡褐色。胎土砂粒を含む。 底部不明。	
41-1	土 鋸 磨 甕 No71	第19上 壤 3 层	焼成もろい。色調褐色。胎土砂粒を含む。 口縁外反。体部ロクロナデ。底部不明。	

国 史 番 号	種 類 遺物番号	遺 墓 層	特 徴	備 考
41-2	須・惠 瓶 No352	第 3 土 墓	口縁不明。体部ロクロナデ。下端ヘラケズリ。 底部ヘラケズリの後、ナデ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真図版15-5
41-3	土 部 器 手 掘 土 器 No10	第 3 号掘立 1 層	口縁直立。体部指による整形。底部不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土少量の砂粒を含む。	写真図版16-8
41-4	土 部 器 手 掘 土 器 No342	第 19 土 墓 末 面	口縁直立。体部指による整形。底部丸底、指による整形。 焼成ややもろい。色調暗色。胎土少量の砂粒を含む。	
41-5	上 部 器 手 掘 土 器 No358	第 14 土 墓	口縁外反。体部指による整形。底部不明。 焼成もろい。色調にぶい橙色。胎土若干の砂粒を含む。	写真図版16-4
41-6	上 部 器 七 五 No366	第 13 土 墓 5 层	口縁1mm程の容大がなされている。全体に月を走った可能性がある。	写真図版16-10
41-7	硯 風 字 砚 No373	第 19 土 墓 2 层	腹部は上・下方向に磨かれている。側縁はヘラケズリがなされている。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒。	
41-8	壺 No362	第 14 土 墓	残存する一面に布目模がある。 焼成もろい。色調にぶい橙色。砂粒を含む。	写真図版17-3
41-9	壺 No363	第 14 土 墓	焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真図版17-2
42-1	須 惠 器 环 No419	7 号 滝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	写真図版14-3
42-2	須 惠 器 环 No299	4 号 滝	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
42-3	須 惠 器 环 No378	19 号 滝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰褐色。胎土石英を含む。	
42-4	土 席 25 26 No480	19 号 滝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成ややもろい。色調淡黄褐色。胎土砂粒を含む。	
42-5	須 惠 器 环 No420	7 号 滝 2 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	写真図版12-6
42-6	須 惠 器 环 No475	18 号 滝 2 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒、小石を含む。	写真図版13-4
42-7	須 惠 器 环 No421	7 号 滝 2 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英砂粒を含む。	
42-8	須 惠 器 环 No434	7 号 滝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
42-9	須 惠 器 7 号 滝		口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不規整。	

図面 番号	種類 番号	造 型	特 徴	備 考
	环 No410	1 层	手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
42-10	須 恵 器 环 No285	18 号 溝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
42-11	須 恵 器 环 No413	7 号 溝 2 层	口縁不明。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調にぼい橙色。胎上砂粒を含む。	
42-12	須 恵 器 环 No97	7 号 溝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。下端ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調淡黄色。胎上多量の砂粒を含む。	
42-13	須 恵 器 环 No251	22 号 溝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
43-1	土 筋 器 环 No422	7 号 溝 2 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り。 その後ナデ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英、砂粒を含む。	
43-2	須 恵 器 环 No476	22 号 溝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り調整なし。 焼成堅い。色調青灰色。胎土若干の砂粒を含む。	写真図版13-5
43-3	須 恵 器 环 No484	7 号 溝 2 层	口縁若干内溝している。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。 調整なし。 焼成堅い。色調灰色。胎土少景の砂粒を含む。	
43-4	須 恵 器 环 No408	7 号 溝 1 层	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ調整。Xのハラ書き有り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土均質。	
43-5	須 恵 器 环 No471	18 号 溝 破 認 面	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ調整。	
43-6	須 恵 器 环 No470	18 号 溝 確 記 面	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転糸切りの後、回転ヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰色。胎土多量の砂粒を含む。	写真図版13-3
43-7	須 恵 器 环 No434	7 号 溝 1 层	口縁外反。体部ロクロナデ、下端にヘラケズリ有り。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰色。胎土若干の砂粒を含む。	
43-8	須 恵 器 环 No131	7 号 溝 1 层	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り。無調整。 焼成堅い。色調灰色。胎土1mm程の砂粒を含む。	
43-9	須 恵 器 环 No82	7 号 溝 1 层	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切りの後、手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
43-10	須 恵 器 环 No261	6 寸 溝	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	
			焼成ややもろい。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
43-11	須 恵 器 环 No154	7 号 溝 2 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
43-12	須 恵 器 环	1 号 溝 2 层	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	

図版 番号	種類 遺物番号	造 層	特 徴	備 考
	No58		焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
43-13	須恵器 环 No106	7号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	
43-14	須恵器 环 No486	1号溝 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。 焼成堅い。色調灰黄褐色。胎土若干の砂粒を含む。	
43-15	須恵器 环 No538	4号溝 確認面	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不確。 手持ちヘラケズリ調整。	
43-16	須恵器 环 No153	7号溝 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
43-17	須恵器 环 No281	4号溝	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	
43-18	須恵器 环 No286	18号溝 1層	焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
43-19	須恵器 环 No354	1号溝 1層	口縁若干内凹する。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	
43-20	須恵器 环 No187	7号溝 確認面	焼成堅い。色調灰白色。胎土多量の砂粒を含む。	
43-21	須恵器 高台付环 No451	1号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。下端輪積模有り。 底部切りはなし不明。	
43-22	須恵器 环 No523	19号溝 2層	焼成堅い。色調灰白色。胎土多量に砂粒を含む。	
43-23	須恵器 环 No445	1号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。中心に凹部分回転ヘラケズリ。 焼成堅い。色調灰色。胎土石英、砂粒を含む。	
44-1	須恵器 环 No473	21号溝 床面	口縁外反。体部ロクロナデ。内面ヘラミガキ。下端ヘラケズリ。 焼成堅い。色調明褐灰色。胎土砂粒を含む。	
44-2	土師器 环 No338	18号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部切りはなし不明。	
44-3	土師器 环 No477	20号溝 1層	焼成もろい。色調暗色。胎土多量に砂粒を含む。	写真図版13-10
44-4	土師器 环 No243	2号溝 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。底部回転無切り。無調整。	
44-4	土師器 环 No313	18号溝 1層	焼成堅い。色調暗色。胎土砂粒含む。	
			口縁外反。体部ロクロナデ。内面ヘラミガキ黑色處理。 焼成堅い。色調浅黄褐色。胎土若干の砂粒を含む。	
			口縁外反。体部ロクロナデ。内面ヘラミガキ黑色處理。 焼成堅い。色調淡黄褐色。胎土砂粒含む。	

図版番号	種類 遺物番号	產 層	特 徴	備考
44-6	土師器 環 No382	17号 潟	口縁外反。体部・底部磨滅のため不明。 焼成もろい。色調橙色。胎土若干砂粒を含む。	
44-7	土師器 環 No268	21号 潟 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。内側ヘラミガキ黒色処理。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
44-8	土師器 環 No170	7号 潟 2層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部磨滅のため不明。 焼成ややもろい。色調黃褐色。胎土小石粒含む。	
44-9	土師器 環 No579	18号 潟	口縁外反。体部ロクロナデ。底部磨滅のため不明。 焼成ややもろい。色調橙色。胎土若干砂粒を含む。	
44-10	須恵器 長颈甕 No297	18号 潟	口縁折り返し。体部不明。底部不明。 頸部ロクロナデ。 焼成堅い。色調灰白色。胎土砂粒を含む。	
44-11	須恵器 環 No404	7号 潟 2層	口縁内湾しながら直立。体部ロクロナデ。底部回転ヘラ切り、無調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土石英を含む。	写真図版15-3
44-12	須恵器 甕 No6	3号 捨立 1層	口縁折り返し。頸部ロクロナデ。体部・底部不明。 焼成堅い。色調灰赤色。胎土石英を含む。	
44-13	須恵器 甕 No504	2号 潟 2層上下面	口縁若干の折り返し、ロクロナデ。体部・底部不明。 外面に自然釉有り。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
44-14	須恵器 環 No324	18号 潟 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。下端ヘラケズリ。 底部回転糸切り。手持ちヘラケズリ調整。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
44-15	土師器 甕 No479	19号 潟と18号 分離の底 1層	口縁外反。体部ロクロナデ。下端ヘラケズリ。 底部回転糸切り、無調整。 焼成堅い。色調淡橙色。胎土多量の砂粒を含む。	写真図版15-2
44-16	土師器 甕 No440	7号 潟 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部回転糸切り、無調整。 焼成堅い。色調浅黄橙色。胎土石英を含む。	
44-17	須恵器 甕 No252	22号 潟 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。底部不明。 焼成堅い。色調灰白色。胎土若干の砂粒を含む。	
44-18	土師器 甕 No409	7号 潟 1層	口縁不明。体部内面ロクロナデ。外側ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	
44-19	土師器 甕 No362	9号 潟 1層	口縁外反し、口唇部は直立する。体部ロクロナデ。 底部不明。 焼成もろい。色調黃褐色。胎土多量の砂粒を含む。	
44-20	土師器 甕 No478	22号 潟 1層	口縁不明。体部内面ロクロナデ。外側ヘラケズリ。 底部切りはなし不明。手持ちヘラケズリ調整。 焼成ややもろい。色調橙色。胎土石英を含む。	写真図版10-8
44-21	土師器 甕 No ⁴¹⁶ ₄₁₇	7号 潟 1層	口縁不明。体部ロクロナデ。下端ヘラケズリ。 底部磨滅のため不明。 焼成堅い。色調灰赤褐色。胎土若干砂粒を含む。	
45-1	土師器	1号 潟	口唇部は大きく外反し、口唇部で直立。唇部は細くしめられて	

図版番号	種類 遺物番号	遺構層	特徴	備考
45	甕 No384	2層	いる。体部はロクロ痕あり。ナデか。ロクロ跡不明。	
45-2	土師器 甕 No149	7号溝 1層	内外面ともロクロナデ。口縁部外面と内面が角酸化されて黒色になっている。非常に磨滅が激しい。色調は褐色。	
45-3	土師器 甕 No282	18号溝 1層	内外面ともロクロナデ。色調は外面が浅黄褐色、内面が灰白色である。胎土には砂粒を多量に含み、焼成は良好で堅い。	
45-4	土師器 甕 No349	2号溝B 2層	頭部から外反し、口部で内反する。頭部との境を鋸くして、沈線をなしている。体部内外面ともナデがみられる。色調は暗褐色で、胎土には小石を含み、もろい。	
45-5	土師器 甕 No438	7号溝C 2層	体部内外面ともロクロナデ。焼成はあるていど良好であるが、保存が悪く、もろい。胎土には、砂粒を多く混入する。	
45-6	ト 石 No432	7号溝C 1層	浅黄褐色	写真図版16-13
45-7	土師器 甕 No169	2号溝B 2層	内外面ともロクロナデ。内面浅黄褐色、外面褐色。胎土は均質の粘土で焼成良好で堅い。	
45-8	土師器 甕 No65	7号溝A 1層	全体に内外面ともロクロナデ。胎土は0.5mm以下の砂粒が多量に混入している。焼成は良好である。	
45-9	土師器 貝形土器 No467	17号溝 2層	用途不明。底部付近外面は横、斜めの指ナデ。内面は指ナデ、ヘラ削りされている。	
45-10	土師器 手握土器 No381	19号溝 1層	色調は浅黄褐色。胎土に砂粒含み、もろい。	
45-11	土師器 手握土器 No423	7号溝A 2層	色調は浅黄褐色。胎土にやや砂粒が混り、焼成は堅い。	写真図版16-6
45-12	土師器 手握土器 No207	4号溝 埋1	色調は浅黄褐色。胎土に若干の砂粒含み、堅い。	
45-13	土師器 手握土器 No502	8号溝 1層	胎土に若干石英粒含む。色調はにじみ褐色。	
45-14	土師器 手握土器 No453	1号溝 由部分下	焼成もろい。色調浅黄褐色。胎土砂粒含む。	
45-15	土師器 手握土器 No452	1号溝 1層	色調は浅黄褐色。胎土に若干石英砂粒含み、堅い。	
45-16	土製品 No454	1号溝 1層	色調は褐色。胎土に砂粒多く、ややもろい。	写真図版16-12
45-17	土製品 No454	17号溝 1層	色調は灰白色。胎土に砂粒多く、もろい。	写真図版16-11

国 聖 番 号	種 類 遺物番号	道 構 別	特 徴	備 考
	No465			
45-18	土 製 品 把 手 ? No437	7 号 溝 C 1 層	色調は浅黄褐色。胎土に若干砂粒含み、もろい。	写真図版16-18
45-19	鐵 製 品 工 具 ? No459	4 号 溝 2 層	非常にもろい。	
46-1	軒 丸 瓦 No23	道 構 外 北 部 2 層	藍弁蓮華文。色調は灰白色であり、焼成は良好で堅い。	
46-2	軒 丸 瓦 No547	道 構 外 I - 3	細弁蓮華文。 焼成堅い。色調灰白色。胎土均質。	
46-3	軒 丸 瓦 No713	道 構 外	細弁蓮華文。色調は灰白色。胎土は均質な粘土であり、焼成良好で堅い。	
46-4	須 忠 22 环 地 山 No51	道 構 外	体部内外面ともロクロナデ。底部は回転ヘラ切りの後にヘラ削りされている。色調は灰白色、胎土には 2mm 程の砂粒を含み、もろい。	
46-5	土 器 器 皿 No506	道 構 外	内外面ともロクロナデ。色調は灰白色、胎土にはごく頗る砂粒が混入し、焼成不良で焼滅が激しい。	
46-6	須 忠 器 盤 No82	道 構 外 4 層	内外面ともロクロナデ。胎土には 0.5mm 以下の砂粒が多量に混入している。	
46-7	土 器 器 皿 No11	道 構 外	体部内外ともロクロナデ。底部は手持ちヘラ削り。色調は内面が淡橙色。胎土に 1mm 程の砂粒含み、焼成は堅めである。	
46-8	須 忠 器 皿 No123	道 構 外	頭部が外反し、口縁部は折り返している。内外面ともロクロナデされている。内面は灰白色、外縁は灰色である。胎土には砂粒を若干含み、焼成良好で堅い。	
46-9	須 忠 器 皿 No.4	道 構 外	内外面ともロクロナデされている。底部は回転糸切りである。内面に火だしき跡が見られる。胎土には 1mm 程の砂粒を含む。色調は青灰色で堅い。	写真図版18-3
46-10	須 忠 器 皿 No517	道 構 外 4 层	体部内外面ともロクロナデ。底部は手持ちヘラ削り。 焼成堅い。色調明褐灰色。胎土砂粒を含む。	
46-11	土 器 器 皿 No.9	道 構 外 5 层	口縁部から口唇部にかけて、わずかに直立している。全体的に剥離していて、細い調整は不明。胎土は均一でなく、もろい。色調は明黄褐色である。	
46-12	須 忠 器 皿 No81	道 構 外 地 山	回転ヘラ削り、そして調整。胎土には 0.7mm 程の砂粒を多く含む。外縁は明赤褐色、内面はにぼい褐色で、焼成良好にして堅い。	写真図版18-8
46-13	鐵 製 品 カ マ No10	道 構 外 地 山	腐食が激しい。	写真図版19-5
46-14	土 器 器 手 採 土 器 No43	道 構 外 1 層	体部に疣状文様あり。胎土は比較的均質な粘土で、色調が淡赤褐色である。	

図版番号	種類	道構	特徴	備考
46-15	土器 手捏土器 No.40	道構外 道構外 東部斜面	色調は浅黄橙色。	
46-16	土器 手捏土器 No.77	道構外		
46-17	土器 手捏土器 No.27	道構外	焼成もろい。色調浅黄橙色。胎土砂粒を含む。	写真図版18-7
46-18	土製品 No.12	道構外	8角形で先がまるい。 焼成堅い。色調柴灰色。胎上砂粒を含む。	写真図版16-15
46-19	土製品 土鉢 東西ベルト No.13	道構外	胎土に砂粒含む。色調は浅黄橙色。	写真図版19-1
47-1	硯 円筒硯 東西ベルト No.31	道構外	色調は褐色で内面に黒色の自然釉が見られる。 胎土には1mm程度の砂粒を含み、焼成は良好で堅い。	
47-2	硯 円筒硯 東西ベルト No.72	道構外 東西ベルト 西部	接地面が锐角で端部で折り返える。体部にヘラ書き方向沈線が見られる。色調は外表面褐色、内面黒灰色。這しの一部が見られる。胎土に若干の石英を含み、焼成良好で堅い。	
47-3	硯 円筒硯 No.48	道構外 1層	脚部の小破片で這しが1個、ヘラ書き模様が2本見られる。 脚は外溝して端部で折り返える。色調は外表面が灰色、内面黒色であり、胎土に若干の石英を含む。非常に堅い。	
47-4	硯 風字硯 No.20	道構外 南箆払張	外表面はヘラ削り、内面はミガキの調整をうけている。 胎土は良好であり、色調は灰色。堅く焼きしまっており、保存状態は一番良い。	写真図版19-3
47-5	硯 風字硯 No.7	道構外 5層	全体にヘラ削りの調整が行なわれている。胎土は均質な粘土であり、灰白色で、堅い。	写真図版19-2
47-6	硯 風字硯 No.1	ピッコロ 1層	上部器風であり、もろい。硯としての使用は疑問あり。 色調は浅黄橙色であり、胎土には砂粒を多く含む。	写真図版17-1
47-7	硯 風字硯 No.47	道構外	周縁部は平である。比較的均質な粘度で、灰白色。焼成は良好で堅い。	
47-8	硯 風字硯 No.509	道構外	周縁部が平である。外面はヘラ削りとミガキ調整されている。 胎土には砂粒が少々含まれ、青灰色で堅い。	
47-9	硯 風字硯 No.44	道構外	周縁部は平である。底部はヘラ削りされている。内面に一部黒斑が見られる。胎土には砂粒が多く、苟灰色で、堅い。	

職 員 錄

社会教育課

課長 永野 昌一
主幹 早坂 春一

文化財係

係長	鈴木 昭二郎
主任	鈴木 高文
七事	田中 则和
"	結城 慎一
"	柳沢 みどり
"	渋谷 孝雄
"	佐藤 洋彦
"	篠原 信彦
"	木村 浩二
"	佐藤 甲二
"	下野 哲司
"	波部 弘美
"	山口 宏一
"	渡辺 洋一

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物藍尾下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和35年3月）
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法飯塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五本松高跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町宗福寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）
第14集 畠遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北原敷道跡（昭和54年3月）
第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）

仙台市文化財調査報告書第18集

昭和54年度

橋江遺跡発掘調査報告書

昭和55年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市西区分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166



文化省シンボルマーク